屍鬼

SHI KI

五

小野不由美

屍鬼（五）

小野不由美

新潮文庫　日本のミステリー

赤川次郎	うつむいた人形
雨宮町子	骸の誘惑
綾辻行人	殺人鬼
江戸川乱歩	江戸川乱歩傑作選
逢坂 剛	さまよえる脳髄
岡嶋二人	クラインの壷
小野不由美	屍鬼(一〜五)
北方謙三	冬こそ獣は走る
小池真理子	夜ごとの闇の奥底で
幸田真音	偽造証券
佐々木譲	エトロフ発緊急電
篠田節子	アクアリウム
志水辰夫	行きずりの街
白川 道	流星たちの宴
真保裕一	ホワイトアウト
髙村 薫	リヴィエラを撃て(上・下)
筒井康隆	ロートレック荘事件
天童荒太	孤独の歌声
夏樹静子	東京駅で消えた
西村京太郎	祖谷・淡路 殺意の旅
貫井徳郎	迷宮遡行
乃南アサ	幸福な朝食

9784101240275

1920193006292

村人たちはそれぞれに凶器を握り締めた。「屍鬼」を屠る方法は分かっていた。鬼どもを追い立てる男たちの殺意が、村を覆っていく——。白々と明けた暁に切って落とされた「屍鬼狩り」は、焔に彩られていつ果てるともなく続いていった。高鳴る祭囃子の中、神社に積み上げられる累々たる屍。その前でどよめく群れは、果たして鬼か人間か……。血と炎に染められた、壮絶なる完結編。

定価：本体629円（税別）

ISBN4-10-124027-2

C0193 ¥629E

『屍鬼』全五巻
大好評発売中！
驚愕、怪奇、戦慄、そして感動。
全てが超一級、S・キングを越えた最高傑作！

新潮文庫

小野不由美の本

魔性の子
東京異聞
屍鬼（一〜五）

屍鬼（五）

屍鬼
SHI KI
小野不由美
五
新潮文庫
屍 鬼 （五）
小野不由美
お
37
7
新潮文庫
¥629

新潮文庫　日本のミステリー

赤川次郎	うつむいた人形
雨宮町子	骸の誘惑
綾辻行人	殺人鬼
江戸川乱歩	江戸川乱歩傑作選
逢坂 剛	さまよえる脳髄
岡嶋二人	クラインの壺
小野不由美	屍鬼(一〜五)
北方謙三	冬こそ獣は走る
小池真理子	夜ごとの闇の奥底で
幸田真音	偽造証券
佐々木譲	エトロフ発緊急電
篠田節子	アクアリウム
志水辰夫	行きずりの街
白川 道	流星たちの宴
真保裕一	ホワイトアウト
髙村 薫	リヴィエラを撃て(上・下)
筒井康隆	ロートレック荘事件
天童荒太	孤独の歌声
夏樹静子	東京駅で消えた
西村京太郎	祖谷・淡路 殺意の旅
貫井徳郎	迷宮遡行
乃南アサ	幸福な朝食
帚木蓬生	ヒトラーの防具(上・下)
東野圭吾	鳥人計画
船戸与一	砂のクロニクル(上・下)
宮部みゆき	龍は眠る
山村美紗	毎月の脅迫者
吉村達也	孤独
連城三紀彦	隠れ菊(上・下)

カバー装画　藤田新策

9784101240275

1920193006292

定価：本体629円（税別）

村人たちはそれぞれに凶器を握り締めた。「屍鬼」を屠る方法は分かっていた。鬼どもを追い立てる男たちの殺意が、村を覆っていく——。白々と明けた暁に切って落とされた「屍鬼狩り」は、焔に彩られていつ果てるともなく続いていった。高鳴る祭囃子の中、神社に積み上げられる累々たる屍。その前でどよめく群れは、果たして鬼か人間か……。血と炎に染められた、壮絶なる完結編。

ISBN4-10-124027-2

C0193 ¥629E

新潮文庫

小野不由美の本

魔性の子

東京異聞

屍鬼（一〜五）

カバー印刷　錦明印刷　　デザイン　新潮社装幀室

新潮文庫

屍鬼

（五）

小野不由美著

新潮社

屍鬼（五）

小野不由美著

新潮文庫

新潮文庫

屍鬼

（五）

小野不由美著

新潮社版

6805

屍鬼（五）

——To 'Salem's Lot

第四部　傷ついた祈り

一章

I

静信は寺務所の黒板に向かい、チョークを取って躊躇したあげく、結局、何も書かずにそれを戻した。机の上を整理し暖房を消して、寺務所を出る。そっと丁寧に寺務所の戸を閉めた。

庫裡の外に出ると凍てついた風が真っ向から吹きつけてきた。陽は落ち、空は東から西の山際にかけて藍と茜のグラデーション、天上には星、そしてあたりは凍りついたように静かだった。

寺を出るまで、美和子にも光男にも、そして克江にも出会わなかった。鶴見も池辺もいない。角が来ることもないし、檀家衆の姿を境内で見かけることも減った。すでに寺は死に絶えようとしている。光男が頑なまでに境内を整えていたから荒んだ色は見えなかったが、廃墟につきものの空虚な寂しさが漂い、あたりをくまなく覆っていた。

墓地から山に入ると、その色はいっそう明らかだった。枯れた草叢は風に揺すられて乾いた音を立てている。ここではもう、あらゆるものが枯渇していた。

荒涼たる大地は硬く凍って
　虚しく死に絶え
　幾重にも紆曲る。
空は暗澹と垂れ込め、
　暮れなずみ、
　　雲と大地とで
　　(影色の藍と血色の茜とで)
　　世界は見事に二分されていた。
駆けるのは刃物のような風ばかり、光は
　光輝は
　　空のどこにもなく、ましてや地にあるはずも
ない。

麓から巻き上げてくる風には、なんの音もなんの匂いも含まれていなかった。樅の間から見下ろした村にも寺と同様の空虚な寂しさが漂っている。五感に触れるすべてのものが、ただただ完全な死を、荒廃の始まりを、それを告げる弔いの瞬間を待っているように思われた。

材木置き場には人の気配が絶えていた。それを突っ切り土手道に登り、尾崎医院の建

物を見る。窓に明かりが点いていたが、それは暗黒の海の中に浮かぶブイの明かりのように、隔絶された孤立を思わせるだけで、なんの温もりも感じさせなかった。静信は少しの間足を止め、小さい頃から通い慣れた窓を見た。去来するものから目を伏せ、俯く。静信はもう、その窓に向かって何を思う権利も持たなかった。

風から顔を逸らすようにして深く俯き、静信は土手道を辿る。収穫されないまま放置された稲が枯れてそよぐ田圃の間の畦道を拾い、樅林の縁を辿り、門前の端にある坂の下に出た。

道も村も閑散としていた。人の姿を見かけないのはもちろん、その気配さえ感じなかった。明かりのない窓、聞こえない物音、今や窓辺に住人の姿が映ることはなく、テレビの音が漏れ聞こえてくることもなく、夕餉の匂いが風の中に混じることもなかった。廃墟じみた村は、完全な廃墟となる時を無為に待っている。こうして歩く自分の姿は廃墟をさすらう亡霊のように見えるだろう。日没を過ぎて人影のあるはずもない場所をさまよう影、そのあり得べからざる姿を目撃する者もいない。

静信は坂に足を載せた。夜にこの坂を登ることが何を意味するのかは、充分すぎるほど分かっていた。にもかかわらず、どうしても来ないでいることができなかった。信明の残した短い文書が、静信をそうしないではいられないところに追い込んでいる。

樅の間、坂を登ると、千裂石のように屋敷が立ち塞がっていた。静信は黒いスレート

の屋根を見上げ、灰色の外壁を見つめる。すべての雨戸はぴったりと閉ざされていたが、隙間からは黄味を帯びた光が漏れている。それが温かな色に見えるのが皮肉だった。
　静信は少しその屋敷を見上げた。風雪にさらされ、太古の昔からここで村を見下ろしていたかのような威容。屋敷の背後に広がる山の端には、赤く残照が縁取りを施している。
　この楼閣は彼を呑み込み、彼の運命にひとつの決着をつけ、そして何事もなかったかのように丘を睥睨し続けるに違いない。
　静信は不思議なほど淡々とした気分でインターフォンのボタンを押した。呼び鈴の音は聞こえなかったし、それに対する応答もなかった。静信はしばらくの間、その場に放置され、風の音を聞いていた。やがて、微かな音がして、門柱脇の潜り戸が開いた。顔を覗かせたのは辰巳だった。おや、と彼は驚いたように目を軽く見開き、かつてのように朗らかな笑みを浮かべた。
「室井さんでしたか。驚いたな」
「突然、済みません」
「いいえ」と、辰巳は潜り戸をいっぱいにまで開いた。「——どうぞ」
　辰巳は屈託のない笑顔を浮かべている。静信は彼と潜り戸の間隙を一瞬、見つめ、そうしておとなしくそれを潜った。静信の背後で辰巳が扉を閉め、硬い音を立てて鍵をか

ける。振り返りたい気がしたが、あえてそれを堪(こら)えた。
「気になりますか？」くすり、と辰巳の笑い声がする。「鍵をかけておかないと、不用心ですから。……色々とね」
静信の脇からそう言って、辰巳は先に立つ。明かりの点(とも)された玄関を示した。
「けれどもお客様は久々だな。最近は、訪ねてこられる方もありませんから。旦那(だんな)さまに御用ですか？」
「たぶん、沙子(すなこ)さんのほうだと思います」
「思います？」
静信は無言で頷(うなず)いた。辰巳は興味深気(げ)な貌(かお)をして玄関のドアを開けた。ホールには明かりが点され、暖炉には火が入っていた。暖炉の温もりだけではこれだけの空間を暖められるはずもないが、スチームも通っているのだろう、広いホールはほっとするほど暖かい。どこもかしこも人が起居する温かな気配が漂っていた。まるで死者の国を通り抜けて生者の家に辿り着いたようだ、と静信は思う。——なんという反転だろう。
「どうぞ」と辰巳は左手のドアを示す。「こちらで、少しお待ちください」
おそれいります、と頭を下げながら、静信はふいに笑いたい気がした。訪問する客とそれを受け入れる家人、そんな図式を忠実に辿っている自分たちがおかしい。
通されたのは、張り出し窓のある部屋だった。暖炉には火が入っていなかったが、室

内はきちんと暖房されている。これは一体、誰のための暖房なのだろう。彼らも寒さを感じるのだろうか。それとも正志郎のためのものだろうか。あるいは——なんの意味もない、冬には部屋を暖めておくものだ、という図式を単純になぞっただけの行為なのかもしれない。静信と辰巳が、とりあえずそう振る舞うしかなかったように、そうしないではいられないのかも。

静信は所在なく、暖かな室内に立っていた。背後のドアが再び開くまでには、少しの時間がかかった。

「お待たせしました」

辰巳の快活な声がして、振り返ると辰巳と沙子が入ってくるところだった。辰巳は銀のトレイの上にカップとポットを載せており、和服の沙子が慎ましやかにその背後に従っている。辰巳は静信に椅子を勧め、沙子はテーブルを挟んだ向かい側に坐る。テーブルの上には茶器が整えられる。挨拶と社交辞令。辰巳は静信の斜め後ろ、ドアとの間に控えている。現実の模倣、図式の再現。それを離れてしまうと、どう振る舞えばいいのか、お互いに分からない——おそらくは。

「それで」と、沙子が均衡を破った。「わたしに御用がおありなのでしょ?」

沙子は微笑んでいたが、表情にも声音にも、どこかしら硬さが漂っていた。

静信は頷く。

「ぼくは父の消息を知りたい」
沙子は首を傾げてみせた。
「お父様は――」
「父は先月の末に姿を消した。一人で移動できるはずもないのだけれど、それきり行方が分からない。ひょっとしたら君は父の行方を知っているんじゃないかと思うんだ」
「それは御心配ね」沙子は困惑したように微笑む。「でも、わたしは室井さんのお父様を存じ上げげないわ」
「そうだろうか?」
沙子は視線を逸らした。
「昨日、父の部屋を整理していて、ぼくは父の残した文書を見つけた。招待状だった。思い返せば、父は失踪に先立って、手紙の投函を寺の者に頼んでいる。宛名は桐敷氏だったけれども、ぼくはあの手紙が、結局のところ君の手に渡ったのじゃないかと思っているんだ」
「室井さんのお父様から手紙をいただく理由がないわ。わたしは一度もお会いしたことがないんだもの」
「うん。君と父には一面識もなかったことは知っている。だからこそ、父はあの招待状を出したのだと思う。父は桐敷氏に手紙を書いたが、それはこの家の事情を知らないか

らで、父は結果として桐敷氏ではなく君を招待したことになるんだと思う。本当に父を訪ねてきたのが誰かは知らないけれども、そんなことはどうでもいい。ぼくはそういうことを知りたいわけじゃない」
「心当たりがないのだけど」沙子は微笑む。「もしも、招待があったとして、じゃあ室井さんは何を知りたいのかしら」
「ぼくは、なぜ父が君を招待したのかを知りたい」
静信は呟いた。
「先月の十三日、安森の徳次郎さんが倒れた。父はそれを聞いて見舞いに行こうとした。倒れて以来、ただの一度も周囲に手を焼かせたことがない父が、制止を振り切って連れて行ってくれないのなら這ってでも行く、と言い張って聞かなかった。父と徳次郎さんの友誼は長かった。傍目にはそう見えなくても、それほどの交友があったのだろうとぼくたちは納得したのだけれども、実際に連れて行ってみると、どこかおかしかった。心配でたまらなくて顔を見に来た、というふうではなかったんだ。ぼくは最初、父がすべてを承知していて徳次郎さんに別れを告げるために行ったのじゃないかと思った。でも、今は少し違う。父は何かを確かめるために徳次郎さんに会いに行ったんじゃないだろうか。そして本人に会って確信を得た。帰ってからの父はずっと何かを思案しているようだった。その徳次郎さんが死んで、父はそれに興味を示さなかった。這ってでも見舞い

に行く、と言った人が、悲しむわけでもなく通夜（つや）や葬儀に行きたがるわけでもない。頷いただけだ。ぼくはそれが不思議だった。父の考えていることが分からなかった。父は何も言わず、その翌々日、寺の者に手紙を投函するように頼んだ。桐敷氏宛の手紙だ」

「そう……」

「父は招待状を書いていたんだ。文書ファイルの作成日は十五日になっている。徳次郎さんを見舞いに行った、その二日後だ。父は一体、徳次郎さんのところで何を確認し、何を思ってあの招待状を作ったのだろう。招待状を作っておきながら、父はそれを放置していた。ひょっとしたら、それを本当に出す決心がつかなかったのかもしれない。徳次郎さんの訃報（ふほう）を聞き、二日の間考えて、それを投函させた。父はその間、何を考え、何を思ってそれを出す決意をしたのだろう。ぼくはそれを、どうしても知りたい」

　信明は徳次郎のところで何かを確信したのだ。そして招待状を書いた時点で信明は、自分が招待する相手が何者なのかを理解していたのだと思われる。相手が屍鬼であることを承知で、信明は手紙を書き、それを投函させた。それは自殺行為に等しい。信明はそれと承知で殺戮（さつりく）者を招いたのだ。

　静信は自分の中に正体不明の暗黒を飼っている。かつて自分は、それによって死を選ぼうとした。そして静信は今に至るも、自分がなぜ死のうとしたのか分からない。自分の中に死に至る暗黒があることを知っていながら、その暗黒の正体が分からないのだっ

た。信明はおよそ、そういった暗黒には無縁であるように思えた。檀家(だんか)の敬愛を受け、病床にありながらそれを受け止め続けていた父。にもかかわらず、信明の中にも静信と同種の暗黒があって、それは信明に手紙を書かせたのだ。信明の中にも衝動は潜んでいた。静信はその衝動の正体を知らなかったが、信明は分かっていたのかもしれない。

——だから、それを知りたかった。

殺意のない殺人は事故であって殺人ではない

殺意のない殺人はない

理由のない殺意はない

「ぼくは父が、なぜ死のうとしたのかを知りたい」静信は呟いた。「どうしても、それを知らないではいられないんだ」

沙子は少しの間、黙っていた。沈黙を断ち切ったのは小さな溜息(ためいき)で、その複雑な声音が何を示すものであるのか、静信には分からなかった。

「それは、お父様しか知らないことなのじゃないのかしら」

「そうなのかもしれない。けれども、ぼくはひょっとしたら君が父からそれについて何かを聞いているのじゃないかと思っているんだ」

もしも沙子があの招待状を受け取ったとしたら、そうして信明を訪ねたのだとしたら、なぜ自分を招いたのかと信明に問いかけずにいられただろうか。

「もしも何かを知っているなら教えてほしい。……それとも頼めば、父自身からそれを聞くことができるのだろうか」
沙子の返答はない。目を逸らしたまま、ひどく迷っているふうだった。
「ぼくは知らないでいることに耐えられない。知っているなら教えてほしい」沙子は目を上げた。静信を見る。「父はなぜ、君を招いたんだ?」
「……お父様は疲れていらしたの」

信明は疲れていた。病床に縛られ、不全感と痛みに耐え続けることに心底、飽いていたのだった。
——だが、と信明は古びた天井を見上げた。
廃屋の天井は醜い染み(し)に覆(おお)われ、腐りかけて撓(たわ)んでいる。今にも自分へ向かって落ちてきそうだった。目覚めて以来、暗闇(くらやみ)でも信明の目は利(き)く。だが、変わったのはそれくらいで、やはり信明は今も病床に縫い留められ、他者の手を借りなければ起きあがることもできないのだった。
(……こんなはずではなかった)
手紙を書き、自ら屍鬼を招き、その前に自分を差し出したときには、こんなことになるとは思わなかったのだ。

信明が脳卒中で倒れたのは昨年の初め、六十五歳の時だった。突然、昏睡状態に陥り、かろうじて一命は取り留めたものの四肢に麻痺が残った。当初、さほどでもなかった麻痺は入院生活の間に悪化して、退院する頃には寝たきりの状態になってしまったのだった。それまでの信明は年齢のわりに健康で、自分の歳を軽んじているところがあった。同年輩の者が次第に減っていっても、自分だけは、という侮りがどこかにあったように思う。自分ももう、いつ死んでもおかしくない歳になったのだと、病床に繋ぎ留められてようやく腑に落ちたようなところがあった。

　自分の死期を自覚してみると、思い残すことは多かった。とにかく息子の静信に寺を継がせなくてはならない。せめて晋山式には坐って立ち会いたいと半ば使命感でリハビリに励み、その甲斐あって坐れるようになって欲が出た。せめて歩くことができるよう、それが無理なら自力で車椅子に乗れるよう、無理をしたあげくに転倒した。加齢と寝たきりの生活のせいで信明の骨は脆くなっていた。両足を骨折し、同時に脊椎椎体を骨折した。骨折が治った頃には腱は萎縮し関節は変形したまま固まって、もはや立つことはおろか、坐ることも車椅子を使うこともできないようになっていた。椎体骨折による痛みは激烈だった。治っても体調によって痛み、いったん痛み始めると身動きもままならない。痛みに耐えながらベッドに横たわり、ある日、唐突に自分の人生は終わったのだと自覚した。

信明は生きていたが、人生はすでに終焉を迎えていた。気づけば寺は息子の手によって遺漏なく運営されている。信明は寺に必要なかった。家族にとっても寺にとっても、荷物でしかない病人が一人残っただけ、檀家から贈られた高価なベッドに横になり、食事から下の世話まで受ける。信明はもう誰にとっても必要でなかったし、もう何事もなすことができず、同時に何も求められていなかった。

いや、それよりも悪い。

そのようになっても、信明は住職であり、檀家は彼に敬愛に値する住職であることを要求した。信明はどんなに絶望に駆られたときにも鷹揚に笑っていなければならなかったし、身内を灼かれるほどの焦燥を感じていても声を荒げることも、癇癪を起こすことも許されなかった。寺を運営しているのがもはや信明でない以上、そうやってせめても住職としての演技を全うしていなければ、信明は存在意義を失う。本当に不要な存在になってしまう。その一心で、信明は敬愛に値する住職を演じ続けていたが、それがもはや演技でしかないことを、信明自身がいちばんよく分かっていた。――そうしてふと、信明は思ったのだった。一体、自分はこれまで、そうでなかったことが一度でもあっただろうか、と。

信明は五人兄弟の中の唯一の男子だった。姉と妹が合わせて四人、寺を継げるのは信明しかいなかった。家族の期待があり、檀家の期待があった。幼い頃から信明はた

だ、良き「若さん」であることだけを期待されていたし、長じては良き「若御院」、良き「御院」であることだけを期待された。それ以外の可能性については、考えてみることさえ許されなかったのだった。

そうやって思い返してみると、ベッドに横たわっている自分の姿はいかにも象徴的だった。檀家は敬愛すべき住職に対して、高価なベッドを買い与えた。それは檀家の住職に対する敬愛の表れだったが、同時にそこにおとなしく横たわり、敬愛に値する住職であり続けよ、という無言の要求でもあった。

――もしもお前が敬愛に値するものなら、我々はこうしてお前に褒賞を与えるだろう。だが、それを裏切れば、我々はお前を見捨て、二度と振り返らない。

信明はそうやって、それまでの人生を歩んできたのだった。敬愛という褒賞、その下に無言で潜んでいる要求。檀家が用意してくれた狭い場所から自分の意思で離れることは許されなかった。自分の足で立ってベッドを離れることは、すなわち自分の存在が無に帰することを意味していた。そこに唯々諾々と横たわっているしかなかった。せめても信明にできることは、お粗末な住職ではなく、敬愛に値する良き住職を演じることだったし、だからこそそれを懸命に貫いてきたのだが、そうすればそうするほど身動きならなくなるのだ。寝たきりの生活が、信明の足を動き得ない形に硬直させてしまったように。

信明は六十五歳で倒れ、病床に縛りつけられたが、実際のところ、彼は生まれた時からそのようにして縛りつけられてきたのだった。彼はようやくそのことに気づいたが、もはや彼の四肢は動かず、どれほど願っても病床を離れることはできなかった。おそらくは、そうやって死んでいく。ただの一度も、彼自身ではあり得ないまま。

（なんと、虚しい……）

信明は歯ぎしりする思いで天井を見つめていた。あまりの虚しさに自ら生を終えることも考えたが、彼の身体ではそれすら自由にならなかった。そんな彼を嗤うように、村では死が蔓延し始めた。

信明がそれに思い至ったのは、いつ頃だっただろう。明らかに死人が多すぎることに気づき、それはあっさりと鬼の伝承に結びついた。それは疫病なのかもしれない、あるいは邪悪な意思を持つ誰かなのかも。ひょっとしたら本当に超常的な何かなのかもしれなかったが、信明にとってそれは「鬼」という言葉で一括してしまえることだった。

鬼が村にやって来た。そして猛威を奮っている。鬼が触れたものは死に感染し、そうして死んだ者は鬼として起き上がる。死は拡大再生産されていく。信明はその図式を早くから直感していたが、あえて誰かに警告することはしなかった。良識が邪魔したせいもある、敬愛に値する住職が口走ることではない、と思ったせいもあるだろう。だが、まず何よりも、信明は死が蔓延していくことに昏い興味を覚えていた。これがどこまで

広がるのか、見届けてやりたいという思いがあった。
そう——信明は、己をただひとつの鋳型に押し込み、それ以外の生き方を許さなかった世界のすべてを怨んでいたのだ。
檀家は彼に良き住職であることを求めた。彼らは良き住職を欲していたのだ。寺と墓を守る者が必要で、どうせそれが必要である以上、慈愛深い良きものであったほうが都合が良かった。ただそれだけのために、信明は矯正され刈り込まれ、彼らの欲するものであることを強要されてきたのだった。信明は体のいい贄であり、自分の存在に疑問を持つことさえ許されなかった。信明である必要などなかったのだ。彼らが求める振る舞いができる誰かが、寺に坐っていれば良かった。読経し、説教をしてそこに存在していれば、それは信明だろうと静信だろうと、他の誰だろうと構わなかったのだ。
彼はあまりの虚しさに身を切り裂かれる思いがした。どうしてもっと早く、これに気づかなかったのか。彼の人生は終わろうとしていた。事実、すでにもう終わったも同然だった。修正のチャンスは万にひとつも残されていなかった。
——いや、信明にはたったひとつ、可能性が残されていた。村には鬼が跋扈している。死んで甦れば、信明はやり直すことができるのではないか。
徳次郎を見舞いに行って徳次郎の首に鬱血点を見つけた。頸動脈の上に残されたふたつの小さな瘢痕。信明は寺に戻り、考え込み、徳次郎の訃報に触れて決意を固めた。屍

鬼を招こう。そうして、この病床に囚われ、寺に囚われた人生に終止符を打ち、第二の人生を得るのだ。

信明はそのとき、死者のすべてが必ずしも屍鬼として甦るものではないことを知らなかった。信明が知っていたのは、自分が虜囚であり、必要のない人間だということだった。信明自身は必要ない。人々にとって必要なのは住職であって、信明自身ではないのだ。信明は、自分自身として生きることを許されなかった。敬愛という名の檻に捕らえられ、他者に献身すべく求められ、そうやって生きてきた果てに辿り着いたのが、檀家から贈られたベッドだったのだ。それに縛りつけられ、無為に死を待つだけの人生。信明は虚しかった。彼を捕らえたものが憎かった。だから、屍鬼を招いた。

（だが、こんなはずではなかった……）

信明は目を瞑る。目尻から冷えた涙があふれ、蟀谷を滑り落ちた。

幸運にも、信明は甦った。――だが、本当にこれを幸運と呼べるのだろうか。

信明は甦生したが、若返ったわけではなかった。自分が変容したことは理解している。おそろしく夜目が利き、自分でもすでに鼓動が絶え、呼吸を必要としていないことは分かっている。排泄は止まった。もう屈辱的な方法の世話になる必要もない。だが、それだけだった。彼は依然として動くことができず、立ち上がることも歩くこともできなかった。信明は第二の生を得たが、この生は最初から病床に結びつけられ、いかなる可能

性も持たなかった。

（こんなはずでは、なかったんだ）

――甦生以前の損傷は保持される、と医師の江渕は言った。甦生以前に遡って損傷を修復することはできない。なくした腕が、また生えてくることがないのと同様にね。室井さんの場合には」と、江渕の声は冷たかった。「長い間の寝たきりの生活、それによって弱った部分の回復は期待できる。けれども、損失を埋めることはできないんだ。あなたの脳は出血によって器質的に損なわれている。その後の骨折による損傷、これらはもうどうすることもできない」

信明は衝撃を受けた。では、自分は何のために甦生したのか。自ら屍鬼を招くような振る舞いをしたこととの意味は。

「痛みは止まったろう。せめてそれを感謝するんだね」

実際、あの痛みは止まっていた。けれども代わりに疼痛に似た飢餓があった。信明は獲物を狩ることができない。身体的にできないだけでなく、心情的にできなかった。哀れな虜囚を目の前に突きつけられれば、とても恐ろしくて襲うことができず、飢餓に耐えかねて贄を襲う決意をしたときには周囲には誰もいない。自ら立ち上がって決意を実行に移すことが、信明には不可能だった。

信明は屍鬼の群の中にあって、明らかに不要物であり、邪魔者以外の何物でもなかったのだった。屍鬼の群においては、住職であったことにはなんの意味もなかった。信明は住職でしかあり得ない自分を拒んだが、住職という外皮を剝(は)がしてみると、肢体不自由な無益な老人が残ったにすぎなかった。

(あんな手紙を出さなければ)

信明は不自由な手でかろうじて顔を覆った。廃屋の埃(ほこり)にまみれた納戸(なんど)には、信明の他には誰もいなかったが、そうせずにはいられなかった。

ここに置き捨てられている自分。どこにも行けず、何者にもなれない。沙子は信明を見捨てない、と言った。

「人間の世界と同じよ。弱者は保護を受けるの。心配はいらないわ」

沙子はそう保証したし、最低限の世話はさせると言ったが、それが徹底しているとも思えない。それとも沙子は最初から、この程度のことを「最低限」と呼んでいたのだろうか。

信明は嗚咽(おえつ)した。こんな生が続くのだろうか。無期限に?

(あんな手紙さえ出さなければ)

どうせ数年も待たずに、すべてが消えてしまっただろうに。

お父様は、と沙子は呟いた。
「住職でしかあり得ない自分に辟易してらしたのよ。演技し続けることに疲れていた。そうしてそれを強要する檀家も村も憎んでいたの」
静信はテーブルの向かい側に坐った沙子を見つめる。
「父が——そう言ったのだろうか」
「ええ」と、沙子は微笑む。「お父様の気持ちは分かるわ。だって、そうじゃない？結局のところ、村の人たちがお父様に求めていたのは、自分たちにとって都合の良い住職だったんですもの。誰でもいい、それが必要だったからお父様にそれを求めた。飴と鞭で無理矢理そこに押し込んだんですもの。良き住職であろうとする以外、何も望まないようスポイルしてしまったの、自分たちのためにね」
静信は沈黙した。答える言葉を持たなかった。
「お父様はそれに抵抗したかったんだと思うわ。——室井さんと同じに」
静信は首を振った。
「……違う」
沙子は首を傾げた。
「違う？」
「ぼくは、そうじゃない」

静信はそれを確信していた。静信は自分の中に存在する暗黒の正体を知らない。けれどもそれは、沙子が言ったようなことではないと断言できた。
「お父様は、身体が不自由になって初めて、それに気づいた、と言っておられたわ」
　沙子は憐れむように笑う。静信は重ねて首を振った。
「ぼくは、ぼくでなくていいことなど、ずっと以前から分かっていた。君の言う通りだ。村の人たちは自分たちの望む住職がほしいだけなんだ。けれどもそれをこそ期待と言うんじゃないのか。彼らが自分たちにとって都合の良いものを期待するのは当然のことで、その期待に応えるかどうかは、ぼくや父の自由意思に任されている。ぼくは村人の期待を投げ捨て、逃げ出しても良かった。けれども、ぼくはぼくの意志でそれをしなかった。彼らが誰でもいい、良き住職を望むと言うなら、ぼくがそれになってみたかったんだ」
　沙子は怪訝そうに瞬いた。
「寺の住職は信仰の要だ。それは実は、積極的に何かを施すことができるわけじゃない。ただそこに存在することによって、目に見えないものを束ねるだけの役割しか果たしていないんだ。だが、それは確実に必要なものだ。要を失えば信仰は寄る辺を失う。誰かがその任に就かねばならないのだし、ぼくはそれになりたかった」
　お前でなくてもいいんだ、と敏夫に指摘されたのは、いくつのときのことだったろう。連中の期待通りに振る舞ってやる義務がどこにある、と吐き捨てるように言った敏夫は、

どうあっても医学部に進まねばならないというプレッシャーに荒れていた。——そう、だから高校生の頃だ。おそらく三年ではない。その頃には敏夫も、ある種の諦観に達していた。一年かそのくらい。ひょっとしたら中学校の終わりだったかもしれない。

静信はそれまで、そういったことを考えたことがなかった。指摘されて目から鱗が落ちる思いだったが、それでいいのだ、と納得した。静信は信仰を肯定していたし、それを束ねる存在が必要だということが理解できた。自分がそれになることには、なんの違和感もなかった。むしろ自分がそれを望んでいることを了解した。

「では、あなたはなぜ自分を殺そうとしたの——室井さん？」

沙子は問う。

「分からない……」

そう、と沙子は目を伏せた。短い沈黙のあと、視線を上げる。静信を見つめ、どこか自嘲するように微笑った。

「お役に立てなくて残念だわ。本当に、とても残念に思ってるの。——あなたはとても高い代償を払って、ここに来たんだもの」

背後から、静信の両肩に手が置かれた。その手は、静信をその場に押し留めるように肩を摑んでいたが、そもそも静信は立ち上がる気力を失うほど虚脱していた。

「帰れないことは覚悟していらしたんでしょ？」

沙子の問いに、静信は頷いた。
「それは、消極的な自殺行為だわ。今度はなぜ？」
静信は虚を衝かれて瞬いた。信明の真意を知りたかったからだ。だが、自分はなぜ、そうまでして信明の真意を知りたいと望んだのだろう。
静信は呆然と答えた。
「……ぼくはそれを知らない」
そう、と沙子は呟いて立ち上がる。まっすぐに間近へとやって来て、軽く屈み込んだ。辰巳が静信の二の腕の付け根を掴んでいたが、もちろん静信にはそれを振り解く気も、これから自分に襲いかかるであろうものから逃れようという意思もなかった。
沙子はひどく複雑な顔をしているように思われた。

2

最低限の清掃を終え、病院の戸締まりをし、敏夫が母屋の私室に戻ると、すでにそこには客人が待ち構えていた。
「ずいぶんと仕事熱心なのね？」
千鶴はベッドに腰掛けたまま笑う。

「君もだ。熱心なことだな」
答えながら視線を滑らせる。プロジェクターが消えていた。そればかりでなく、明らかに家探しされた形跡があり、棚の上からはとりあえず護身用にと用意したものが消えていた。
千鶴が合い鍵を持っていることを考慮して、部屋には急拵えの錠をつけ、そのうえで窓にも鍵をかけておいたが、肝心の窓のガラスが切られていた。窓には籠目文様を描いた紙を貼っておいたのだが、それも剝がされている。
「誰かが君を入れるために露払いをしたようだな。正志郎氏かい？」
千鶴はただ笑う。忍び込んできたのが正志郎のような人間なら、予防措置には意味がないだろう。そういう存在がいるのは厄介だ――非常に。
「女房の夜這いを手伝うとは、奇特な亭主だな」
「正志郎は、わたしにはとても親切なの」
「それを親切と言うかね。――言っておくが、お袋がまだ起きてるぜ」
「でしょうね。だから尾崎さんも、大声を上げてお母様を危険な場所に呼び寄せたりはしないわよね」
千鶴の笑みを見ると、どこか近辺に仲間がいるのだろうと想像がついた。ここで敏夫が大声を上げればそいつが孝江を襲うのだろう。――いや、こうしている間にも、すで

に孝江は襲われているのかもしれなかった。
身を守ってくれるものはない。揉み合いになれば力のうえでは敏夫の勝ちだろうが、それも飛び込んでくる千鶴の仲間がいなければ、の話だ。数が多く、しかも連中はすでに夜を支配している。その中には昼間にも動きまわり、呪術を忌避しない者がいる。いったん、家が開かれてしまうと、屍鬼を撃退することは非常な難問だった。敏夫にはすでに退路がないことを悟らざるを得なかった。
——だが、連中は一度の襲撃で犠牲者を殺さない。そのはずだ。特に敏夫を殺しはしないだろう。こいつらは何よりもまず、犠牲者のカルテや診断書の控えを破棄したいはずだ。自室から病院の保管庫に移しておいて良かった、と思わないでいられなかった。家探しした際にそれを見つけられていたら、本当にここで集って殺されかねなかった。
敏夫は少しずつ場所を変えて手を伸ばす。千鶴が興味深そうに首を傾げた。電話の子機をテーブルの上に放り出してある。それが唯一の頼みの綱だ。敏夫が何に向かって手を伸ばしているのかを悟ったのか、千鶴は軽く微笑んだ。
「警察を呼んでみる？　念のために言っておくけど、一一〇番に通報しても、最初に駆けつけてくるのは駐在の佐々木よ？」
ああ、と敏夫は頷く。

「それとも誰か人を呼ぶ？　いちばん近所の人を呼んでも間に合わないいんじゃないかしら」

分かっているさ、と敏夫は内心でひとりごちた。今夜の襲撃は避けられない。だが、二度目以降を切り抜けることができれば、敏夫にはまだ活路が残されている。思いながらダイヤルした。千鶴との間合いを計りながら呼び出し音に耳を澄ます。コール五回で、相手が出た。

「はい」と言う声は女のものだった。

「……静信はいますか」

「出かけているみたいですけど」美和子は言って、ふいに不安そうな声を上げた。「敏夫くんのところではないの？」

「いえ」敏夫は反射的に答えながら千鶴との間合いを確認する。そうして、ふと、千鶴の顔に意味ありげな笑みが浮かんでいるのに気づいた。

――こいつは、静信が家にいないことを知っている。

だから嗤（わら）っている。家にいないならどこにいる？

美和子が何かを問う声は聞こえたけれども、敏夫は通話を切った。電話がいったん切れ、再び回線音が流れるのを、上の空で聞いた。

「静信はどこだ」

「室井さんなら屋敷よ」
敏夫は電話を持った手を凍らせた。
「……捕らえたのか」
「室井さんは自分から沙子を訪ねてきたの」千鶴は言って、低く笑う。「よく似た親子だわ。室井さんのお父さんもね、自分から沙子を招いたのよ。わざわざ正志郎に手紙を寄越して。自分の身体が自由になれば、室井さんのように家を訪ねてきたんでしょうね」
なぜ、と敏夫は呟いた。
「さあ？　あの親子が何を考えたかなんて、わたしには分からないし、興味もないわ。わたしが知っているのは、室井さんはすでにわたしたちの手の中にあって、それは室井さん自身が望んだことだ、ってこと。彼は甦生するかもしれない。父親もそうだったから」
「そう……」
敏夫の声は、敏夫自身をもぎょっとさせるほど低かった。
自ら屍鬼を訪ねるということが、何を意味するのか知らない静信ではあるまい。——静信は屍鬼の側に下ったのだ。
敏夫は子機を床に叩きつけた。すべてが突然、どうでもいい種類のことに思われた。

それを見て取ったように千鶴は笑う。
「ショックだった？」
「……の、ようだな」
「あなたは一人になったの。正真正銘の孤立無援。気分はどう？」
「悪くない」
千鶴は笑った。笑ったまま立ち上がり、一歩を踏み出す。敏夫は退った。
「やめてくれ」
「命乞い？」
「そうだ。死にたくない。見逃してくれ」
千鶴は歩み寄りながら眉根を寄せた。微かに苛立ちのようなものが浮かぶ。敏夫は足を踏み出し、その腕を掴んだ。冷えた——体温のない、けれども柔らかな二の腕。
「千鶴、おれは外場が滅びるところを見たい」
屍鬼は忌まわしいことを聞いたかのように眉を顰めた。
「もう、うんざりだ」敏夫は吐き捨てる。「この夏以来、一体どれだけの人間が死んだと思う。それに対して、村の連中が何をした。何も、だ。変だ、おかしい、どうかしていると言いながら、何が起こっているのか知ろうとするわけでもなく、食い止めるために指一本、動かすわけでもない。声高に不平を言うだけだ。そうすれば誰かが連中の口

に旨いものを放り込んでくれるものだと思ってる」

敏夫は摑んだ腕を投げ出した。

「だからおれが結果を放り込んでやろうとしたんじゃないか。原因を探し、敵がいることを確認した。外場は屍鬼に侵略されている。答えはあまりにも明白だ。死にたくなかったら、屍鬼を滅ぼして脅威を取り除くしかないんだ。そのための方法も探してやった。あとは実行に移すだけだ。なのに、それは嫌だと言う」

静信は協力できない、と言明した。村に脅威があり、放置すれば惨禍はやまない。それを分かっていて、脅威を取り除くために行動することを拒んだ。それは翻せば、村の連中など死んでも構わないということだ。

もちろん、敏夫にも分かっている。静信は屍鬼による殺戮を肯定したわけではない。静信はそのために屍鬼を殺すことを拒んだのだ。だが、殺戮を止めるためには敵を排除するしかない以上、それを拒むということは殺戮を止める手だてをも放棄する、ということに他ならない。

静信の気持ちは分かる。共感はできないが理解はしている。昔から静信は結果よりも過程に拘るところがあり、過程に納得がいかなければどんなに望んだ結果でも放り出してしまいかねない人間だった。敏夫は逆だ。問題は望む結果が得られるかどうかであり、過程は問題ではない、と思っている。だから静信が敏夫についてこれない、これは理解

できなくもない。そういう奴だ、とは分かっている。
「相手が屍鬼だろうと人間だろうと、殺戮は御免だ、と言うなら勝手にするさ。屍鬼を殺すことを拒んで殺されるのも、屍鬼を殺して生き延びるのもそいつの勝手だ。――だが、そいつが決定権を持っているのは自分の命に関してだけだ。他人の命に対してまで、勝手に先行きを決める権利はないんだ！」
屍鬼の存在を理解しており、このまま放置すれば殺戮はやまないであろうことを了解していながら戦線を離脱するということは、自分の命だけでなく他人の命まで投げ出すに等しい行為だ。しかも屍鬼に襲われれば自身も屍鬼として甦生する可能性がある。静信が自分を投げ出すのは勝手だが、それによって屍鬼が一体増えれば、そのぶん脅威は増す。静信が選んだのはそういうことだ。静信は自身の命の譲渡契約書に、外場の住人のすべてを付記してサインをしたのだ。
「世の中は二極対立で割り切れない。黒と白の間には、必ず中立としてのグレイがあるもんだ。だが、この件に関しては黒か白しかない。屍鬼は人間にとって天敵だ。戦って脅威を排除するか、唯々諾々と殺されるかだ。共存はあり得ない。あるとしたら、桐敷正志郎のように、屍鬼の奴隷になるしかないんだ」
そして、と敏夫は思う。常に穏当な中立を堅持してきた静信なら、それを貫くために第二の正志郎になろうとしても不思議はない。静信が自ら桐敷家を訪ねた理由は、それ

以外、敏夫には想像できなかった。
千鶴は興味深気に首を傾けた。
「それが許せないのね」
「とんでもない」敏夫は口許を歪める。「馬鹿な選択だが、それでも静信は奴自身であるために選択をしたんだ。だが、村の連中はそれすらしないのさ」
村の者は理解している。村に脅威が存在すること、自分たちの生命が脅かされていること、これを放置すればさらに酷いことが起こりかねないこと。その脅威は常識では考えられない種類のものであり、外部に助けを求めても理解は得られないこと。
「村の連中は怯えている。当たり前だろう、自分と自分の家族の命が危険にさらされているんだ。にもかかわらず、奴らは危険が存在することを認めるのを拒むんだ。おれだって、屍鬼だ吸血鬼だという指摘が、どれだけ信じ難いものであるかは分かっている。だが、冷静に考えれば、そうでしかあり得ないことは分かるはずだ。だが、連中は、この期に及んでも、そんなものはいるはずがない、と言い張るんだ」
そんなものはいるはずがない、と確信しているなら、なぜ誰も夜に道を歩こうとしない。窓を閉め、鍵をかけて家の中に閉じ籠もる。誰も山に入ろうとしなくなったのはなぜだ。玄関に貼られた護符、これ見よがしに上げられた破魔矢、窓辺に吊された除虫菊や蓬は何を意味している。

「連中だって分かっているんだよ、もう。本当は知っている。鬼が村を襲っているんだ。にもかかわらずそれを認めない。認めようとしないのは、正気を疑われたくないからでも鬼を信じてないからでもない。連中は、そういう脅威が現実に存在することを認めたくないのさ」

敏夫は笑う。

「現実に鬼が目の前にいるのに、目を瞑って『これは夢だ』と言い聞かせているんだ。それを認めれば、連中は鬼に対峙しなきゃならん。それが怖いものだから、そんなものがあるはずはないと自分に言い聞かせてる。鬼なんていない、だから自分が鬼と対峙するなんて恐ろしいことをする必要はない、というわけだ。鬼がいないなら、どうしてこれだけの人間が死んでいくんだ。なぜ連中の命は脅かされねばならないんだ。連中は、それが分からない、と言う。分からなくて不安だから、どうなっているんだ、教えてくれ、と叫ぶ。この殺戮を止めてくれ、自分たちの不安を取り除いて、安全を取り戻してくれと喚くくせに、鬼だ、だから鬼を倒せと言えば、そんなものはあるはずがない、と頑強に否定するんだ！

どうなっているんだ、と言う。だからおれは教えてやった。これは屍鬼だ。どうにかしてくれ、と言うから、おれはどうにかする方法を教えてやった。ところが連中は、そんなものはあり得ないとほざく。おれの出した答えが気に入らないんだ。そうやって喚

いていれば、誰かが自分にとって都合の良い答えを放り込んでくれると思っている」敏夫は、戯けて両手を広げた。「これは新種の疫病です、御心配なく、すでにワクチンがあります。これは悪の組織の陰謀です。御心配なく、すでに正義のエージェントが是正に乗り出しました」

千鶴は微かに笑った。敏夫もまた乾いた声で笑った。我ながら自嘲のようにしか聞こえなかった。

「自分の頭で考える気はない。自分の身体は指一本だって動かすつもりはない。喚いていれば現実のほうが連中の都合に合わせてくれると思ってるんだ。それ以外のことなんて考えてみたくもない。連中は世界の何たるかを分かってない。世界はベビーベッドじゃないんだ。周囲にいるのは泣けば飛んできてミルクやオムツを与えてくれる母親やベビー・シッターじゃない。自分の頭で考えて、自分の足で歩いて行かなければ、自分の安全でさえ手に入らないってことを認める気がないんだ！」

「……そうね」

「だったら好きにするがいい。好きなだけ喚いていればいいさ。だが、おれには連中より分別があるからと言って、連中の面倒を見てやらなければならない義理などない。警告はした。危機を回避する方法も示した。最低限の義理は果たした。それが気に入らないと言うなら勝手にゴミ箱の中に放り込んで忘れるがいいさ。連中が自分にとって都合

の良い現実しか現実と呼びたくないと言うなら、そうすればいい。おれはその結果を連中がどう受け止めるのか、見物させてもらう」
敏夫は千鶴の腕を改めて摑んだ。
「見届けたいんだ。連中が、現実は拒絶しても変えられないと知ったときにどういう顔をするのか。連中は鬼が夢の中のモンスターだと信じている。それ以外の可能性は信じたくないいんだ。にもかかわらずそのモンスターが自分を捕らえて喰らいついてきたとき、連中がそれまでも拒めるものかを見てみたい。それを見届けてからなら、喜んで餌食になってやる」
「それをどこまで信じてもいいのかしら？　いいように騙される馬鹿な女にはなりたくないわ」
「信じてくれ」
「確証もなしに信じるわけにはいかないの。あなたは敵だったんですもの。沙子はそういう愚かな振る舞いを許さないのよ」
「沙子……」
「そうね——あなたが誠意を見せてくれたら、考えてもいいわ」千鶴は言って、敏夫の頸に冷えた指を滑らせる。極めて正確に外頸静脈を辿った。「血をくれる？」
「好きにしろ」

千鶴は笑う。敏夫の首に改めて腕を廻し、顔を寄せてきた。無意識のうちに息を詰めて待つと、冷えた柔らかなものが押し当てられる。そして鋭い針を刺されたような微かな痛み。だが、その痛みも触感もすぐに遠ざかり希薄になる。軽い酩酊感があった。
――悪くない気分だった。
やがて千鶴は顔を離した。腕を首に絡めたまま囁く。
「すべての資料を破棄するの。リストをあげるわ。それの指示通りに患者のカルテを訂正して。この村では異常なことなんて起こってない。誰も死んでいないの……分かるでしょ?」
敏夫は頷いた。
「……ああ」

3

美和子は電話が切れたあとも、しばらく受話器を握ったまま立ち竦んでいた。時計に目をやると九時になろうとしている。夕刻に出たらしいが、それきり夕飯にも戻ってきていない。てっきり敏夫のところだと思っていたのに、そうでないとすると。
「どうしました?」

光男が茶の間の側を通りがかって声をかけてきた。寺の人手が減っている。通っていたのでは仕事を捌けないからと言って、光男は母親の克江ともども、寺に越してきている。
「……光男さん、静信を見なかった？」
「いえ。若御院なら病院じゃないんですか」
「それが行ってないようなの。でも、こんな時間まで他のどこに」
光男は美和子の青い顔を見つめ、そしてついに来るべきときが来たのだと悟った。鶴見はああ言っていたが、災厄が寺を避けてはくれないことは、これまでの事態からも明らかだ。いつかこうなると思っていた。事実上、これで寺は終わったのだ。
美和子はいったん受話器を置き、そして改めてそれを取り上げた。
「駐在は何番だったかしら。それとも田茂さんにお願いしたほうが」
言いかけた美和子を、光男は遮る。
「どこか散歩に行ってるんですよ」
「光男さん、でも」
「まだ着いてないだけで、今頃は尾崎にいるのかもしれません。まだ九時じゃないですか。騒ぐようなことじゃありませんよ。若御院は子供じゃないんですから」
けれども、と言い募る美和子に、光男は笑ってみせる。

「ガレージに車がありましたよ。村の中にいるんでしょう。村の中にいて、何の心配があるって言うんです?」
「ええ……それは。でも」
美和子は口ごもった。
光男はあえて素っ気ないふうを装った。騒ぎ立てないほうがいい。静信が帰ってこないということは、信明のように連れて行かれたということだ。これが連中の意思だ。逆らわないほうがいい。下手に逆らい、連中にとって不都合な行動を起こせば、今度は美和子が犠牲になる。
「近頃、妙なことが続きますからね。奥さんが心配なのは分かりますけど、変に心配すると本当のことになっちゃいますよ」
「光男さん、でもね」
「ちょっと帰りが遅くなっただけでしょう。ひょっとしたら今夜はお泊まりかもしれませんね。別に珍しいことじゃないでしょう。それとも、奥さんは何かあったって言うんですか?　何か帰ってこれないような事故でもあったって?」
美和子は俯いた。そんなことに起こってほしいわけではない。ここで不安を言い立てるのは、まるでそれを望んでいるように思えて、口を噤まないではいられなかった。
「村の中なんですよ。何が起こるって言うんです。若御院は無茶をするような性格じゃ

ないし、仮にも寺の若さんに対して滅多なことをする者もいないでしょう。なんの心配もないじゃないですか」

「そうね……」と、美和子は震える手を握る。「そうだわよねえ」

「そうですとも」

光男の力強い肯定に、美和子も頷いた。そう、滅多なことなどあるものじゃない。すでに美和子は信明を失っている。このうえ息子まで失うなんてことが、あるはずがなかった。

かおりは一人で自宅に戻っていた。大塚浩子(おおつかひろこ)らはなにもあんな寂しい家に帰らなくても、と何度も引き留めてくれたが、少し考えたいことがある、家の中の整理もしたいし、だからしばらく家に戻る、と言って出てきた。寂しくて我慢できなくなったら戻るから、と言い置いて。

一人で家にいることが危険だということは分かっている。かおりはつい昨日まで、恵(めぐみ)による襲撃は避けられないことだと思っていたし、それが運命なら仕方ないと思っていた。だが、昨日静信に会い、静信らも屍鬼を疑っていたことを聞いて、気持ちが変わった。

静信に——あるいは医者の敏夫に相談していれば、夏野(なつの)は死なずに済んだのだ。夏野

も、昭も、きっと父親も母親も失わずに済んだ。それが悔しい。
（こんなの、ないよ）
感じているのは悲しみより何より、対象不明の怒りだった。こんなのは全部、間違っている。
このまま恵に殺されるのは違う。そんなことは起こるべきじゃないし、そんなことは許さない。なぜこんな酷いことを、と恵を責めたい。一矢報いてやりたい。かおりの得た苦しみを、恵にも投げ返してやりたい。
かおりは大塚家からもらってきた護符を、窓という窓に貼った。護符や陀羅尼が大塚家にはいくらでもあった。それらで家を荘厳し、昭の部屋から杭を持ってきて武装した。昭が用意していたそれ。
絶対に恵の好き勝手にはさせない。これ以上、かおりに酷いことはさせない。恵と対決するのだ。場合によっては恵なんて許さない。
そのためにも大塚家にいるわけにはいかなかった。だから家に帰ってきた。来るならさっさと来ればいいのに、という捨て鉢な勇気で、かおりはむしろ高ぶっていた。
しんとした家の中、あらゆる明かりを点して、まんじりともせずに坐っている。窓の外を徘徊する物音を聞いたのは、日付が変わってからだった。ラブの吠える声が聞こえた。この家に近づく権利のない誰かが家の周囲を徘徊している。

それはあちこちを叩き、中へ入る方策を探しているようだった。戸締まりはしてある。慣れない大工道具を引っぱり出して、打ちつけられる場所は打ちつけておいた。ただ座敷の縁側だけを戸締まりもせずに放置してある。雨戸も引いてなければカーテンも引いてない。かおりは杭を隠し持って、じっと窓から外の様子を窺っていた。

それは窓辺の、明かりの届くすぐ側まで何度もやって来たように聞こえた。迷うように遠ざかっては近づいてきて、そしてやがて消えた。はたりと音がやんで、かおりは無音と孤独の中に取り残された。

律子が目を覚ますと、そこは蒼い闇の中だった。薄い異臭のする布団が展べられ、律子はそこに横たわっている。最初、記憶は混沌としていた。とりあえず律子は、自分の身体を検め、そして自分が死んでいることを発見した。少なくとも呼吸がなく、脈がない。何度指を当てて探ってみても、脈拍を触知することができなかった。

律子は恐慌をきたし、閉ざされた部屋の中で悲鳴を上げて暴れた。それが治まってみると、空虚な自覚がやってきた。自分は死んでいるのだと、認識すればそれを核にして記憶はするすると解けた。自分は鬼に引かれ、鬼として起き上がったのだと理解した。

呆然としているところで扉が開いた。中年の見たことのない女が一人、どこかで見たような若い男が一人、入ってきた。

「……誰？」
律子はすでに、声の出し方を心得ていた。
「倉橋佳枝（くらはしよしえ）というの。よろしくね」
「あなたも鬼なの？　起き上がったの？」
佳枝は目を見開いた。
「おや。何も説明していないのに、分かったの？」
「だって脈がないもの。自分がどうなったかぐらい、覚えてる。ひどい過呼吸だったの。自分で処置しようとして袋を探したんだけど、手の届く範囲に見つからなかった。探しに行こうとして意識を失ったの。わたしはあれで死んだんでしょう？」
「でしょうね」
「……彼は」律子は佳枝の背後に憂鬱（ゆううつ）そうな顔をして佇（たたず）んだ青年を見た。「武藤（むとう）さんのところの」
「知り合い？」
いいえ、と律子は呟（つぶや）いた。直接、顔を見知っているわけではない。それでも武藤とは親交があるし、何より律子は彼の葬儀で彼の遺影を見ていた。徹（とおる）は狼狽（ろうばい）したように顔を背けた。その仕草は、彼が自分の素性を知られたくなかったのだと端的に訴えていた。
「何が起こったのか分かっているなら話は早いわ。あなたは変わってしまったの。そう、

鬼になってしまった。吸血鬼、というやつね。仲間は屍鬼と言うわ」
「……屍鬼」
「これに着替えなさい。あとのことは彼に聞いて。あなたにだけ構っていられないの。近頃は起き上がる人が多いから」
律子は着替えを受け取りながら身を竦めた。起き上がる者が多いということは、死ぬ者がそれだけ多いということだ。——そうだろう。鬼に引かれた者が鬼として起き上がれば、犠牲者は鼠算式に増えていく。
「……佳枝さん、おれ」
徹は出て行こうとする佳枝を呼び止めた。沙子に佳枝を手伝うよう命じられているが、知り合いの甦生には立ち会いたくなかった。
「お願い。この人は分かってるから、そんなに大変じゃないわ。最低限のことだけ教えてあげて、食事をさせればいいのよ。そのくらいのこと、できるでしょ？　今夜は他にも三人、起きる人がいるかもしれないの。ここだけじゃなく、あちこちの小屋にもいるわ。あたしと辰巳さんだけじゃ、手に負えないの」
「ええ……はい」
「お願いね」
佳枝は言って、そそくさと出て行く。甦生を待つ者が多いのは事実だった。いや——

そもそも死体が多く、それが甦生するかどうかを見極められる者の数が限られているために、事前に甦生するかどうかを確認し切れないのだ。だからとりあえず死体を集めて隠す。それを全部、見張らなければならない。山入だけでは収容するのに追いつかず、村に設けた隠れ家や山の中の小屋にまで死体があふれて、しかも仲間たちにもうその実数を把握できていなかった。

徹は溜息をつく。

「とにかく、それに着替えてくれ。なんだったら、おれは外に出てるから……」

「結構よ」と、律子は答えた。思い切るようにひとつ首を振って、佳枝が渡した着替えを差し出す。「これ、いらないから」

「いらないって」

「わたしは死んだんだから、経帷子で充分だわ。生きている人のふりなんてしたくないの」

「生きてるようなもんだよ。これから、あんたはそれを受け入れなきゃならない」

「着替えて、人の顔をして、人を襲うの？」

徹はわずかの間ののち、頷いた。

「……そうだよ」

「それはしたくないの。そういう選択の自由はないのかしら」

徹は律子の微笑(ほほえ)んでさえいる顔を見つめた。
「誰も襲いたくない。殺したくないの。生きているふりなんてしたくない。わたしは死んだの」
「襲わないと、飢えて死ぬんだよ」
でしょうね、と律子は頷いた。
「……それでいいわ」
徹は軽く笑った。
「そう言うんだよ、みんな。人を襲うなんて冗談じゃない、そんなことはできないって。けれども、結局みんな飢えに負けて襲うんだ。だからそういうことは断言しないほうがいいよ」
「そう？　じゃあ、できるかどうか、やってみるわ。それともそういうことは、ここでは許されないの？」
「許されないと思うよ」
「でも、無理矢理わたしを襲うことはできても、襲わせることなんてできないわよね？」
「あんたが拒むと、あんたの周囲の人間が襲われることになるんだよ」
律子は目を見開き、そして考え込むようにしばらく宙を見ていた。
「……だったら仕方ないわ。わたしには、やめてってお願いすることしかできないも

の」
「家族を犠牲にするのかい？」
「わたしが誰かを襲っても、誰かが犠牲になるのよ。だったら同じことなんじゃないかしら。――それに、たぶんわたしの家族はもう襲われてると思うわ。最後に見たとき、二人ともそんな顔をしていたもの」
「もしもそうじゃなかったら？」
「言ったでしょう？　わたしが誰かを襲っても、誰かがわたしの家族を襲っても、犠牲が出るという意味では同じだわ。わたしは自分が人を襲うのは嫌なの。そんなふうに人を殺したくない」
たくさんの犠牲者を見た。あの虚ろな目をした患者たち。敏夫の努力も虚しく、命は失われていった。その元凶にはなりたくない。
「きっとじきに、今の言葉を撤回したくなると思うよ」
「そうかもしれないわ。……でも、とりあえずやってみたいの。自分を嫌いになりたくないから」
徹は顔を背け、律子の視線から逃げるようにして部屋を出た。
「着替え……置いておくから」

妙は飢餓に呻いていた。加奈美は母親の無惨な声を聞きながら、それでもそれをどうしてやったらいいのか分からないでいた。
あれ以来、ありとあらゆるものを様々に加工して与えてみたが、妙はそれらのすべてを受けつけなかった。口に入れては吐き戻すことを繰り返し、家の中には異臭が薄く充満していた。
加奈美、と妙が呼ぶ。この苦痛をなんとかしてほしいと訴えている。なのに加奈美にはどうすることもできない。本当に、試せるだけの食材はすべて試した。できるだけ柔らかく煮てそれをすりつぶし、裏ごしすることまでしてみたが、まったく受けつけなかった。コンソメのように薄くしてゼリーで固めてみたが、それでさえ吐き戻すものをどうしてやったらいいのだろう。
「加奈美……あたし、どうしたのかしら。具合が変なのかしら。このまま死ぬの？」
加奈美はもう少しで笑いそうになった。箍が外れそうな自分を感じる。ここで笑い出したら二度と笑いが止まらないだろう。そんな気がする。
「気弱なことを言わないで。お母さんが無茶をして、無理に食べようとするからよ。胃が弱ってるのよ。とにかくスープで我慢して？」
「だってひもじいんだもの」
「とにかく、スープから始めましょ？　ね？」

でも、と言い募る妙を宥めて、加奈美はキッチンに立つ。あたりには物が散乱し、放置された食物があふれていた。とりあえずシンクの上にスペースを作ろうとして、調理道具をまとめにかかる。シンクの中のものを浚えていて指先に痛みを感じた。包丁が汚水の中に沈んだままだった。

小さく声を上げ、水の中から手を引き出す。人差し指と中指の先がざっくりと切れていた。慌てて流水で洗う。声を聞きつけたのか、妙がどうしたの、と近づいてきた。

「切ったの。大丈夫、そんなにたいした傷じゃないから。絆創膏を取ってくれる？」

加奈美はことさらのように笑って振り返ったが、妙は異様な表情を浮かべて加奈美の手先を凝視していた。

「お母さん。救急箱を取って」

ええ、と頷いたものの、妙はその場を動かない。食い入るように加奈美の手先を見つめている。傷口からあふれた血が、指を伝う。関節を這い、軽く曲げた指の付け根から滴り落ちようとする。妙が手を伸ばしてそれを受けた。妙の掌に点々と血が落ちる。妙がそれを口に運ぼうとして、加奈美は仰天した。

「——お母さん！」

だって、と妙は口の中で呟く。加奈美が思わず摑んだ手を追い、懸命にそれを舐めようとする。無理にもぎ離すと、反対にその手を握った加奈美の手を摑み、傷口に吸いつ

こうとする。

「お母さん、やめて！」

妙は何が飢えを止めてくれるのかを悟った。悟ったことを加奈美も悟った。起き上がってきた母親、続いていた死、それらが何を意味していたのか、ようやく何もかもを理解していた。

「お母さん、やめて。それだけは駄目！」

これで血の味を覚えてしまったら。そうしたら妙は本当に化け物になってしまう、と思った。せっかく戻ってきたのに、遠く隔たった別のものになってしまう。

「お母さん、お願い……！」

妙はかろうじて動きを止めた。加奈美の手を放し、血のついた自分の両手を眺め、それを服に擦(こす)りつけて拭(ぬぐ)う。拭った手で顔を覆(おお)い、その場に蹲(うずくま)って嗚咽(おえつ)し始めた。加奈美もまたその場に蹲り、母親の肩を抱いて泣いた。

4

微(かす)かにドアの開く音を聞いたように思って、静信は目を開けた。周囲は暗く、風の音だけが壁を隔てた遠くで響いていた。

「気分はいかが？」

微かに沙子の声がして、小さく何かのスイッチを入れる音がした。すぐ側で眩しくスタンドの明かりが点って、静信は軽く目を眇める。

小さな部屋の中だった。静信はベッドに寝ていたが、そのすぐ上まで斜めになった天井が迫っていた。高いところに天窓のような小さな窓が切られていて、板戸がぴったりと閉じていた。おそらく屋根裏部屋なのだろう。部屋はあまり広くない。ベッドの脇に小さな枕頭台があって、そこにはスタンドがひとつだけ置かれている。その脇には小型の机とも、抽斗のついたテーブルともつかない台があって、それに向かって据えられた椅子に沙子が腰を下ろしていた。

身を起こそうとしたが、目眩がひどかった。両手と両足も括られているようだったので、あっさりと努力を放棄した。まだ半分、夢うつつの状態にあるようで、何もかもが現実感を欠き、ひどく薄く頼りなく思われたが、これは単純に目が覚め切っていないせいばかりではなかったかもしれない。

「縛られていることを屈辱的だと思わないでもらえると嬉しいんだけど」

「……いや。事情は分かるよ」

そう、と沙子は微笑む。

スチームが入っているのだろう、掛け物は毛布だけだったが、寒くはなかった。さほ

どに悪い気分でもない。無理に身動きしようとすると目眩がしたが、おとなしく横になっているぶんには、惰眠を貪っているようでむしろ心地が良かった。なるほど、これでは犠牲者は積極的に不調を訴えないはずだ、と妙な納得をし、同時にそれを理解している自分を不思議に思う。静信は自分に何が起こったのかを理解していたし、問われれば証言できるだろう。犠牲者はそれができない、ということではなかったのだろうか。

「何が起こったのか、分かる？」

そう訊いたのは沙子のほうだった。静信は頷く。

「分かっては具合が悪いんじゃないのかい？」

「いいの。室井さんはもう逃げられないんだもの。忘れるよう言い聞かせる必要なんてないでしょう？」

光線の加減か、そう言う沙子は悲しげに見えた。

「そうか……」

「怒ってる？」

「何を？」

見返したが、沙子は答えなかった。

「君がぼくを襲ったことなら、当然のことだと心得てるよ。……覚悟して来たんだ。むしろまだ生きていることのほうに驚いてる」

そう、と沙子は呟いた。
「今は何時だろう」
「五時を過ぎたかしら。じきに夜が明けるわ」
では、母親や光男はさぞかし心配しているだろう、と思った。静信がもう戻らないことを美和子は理解しているだろうか。自分はこんな形で、最後の最後に美和子らを裏切ったのだと思った。父親と同じく、円満な存続を願う人々を裏切り、あえて落胆させた。静信はそのことに対し、済まないとも哀れだとも感じていたが、父親はそうではなかったのだろうか。自分をスポイルした何かに対する復讐なのだから、心を痛めたりはしなかったのかもしれないが、そこまで冷徹になり切れていただろうか、とも思う。
「父はなぜ、秩序を憎んだのだろう……」
静信が呟くと、沙子は首を傾げた。それは、と言いかけた沙子を、静信は遮る。
「うん……父の気持ちは分かったと思うんだ。父は良き住職であることを周囲に強要されて、自分をそこに押し込んだものを憎んだ。けれども、誰も父に対して鞭を振りかざしてかくあれと強制したわけじゃない。周囲は父に期待しただけなんだ」
「期待という名の強要ではないのかしら。良き住職であってほしい、という望みそのものは期待にすぎないけれど、そうでなければ許さないという無言の圧力を伴っていれば強要だと思うわ。良き住職であれば褒め称えて大事にする、――そうすることは、必然

的に、良き住職でなければ褒め言葉も何もかも与えてはやらない、という脅しを含んでいるものだと思うの。他人の肯定がほしくない人間なんていないでしょ？　肯定を得ようと思うと、他人の期待通りに振る舞うしかない。それどころか、期待通りでなければ、住職のくせに、と言われて否定されるのだとしたら、期待に背くことは自分にとってとても辛いこと——懲罰を覚悟しなければならないことになるんだと思うの」
「……そうなんだろうな。肯定がほしければ期待通りに振る舞うしかない。否定されたくなければ、やはり期待通りに振る舞うしかない。そこには最初から選択の余地がないんだ……。自己の存在を否定されることが苦痛でない人間はいないから」
「ええ」
「でも、父は周囲の肯定がほしかったのだろう？　それは父が周囲を肯定していたということなんじゃないだろうか。父は周囲の肯定を欲する程度には、周囲のものを愛していたんだ。だとしたら、周囲の期待通りであることは父にとって喜びだったはずだ。なぜそうじゃなかったのだろう」
「さあ……。肯定を得るために積極的に周囲の期待に応えようとするか、否定されないために周囲の期待に阿るか、という違いなのかもしれないわ」
「周囲の期待に阿る……」
「自分の存在を否定されることほど辛いことはないもの。否定から逃れようとして、周

囲の期待に阿る。彼は肯定されるのだけど、彼の中には周囲に阿ることなく生きてみたいという渇望(かつぼう)が潜んでいて、ずっと解けない。自分自身として生きてみたい、それを肯定してほしいという周囲に対する期待が、お父様の中にはなかったかしら。なのに期待するものは得られない。そこで自分自身であることを受け入れてくれない連中なんていらない、と言ってしまえればいいのだけど、そのためには周囲の肯定など必要としないほどの自己肯定が必要だわ。けれどもお父様はかつて一度たりとも自分自身であったことがなかった。そんな人に、周囲の否定に揺らがないほど強い自己肯定なんてできるものかしら」

そうかもしれない、と静信は思う。ひょっとしたら父は、周囲の期待に応えていなければ成り立たなかったのかもしれない。阿っている自分を知っていたから、その束縛を離れ、期待に背いて自分自身であってみたかったけれども、期待されることがなければ、信明自身にもどこへ行けばいいのか分からなかったのかも。

「父はここに至って周囲の期待を投げ捨てた……。けれどそうして、父はかくありたいと思うような自己を獲得できたんだろうか」

「どうでしょうね。右へ行けと言われてこれに従い、右に進む。あるいはこれに逆らって左に進む。どちらにしても、こちらに行けと言う声がなければ進む方向を決められないということよね。もう誰も自分に期待してくれなくて、こちらへ行けと要求してくれ

なかったら、自分でもどこへ行けばいいのか分からないでしょうね」
「もしも周囲に背くために自分を投げ捨てたとして、それでもしも甦生すれば、父はひどく途方に暮れるのじゃないだろうか」
「たぶん」
「あれほど憎んだ期待がなければ、成り立たない自分を自覚したとき、父は何を思うんだろう……」
「そうね」と沙子は目を逸らし、呟く。「わたしだったら、死にたいぐらい自分に失望すると思うわ」
死にたいぐらい、と静信は呟いた。
「そうか……死にたかったのかもしれない」
「──え？」
「彼の弟。だから彼に自ら殺されることを望んで、抵抗をしなかったのかも……」
慈愛深い神の寵童、慈愛深い住職、そうであることが実は、当人たちを苦しめていた。それは彼らが求めたことではなかったからだ。ただ周囲から拒絶されないためだけに、自身を殺してそれを演じた。
慈愛の具現であった父、
光輝の具現であった弟、

秩序の寵愛と
神の寵愛と
周囲の敬愛を
隣人の敬愛を一身に受けていた彼の同胞。それは彼の内実によるものか、それとも内実を謀(たばか)った演技によるものだったのだろうか。
おそらく、彼はその答えを知っていた。
そう、もちろん弟もまた、光輝の具現を演じていたのだ。いや、弟のみならず、おそらくは隣人たちの誰もがそうだったのだろう。
丘は沙子が指摘した通り、そもそも楽園を追放された罪人たちが住まう流刑地(るけいち)だったのだ。

丘のすべては、造反を押し隠すための信仰、逸脱を押し隠すための規律によって見事なまでに調和していた。本質的に造反者であり、逸脱者でなければ、調和の中に居場所がないよう、すべては頑(かたくな)に整合していたのだから。
だから彼の弟もまた、本質的に造反者であり逸脱者だったのだ。弟の中には神に対する——神の作った秩序に対する抜き差しならない憎悪(ぞうお)があった。
その憎悪を押し隠し、
良き隣人を演じることによって、弟は秩序に調和し神の寵愛を得ていたのだろう。秩序

を憎めば憎むほど、それを隠すため、弟はより強く自律せねばならなかった。皮肉にも、抜きんでて強い憎悪こそが、弟をして光輝の具現たらしめていたのだ。

それほどの憎悪があって、憎悪そのものが自覚されていれば、弟が秩序との調和を願ったはずがなく、神の寵愛を欲したはずがない。弟は秩序に背きたかった。神に造反してみたかったのだ。——だが、その衝動はあっても、弟はそれを実行に移すことができなかった。なぜなら、この抑圧と抑圧に対する憎悪がなければ成り立たない己を知っていたからだ。

弟の中には秩序に対する嫌悪と侮蔑（ぶべつ）があったが、秩序が求める演技を拒むことができなかった。秩序を離れた自己を想像することができなかったからだ。背くために背いても、弟はその先、自分が何を求め、どうあればいいのか分からなかった。それゆえに演技を拒むことができない己を唾棄（だき）し、自身をそこまで歪（ゆが）めた秩序を心の底から憎んでいた。

そんな弟にとって、兄は毅然（きぜん）と生きる光輝だった。兄は秩序を畏（おそ）れず、己の在りように逆らわなかった。——そのように見えた。弟には兄が秩序に迎え入れられたく、それが決して成されないことに苛立（いらだ）っていることが分からなかった。弟の目から見た兄は、秩序を拒絶し、昂然（こうぜん）と兄そのものであろうとしているように見えた。そして、その兄と比して、秩序を憎みつつ阿るしかない己に絶望していたのだった。

ゆえに弟は、彼が凶刃（きょうじん）を振り上げたとき、すすんでこれを受けたのだ。

弟は兄のようになりたかったが、それは決して得られなかった。弟もまた、どんなに秩序を憎んでいても、秩序に背くことのできない己の不甲斐なさに落胆していた。背いたところで、何物を得ることもできない己の在りように絶望していた。兄は凶器を握ることすら、躊躇わない。――躊躇わないように思われた。

すすんで兄に屠られ、殺人という名の反秩序の成立に荷担することによって、弟は初めて秩序に背いた。背いて以後、己がどこに行くべきかを思い煩い、それを描き出すことのできない自己の不甲斐なさに失望する必要もなかった。

これによって弟は秩序から、やっと解き放たれたのだった。

静信は傾いた白い天井を見上げて、それらを語った。沙子は黙って静信が語るそれに耳を傾けていた。

やがて小さく息を吐く。

「室井さん、これだけは信じてほしいの」

静信が沙子に目を移すと、沙子は指を組む。

「わたし、とてもあなたの作品が好きだったの。これだけは偽りのない本当だったの」

静信は軽く微笑んで頷いた。沙子はひどく複雑そうな顔をして、そして膝の上に置いた手を見つめるように俯いた。

二章

I

屋敷のどこかで六時を打つ時計の音がした。もう外は薄明るいはずだが、部屋の端々に落ちた闇(やみ)の色が薄まる気配はない。天窓の周囲からも漏れてくる明かりは見えなかった。板戸だけで遮光できるとも思えないから、あるいは板戸が内外の二重になっているか、そもそも塗り込めるかどうにかしてあるのかもしれなかった。

静信は鐘の音を聞くともなく聞き、机のほうを見る。ついさっきまで何かを考え込むように俯(うつむ)いていた沙子は、眠ってしまったのか、さらに深くうなだれ、ぴくりでもない。そんなところで寝て構わないのか、と声をかけようとしたとき、ふらりと均衡を崩したように傾いて、そのまま床の上に倒れ込んだ。

「——沙子」

声をかけたが、返答はない。それどころか、なんの反応もなかった。怠(だる)い身体(からだ)を無理にも起こし、なんとか近寄ろうとしてみたが、括(くく)られた手足でベッドを降りようとあがいている間に部屋のドアが開いた。辰巳が片手にトレイを抱えている。

「ここにお邪魔していたんですね」
辰巳は言って、廊下の向こうに声をかけた。
「ここにいた」
すぐに廊下から正志郎が顔を出した。辰巳に頷いて、床に倒れた沙子の身体を抱き上げる。特に驚いた様子もなく廊下の外へと運び出していった。
「……大丈夫なのかい？」
静信の問いに、辰巳は微笑む。
「室井さんに御心配いただくのは妙な感じですね。——大丈夫です。単に眠っただけですから」
「でも」
辰巳は肩を竦めた。スタンドを動かし、トレイを枕頭台の上に載せる。魔法瓶がひとつとサンドイッチか何か、そんなものがナプキンを被せられ、載せられているようだった。
「彼女たちが眠るときはあんなもんですよ。夜明けが近くなると、文字通り墜落するように前後不覚になる。どこで倒れ込んでもいいよう、家の中は遮光を考えてますから」
「光には弱いんだね」
そうですね、と言って辰巳は静信の手足にかけた紐を解く。

「君も正志郎氏も人間なのかい？」
「さあ、どうでしょう。なぜ？」
「眠るふうじゃないから。昼間にも出歩くことができるようだし」
　そうでなく、と辰巳は顔を上げた。
「そんなことを訊いてどうするんです？　ひょっとして彼のような協力者になりたい？」
　ああ、と静信は苦笑した。
「別にそういう意味じゃない。単に不思議だったから。もしも君たちが人間なのだとしたら、屍鬼と人間は共存できるということになるんじゃないかと思って」
「下僕になることを共存、と言って差し支えないのであれば、共存は可能なんでしょうね」
「下僕なのかい？」
　そうですね、と呟きながら辰巳はポットからコーヒーをカップに注ぎ、皿の上に被せたナプキンを取ってどうぞ、と言う。自分は椅子を引き寄せて見張るように腰を下ろした。
「その言葉で正しいんじゃないかな。彼は決して我々を裏切らない。少なくともそういう信頼関係を築くことには成功してますね。ただ、彼が裏切ってそれで我々が困るかと

言うと、そんなこともないですし」
辰巳の答えはあまりにも日常めいていて、しかもいつかのように快活だった。
「我々は別段、正志郎を必要としてはいないけど、役に立つから側(そば)に置いて生かしてるんです。本人もそれを望んでいますしね。彼が与えてくれる経済的な裏付けだけでも、我々には助けになってます。とは言え、別に彼が死んで困るというものでもないですけど。千鶴は正式に彼の妻だから、正志郎が死んだって、まるまる千鶴と沙子が相続するだけですからね」
「奥さんには戸籍があるんだね」
「捏造(ねつぞう)する方法なんか、いくらでもありますよ。——まあ、だから正志郎がいないと困るというものでもない。千鶴や沙子に財産を残してくれた連中なんて、正志郎だけでもないですし。ただ、非常食糧としては役に立ってますよ。その点では貴重かな。正志郎には逃げる意思がないから、食糧に困ったときには、彼で食い繋(つな)げますからね。そういう形でならね、共存は可能だと思いますけど。理想を言うなら屍鬼一人当たりに、五人くらいの人間がいて襲撃を許してくれれば、屍鬼も飢えずに済むし、人間のほうも天寿を全うできる」
「それを受け入れる人間はいないだろうな……」
「でしょうね。一度や二度、襲ったぐらいでは死なないんですけど。とりあえず飢えを

しのぐ程度に襲っておいて、それなりに手当てしてしばらく放っておけば、それでまた回復する」辰巳は言って、苦笑するように笑みを零す。「だから、正志郎がいると、どうしても食糧を得られないときには便利ですね。――その程度のことだから、対等の関係ではないでしょう。役に立つ間は生かしておくんだし、そうでなくなったら殺してしまえばいい。あれは隷属と呼ぶべきなんじゃないかな。正志郎が隷属していて、我々はそれを許している」

「我々ということは、君は人間ではないんだね」

「沙子は人狼と言いますよ。ほら、映画じゃあ、吸血鬼には狼男の下男がつきものでしょう。だから人狼なんだそうです。別に狼に変身するわけじゃありませんけどね」

「屍鬼ではない？」

「違うんじゃないかな。御存じの通り、ぼくは昼間にも出歩けますし。ごく普通の食事でも持ち堪えることができますしね。第一ぼくは、未だかつて死んだ経験がありませんから」

静信は瞬いた。

「そういうのもね、たまにいるんです。数は少ないけど。葬儀屋の速見なんかもそうですね。死なないで、ただ変わってしまうんですよ」

そう、と静信は呟いた。

「君たちの仲間はどのくらいいるんだい？」
「さあ。もうずいぶんな数になるんじゃないですか。村だけじゃなく、外からも犠牲者を連れてきていますしね。甦生する確率はそんなに高くもないけど、母数が大きければかなりの数になるわけで」
「確率はどのくらい？」
辰巳はくすりと笑った。
「興味ありますか？　自分の甦生する確率に」
静信はただ首を振る。辰巳は首を傾げた。
「数人に一人、というところじゃないかな」
「そう……」静信は目を伏せ、「君は、ぼくの父がどうなったか知らないか？」
「起き上がってらっしゃいましたよ」あっさり言って、辰巳は苦笑する。「ただ、残念ながら簡単にはお引き合わせできませんけどね。起き上がりはしたのだけど、やっぱり寝たきりなんです。江渕によると、生前の損傷は再生できないんだそうで」
「そう……」
では、と思った。父親は第二の生を望んだのに、そういった形でしかそれを得られなかったわけだ。
「ですから室井さんも甦生する確率が高い、と言うと少しは慰めになりますか？」

「いや。……あまり興味はないな、正直を言うと」
「それじゃあ、自分の生き死にに興味がないように聞こえますよ」
「そんなつもりはないけれども」と、静信は自分の手を見た。「甦生はしたくないな。ぼくは臆病だから自分の手を汚したくないんだよ。甦生するくらいなら死にたいと思うけれども、死にたいか、と訊かれると、ノーと答える。ぼくは死にたくないんだ。……怖い」
「そうは見えませんね」
「ぼくが落ち着いていられるのは、まだ自分が死ぬんだってことを信じていないからじゃないかな。別にこれは阿るわけではないのだけど、君たちがぼくに対してそこまで酷いことをするわけがないと、思っているのかもしれない」
「だったら、そんな甘い期待は捨てたほうがいい、とお勧めしますよ」辰巳は言って、軽く笑う。「前に何かで読んだんですけど。連続殺人ってあるじゃないですか。快楽殺人者？　そういう人間でもね、被害者と話をしてコミュニケーションを取っていると殺せなくなるんだそうです。被害者はモノから人間になってしまう。共感可能な人間を殺すことは、そういう連中にとってさえ辛いことなんでしょうね。だから、反対に被害者はできるだけコミュニケーションを取ろうとしてみるといいんだそうです。……けれども、我々にそれは通用しない」

静信は苦笑する。
「別にぼくが話をしたがるのは、そういう意味じゃないよ。他にすることがないから。せめて紙と鉛筆があれば、黙っておとなしくしているけれど」
訊いておきます、と辰巳は笑う。
「……たしかにそういう奴もいますけどね。と言うより、そういう時代もある、と言ったほうがいいのかな。最初はね、嫌がるんですよ、みんな。人を意図的に襲うなんてことは、誰にとっても怖いことなんでしょう。純粋に罪を犯すことを恐れる者もいるし、罰を恐れる者もいる。重大事すぎて背負いきれないんでしょうね。
けれども人間の心とはよくしたもので——我々を人間と呼んで良ければ、の話ですけど——慣れてしまうんです。罰を恐れていた者は慣れるのが早い。罰されることがない間は、それはしても良いことなんですよ。すぐに罰なんか下されないことを確認して、意に介さなくなる。そうでない者は少し時間がかかりますが、それでも少しのことです。すぐに共感を断ち切ることを覚える。これは餌だと割り切るようになるんです」
「悲劇的だね」
「悲劇ですか?」
「じゃないのかな」静信は、徹を思い出す。「命の在り方は根本的に変わってしまったのに、意識が変わっていないわけだから」

「そうですね。そうかもしれない。……だから、みんな自分を守るために、割り切ることを学ぶんですね。これは単なる餌だって。そう割り切った奴は、人間を餌として扱う。話しかけたりしないし、話しかけられても答えないんです。何かの弾みで会話してしまうと、襲えなくなったり、いまさらのように罪悪感を抱いて苦しんだりするんです。……ところが、それにも慣れる。よくしたもので。会話して、コミュニケーションを楽しんで、好い奴だな、と思って、じゃあ、夜明けも近づいてきたことだし、そろそろやろうか、と思う」

「そう……」

「沙子は言うんですよ、屍鬼と人間の関係は特殊だって。たしかにそうだと思いますよ。同じ体系の記号を共有している捕食者と被捕食者なんて、屍鬼と人間くらいのものでしょうから。その特殊性を楽しむようになるんです。会って話をして、趣味が合うことを確認して、相手に好感を持っても、それと襲うこととは別なんです。いや、むしろ、相手に好感を持つと襲うことも嬉しかったりする。嫌な奴に食わせてもらうなんて、気持ち悪いじゃないですか。どうせ食わせてもらうなら、気持ちの良い奴がいいと思うのかな。楽しい時間の仕上げに相手を襲う。それでなんの矛盾も感じなくなるんです」

「君のように？」

そうですよ、と辰巳は破顔する。

「頭では倒錯した行為だな、と思うんですけどね。頭で思っているだけで、疑問はないです。薹が立ってくると、そうなるんですよ。だから、室井さんも妙な期待はしないほうがいいと思うな」

「心しておくよ」

「本気で忠告してるんだけどな」

「ちゃんと聞いているつもりだけど」静信は苦笑する。「ぼくはまだ、状況を舐めてるんじゃないかな。知識として、一度や二度の襲撃では死なないと知っているから。現実に怠いだけで、特に苦痛もないし、むしろ気分は悪くない。軽い酩酊が続いてる感じがするね」

「ああ……そうか」

「だから自分が死にかけてるんだってことを、差し迫ったこととして感じられないんじゃないかな。今は、死ぬことは怖いけれども自分で選んで来たんだからしょうがない、という気分になっているね。でも、ずっとこのままでいられるとも思えない。きっとこれから、あがくんだと思う。だから、ぼくを正志郎氏と同じもののように考えて、油断しないほうがいいと思うよ」

ふうん、と辰巳は呟く。

「室井さんは面白いな。……沙子の言っていた通り」

「君と沙子は対等なのかい？」
「ぼくは単なる下男ですよ。狼男ってのは吸血鬼の使い魔ですからね」
「君が誰かに使われている、というのも妙な気がするな。沙子が君たちの中でいちばん偉いように見えるのも、考えてみれば不思議な話だね」
「実績の問題ですね。沙子は生き残る術を知ってるんです。自分の身の安全を自分の才覚で得ることができる。我々にとって、それは最も重要なことです。眠って目を覚ますためにさえ、完全に遮光された空間が必要なんですから。それを手に入れることは想像するほど簡単なことではないんですよ。間違いなく安全な寝場所を自分の手で得る才覚のない者は、悲惨な死を迎えることになる。けれども沙子は安全に生きる術に精通していて、人間や人間のシステムを最大限、有効に使う手を知っている。沙子は安全をくれます。実際、ほとんどの屍鬼は沙子の庇護を離れたら生きていけない。そのことをみんな分かっているんですよ」
「そうか……」
「ぼくが沙子に対して馴れ馴れしいのは、それだけ付き合いが長いから」
「長いのかい？」
　とても、とだけ辰巳は答えた。

2

尾崎孝江は庭に薄煙が漂っているのを見て、庭に出た。煙の所在を探して、土手道沿いの裏庭に廻ると、敏夫が屈み込んで紙を燃やしている。

「どうしたの。駄目じゃないの、こんなに空気が乾いているのに」

村はもともと秋口から冬場にかけて乾燥するところだが、今年はそれがひどかった。消防団からもつい先日、焚き火に注意してくれと回覧が来たばかりだった。

「嫌ですよ、火事なんか出したら何て言われるか」

小言を言いかけて、孝江は言葉を途切らせた。うっそりと屈み込んだ敏夫の膝先に積まれている書類の束は、明らかにカルテだった。

「お前——それはカルテじゃないの？」

孝江は病院のことに疎いが、それでもカルテが簡単に処分してはならないものであることぐらいは知っている。敏夫も死んだ夫もこんなふうに庭で焼き捨てていたことなど、一度もない。

「いいんだ」と、敏夫は呟いて、炎の中に新たに書類を放り込む。「……書き損じなんだ」

敏夫はそう言ったが、放り込まれて炎にめくれ上がったカルテには、検査結果の帳票が貼られている。それが燃え上がっていく。
「だって、お前」
　孝江は言いかけ、そして敏夫の妙に生気のない顔に固唾を呑んだ。顔色が悪い。目の下には濃い隈ができている。そのくせ妙に目ばかりが異様な光を放っているのだ。——まるで、憑かれたように。
　だから言わないことじゃない、と孝江は身震いした。罹患したのだ。あれだけの数の患者と接触して移らないはずがない。看護婦も次々に辞めて、それだけでも事態の深刻さが分かろうというものだ。
「敏夫……病院に行きましょう。ちょっと待ってて、今救急車を」
「必要ない」
「必要なくなんか、ありませんよ。お前、そんな顔色で。医者に診てもらう必要があるわ」
「医者はおれだ。……心配ない。別に何でもないから。ちょっと疲れているだけだ」
「でも」
「余計なことをするな」
　敏夫は孝江を睨んだ。その形相に孝江は一歩、退る。何でもないという様子には見え

ない。けれども。
孝江はふと思う。これに罹患して助かった患者はいない。必ず訃報が入るのだ。ならば、敏夫は移ってなどいない。——そうでなければならないのだ。

3

昼食を持ってきたのは、正志郎だった。ほとんど手つかずで残された朝のトレイを見て、正志郎は眉を顰める。
「食べたほうが良くはないですか」
静信は身を起こした。手足の縛めは朝に解かれたままだった。ドアには鍵がかけられており、枕許には辰巳が、用があれば鳴らすように、と言って置いていった電池式のブザーが置いてある。二度ほどそれを鳴らしたが、そのたびにやって来たのはどこかで見たような気もする老婆で、正志郎がやって来たのはこれが初めてだった。
「食欲がない？」
訊かれて、静信は頷いた。喉は渇いたが特に食べ物はほしくなかった。それよりもひたすら眠かった。
「食べないと保ちませんよ、と言ったところで——お笑いに聞こえるでしょうね」

「眠いんです。……それだけです」
答えながら、静信は正志郎の顔を間近から眺めた。
「どうしました？」
「ずっと以前——夏の盛りに事故があったんです。その車の運転手が、あなたではないかという噂があって」
「わたしですか」
「桐敷さんと言うより、兼正の住人ではないかという噂があったんです。でもあの男とあなたは似ても似つかないな、と思って……」
正志郎は、わずかに苦笑するふうを見せた。
「奇妙な人だ。こうやって虜囚になっていながら、自分の将来や身体の心配をせずに、そんなことを考えているんですか」
「先々のことで考えるべきことは、ぼくにはもうないんじゃないかな。考えることがあるとすれば、過去のことだけだから」
「……夏に事故？」
「ええ。黒い高級車が村に入ってきて、子供を引っかけて逃げていったんです。やっぱりあれは、山入の義五郎さんを誘い出すために山入に向かったのかな」
「ああ、あの男のことですか。そう——そうでしょうね。たしかに山入に人を向かわせ

たことがありますよ」
「ひとつ訊きたいことがあるのですが、いいですか」
「何です？」
「なぜ、あなた方はこの村に来たんでしょう。……ぼくは少し前から、それがとても気になっているんです」
「それは我々――沙子たちにとって、この村が色々と好都合だからですね」
「たとえば土葬だったり？」
ええ、と正志郎は頷く。
「それはひょっとして、ぼくの書いたエッセイが原因なんでしょうか」
「ああ……それで気になっているわけだ」
「そうです。だとすれば、村を現在の状況に追い込んだそもそもの元凶はぼくだということになります。どうなんでしょう？」
正志郎は無言で頷いた。静信は息を吐いた。やはりそうだったのだ、と思う。静信が屍鬼を呼び込んだのだ。にもかかわらず、静信は村を見捨てた。
「ただ」と、正志郎は言う。「自分のせいだと思うのはどうでしょうね。――土葬の風習が沙子たちにとって都合が良いことは事実です。ただ、それだけではないんですよ。色々な意味で、この村は沙子たちにとって理想的な場所だった。もちろんあなたがああ

してエッセイに書かなければ、外場のような理想的な場所があることを沙子も知りようがなかったのだけれども、書いたこと自体を悔いても仕方がありません。何かがひとつ違っていれば、沙子はこの場所を諦めたでしょう」
「慰めてくれるんですか？　なぜ？」
「さあ。……あなたは沙子の敵には見えないせいかもしれない。あなたはむしろ、わたしと同じく屍鬼の側の人間に見える。そのせいなのかもしれません」
「そうですね。たぶんぼくは屍鬼の敵ではなく、人の敵なんでしょう。別に屍鬼が人を狩ることを歓迎したいわけではないけれども、ぼくにはそれが仕方のないことに見えます。肉食獣が生命を狩るのと同じく、避けられないことに。それを咎めることはできないような気がするんです。……けれども人が屍鬼を狩ることは仕方ないことのように見えない。抵抗するのは当然のことだとしても、そのために屍鬼を殲滅することを、どうしても受容できないんです」
「そう……」
「あなたはなぜ、屍鬼の側にいるんですか？」
さあ、と正志郎は言い、すぐに軽く息を吐いた。
「わたしはね、人でなしの子供なんですよ」
静信が首を傾げると、正志郎は苦笑する。

「わたしの父親はそういう人間だったんです。地位も財産もあって社会的にはひとかどの男だったけれども、家庭にあっては家族を虐げ、社会にあっては他人を虐げた。わたしは加害者である父を憎んでいました。だが、わたしは人でなしの子供だから、誰も被害者として憐れんではくれないんですよ。むしろ蔑み、憎む。親族も社会も、人でなしの子供だと言って指弾するんです」

正志郎はじっと足許に視線を落とした。

「誰もわたしの存在を許さない。けれども、わたしの主観においては、わたしもまた被害者です。社会はわたしを人でなしの子だと言って排除するけれども、わたしにはなぜ自分がそういう扱いを受けなければならないのか、分からなかった」

「だから、社会に背を向けることで拒絶したかった？」

「少し違います。——屍鬼の存在は世間一般の価値基準で言うなら、悪なんでしょうね。人を殺して生きているわけですから。文字通りの人でなしです。鬼そのものなのだけど、それは屍鬼の罪ではないです。沙子たちもまた被害者で、人を殺さなければ生きていけない生き物になってしまっただけなんです」

「……分かります」

「屍鬼が人を狩ってなぜいけないんです。人だって人を狩るんです。自分が生きるため、欲望を満たすため、優越感を満たすために人を狩って引き裂く。父はまさしくそういう

種類の人間で、だからこそ悪だとされ、人でなしだと呼ばれてきたんです。そしてわたしは、そんな父に狩られてきたのだし、そんな父を持ったためにずっと人の群によって狩られてきた。それに比べれば、屍鬼が人を狩るのは屍鬼としての必然で、別段、屍鬼が冷酷なわけでも悪だからでもないんです」

「ええ」

「わたしはずっと、わたしを虐げたものに復讐したいと思っていました。父に対しても社会に対しても加害者になりたかった。そうすることで被害者の立場から抜け出したかったんですよ。けれどもわたしは人の範疇にあるから、それをすることは許されないんです。どんなに父が憎くても殺すことは許されなかったように。──わたしは人だから人の秩序に捕まっている。誰もわたしが意図的に人を殺し、社会秩序を壊すことを許してはくれないんですよ。人でなしの子と呼び、秩序から弾き出し、自分たちは平然とわたしを狩るくせに、わたしが加害者になることは許さない。それは悪なんです。無理にそれを貫けば制裁が待っている。わたしは被害者という立場から出られない」

「ひょっとして屍鬼になりたかったのですか?」

「そうですね。……そうです。屍鬼になりたいんですよ、わたしは。本当に人でない生き物になって、人の範疇を越えてしまいたいんです。そうすればもう誰も、わたしが加害者になっても悪だと指弾することはできない。そう言って責める者はいるでしょうが、

そんな糾弾はナンセンスです。屍鬼が人を狩るのは必然で、善悪の問題ではないんですから。少なくともわたしはそう思って、糾弾を嘲笑っていられる。けれども屍鬼として甦生するためには、一度死ななくてはならないんです。死んで確実に起き上がるものなら、わたしはいつでも喜んで殺されます。けれども、確実に甦生するとは限らない……」

「だから、せめて協力者でいる？」

「そういうことです。甦生するのは数人に一人です。しかも甦生するかどうかは、個人の体質によるところが大きいらしい。何か資質のようなものがあるんです。甦生を促す因子があるのか、甦生を抑制する因子があるのか、どちらにせよ、とりあえず何かそういうものがあって、これは明らかに遺伝する」

「辰巳くんもそんなことを言ってました」

「親のどちらかが甦生した場合、子供もまた甦生することが多い。多いと言っても、そうでない場合に比べてにすぎないのですが、明らかに確率は上がります。子が甦生した場合にも親のどちらかが甦生することが多い。甦生しやすい血統のようなものがあるんですね。ですから両親が二人とも甦生した場合には、その子供は非常な高確率で甦生する。中には稀に、辰巳のように死なないまま変容する者もいる」

「人狼ですか？」

「沙子はそう呼んでいます。両親がともに甦生したからと言って、必ず子供が人狼になるというものではありませんが、人狼になった者の両親は必ずどちらも甦生します。逆に両親がともに甦生しなかった場合、子供も甦生しないことが多い。甦生する子供は稀です。そして、わたしの両親はともに甦生しなかった」

「御両親も犠牲になったのですか」

「わたしが依頼したのです」正志郎は自嘲するように笑った。「わたしは千鶴に会った。彼女に襲われて、初めて彼女が何者だかを知りました。わたしは嬉しかった。わたしが父を殺すことは罪ですが、千鶴が父を殺すことは必然であって罪ではない。だから懇願したのです。父母を襲ってくれたら、父母から受け継ぐもののすべてを千鶴に譲る、と言って。――そして父母は死んだ。千鶴はわたしを自由にしてくれました。だが、父母は甦生しなかった。わたしにはほとんど甦生する望みがないのです。極めてその可能性が低いことを分かっていて、一度死んでみる勇気が、わたしにはない……」

「そう……」

「だからせめて手を貸している。屍鬼は秩序に敵対するものです。殺人が必然であるほど秩序に反する存在なんです。屍鬼は秩序を破壊する。破壊してほしいとわたしは願っています。そうしたらもう、秩序はわたしを排斥できない」

「破壊するのですか、本当に?」

「少なくとも沙子はそれをしようとしているんです」
静信は首を傾げた。正志郎は笑う。
「沙子はここに、屍鬼のコロニーを作ろうとしているんです。村を乗っ取り、住人をことごとく入れ替えて、屍鬼の村を作ろうとしている」
「……馬鹿な」
「そうですか？　沙子はずっとそれを望んでて、そして夢想にすぎないと思っていた。けれども、外場という特殊な場所があったんです。あることを、あなたが教えてくれた」
「……あのエッセイで？」
「そうです。土葬の風習、内部だけで完結した社会。村は地理的にも社会的にも孤立している。狩り場となる都会までは、自動車道を使えば夜のうちに行って帰ってこれる距離です」
「無茶だ。そんなことができるはずがない」
「けれども実際、これだけの死人が出て、まだ外部には漏れていないじゃないですか」
「それは」と、静信は口ごもった。
「これはあなたが村のことを書いたせいじゃない。極めて特殊な村の成り立ちが、あまりにも沙子にとって好都合だったんです。あれを読んで、沙子は夢想を実現させる望み

があることに気づいた。人を雇って調べさせてみると、これ以上は望むべくもないほど、村の在りようは我々にとって好都合だった。何かひとつでも、不都合な要因があれば、沙子は諦めたでしょう。だが、それがほとんどなかった。無視できる程度だったんです」

「そして、兼正の先代を襲い、この土地を手に入れ、屍鬼にとってぜひとも必要なこの気密性の高い、遮光の能力の高い建物を移築した……」

「そういうことです。そうして準備したと言うのに、いよいよ越してくる段になってみたら、沙子たちは村に入ることができなかったんです」

「虫送りですね。あなた方は深夜、村にやって来ようとして祭りに出会い、引き返した……」

「ええ。村の誰かに招いてもらう必要があった。だから傀儡（かいらい）を一人村に差し向けて、ちょっとした儲（もう）け話を餌（えさ）に山入の老人を呼び出してもらったんです」

そして、と静信は思う。義五郎は外で襲われ、屍鬼に言われるまま彼らを招き、村を開いた。彼らは村に侵入した。そこから何もかもは始まったのだ。

村と外部との接点を切断し、村を孤立に追い込んだ。住人を間引き、屍鬼と入れ替えていくことで、村を侵食していった——。

「成功するでしょうか」

「すると思っていますよ。そのために、丹念に準備をしたんですから。駐在の後任を得るために——そうやって作った仲間を正式に村に異動させるためだけにも、たいへんな手間がかかっているんですよ」
「けれども、敏夫がいる……」
「尾崎さんはじきにいなくなるんです。そうでなければ仲間になる」
静信は目を瞠った。
「……襲ったのですか？」
「ええ。我々を狩るほどの機知と行動力を持った人は、もう村にはいないんです」
静信は少し考え、では、村は終わったのだ、と思った。
「……我々を憎みますか？　あなたの村を、我々は蹂躙した」
「あなた方を責める権利を、ぼくは持ちません」

4

澄んだ空に笛の音がしていた。傾いた陽を掠めて黒く鳥が旋回する。タツは店先から空を仰いでそれを見た。笛の音はひとしきり流れて調子を変え、またひとくさり続く。誰かがすぐ近くで今夜の本番に備えて稽古をしているらしかった。

今日は珍しく人通りが多かった。霜月神楽のせいだ。神楽を担当する下集落の者たちは妙に張り切っている。これで厄を落とすのだと盛んに口にしていた。

（落ちるもんかね……）

いくら厄が落ちたところで、死んだ者は帰っては来ないだろう。落とすとすればもっと早く、暑い盛りでなければならなかったという気が、タツにはしている。

タツは何度も膝先に置いた紙に目を落とした。紙片と道を見比べながら考え込んでいると、笈太郎がやって来るのが見えた。

「タツさん、タツさん」

笈太郎は息せき切ってやって来て、武子が死んだ、と伝えた。

「ゆうべ、死んだんだとさ。誰も知らなくてさ。なにしろあそこの息子ときたら、弔組にも連絡してなかったらしいんだよ」

「そう」

そうか、とタツは思った。ついにそれはタツの周辺に及んできたわけだ。日がな一日、無駄話をするしか能のない年寄りだからと言って避けてはくれない。村を襲った何かは完全に村に覆い被さり、あとはもう、この村は死滅していくだけなのだ、と思った。

笈太郎は武子の息子を責めている。ろくに医者にも診せず、葬式も葬儀社に頼んでごく内輪で簡単に済ませるつもりらしい。そのことに憤っていた。武子が蔑ろにされてい

るように感じるのだろう。何度も掌で目許を拭っていたが、半ば悔し涙なのに違いない。

「別に武子さんを疎かにしてるわけじゃないだろう。寺じゃあ、もう葬式なんかできないんじゃないのかい。病院だってそうさ。事務長が薬持って走りまわってるぐらいだもの、手が足りないんだろう」

「だってさ」

「弔組だって、いい加減、勘弁してほしいだろうよ。これほど続いたんじゃあね」

「だがね、タツさん」

「第一、医者に診せてどうなるもんでもないだろ」タツが言うと、笈太郎は口を噤んだ。「もう駄目なんだよ、この村は。そういう気がしないかい」

「縁起でもない。知ってるかい、今年の神楽は全番やるんだってさ。それで厄を落とそうって話さ。落ちると思うよ、おれは。夏からこっち、ちょうど祭りのない季節だったからね。それも按配として良くなかったんだよ」

「そうかね……」

そうさ、と笈太郎は言って、床几から立ち上がった。

「行って若い者を手伝ってやらないと。そうさ、何がなんでも今年の霜月神楽は、うまいことやってもらわないとな」

自分自身に言い聞かすように言って、笈太郎は村道を北へ、神社のほうへと歩いてい

く。その背を見送り、タツはまた紙片に目を落とした。いつにない人出で賑わう村道を眺め、夕陽が射し始めると周囲のものを片付けにかかった。床几を片付け、店の雨戸を閉める。あちこちの戸締まりを確認しながら二階に昇った。道を見下ろす二階の寝間には、鞄がひとつ、すでに荷造りを終えてある。タツはあちこちを確認し、整理して、そして昼間から膝先に置いていた紙片をもう一度、眺めた。そこには溝辺町すらも遠く離れた場所にある老人ホームの入所心得が書いてある。たいして良くもなく、安くもなく、おまけに見ず知らずの土地にある民間の施設だったが、タツが探し始めてから空きが見つかったのは、ここだけだった。

こんなところでも、村に残っているよりはいいのに違いない。

タツはそれを折り畳み、バッグの中に押し込んだ。壁に貼ったバスの時刻表に目をやり、旅行鞄ひとつを提げて、家を出た。外には夕闇が迫っている。神社のほうから渓流沿いに祭り囃子が響いてきていた。普段はもう人通りの絶える時間だ。それが今日だけは途切れることなく人が北へと歩いていく。タツはその流れに逆らい、南へと向かう。国道に出てバス停に立った。

バスはいくらも経たずにやって来た。タツは乗り込み、最後尾に坐る。動き始めたバスの車窓から、しばらくの間、遠ざかる村の明かりを見ていた。

5

千鶴は屋敷の潜り戸を抜け、林道を登って脇道へと入っていった。道は斜面を下り、やがて樅の林から吐き出されて細い畦道へと繋がる。そこまで来ると、尾崎医院の明かりはすぐ近くだった。

屋敷を出るとき、正志郎が恨めしげな視線を寄越していたが、千鶴はそれを無視してきた。戸籍の上では夫でも、千鶴にとって正志郎は単なる下僕にすぎない。死んでみる度胸もない男が、これから死のうとする犠牲者を羨むなんて馬鹿気ている。

祭り囃子が流れていた。それが神事に属するものだとは分かっていたが、響いてくる笛の音は特に疎ましくも忌まわしくもなかった。むしろ妙に気分を高揚させる。プリミティブな何かを掻き立てる音色をしている、と思う。

それを聞きながら畦道を辿った。土手道から病院の裏庭に入り込み、明かりの点った窓を叩く。ベッドに横になっていた男は身を起こし、中へと促すように顎をしゃくった。

千鶴は部屋の中に入り込んだ。ローテーブルの上には書類が揃えられている。俯いた男に目をやり、カルテをいくつか手に取った。どれもきちんと書き改められている。

「お疲れだったわね」

「そうでもなかった。少なくとも、君の指示通りに何かをしようとする限り、苦はなかったよ。こういうのを憑かれたよう、と言うんだろう」

「気分はどう?」

「悪くない。怠いし眠いが、気分はいいな……」

千鶴は微笑む。そんなものだったかしら、と思った。千鶴が犠牲者だったのは、もう五十年も前のことだ。辰巳に襲われた当初、どんな気分だったのか、そんなことは忘れてしまった。胸を掻き毟って倒れたときの、自分は死ぬのだろうかという恐怖なら、今も生々しく覚えているけれども。

「沙子もこれを見たら喜ぶと思うわ。沙子は役に立つ者にはとても寛容なの」

「人間にすぎない桐敷氏や辰巳を、生かしているみたいに?」

「そうね。——でも、辰巳は違うわ。あれは仲間なの。数は少ないけど、ああいうのもいるのよ」

「へえ……」

「脈もあるし、体温もある。本当は辰巳みたいな者がたくさんいてくれると助かるんだけど。でも、なかなか人狼は生まれないの。三十人かそこら襲ってやっと一人出る、というところ。でも、この村のおかげでずいぶん増えたわ。人狼に限らず、仲間もね」

「村を乗っ取れるぐらい?」

千鶴は笑った。
「そうね。早く村が閉じてしまえばいいのに。そうしたら、本当に自由に村の中を歩けるわ。買い物をして立ち話をして――おままごとみたいね」
「それが君たちの望みか？」
「そうね。安全な拠点がほしいの。隠れていて安全なのじゃなくて、隠れる必要のない安全な場所が。もう少しだわ。もうじきそれが手に入る」
「そう簡単にいくかね」
「沙子は最後の詰めが難しいんだ、と言うけれども、ここまで来たら成功したも同然でしょう？　いちばんの脅威だったあなたも、もう敵ではないわけだし」
「いちばんの脅威はおれじゃない。村の連中だよ。屍鬼の存在に気づいていながら、目を閉じて耳を覆って息を潜めている連中。あいつらは現実を拒絶してるだけで、あんたたちを許容しているわけではないいんだからな」
「そう？」
「成功させようと思うなら、もっと表に出ることだな」
まさか、と千鶴は呟いた。
「そのほうがいいんだよ。そもそも人間は、嘘臭い嘘のほうに騙されやすいんだ。見え透いた嘘を厚顔無恥に主張すれば、こんな嘘臭い嘘をここまで厚顔無恥に言ってのけた

りはしないだろうと思う」言って、敏夫は投げ遣りに笑う。「だから表に出たほうがいいんだ。あんたたちが当たり前の人間の顔をしていれば連中はそれを信じる。連中はそのほうが都合がいいんだ。何よりも君たちに単なる人間であってほしいんだよ。だからそうアピールすれば、それを信じる。むしろそう信じさせてほしいんだ」

千鶴は首を傾けた。そう——そういうものかもしれない。

「これからの仕上げがしやすいようにしてやろうか？」

「……どうやって？」

「おれが、村の重鎮に君や桐敷氏を引き合わせるんだよ。静信がまだ生きているんなら、静信も使うと申し分ない。村にとっちゃ、尾崎と室井は偉いんだ。おれたちが保証を与えれば、連中は安心する。古老が君たちを受け入れれば、いっそうのこと信用する」

「わたし、昼間には出歩けないのよ？」

「夜に出歩けばいいだろう、胸を張って。あんたが昼間に出歩けないことぐらい、おれがいくらでも保証してやるよ。ＳＬＥなんだろう？　なんだったら診断書を書くぜ。診断書だけなら江渕さんでも出せるだろうが、村じゃあ、そこに尾崎の名前があるかどうかで、重みがぜんぜん違ってくるんだ」

「前向きね。……でも、残念ながら、最近は村の夜道を歩いても、出会うのは仲間ばかりよ」

「今日はそうじゃない」
ああ、と千鶴は呟いた。
「お祭りなのね。お囃子が聞こえていたわ」
「霜月神楽だ。こういう時にこそ表に出るんだ。別に不自然じゃないだろう。村に転居してきた人間が、祭り囃子に浮かれて様子を見に出てくるんだ。そうでないほうが不自然なくらいだよ」
「駄目よ、神事は」
「肝心の場所に近寄らなきゃいいんだろう。見物に来たと言って、遠目にうろうろしていれば、それで事足りる。実際に君たちを境内で見かけたかどうかなんて、誰も問題になんかしない」
千鶴は少し考えた。それは悪くない提案に思えた。第一、村がこんなに賑やかなのに、身を潜めてこそこそしているしかないなんて、あまりにもつまらない。
「尾崎先生が案内してくれるの？」
ああ、と敏夫は頷く。億劫そうに立ち上がった。
「辛そうね」
「気分は悪くないんだが、ナマケモノになった気がするな。——病院のほうへ廻ってくれ」

「なぜ？」
「おれとあんたが一緒に歩いてたんじゃ、唐突だろう。それらしい演出をするのさ」
千鶴は首を傾げ、とりあえず部屋から庭へと出て病院に廻った。裏口の前にいると、敏夫が大儀そうにドアを開ける。処置室に連れて行って、千鶴の左手に包帯を巻いた。
「たしかに、それらしい演出ね」
千鶴は掌と甲を覆った包帯を見る。
「包丁で切ったと言うんだな」
「ずいぶん深手みたい」
「そのくらいでなきゃ印象に残らんだろう。小芋の皮を剝こうとして包丁が滑ったんだ。親指の付け根を切った。そういう処置をしてある」
「細かいのね」
「それがリアリティってもんさ。よくあるんだよ」
千鶴は笑った。
「そう言えば、小芋は滑るのね。わたしも昔、よく切ったわ。……懐かしい」
台所に立って包丁を握ることなど絶えて久しい。自分が包丁を握っていて、そして怪我をして、この包帯の下に傷があるのだと想像するのは、妙に楽しかった。寄る辺を見つけたような安堵感がある。

「小芋を剝く屍鬼というのは、冗談のようだな」
「失礼ね。これでもわたしは昔、人間だったのよ」
「どのくらい昔?」
「さあ?」
「結婚してたのかい?　子供は?」
「夫は子供を与えてくれるほど長い間、側にいなかったわ。……そして南方で死んだの」
千鶴は目を細める。もう顔も忘れてしまった。思い起こそうとするとわずかに、漠然とした喜びと悲しみとが深い井戸の底の水面に立った波紋のように甦るだけ。これもじきに忘れてしまうのだろう。千鶴はじっと、包帯の下の、かつて存在したことのある傷を眺めた。
「そんなに嬉しいかい。まるで特大の宝石がついた指輪でも眺めてるふうだな」
敏夫は倦怠感の漂う顔で苦笑する。
「そうね。気分的には近いわ。……不思議ね。わたし、人間に戻りたいのかしら。そんなこと、もうとっくにどうでもよくなったと思ってたのに」
千鶴は包帯をためつすがめつしてから、敏夫を促した。
「ねえ、行きましょう」

「包帯を見せびらかしに？」
「ええ、そう。とても自慢で嬉しいの。おかしい？」

6

おはよう、と声がして、静信は机から顔を上げた。机の上には紙が広げられている。それに目を留め、沙子は首を傾ける。
「何かほしいものはないかと訊かれて。紙と鉛筆がほしいと言ったら桐敷さんが与えてくれたのだけど、いけなかっただろうか」
「正志郎が？　いけなくはないけれど……いいの、起きて？」
うん、とだけ静信は答えた。
「お仕事中じゃあ、お邪魔かしら」
「別に、そういうことじゃないよ」と静信は首を振る。もう、中断されて困るようなことはない。――少なくとも今は、ないつもりでいる。家を出たときに、何もかもここまでなのだと見切りをつけてきた。「……他にすることがないから」
「じゃあ、ここにいてお話をしても構わない？」
どうぞ、と答え、静信は微かに笑った。沙子は首を傾ける。

「……何？」
「いや。君たちは面白いな、と思って。辰巳くんと桐敷さんがね、何かと言うと顔を出すんだよ。そして話をしていく。ぼくも退屈しているからありがたいのだけど、まるで会話に飢えてるみたいだね」
「そうなのかもしれないわ」沙子は微笑って目を伏せた。「これを言うと、とても妙な感じがすると思うんだけど、わたしたちは人恋しいの。……あまり人と話をする機会がないから」
「お互いがいるだろう？」
「そうね。でも、仲間は人じゃないもの。そういう意味で人恋しいの。人と話をすること自体は、いくらでもあるけど、そういうとき、わたしたちは自分が屍鬼だということを隠してる。正志郎だって、やっぱり自分を偽っているんだわ。だから、何も隠さずに済む人と話ができるのが嬉しいの」
「仲間は駄目なのかい？」
「駄目じゃないわ。でも、違うの。たとえば室井さんなら、わたしたちが人を襲うことは仕方ないことだって言ってくれるでしょ？　もちろん仲間と話していてもそう言うわ。でも、同じ言葉でも意味が違うの。仲間が仕方ないって言うのは、そう考えないとやってられないという意味だもの」

「……そうか」
「正志郎は人だけど、人の陣営にはいない。……そうね、閉塞感があるんだと思うの。仲間と話をしているとき、わたしたちは常に心のどこかで、仲間とでなければこんなふうに話のできない自分を意識してるんだと思うわ。楽しくないわけではないのだけど、どこか虚しい……」
「なのに、仲間だけの村がほしいのかい？」
沙子は静信を見る。
「そんなことまで喋ったの？　正志郎ったら」
「聞いてはいけないことだったんなら、忘れるよ」
「そんなわけじゃないけど……」沙子は俯く。「呆れたでしょう、子供っぽくて」
「子供っぽい？　なぜ？」
「……自分ではそういう気がするわ。とても子供じみたことだって。わたし、ずっと一人だったの。一人で狩りをして、一人で隠れて。とても寂しくて心細かった。どこかで仲間に会わないかしら、ってそればかり考えてたわ。仲間に会って、いろんなことを分かち合えたらいいのに、って」
「誰か仲間が、君を火葬から救ってくれたんじゃなかったのかい？」
「……違うわ。必ず火葬になるような時代じゃなかったの、って言ったら驚く？」

静信は少し目を見開いたが、どちらとも答えなかった。沙子は笑う。
「だから勝手に起き上がったの」
「君を襲った誰かがいたんだろう？」
「いたわ、もちろん。もう忘れちゃったけど」
「――本当に？」
沙子は目を逸（そ）らし、瞬く。
「お父様のお友達が、あの人を連れてきたの。異国からのお客様で、その人はしばらくうちに逗留（とうりゅう）することになった。兄妹（きょうだい）やねえやは怖がってたけど、わたしは面白かった。言葉なんかこれっぽっちも分からなかったけど、身振り手振りで話をするのが楽しかったの。別に変だとも思わなかった。その人は昼間にも出歩けたんだもの」
「人狼（じんろう）だった？」
「たぶんね。でも、近所で不幸が続いて、それでお客様はいられなくなったの。きっとあの人のせいだって。理由なんかない。単にその人が異国の人だったから。そういう時代だったの。それでお父様も置いておけなくなって、その人は別のつてを頼って関西のほうに行くことになって。出発の準備をお手伝いしてたとき、あの人が来たの……」
「そう……それで？」
「それでおしまい。目が覚めたら棺桶（かんおけ）の中だった。何も分からなくて怖かったわ。守り

刀があったから、それで一生懸命、蓋を切って土を掘ったの。たくさん泣いたし叫んだわ。そうしたら隠坊が来て助けてくれたの。家に連れて行かれて、知らせを走らせてくれて、親切にしてもらって――その人をわたし襲ったの」

静信は息を潜めた。

「とてもお腹が空いてたんだもの。何がなんだか分からなくて、どうしてそうなるのか分からなかったけど、その人を襲った。そしたらやっと飢えが治まったの。それから眠くなって――それとも、迎えが先に来たんだったかしら。もう忘れちゃったわ。とにかく家に戻って、そしてすぐに納戸に入れられたの。いろんなことがあった気がするけど、覚えてない。……記憶って摩耗していくのね。

たくさん苦しい思いをしたことは覚えてるわ。陽に焦がされたり、すごくひもじかったり。お父様がひどく怒ったのもお母様が泣いてたのも覚えてる。納戸みたいなところに入れられて、それから別の場所にやられたの。別宅の近くだったと思うわ。蔵の中に押し込められて、それきり誰にも会わなくなった。日に一度、人が御飯を運んでくるの。だから、その人を襲ってた。次から次へと顔ぶれが変わったわ。……今から思うと怖い話ね」

「……そうだね」

沙子の両親は、彼女を養ったのだ。遠方にやって捨て置きながら、それでも次々に奉

公人を入れて沙子に与えた。——そういうことなのだろう。
「そこでたくさんのことを知ったし、学んだわ。自分がどういう生き物だか理解した。それでそこを逃げ出したの。親切な人を犠牲にしながら家に逃げ戻ったら、もう家には別の人が住んでた。家族は越してたの。だから捜した。ずっとずっと捜したの。そうしてるうちにお母様が生きてるはずもないほど時間が経った。それでも諦めきれないでいたら、妹だって死んで当然なほど時間が経った。それでやっと諦めたの……」
嘘だ、と静信は思った。沙子は諦めていない。だから千鶴や正志郎を側に置いておくのだ。だからこそ村を襲った。二度と取り戻せないものだから、自分の手で作ることにしたのだ。
「わたし、ずっと一人で、とても寂しかった。心細かったの。仲間を作ることができるなんて知らなかったから、本当に仲間に会いたかった。それができるんだってやっと分かって、なのにみんなわたしを罵って逃げていくの。罵らなかったのは、辰巳だけ」
「……そう」
「辰巳がいて、仲間を作ることは前よりも簡単になったけど、やっぱり離れていく人がいて、食事に出かけたまま帰ってこない人もいたわ。ずっととても心細いままだった。千鶴がいて、正志郎がいても、江渕さんがいて佳枝さんがいても、わたしたち、この広い世界の片隅で、お互いの顔を見ながら閉塞してないといけないの。もっと自由に散歩

ができて、御近所の人と自分を偽ることなく立ち話ができて、お友達を作ったり仲違いしたりできたらどんなにいいだろう、と思ったわ」
「帰属する家と社会がほしかったんだね」
「……子供っぽいわね」
静信は答えなかった。たしかに子供じみていると言って言えなくもなかったが、それは幼い望みであるだけに、根源的な望みであるように思われた。母体を慕うのに似ている。自分を抱きかかえ、庇護し、くるみ込んでくれる何かがほしいのだ。そう願わない人間など、果たしているのだろうか。
「でも」と、沙子は呟く。どこか決然としたものが浮かんでいた。「わたしたちには安心して休める場所が必要なの、これはたしかだわ。どこかに根づいて、共同体の一部になって、自分の居場所を作る必要が。わたしたちはもともと、人間なのだもの。群を作り、社会を作る生き物なの。けれども、人の社会はわたしたちの存在を受容してくれない。だから自分たちだけの社会を作るの。わたしたちの種が存続するために、自分たちのための、種の性質に応じた秩序が必要なのよ」
「それをここに作る?」
「作るわ。もうじき、できる……」
そうか、とだけ静信は呟いた。沙子は軽く息を吐き、そして少し躊躇う様子を見せる。

「室井さん、わたし、お腹が空いたの」
辰巳の言った通りだ、と思った。心情的な好悪は、行為になんの関係も持たないのだ。たぶん沙子は、こうして小さな友人のような顔をして、そのくせ静信を死に至らしめるのだろう。――それが沙子にとっての必然だから。
そうか、と改めて思った。やはり自分はここで死ぬのだ。不思議に、怒りも悔しさもなかった。ただ、自分が死んだら「自分」という存在はどこに行くのだろう、と思った。

7

大川かず子は、店の前を片付けていて、商店街をやって来る男女を見て目を丸くした。男のほうは敏夫だが、横にいる女は見かけない顔だった。にもかかわらず、それが誰だか、かず子にはすぐに分かった。兼正の――あの。
談笑しながら近づいてきた二人は、かず子の姿に目を留めて会釈をした。女のほうは手に真新しい包帯をしていた。
「こんばんは」
かず子は気を呑まれて、口ごもり、ただ頭だけを下げた。どういうことだろう。あの

兼正の住人が村に下りてくるなんて。それもこんな祭りの晩に、敏夫と楽しげに話をしながらそぞろ歩きをしているなんて。
「あの……そちらは」
かず子が問うと、敏夫は兼正の、と答える。
「奥さんだよ。桐敷千鶴さん」
「あら、まあ……それはどうも」
口の中で答えながら、かず子は困惑していた。あの屋敷の住人は決して村には下りてこないはずだ。こんなふうに村の誰かと世間話をするなんてあり得ない。あるとすれば、それは夜の片隅でこっそりともたれ、そうしてその誰かはそのあとに急死するか、さもなければ消えるのだと、そんな気がしていた。
「奥さんが、この賑(にぎ)やかな音は何だって言うんでね」
ああ、とかず子は呟いた。
「今日は祭りなんですよ。お神楽(かぐら)で。そんなたいした祭りじゃないんですけど。別に屋台が出るわけでもないし、近隣から見物客が来るわけでもないんで」
「わたし、お神楽って側で見たことがないんです」
そう言って、千鶴は笑った。どこにも翳(かげ)りはなく、本当に楽しげに見えた。
「あらまあ」

「都会育ちだったものですから、お祭りや年中行事には本当に縁がなくて」
そうなんですか、とかず子は子供のように浮かれた千鶴を見た。怪我(けが)をして病院に行って、それで祭りの話を聞いて出てきたということなのだろうか。かず子の視線に気づいたのか、千鶴は左手を示して笑う。
「みっともないでしょう？　小芋が手の中から逃げ出しちゃったんです」
「ああ」と、かず子は困惑したまま笑った。「わたしもよくやるんですよ」
「根がおっちょこちょいなのか、怪我が絶えなくて。娘なんか、料理してるんだか料理されてるんだか分からない、なんて意地悪を言うんです」
まあ、とかず子は声を上げて笑った。そうやって笑ってみると、今まで兼正の住人について感じてきた不信感が、いかにも馬鹿馬鹿(ばかばか)しいものに思えた。そう、よくよく振返ってみると、なんの根拠もなかったことだ。村の様子が何やらおかしいのはたしかだが、それと兼正の住人を積極的に結びつけるものなど、何もない。なのに自分はそこに何かの関係があるに違いないと、いつの間にか思い込んでいたらしい。自分でもそうとは意識しないままに。
「なんでもお身体(からだ)が悪いって伺ったんですけど、散歩に出てこられていいんですか」
「このところ調子がいいんです。引越したあとは、疲れが出たのかずっと調子が悪くて寝たり起きたりだったんですけど」

「おまけに今年は暑かったですからねえ」
「そうなんですよ。本当にお天気続きで。お天気がいいと身体に堪えてしまって」
「あら、そうなんですか？」
　敏夫が口を挟んだ。
「光線過敏症ってのがあるんだよ。日光が当たると皮膚疾患が起こったり、体調を壊すことがあってね」
「まあ……そうなんですか。大変ですねえ」
「家の中でおとなしくしていればいいことなんですけど。でも、あんまりお天気がいいと、ついお洗濯をしたくなったりするんです。シーツなんかを洗って、庭中に干すのって、とても楽しそうな気がして」
　千鶴は子供が遊びの話をするように笑う。
「そういうことをするから、寝込む破目になるんだよ」
　はい、と千鶴は敏夫に向かって首を竦める。その様子が本当に子供じみていて、微笑ましかった。自分が兼正の住人に対し、なぜかしら禍々しいイメージを持っていたのが本当に愚かしく思えた。
「じゃあ、今夜は楽しんでらしてくださいよ。一晩中やってますから」
　かず子が笑うと、千鶴も笑う。

「ありがとうございます」

8

敏夫は大川かず子が目に見えて警戒心を解いていくのを理解して、皮肉な気分にならずにはいられなかった。たったこれだけのことで、連中はあれほど明らかな嫌疑を投げ捨てるのだ、と思う。どこまでも愚かな。——結局のところ、自分の見たいものを見ているだけ。

かず子に限らず、足を止めて話しかけてくる男女の誰もがそうだった。堂々としていれば、かえって誰も疑わない、と言ったのは敏夫自身だが、それがこうまで図に当たって、呆れずにはいられない。

呆れると言えば、それは千鶴に対しても同様だった。村で殺戮を恣にしてきた女が——あの屋敷に住まい、そこから村に対し暴力的な支配力を行使してきた女が、自分の手に巻かれた包帯を得意気に見ている。心底、嬉しそうなのが奇妙だった。

（なんて茶番だ……）

思いながら村道を北へと歩いていると、一之橋の袂に出た。加藤電気店のゆきえは、やはりかず子と同じように打ち解けた様子で千鶴と立ち話をする。そのゆきえと別れ、

千鶴は橋の袂で足を止めた。羨むように神社のほうを見ていた。
「行ってみるか？」
「……行ってみたいわ。でも、駄目」
「なぜ？　何か実害があるのかい」
「さあ……試してみたことがないから分からないわ。沙子は聖書を読んだりするから、実害はないんじゃないかしら。でも、駄目なの。もう足が竦んでる」
「試してみたらどうだい。少しでも近づけば近づくほど、村の者は君たちに対する警戒心を捨てるんだ」
「本当にそうね」と、千鶴は小さく笑った。「みんな最初はとっても不審そうにして、それからだんだん、警戒心を解いていくのね。なんだ、って顔に書いてあるみたいだったわ」
「おれの言った通りだったろう」
「本当に。なんて簡単なのかしら」
「人間は単純な生き物なんだよ。……行ってみれば。怖ければ摑まっていればいい」
言って、敏夫は千鶴の手首を握った。千鶴は戯けて首を傾げる。
「これはなんだかスキャンダラスじゃない？　こんな平和な村では、ちょっと問題だと思うんだけど」

「暗いから分かりゃしないさ。橋の向こうは人も多いし。第一、多少の噂になったところで構うもんか」

そう、と千鶴は笑う。

「じゃあ、行けるところまで。でも無理強いはしないで。本当に怖いの」

ああ、と敏夫は頷いた。橋に向かって足を踏み出す。神社へと向かう善男善女が、やはり驚いたように敏夫と千鶴を見ていた。

「おや——若先生」橋の中程で声をかけてきたのは、外場の村迫宗秀だった。敏夫に会釈して、千鶴へと目をやる。「そちらは桐敷の奥さんですかね」

「そう。お神楽を見たことがないって言うんでね。でも、人混みに参ってるらしいな。……どうします、引き返しますか」

千鶴に向けて問うと、千鶴は迷うようにする。本当に腰が引けている。怖いものを見るように鳥居を見上げた。

「宗秀さん、そっちからちょっと盾になってあげてください。身体の弱い方なんで心配だ」

ああ、と宗秀は頷いて、千鶴の脇に立つ。そうしているうちに、また顔見知りと出会う。話をしながら橋を渡っているうちに、徐々に敏夫の——千鶴の周囲には人垣ができ始めた。

「尾崎先生……駄目です」
千鶴は足を止めて敏夫の手を引く。ちょうど橋を渡り切ったところ、鳥居の真下にさしかかろうとしていた。
「どうしました」
「気分が悪くて……。せっかく連れてきていただいたんだけど、戻ります」
「戻るんじゃあ、かえって大変でしょう。社務所がある。休ませてもらいましょう」
「いえ、でも」
敏夫は周囲の人間を促した。
「ちょっと支えてあげてください。社務所へ」
はあ、と頷いて千鶴の腕に手をかけたのは、上外場の田茂定次だった。千鶴はそれを嫌がるように蹲る。
「いえ……駄目。帰ります」
「その様子じゃ無理ですよ」敏夫は言って、すぐ間近の人出の中に、清水の顔を見つけた。「清水さん、済みませんが手を貸してください」
清水は怪訝そうにして敏夫らのほうに歩み寄ってきた。
「お久しぶりです。——どうしたんですか」
「桐敷の奥さんが祭りを見たいと言ってね。ここまで来たんだけど、具合が悪いらしく

て。社務所まで運びたいんだよ」
　はあ、と清水は、敏夫らの周りにできていた人垣を見た。これだけの人数がいるじゃないか、とその顔には書いてあるようだった。
　お願いします、と言って、敏夫は千鶴の手首を清水に引き渡す。千鶴を背後から引き立たせて鳥居の向こうへと押し出した。
「……いや！　お願い、帰ります。家に帰して」
　千鶴は頭を振った。威圧感のようなものが自分を取り巻いて押しつぶそうとするように感じられた。良くない予感のようなもの。とてもこれ以上は、前に進めない。妙に浮かれた祭り囃子(ばやし)が、かえって神経を炙(あぶ)るようだった。
「どうも妙だな」と、敏夫は言う。「あんたはまるで神社を怖がっているみたいだね、千鶴さん」
　千鶴は顔を上げ、背後を振り返った。蹲った身体を無理にも引き立てられ、周囲には人垣ができている。それは完全に千鶴を包囲し、右から左から伸びた手が千鶴の身体を拘束していた。
　千鶴は背後で薄く笑っている男を見る。
「……顔色が悪い。社務所で休んだほうがいい。それとも社務所には行けない理由でもあるのかい」

千鶴は目を見開いた。ようやく、騙されたのだ、と気がついた。周囲を見ると、周囲の人間も不審そうに千鶴と敏夫を見比べている。先生、と中の誰かが困惑したように声をかけた。敏夫は千鶴の首筋に手を伸ばし、平然と社務所を示す。
「抱え上げてくれ。体温が下がって徐脈が出ている」
「……やめて」
「手当てが必要なんだよ」
やめて、と千鶴は声を上げたが、男たちは迷ったように顔を見交わし合って、それから千鶴を抱え上げた。鳥居が頭上を通過していく。本殿の建物が近づき、祭り囃子は高まる。鐘の音がした。それが背筋を粟立てた。
「やめて！　いや！」
千鶴は身もがいた。あまりの恐怖に、そうしないではいられなかった。人々の手を逃れ、地面に転がり落ち、遮二無二這って逃げ出そうとした。
清水は女のその様子を見て、何か不審なものを感じないではいられなかった。この狼狽ぶりは何なのだろう。まるで恐ろしいものから逃げようとして我を失っているように見える。あまりにも異様な様子に、手を出しかね、呆然と見ていると、敏夫が耳許で囁いた。
「逃がすな。――あんたの娘を殺した犯人だ」

清水は敏夫を振り返り、そして女を振り返った。とっさに腕を伸ばし、這って逃げようとする女の肩を摑む。
「運んでくれ。いよいよ様子がおかしい」
敏夫の声に、呆気にとられていた男たちが動いた。清水も狼狽したまま女を羽交い締め、そしてその匂いに気づいた。いかにも高そうな香水の匂いだった。清水はこの匂いに覚えがあった。
（娘を……殺した……）
恵の部屋に残っていた匂いだ。この夏、突然倒れて逝ってしまった一人娘。まだわずかに十五歳でしかなかった。十六の誕生日を目前にして。——清水はどれほど苦しんだだろう。
「誰か、社務所に行って場所を空けてもらってくれ」
敏夫が指示しているのが聞こえた。女は清水の——周囲の手を振り解こうと手足を振りまわして暴れている。拳が当たった。鈍い痛みがあった。それが清水の空虚な胸の中に淀んで息を潜めていた何かを呼び覚ました。
（……この女が）
自分から娘を奪った。そう、まさしく兼正にあの異様な家が建ってからだ、すべての災厄が始まったのは。娘を失った痛み、空洞と化した家庭の冷えた空気が与えた痛み、

職場や隣近所の者がまるで汚染されたものを見るようにして自分たちを見た、その排除されたことに対する痛み。もはやそれを嘆く気力さえ失っていたのに、今になってそれらの痛みが生々しく甦（よみがえ）り、対象不明の怒りとなって清水を身震いさせた。

「清水さん、頸（くび）」敏夫に言われ、清水は我に返った。敏夫を見返すと、敏夫は自分の頸（けい）部（ぶ）を指している。「脈を見てくれ。救急車を呼ぶかどうかを」

考えないと、という敏夫の声を聞きながら、清水は思わず、言われるままに女の首筋に手を当てた。女の肌は異様なまでに冷たかった。これほど声を上げ、暴れているのに汗もかいていなければ、温（ぬく）もりも感じられない。それはまるで、娘の肌のようだった。突然、死んだ恵。清水は娘に取り縋（すが）って泣いた。その時の肌の。

清水は夢中で手を動かした。首筋を探るが、なんの脈動も感じられない。目を見開いて、たまらず手を伸ばした。女の胸を摑むようにして探る。なのに何も感じられない。

——心拍が、ない。

敏夫を振り返ると、敏夫は頷く。そうか、と思った。敏夫はこれを知っていたのだ。そして清水に理解させた。

「社務所に運んでくれ。本殿でも、舞殿（まいどの）でもいい」

清水は率先して抱え上げ、舞殿のほうに引きずった。女が悲鳴を上げる。周囲の者たちが、徐々に異常に気づき始めた。

「何の騒ぎなんだい」
人混みから責めるような声が上がる。大川富雄だった。大川は明らかに神事を妨げる騒ぎに対して怒っている。大川も家族を失ったのだったか。息子が死んだと聞いた。女の腕を引いているのは村迫宗秀だった。ここでも孫と息子が死んでいる。いや、女の身体に手をかけた者のうち、近親者の死を経験していない者などいないのだろう。それほどの災厄が村を襲った。その元凶がこの女だ。
「――鬼だ」
清水は吐き出した。
「こいつがうちの娘を殺したんだ」
「あんた、何を馬鹿な」
間近の誰かが言った。清水は声を張り上げる。
「馬鹿なもんか。こいつには脈がない！」
誰もが一瞬、呆気に取られた。手の力が緩んで、千鶴は身もがき、拘束を離れて逃げ出そうとした。髪を振り乱し、着衣を乱したまま土の上を這い、人波をかいくぐっていこうとする。大川はその髪を捕らえた。何だって、と清水に問い返す。清水が答えるより先に、敏夫が近づいてきて、大川が捕らえた千鶴の脈を取った。しん、と周囲の者が押し黙る。不審そうな喧噪が人垣の外から流れ込んだ。この騒ぎに気を取られたのか、

上の空の祭り囃子がそれに重なり、妙な緊張感を作った。
敏夫は顔を上げ、大川を見た。
「たしかに脈がないな」
馬鹿な、と大川は捕らえた女を見る。
「嘘（うそ）だと思うなら、胸に耳を当ててみるといい」
敏夫が言って、大川は女をその場に引き倒した。周囲から腕が伸び、悲鳴を上げる女の手足を拘束する。大川は真っ先に耳を当てた。悲鳴と喧噪に邪魔されて確実なことは分からなかったが、たしかに何も聞こえなかったような気がした。
「本当だ！」
周囲にいた者たちが声を上げた。敏夫は一歩離れ、人々が千鶴に群がるのを薄く笑って見ていた。千鶴は無惨（むざん）な贄（にえ）のように、悲鳴を上げながら人々の間を引きずりまわされ、舞殿のほうへと押し出されていった。いつの間にか千鶴は前をはだけられ、集まった男女によって無慈悲な蹂躙（じゅうりん）を受けている。この騒ぎの中では心音など、していても確認できまい。なのに、本当だ、という叫びがあちこちでしていた。確認するまでもなく、誰もがもとより知っているのだ。ただ、間違いなくそれを確認したという形式が必要なだけのことで。
起き上がり、と叫んだ女の金切り声が、誰のものだったかは分からない。鬼だ、とさ

らに叫ぶ声があって、それで千鶴は鼓動を確かめようとする手から、憎しみを込めて振り上げられる手から手へと引きまわされることになった。祭り囃子はやんでいる。いつの間にか舞い方も舞台を降り、代わりに千鶴がそこに追い上げられようとしていた。そして、投石が始まった。

その直径十五センチほどの、ひときわ大きな石を誰が投げたのか、それは永遠に分からないだろう。ひょっとしたら、投げた本人にも。

それは千鶴の側頭部を直撃し、千鶴は横倒しになって舞殿から転がり落ちた。千鶴は人垣の前に頽れ、何度か痙攣したあげくに動かなくなった。投石によって傷だらけになった身体がその場に残された。

敵を倒した、という高揚感に雄叫びを上げた者もいたが、千鶴が転がり落ちた周辺の人々は、むしろそれによって我に返った。照明のせいで、側頭部の損傷は明らかだった。

おい、と誰かが狼狽したような声を上げた。

「死んだんじゃないのか……?」

まさか、と言う声と、そうだ、と言う声が錯綜する。ぱらぱらと千鶴の側に駆け寄る者があって、その身体を検め、死んでいる、と声を上げた。罵声がやんで、潮騒にも似た不安の声がその場に広がっていった。

広沢は人の群の後ろから、その声を受け取った。広沢自身は石を投げなかった。身動きできないほど驚いていたからだ。ずっと意図的に直視すまいとしてきたことに直面し、やはり、という思いと、まさか、という思いに搦め取られて身動きができなかった。だが、目の前で千鶴が倒れ、死んだという声がすると、後悔が迫り上がってきた。大変なことが起こってしまった、という気がした。逆上した村人が寄って集って一人の女性を殺した。起き上がりなど存在するはずもないのに。――そういうことなのではないだろうか。

広沢の脳裏を掠めたのは、たとえば憑き物を落とすと言って暴行を受け、誰かが死んだという新聞記事の断片だった。同様に愚かで狂信的な事件が起こった、しかもほとんど村ぐるみでそれを行なったのだ、という絶望的な気分が襲いかかってきた。

救いを求めて周囲を見渡すと、広沢のすぐそば、社務所の脇の暗がりに屈み込んでいる姿があった。祭りを行なうために持ち寄った様々な道具を積み上げてあるそこに蹲った人物は、広沢の目の前で鉈を置き、荒く削って尖らせた太い木の枝と、木槌を持って立ち上がった。――敏夫だった。

「先生……」

一体何を、と駆け寄った広沢を、敏夫は押し除ける。

「どいてくれ」

「先生、そんなものをどうする気です」

「打つんだ。吸血鬼を滅ぼすには、心臓に杭を打つ。子供でも知っている」

そんな、と広沢は声を上げた。広沢ばかりではなく、周囲にいた人々が、怖じけたように退った。人垣が割れ、工まずして敏夫のために道を開けることになった。

「先生、そんな」

広沢は敏夫に追い縋る。人垣の間から武藤も飛び出してきて同じように敏夫を押し留めようとした。

「冗談じゃない。――駄目です。それよりも、奥さんに手当てを」

敏夫は武藤と広沢を振り返る。

「――いいか。あいつは、あんなことでは死なないんだ。今は動きを止めているだけだ、死んだわけじゃない」

「死んでるじゃないか」と、千鶴の脇に屈み込んでいた村迫宗貴が声を上げた。「脈もない。息もしてないいんだ、敏夫」

女の周辺で人垣が崩れ、幾人かが屈み込んでそれを確認し、頷く。敏夫は笑って、その側に屈み込んだ。

「こいつらには、そもそも脈はないんだ。呼吸もしてない。屍鬼というのは、心臓死していながら、脳だけが生きている化け物なんだ。脳波を取って観察してみなければ本当

に死んでいるかどうか判別がつかない。死んでいなければ、いずれ必ずまた起き上がる。動かなくなったからと言って安心しないことだ」
「しかし、たしかに」
「屍鬼を滅ぼそうと思うなら、心臓に杭を打つ。さらに確実を期すなら、頭を切断する」
「……そんな！」
「今、分かる」
敏夫は杭を押し当てた。宗貴は怯んだ。ほとんど、力任せに杭を刺そうかという勢いだった。明らかに白い肌に杭の先端がめり込むのが見えた。声を上げて敏夫を留めようとしたとき、死んでいたように見えた女が目を開いて声を上げた。
人垣からどよめきが上がった。宗貴自身も、声を上げていたと思う。たしかに脈もなく息もしていなかった。なのになぜ、この女は悲鳴を上げ、あてがわれた杭を摑んで押し戻そうとするのか。宗貴は思わず敏夫の摑んだ杭を支えた。幼い息子と歳の離れた弟の顔が、一瞬、脳裏を横切った。
敏夫が取り落とした木槌を摑んだのは清水だった。敏夫が促すように振り返って、清水は声を上げてそれを振り下ろした。千鶴が——腫れ上がった顔をした女の口が開いて悲鳴を撒き散らした。完全に沈黙するまでに、杭は身体を貫通して地面に縫い留めた。

三章

I

村迫宗貴は、自分の膝が血溜まりに浸されているのを見つけて、声を上げて後ろに退った。その声に弾かれたように、清水が木槌を取り落とす。

「お前たち——なんてことを」

声を上げたのは、宗貴のすぐ背後にいた父親、村迫宗秀だった。

「なんてことをしたんだ！　人を殺すなんて」

「殺してない。父さん、たしかにこいつは杭を打たれる前に死んでたんだ」

「だが、声を上げとった。悲鳴を上げて暴れて」

「だから変なんじゃないか。本当に死んでたんだ。心臓の音もしなかったし、息だってしてなかった」

「仮死状態ってことはないのかい」狼狽したように言ったのは、田茂定市だった。白装束に袴をつけた老人は、おろおろとその場の人々の顔を見渡した。「たまたまそんなふうに見えただけで……」

「それはないな」

きっぱりと言ったのは敏夫だった。敏夫は頓着なく死体の側を離れ、返り血で濡れた手をハンカチで拭った。顔を顰めてその赤く染まった布きれを足許に落とし、そして煙草を引っぱり出して啣える。

「だけど、若先生」

「こいつらは、そもそも死んでいるんだ。起き上がった屍体なんだよ。この女が村に足を踏み入れた時から、この女はずっと屍体で、ずっと死んでいたんだ」

「しかしね」

「この連中が、広也くんを殺したんだよ、定市さん」

定市は呻いた。

「起き上がった屍体だ。墓穴から甦り、山を下りてきて村に死をもたらす。犠牲者を襲って血を吸い、失血から来るショック死を招いてきたんだ」

「だが、こうして死体が残ってる……」

「残るんだ」敏夫は煙を吐く。「こいつらは、一部で伝説の通りであり、一部で伝説とは異なる。日光に弱いのはたしかだが、屍体が灰になって飛散することはない。呪具や呪符を恐れるが、鏡には映るし、影もある。吸血鬼というより、こいつらは『起き上がり』なんだ。鬼なのさ。墓穴から甦った生きている屍体、——屍鬼だ」

「それを証明できますか」と、言ったのは結城だった。「たしかに桐敷の奥さんは死んでいたのだと」

敏夫は肩を竦めた。

「こうなってから証明するのは難しいかもな。ただ、今ならまだ血液を採れば確認できるかもしれん。興味があるならやってみればいい。血液を採取して顕微鏡にかければ、赤血球も白血球も存在しないことが確認できる」

だが、と敏夫は煙草を投げ捨てた。

「あんたらは確認したんじゃないのかい。鼓動がしないと言って彼女を追い立て、石を投げたんだろう。それとも確認もしないのに、周囲の騒ぎに呑まれて石を投げたのか、あんたらは」

「わたしは投げてない」

結城は言ったが、敏夫の返答は素っ気なかった。

「止めずに見ていたら同罪だ」

「あの状況の中で――」

「やめるんだな、結城さん。止めもしないで見ていたくせに、いまさら宗貴さんや清水さんを責めるのはないいんじゃないか。この場にいる人間は、みんな同罪だよ」

そうだ、と清水は結城に向かって叫んだ。

「第一、咎められる謂われなんかない。この女はたしかに死んでたんだ。わたしは脈がないことを確認した。それだけじゃない。この女のつけてた香水は、間違いなく娘の部屋に残っていたものだったんだ」
「しかし、清水さん」
「こいつが娘を殺したんだ！」
口ごもる結城を見やって、敏夫は新たな煙草に火を点ける。
「村では夏以来、死人が続いていた。不審事が続いた。全部兼正の屋敷が建って以後のことだ。違うか？」
「それは……」
「患者の全員は、循環血液量減少性ショックから来る多臓器不全で死亡している。どの患者にも、首筋や肘の内側、表出血管に膿んだ虫さされのような痕があった」敏夫は言って襟に手をかけ、結城を見る。「……こういうやつだよ。見覚えはないかい、結城さん」
結城は敏夫の首筋を見て口を開けた。それはたしかに虫さされの痕か何かのようにしか見えなかった。それがふたつ、冗談のように並んでいる。
「それは……」
敏夫はただ肩を竦める。

「この連中が越してきて、本格的に死が蔓延し始めたんだ。屍鬼は人を襲う。生存のために人血が必要なんだ。身体はたしかに死んでいる。鼓動はないし、血圧もゼロ、呼吸もしてない。そのくせ、脳は生きている」
「どうして」
「知らんよ、おれは。ただ、こいつらの血液は動脈だろうと静脈だろうと、鮮紅色をしてる。静脈にまで動脈血が流れているんだ。血圧がゼロだから、血液中の成分は沈殿するはずだが、それはしない。実際のところ、屍鬼の血を採って顕微鏡にかけても、血球は見えない。倍率を最大まで上げても、顆粒状の赤い斑点が見えるだけだ。試験管に採って観察しても、分離はしない。しかも空気に接触している限り、鮮紅色をしている。
——血液の組成が違うんだよ、根本的に」
「そのせいなのか？」
「おそらくね。連中の血液は、それ自体が生きている。試験管に採って長時間放置しておくと、次第に鮮紅色から暗赤色に変化していくが、そこに人間の血清を入れてやると、また鮮紅色を取り戻す」
結城は呻いた。
「屍鬼を滅ぼすには、心臓に杭を打つことだ。ただし、針や刃物では意味がない。屍鬼の心臓は動いていない。拍動は関係ないし、心臓自体を傷つけることには意味がない。

血管系の破壊に意味があるんだ。心臓の破壊、摘出、大動静脈の破壊切断。ちょうど胸の真ん中、肋骨の上から三本目、第三真肋のあたり、ここは上大静脈と大動脈弓が交叉する。ここでなければ、背後からだ。臍の真裏からその上、背骨に沿う形でここに下大静脈と大動脈が併走する。効果的なのは、この三箇所。そうでなければ、頭部の破壊。頭をつぶすか、あるいは首を切断する。脳を身体から切り離すんだ。――屍鬼を滅ぼす手は、それしかない」

敏夫は言って周囲を見渡し、いかにも皮肉っぽく笑みを見せた。

「今にも吐き戻しそうな顔をしてるな。――だが、それしか手がないんだ」

いいか、と敏夫は周囲の顔ぶれを確認するように見た。

「屍鬼は人を襲う。襲われた者は屍鬼として甦生する。幸か不幸か百パーセントじゃない。だが、そうやって増えていることは間違いないんだ。この村は、屍鬼に侵略されている。連中を狩らなければ、自分たちが滅ぶ」

「まさか……」

「まさか？　この中で最近、村の外に通勤する人間を見た者がいるかい。外から通勤してくる者はどうだ？」

人々は顔を見合わせる。

「役場が急に夜間業務なんてのを始めたのは、なぜなんだい。新しい駐在を昼間に見か

けた者がいるか？　ＪＡはどうだ、郵便局はどうだ。なんだってこんなに人が死ぬんだ。次々に人が出て行って、そして得体の知れない連中が村に入ってきている。——違うか」
「け……警察を呼ぼう」
人垣の中で誰かが言った。
「警察？　何と言って？　村で吸血鬼が増えて困るんで、やっつけてくださいとお願いするのか？」
敏夫は鼻先で笑った。
「他の誰が信じるんだ。この村にいて実際に脅威にさらされているおれたち以外の誰が？　吸血鬼がいます、死人が生き返って人を襲います、——そんなことを誰が信じてくれると言うんだ」
「しかし」
「そりゃあ、こいつのように屍鬼を捕まえて差し出せば、存在を証明することはできるだろうさ。だが、外の連中が証明の機会そのものを与えてくれると思うか？　屍鬼の首に縄をつけて警察署に引っぱっていって、御覧の通り、殺しても殺しても甦ります、と実験してみせることが可能だとでも思うのか」
「実験は無理でも、村の現状を報告して」

「外場で一体、この夏以来、どれだけの人間が死んだ。目の前で家族が死んでいっても、あんたたちは信じなかったろう。違うかい、結城さん」

結城は目を伏せる。

「それは……しかし」

「みんな薄々は気づいていたはずだ。山から鬼が下りてきてるんだ、ってことは。だが、あんたたちは信じなかった。信じたくなかったんだ。あんたたちは脅威から目を逸らした。――いいや、脅威が存在するかもしれないという不安そのものから目を逸らしたんだ。

おれはあんたたちを責めようとは思わない。そうやって不安そのものから逃げ出すことこそが、人間らしさってものだろうと思うからだ。だが、おれたちはもう逃げられないんだ。村は完全に包囲されている。このところ、朝に村を出入りする人間の姿を見たか？　これだけの死人が出ていて、誰か行政だのマスコミだのから、事情を訊かれたことがあったか？」

「それは――」

「行政に直訴しに行くか？　屍鬼を引っぱっていくのか。データを取り揃えて、外部に救いを求めるか？　それを連中が、黙って見守っていてくれるとでも思うのか」

「でも、やってみる価値は」

言いかけた広沢を敏夫は遮る。

「死者と病状のデータを取り揃えて、疫病の疑いがある、と役場の石田さんに報告してもらおうとした。だが、石田さんはデータを持って消えた。――あれきり、行方が分からない。おれたちがやるしかないんだ。自分たちで片付けるしか。それ以外に打つ手があれば、とっくにおれがやってる」

「しかし」と、田茂定市は汗を袖で拭った。「しかし、……にしても」

「杭を打って行為が、どれだけ残虐に見えるかは分かっている。だが、結局のところ、どんな死に方をしようと、死は死でしかないんだ。杭を打たれて屍鬼が殺されるのは惨くて、清水さんちの恵ちゃんが血を吸われて死ぬのは惨くないのか。冗談じゃないぞ」

「その通りだ」清水は声を張り上げる。「恵はまだ高校生だったんだぞ。十六を目前にして死んだんだ。恵が何をしたって言うんだ。殺された村の連中が何をした。罪もない人間が、餌食になっているんだぞ。――文字通りの、餌だ」

「その通りだ」敏夫は頷く。「死を恐れない人間はいない。人間にとって、自己の死と家族の死以上の悲劇はないんだ。だが、屍鬼はそれをもたらす。屍鬼にとって人の死は、自分が存在するための必然なんだろう。屍鬼は犠牲者を憎まない、憐れまない。それは殺人や暴力のような負の関係でさえなく、捕食という散文的な行為でしかないんだ。それは人を食糧の位置にまで突き落とす。屍鬼に襲われた被害者は、その生命だけでなく

尊厳までも剝奪されることになる。——それはたしかに、屍鬼にとっては人が牛や豚を襲うような種類のことなんだろう。これは人間にも天敵がいたという、それだけのことでしかないのかもしれない。だが、天敵に襲われて抵抗しない生き物はいない。それが自然の営みってものだろう。すべての生命は、自己の終焉に抵抗するんだ」

それは、と広沢は目を伏せる。

「屍鬼がそこにいる限り、必ず人を襲う。共存はあり得ない。自分や自分の家族を守りたかったら、連中を狩るしかないんだ。連中の数は多い。こちらも組織立って狩る必要がある。でなければ、こちらが粛清される」

「しかし……胸に杭を刺した死体が残るんですよ。どう申し開きをするんです」

「申し開きが必要なのか？　連中は死人なんだぞ。葬式だってやっているんだ。そもそも社会的にもとっくに死んでいる。連中は生きているんじゃない。死んだ者が起き上がったんだ。墓穴から這い出した者を、もう一度墓穴に戻すだけだ。——二度と甦ることがないように」

大川が前に出て、敏夫の前に立ち塞がった。

「どのくらいの数がいると思うね。その——屍鬼は」

「正直言って、分からない。ただ、十や二十ではないことだけは確実だ」

「杭を打つか、首を切り落とすしかないんだな？」

「おれたちに使える手はそれだけだろうな」
「何か……その、薬物のようなものは使えないんですか?」声を上げたのは武藤だった。「杭を打つとか、そういう過激な手ではなく」
敏夫は首を振る。
「少なくとも、そのへんにあるような劇薬を注射しても連中には効かんよ」
「いや、でも、試してみないと分からないんじゃないでしょうか」
広沢が口を挟んで、同意を求めるように武藤を見る。武藤が救いを見出したように頷いた。
「そ、そうです。試してみないと分からない」
「試してみて言っているんだ」
敏夫は薄く笑う。
「試したって……先生」
「恭子は死ななかった。古典的に心臓に杭を打つしか手がなかった」
誰もが顔を見合わせる。敏夫は軽く言い添えた。
「食道や気管に塩酸を流し込んでも効かない。塩酸から農薬、何を注射してもまったく効果は認められない。気道を塞いでも皮膚呼吸で生き延びる。ガラスケースの中だか、水槽の中に閉じ籠めれば、中の酸素を使いつくした時点で窒息死するだろうが、それま

での断末魔を見ていられるか？」
「先生、そんな」
「……楽に死なせてやりたかった。だが、杭を打つことでしか、恭子を罪深い運命から救ってやる術はなかったんだ」
大川は頷く。田茂定市を見た。
「消防団を召集したほうがいいんじゃないですかね。杭だけでもかなりの数がいる。誰か木工をやってるのに頼んで、用意してもらったほうがいいと思うがね。屍体の始末も考えないといかん。まさかそのへんに放り出しておくわけにもいかんだろう。工務店に頼んで、どっかに穴を掘ってもらったほうが良くないかね」
「いや、それは……しかし」
定市は狼狽したように周囲を見る。頷いたのは清水だった。清水は千鶴の屍体を示す。
「それもどっか目立たないところに移しておいたほうがいいんじゃないかね」
村迫宗秀も同意する。
「屍体は神社に集めちゃどうだい。他に、人が集まって指示をやりとりする場所も必要だな」
「消防団の詰め所じゃ狭いか」言って、大川は社務所を示す。「社務所を開けてもらおう。詰め所から無線を持ってきたほうがいいだろうな」

行ってくる、と踵を返したのは、村迫宗貴と数人の人間だった。別の一群が、千鶴の身体に手をかける。女が一人、シーツか筵を持ってきたほうが、と声をかけて、女たちがぱらぱらと人垣から零れていった。別の一団が社務所に向かい、人が動き始める。その背に敏夫は声をかける。

「人手が必要だから事情を説明する必要があるが、警察に連絡なんかはさせないように注意しろ。外部の人間が入ってくると厄介だ」

了解の意を伝える声が方々から上がる。その中で、突然、武藤が膝をついた。

「わ……わたしにはできません。勘弁してください」

「武藤さん」

「腑抜けだと言われてもいい。わたしには、杭を打って人間を殺すなんてことはできない」

「連中は人間じゃない！」

清水の怒声に、武藤は首を振った。

「わたしの息子もね、死んだんですよ、清水さん。あんたんとこの恵ちゃんと同じだ。屍鬼に襲われて死んだんです。みんなは狩る、と軽く言うが、あんたんちの恵ちゃんも、屍鬼になってる可能性があるってことを分かってますか」

清水は言葉に詰まった。

「わたしゃ、さっきからそれが気になってならんのです。うちの徹も死んだ。ひょっとしたら屍鬼になって甦ったのかもしれません。杭を持って屍鬼を狩ると言うのは簡単だが、わたしは徹が目の前にいたら、とてもじゃないが狩れんのです。たとえ徹が人を殺して生き延びていても、息子に杭を打って殺すなんてことは、どうあってもできないと思う。……あんたは、できますか、清水さん」
「わたしは……」
「徹じゃなく、恵ちゃんならできるでしょうかね。――いいや、わたしは、それが恵ちゃんでも、とてもじゃないが杭など打って殺せません。あんたのところのお嬢さんを殺すなんてことはできんのです。……勘弁してください」
「じゃあ訊くが」敏夫は武藤を見る。「あんたはこのまま放置しておけと言うのか。共存はあり得ないんだぞ」
「それは分かります。屍鬼にとっちゃ、わたしらは餌でしかないんだということも分かるんです。しかしだとしたら、これは仕方のないことじゃないんですか。人には天敵がいたってことでしょう。……わたしには殺せない。天敵のいない土地に行きます。罵ってください」
武藤は言って、拝むようにしてから踵を返した。人垣を掻き分けてその場を逃げ出す。
大川と清水の声が聞こえた。

「――腑抜けが！」

「あの人はしょせん余所者だ。もともと外場の人間じゃない。だから、外場がどうなろうと知ったことじゃないんだ」

「事態を甘く見ているんだ」敏夫が吐き出すのが聞こえた。「ぜんぜん、分かってない。外場は今や屍鬼の巣だ。このままおれたちが手を拱いていれば、外場は屍鬼に占拠される。連中は安全なコロニーを手に入れる。ここに屍鬼の社会を築く。ここを足場にして際限なく増殖していけるんだ。そうなれば、どこへ引越そうと、もう安全な土地などない」

「あんな腰抜けなんざ、いても邪魔になるだけだ。構うもんか」

武藤は面伏せ、足早に人混みの中を突っ切る。その傍らに集まり、一緒に神社を出て行こうとする者も、幾人かいた。

「あんたの言う通りだ、武藤さん」武藤が脇を見ると、郵便局の長田だった。「おれにも殺せん。とてもじゃないが、あんな恐ろしいことはできない」

武藤は頷いた。

「先生はどうかしてる。わたしにはついていけない。あの人は……自分の女房を、モルモットにしたんだ」

そうね、と女が声を上げた。

「このままで済むはずがないわ。これだけの死人が出て、誰も気づかないないなんてことがあるはずがない。外の人間が気づけば、きっとなんとかなるわ」
そうとも、と頷いたのは、大川酒店の松村だった。
「身を守りゃあいいんだ。わしらが屍鬼に襲われる隙を見せなきゃ、屍鬼は飢えて滅びる。餌をなくして、どっかへ移動するさ」
「これからどうします」
長田に問われて、武藤は首を振った。
「逃げ出しますよ。家に戻って荷造りして、一刻も早く村を出ます。幸い、子供が溝辺町にいるんでね」
「そこまで急がなくても」
「急ぎたいんです。わたしはこのあと、村で起こることを見たくない」

2

速見は葬儀社の二階の窓から外を覗いた。何かがおかしい、という気がした。
最前から、祭り囃子がやんでいる。賑やかな喧噪だけは相変わらず川の対岸から聞こえていたが、その声の調子が異様な音色を帯びているように思えてならなかった。

窓の外、川を隔てた下手のほうに明るく照明された神社が見えている。葬儀社からは距離もあり、それ以上のことは一切、見て取ることができなかった。ただ、川伝いにひどく興奮した人々の声だけが響いてきている。

「何の騒ぎですか」と、背後から声がする。葬儀社で起居している若者が二人、怪訝そうにしていた。

「何だろうな……嫌な感じだ」

一方は都会から間引いてきた人間で、もう一方は溝辺町から失踪してきた者だった。もともと溝辺町にいた木下は溝辺町役場に勤めていて、役場でちょっとした書類上の操作をしてから失踪していた。役場を辞め、知人に紹介された新しい職に就くために都会に出たことになっており、そこに借りたアパートの一室からも姿を消していた。――こういう者は多かった。村を外部から操作する過程で、かなりの数の仲間が副産物として生まれている。

「木下、お前さん、ちょっと様子を見てきてくれないか。どうも神社で不穏な気配がする」

はあ、と頷いて、木下は部屋を出た。もともとは木工所だった斎場に隣り合って、速見の家は建っている。そんなに大きくもない二階屋だが、普段は人で賑わう。村に下りてきた連中が、溜まり場として使うからだ。だが、今日はその数が少ない。祭りの夜の

人通りの多さに、仲間が夜歩きを控えているせいだった。深夜を過ぎれば、いつものように仲間が増えるのかもしれなかったが、とりあえず今のところは、みんな村を歩きまわることを避けているのだろう。

木下は左右を見まわし、人通りの途切れたところを狙って建物を出た。できるだけ人目につかないように行動する、それが習い性になっていた。村道を渡り、近くの石段から河原に下りた。夜に暗い河原を歩く者はいない。大手を振って河原を一之橋の下まで移動し、そこから神社のほうを窺った。河原よりも神社のほうがかなり高い位置にあるから見通しは利かないが、興奮したざわめきに包まれているのだけは分かった。屍鬼、という言葉が聞こえる。橋を渡る者は、殺すの殺されるのという殺伐とした単語を口に上せている。葬儀社、駐在という単語も聞こえた。何か不穏な――自分たちにとってありがたくないことが起こっているのだということは、その断片からも理解できた。

（まさか、バレたのか……？）

木下は恐る恐る、一之橋の袂から村道に上ってみた。橋の向こうへはどうあっても恐ろしくて近づけない。そればかりでなく、近づいてはならない、という切実な予感がした。集まった人々、橋を渡って出入りする人々の間には、祭りの夜にふさわしい陽気な調子がなかった。むしろどこか殺気立った気配が露わで、しかも頻繁に物騒な言葉を口にしている。神社に駆けてくる者の中には、角材やハンマーなどの武器とおぼしきもの

を携えている者もいた。いよいよ不穏だ、と木下は思わないわけにはいかなかった。通りの様子を窺っていると、角の電気屋の前に子供が一人姿を現した。木下は何食わぬ顔で子供に近づく。
「なあ、坊や、これは何の騒ぎなんだい？」
その子供——裕介(ゆうすけ)はきょとんと木下を見上げた。
「分かんない。鬼が出たんだって」
「鬼？」
裕介は頷いた。店に飛び込んできた男が、父親の加藤実(みのる)に、そんなことを言っていた。鬼がいたとか、神社に出たとか。細かいことは聞き取れなかった。裕介はただ、その会話から、鬼が神社に出て、やっつけられたようだ、とだけ理解した。
裕介がそう言うと、その若い男は険しい顔をした。
「坊や、ちょっと神社がどんなふうか見てきてくれないかい」
裕介は首を横に振る。神社には絶対に近づくな、と店を出て行く前に父親が強く言い置いていった。父親があんなふうに、強い調子で言うときには絶対なのだった。少なくとも裕介は父親との関係において、そう自分の中で了解していた。
そうか、と男は呟(つぶや)き、ありがとう、と声を残して河原のほうに下りていった。真っ暗な河原に下りるなんて、怖くないのかな、と裕介は思った。

木下は葬儀社に戻り、速見に事情を報告した。
「なんか変ですよ。漏れ聞いた限りじゃ、とんでもないことが起こってるみたいです」
速見は木下の強張(こわば)った表情から、強い不安を受け取った。――一大事の気配がする。
速見は電話の受話器を取った。あちこちに電話して仲間たちの注意を促す。神社で何か不穏な事態が起こっているらしい。なんとか事情を探る必要がある。その事情が明らかになるまでは外出を控えたほうがいい。

3

「元凶が兼正なのは間違いがねえ」
大川は社務所に集まった人々を見渡した。
「首領はあいつかね。桐敷正志郎といったか」
「違うだろう」と、敏夫は口を挟んだ。「桐敷正志郎は人間だよ。昼間に出てきたのがその証拠だ。どうも辰巳は屍鬼の中でも特殊らしいが、正志郎はそれでもないらしい。人間なんだと思う」
「人間のくせに、鬼に荷担してやがるのか」

大川は吐き出す。
「――のようだな。千鶴の口振りじゃあ、あの家の中で最も権力を持っているのは桐敷沙子のようだった。正志郎の娘だよ」
「中学かそのくらいの娘がいるって話だったが、――その？」
「らしいな。いずれにしても、兼正の連中が大本だ。それは間違いがない」
「兼正に行こう」と、清水が力説した。「まずあそこに行って、連中を根絶やしにするんだ。一気に焼き討ちにしてしまえばいい」
「それは駄目だ」敏夫は口調を荒げた。「いいか。これだけは心得ておいてくれ。外部の注目を引くようなことはするな。屍鬼は屍体を残すんだ。あれを外部の人間に見られたら、おれたちが殺したのだと思われる。火は駄目だ。消防署の連中が駆けつけてきたら目も当てられない。特にこの乾燥だ。下手に火を使うと山火事になりかねない」
大川は頷いた。
「乾燥注意報が出てる。消防団のほうにも警戒要請があった。火はまずいだろう。たしかに下手をすると山に火が入っちまう」
「じゃあ――？」
敏夫は腕を組む。
「まず、夜のうちに連中と事を構えるのは得策じゃない。夜のうちに兼正を包囲して、

連中が逃げられないようにしたうえで夜明けを待つんだ。朝陽が射すのを待って攻勢に出る。そうすれば日光がおれたちに味方してくれるだろう」

「連中は全員、兼正にいるのかね」

「どうだろうな。屍鬼の実数が分からないから何とも言えない。とりあえず、確実に拠点になっているのは兼正の屋敷、そして江渕クリニック、外場葬儀社だ。この三箇所は押さえておく必要がある。周囲を包囲して抜け出せないようにするんだ。——あとは村道か。村から出られないよう、道を塞いでおいたほうがいいな」

大川は地図を広げた。

「まず村道だな。交叉点の手前に人をやって、道を塞がせよう。あとは農道だ。ここは車でも駐めておいて塞いでおくってのはどうだい」

「それがいいだろうな。近辺の家から車やトラクターを出してもらう。それで塞いで何人かずつ配置する。それでとりあえず連中が車で逃げ出そうとするのは防げるだろうし、ついでに外部から入ってくる者も追い返すことができる」

なるほど、と頷いて、大川は若い者に指示をする。

「兼正、江渕クリニック、葬儀社——他に連中が潜伏していそうなところはないか」

そう言えば、と田茂定市が声を上げた。

「境松が戻ってきていたよ。なんだか妙な按配だった」

「後藤田の服屋も妙だ」
うちの近所にも、と言う声で、社務所の中は騒然とする。敏夫は頷いた。
「細かい拠点がたくさんあるな。役場も妙だし、上外場にも妙な家があった。うちの看護婦の国広くんの家の隣だ。全部リストアップしておいたほうがいい。全部を夜のうちに包囲しておくのは無理にしても、夜が明けたら全部こじ開けて中を検めたほうがいいだろう」
大川は頷き、人混みの中から妻を呼んだ。
「かず子、お前、女衆を集めて、あちこちに怪しい場所はないか訊いてまわってこい。全部リストにするんだ。絶対に一人でウロウロするなよ。何人かで集まって行くんだ」
かず子は頷く。
「ええ。……分かったわ」
「ついでに」と敏夫は言い添える。「これからひと騒動あることを説明してくれ。別に細かいことを言う必要はない。夏からこっち続いていた災厄をなんとかする、とだけ説明すればいい。――そう、虫送りをする、と言うんだ。それで分かる奴はピンと来るだろう。村を挙げて虫送りをする、手を貸してくれる気があったら神社に来るよう、そうでなかったら家に閉じ籠もって表に出ないよう、絶対に表を見ないように言うんだ。そして決して、警察なんかに連絡をしないよう」

「言ってみますけど……大丈夫かしら」

「そうだな——むしろ電話を使わないように言ったほうがいいかもしれない。緊急の事態だから回線を空けておきたい、だから一切、電話は使うな、と」

「分かりました。そう言います」

頷いて、かず子は社務所を出て行く。それを見送って、敏夫らは細かい人員の配分にかかった。

4

小さな溜息が聞こえた。

静信は微睡みながら、それをただ聞いている。ひどく億劫で眠く、目を閉じて横になっている以外のことをしたくなかったが、目を閉じてもうつらうつらするばかりで、本格的な眠りはやってこない。断続的な眠りの合間に短い夢を何度も見た。自分の身体が奥底から融解していく夢であったり何者かに食い荒らされていく夢であったりした。二度目の襲撃があった。発症の機序が動き始めている。これから加速していく一方なのだという思いが、見せた悪夢なのかもしれなかった。

目を閉じていると、チャイムの音が遠くでした。いつの間にか祭り囃子がやんでいる。

まだ終わるような時間ではあるまいに。
思っていると、ひどく慌ただしい足音が聞こえた。ドアが開いて辰巳の声がする。
「沙子――千鶴が」
どうしたの、と沙子が立ち上がる気配がした。静信はかろうじて頭を向け、薄目を開けて血相を変えた辰巳を見た。
「速見から連絡があった。千鶴がやられた」
「やられた――って」
「尾崎の医者だ。あいつが神社に千鶴を引っぱっていったんだ。村の連中は千鶴が何者だか悟って千鶴を殺した。武装した連中が神社に集まっている」
沙子が小さく悲鳴を上げた。
「千鶴が――うそ」
「嘘じゃない。坂の下にも人が集まり始めてる。――どうする」
どうするって、と沙子は狼狽したように首を振る。
「まだ駄目よ。あと少しなのに」
「とりあえず脱出したほうが良くないかい？　早く逃げ出さないと退路を塞がれる」
「駄目よ――だって、あと少しなのに！」
「沙子」

「あとはもう、時期を見て一気に村を閉じてしまうだけだったのよ！」
沙子、と咎める辰巳に、沙子は手を挙げた。
「――分かってる。大丈夫よ、逆上したわけじゃない。まだ手はあるわ。この村はもう死にかけているのよ」
「しかし」
「どうせもう、閉じるだけだったの。その予定を繰り上げるだけのことよ。いいえ、わたしは逃げないわ。これだけの仲間たちが逃げ出すなんてできると思う？　ここでいっせいに逃げ出したら、村の人たちは追ってくる。この騒ぎが村の外まで波及してしまったら、わたしたちの存在が知れ渡ってしまうの。そうしたら村を逃げ出したところで、逃げ場はないのよ。屍鬼なんていているはずがない、という常識が、わたしたちを守ってくれる最大の武器なんだから」
辰巳は硬い表情で頷く。
「閉じる準備が整っているわけじゃない。タイミングとしては理想的とはいかないけれども、最悪でもないわ。だから大丈夫。――正志郎は？」
「連絡を聞いて飛び出していった。神社に様子を見に行ったんだろう」
「軽率だわ。戻ってきたらうかつな行動は取らないように言って。……とにかく正志郎はもう使えないわね。屍鬼でないふりは通用しない。江渕さんや佳枝さんに連絡をして、

注意を促さないと」
「速見がやってくれてる。外部に連絡させせないようにしないとまずくないかい？」
「ええ。そうね、もう志茂田の仕掛けは動くのね？」
「実験はしてないが、大丈夫だと思う」
「では、志茂田に連絡して電話を遮断して。そして無線ね。外部へ連絡できないようにしてちょうだい。電気も落として。明かりがなければ、それだけこちらに有利になるから」
辰巳は頷く。
「他には？」
「とにかく尾崎ね。どうせあの男が扇動しているんでしょう？　大丈夫、いくら村の人たちが集まっても、中心点を排除してしまえば集団なんて勝手に瓦解するわ。とにかくまず、尾崎をなんとかするの」
「尾崎は神社にいる。仲間は近づけない」
「傀儡を使って。傀儡を神社に行かせて尾崎を排除させるの。同時に村の様子を探らせて。群の結束点がどこにあるのか、確認して動向を探る。結束が解ければ敵じゃない。とにかく襲って数を減らす。襲った者には殺し合いをするよう言い聞かせて」
分かった、と辰巳が答える。静信は目を閉じた。

そうか、彼らは蜂起したのか、と思った。沙子は逃げるべきだ、とも思った。正義の名の下に団結した人間は恐ろしい。異物を排除するときの人間の冷酷さは、よく分かっている。もともと外場の住民は結束力が強い。それを沙子は甘く見ていないか。扇動するのが敏夫ならば、なおさらだ。敏夫は目的のためには手段を選ばない。正面から敵に廻すのはあまりに危険だ。

だが、それらのことを説明するのは、あまりにも億劫に思われた。口を開くのさえ厭わしく、身体のどこもかしこもベッドの中に沈んでいきそうなほど重い。

（……瓦解するんだ）

たぶん屍鬼も——そして、村も。

5

加奈美は自分の寝間に閉じ籠もって耳を塞いでいた。隣にある茶の間からは、妙の呻き声が聞こえていた。妙は飢餓に喘いでいる。その飢えを満たす方法を知りながら、それを堪えようとして床に蹲り、座布団の端を噛むようにして耐えているのだ。それを見ておれず、こうして自室に逃げ込んだものの、妙の漏らす悲痛な声からは逃げることができなかった。耳を覆っても聞こえる。——聞こえるような気がする。

（お母さん、お願い……我慢して）
それでどうなるの、と加奈美の身内で囁く者がいる。おそらく、妙は血を得なければ飢えて死ぬのだ。死ぬまでそれを耐えていろと言うのか。
その声からも逃れるように布団を被って頭を覆ったとき、チャイムの音がした。加奈美は飛び上がり、茶の間に向かって妙にタオルを噛ませ、布団を着せかける。それから慌てて玄関に出た。
「……どなた？」
戸は開けないまま、問う。松尾だけど、と言う声が聞こえた。下外場の世話役、松尾誠二の声だった。加奈美は総毛立つ。誠二は妙の葬儀を采配している。妙を見られたら、起き上がってきたことが即座にばれてしまう。――いや、すでにそれが分かっていて、それでやって来たのかもしれない。
「……何ですか」
加奈美の声は我ながら震えていた。開けてくれ、と言う誠二に、駄目、と答える。
「ごめんなさい、今、ちょっと開けられないの」
「加奈美さん、ちょっと頼みがあるんだが」
「何です？」
「あんたんとこの店をね、ちょっと消防団で使わせてもらいたいんだよ」

加奈美は首を傾げた。そっと戸を少しだけ開ける。誠二がホッとしたように顔を綻ばせた。他にも数人、男女が誠二の後ろにいる。
「……店を、消防団で？」
「そう。あんた、お神楽の騒動を知らんかな」
「いいえ。お祭りには行かなかったので……」
「ああ、だったらいいんだ。ちょっと騒動があってね。今年は死人が多かったろう。妙なことが多くてね。だからそれをなんとかしようということになったんだ」
「……なんとかって」
「うん。まあ、虫送りをするのさ。もう一回」
加奈美は首を傾げ、そしてはっとした。誠二は鬼を祓う、と言っているのだ。
「それで村の者が集まってるんだよ。あんたも手伝う気があったら、神社に行ってみてくれ。そうでなきゃ家の中に閉じ籠もってるんだ。表も見ちゃいけない。虫送りってのはそういうもんだ——そうだろう？」
「……ええ」
「電話が混み合うと思うんで、使わないようにしてくれ。できるだけ回線を空けておいてもらいたいんだ。でもって店を使わせてもらえるとありがたいんだがね」
「分かりました」と、加奈美は言って、下駄箱の上の籠から店の鍵を取り出す。「どう

ぞ、使ってください」
「済まないね。ついでに、加奈美さん、あんたこのへんで変な場所を知らないかい。人がいるはずもないのに物音がするとか、夜に知らない連中が出入りするとか、住人の顔ぶれが変わっているとか」
「いいえ……江渕クリニックぐらいしか……」言って、加奈美は首を傾げる。「そう言えば、堀江自動車の廃車置き場で夜に人影を見たという話を聞いたことがありますけど」
そうか、と誠二は背後にいる女を振り返る。誠二の妻の有香子(ゆかこ)だ。有香子はそれをメモしている。
本当にやる気だ、と加奈美は思った。村を挙げて鬼を捕らえ、村から排除する気なのだ。鬼を集めて村の境に祀(まつ)り捨てる。——火の中に投じて。
(鬼を焼き殺してしまう……)
「加奈美さんちは異常はないかい?」
ええ、と加奈美は頷いた。誠二は、そうか、と頷く。特に不審に思った様子はなかった。
「じゃあ、悪いけど使わせてもらうよ」
「どうぞ。あの……店の中のものは好きにしてもらって構いませんから」

誠二は破顔した。
「そうかい、ありがとう。なに、大事に使わせてもらうよ。済まないね」
いいえ、と加奈美は言って誠二らを見送る。戸を閉めて鍵をかけ、茶の間へと駆けつけた。
布団の下からは微かに声が漏れている。それを剝ぐと、胎児のように身体を丸めた妙が、タオルを嚙んで啜り泣いていた。
――鬼を狩るのだ。
とうとう村の人の全部が気づいてしまったのだ。だから鬼を狩って災厄を取り除こうとしている。そしてここにも鬼がいる。哀れに呻いている、加奈美の母親。
(……殺すなんて)
できるはずがない。化け物になるまいとして、こうして泣きながら抵抗している母を、どうして鬼と呼び、殺すことができるだろう。
(でも、このままでいたら飢えて死ぬ……)
飢餓のあげくに死なせることも、できるはずがなかった。
加奈美はよろめくようにして台所に向かう。包丁を手に取って少しの間逡巡した。
(お母さんが死ぬなんていや……。これ以上、お母さんが苦しむのだって見たくない)
たった一人の母親なのだ。高校生のときに父親が死んで、そこからは泥まみれになっ

て田畑を作り、加奈美を都会の短大にまでやってくれた。都会で就職すると決めたときも、結婚すると決めたときにも、帰ってきて自分の面倒を見てくれなどということは口の端(は)にも上せず、自分の苦労をあげつらって恩に着せるようなことも口にしなかった。良かったわね、と言ってくれ、その結婚に失敗して戻ってきたときには、大変だったわね、と慰めてくれた。加奈美は一晩、母親の膝(ひざ)に縋(すが)って泣いた。

(お母さん、だもの)

加奈美は嗚咽(おえつ)を堪え、包丁を指の先に当てる。少し迷って、思い切って刃先を引いた。軽い痛みとともに、赤い一条の傷ができて、一瞬をおいて血があふれ始めた。

加奈美はそれをリキュールグラスに受ける。傷口を下にして、血を絞り出すように指を揉(も)んだ。血が止まってしまえば、さらに別の指を切る。泣きながら小さなグラスを満たした。

「……お母さん」

グラスを持って近づくと、タオルを啣(くわ)えたまま妙が身を起こす。

「お母さん、これ……」

加奈美、と妙はタオルを離して呟(つぶや)いた。グラスと加奈美を見比べ、表情をくしゃくしゃにして泣く。

「ごめんね。苦しかったね。もういいよ……」

「でも、加奈美」
「お願いがあるの。約束して。これから、こうして食べさせてあげる。ひょっとしたらこれっぽっちじゃ足りないかもしれないし、毎日は無理かもしれない。でも、こうして用意してあげるから、ひもじくても我慢してほしいの。人を襲わないで。あたし以外の人を決して襲わないって約束して」
妙はタオルで顔を覆い、声を上げて泣きながら頷いた。
元子は風呂場の中に身を横たえていた。チャイムが鳴ったのが聞こえたが、表に出る気にはなれなかった。
風呂場の中には腐臭が充満している。横たわった元子の脇では、茂樹の小さな死体が徐々に融解していこうとしていた。皮膚は膨れあがり、方々が裂けて相好も変わってしまっていた。
(まだなの……?)
元子は息子を掻き抱く。元子の手の下で、皮膚が弾けて破れた。汚水のような体液が手を汚す。また一段と腐臭がひどくなった。
もう一週間が経とうとしている。なのに茂樹は甦らない。待っているのに。まさかこのまま二度と起き上がらない、なんてことが。

(そんなはずないわ)
あり得ない、と思いながら、元子は茂樹を撫でて泣く。
茂樹が甦らないばかりでなく、この一週間、元子を夜に訪ねてくる者もなかった。巌は元子を意図的に排除したのだ。元子を連れて行くつもりがない。
(酷い……酷いわ)
どうして、自分だけ。
「茂樹……お願い。起きてちょうだい。目を覚まして、お母さんを見て」

かおりは座敷で膝を抱き、じっと窓の外を見ていた。昨夜は引き返していった。今日はどうだろう。
膝にかけた毛布の下には杭を用意してある。杭と金槌、けれども、かおり自身にもこんなものを恵に対して振りかざせるものなのか、心許なかった。
(……できるもん)
父親も母親も殺されて、たぶん、昭も殺されて。かおりから何もかもを奪っていった。恵がなぜそこまでかおりを憎むのか、かおりは知らないではいられない。何をしたって言うんだ、と恵を責めたい。そうでなければ自分が惨めすぎる。
決意を込めて膝を抱き、息を殺してやって来る誰かの足音を待っている。そうしてい

ると、突然、部屋の明かりが消えた。

「……えっ？」

かおりは頭上を見上げる。それはブレーカーが落ちたような、唐突な消え方だった。慌てて周囲を見まわしたが、廊下の明かりも消えている。家中の明かりが消えているようだった。思わず立ち上がり、窓の外を窺う。近所の家の明かりも、街灯も消えていた。

「停電……？」

停電なんて何年ぶりだろう。来るんだ、とかおりは思った。きっと恵がこの闇に乗じてやって来る。ひょっとしたらこの停電も恵のせいなのかもしれない、とさえ思った。

果たして、それからいくらも経たずに、ラブが鳴き始め、人が庭に入ってくる音がした。昨夜、明かりの届かない範囲をうろうろとしていた誰かは、明かりがないことに安堵したのか、すぐ軒先にまでやって来る。かおりの様子を窺っているようだった。

(明かりがないのに見えるのかしら……)

そうなのかもしれない。夜にしか徘徊しない生き物だから、夜行性の獣のように、夜目が利くのかも。かおりは懐中電灯を引き寄せた。片手にそれを握り、もう片方の手に杭と金槌を握ってその場に倒れ込んだ。寝たふりをして息を殺す。それは何度か家の周りを徘徊し、あちこちの戸を揺すっていた。

（絶対に許さない）

みんな死んでしまったのだ、あいつらのせいで。だから、かおりには復讐する権利があるはず。

また庭先で物音がした。それは軒端に近づいてきて、縁側の窓を揺すった。軽い音がして窓が開き、冷えた風が通った。風が出てきたようだった。樅の山が鳴っている。波の音のようだった。何かを村に打ち寄せ、何かを引いて水底へと連れ去る。

窓辺のそれは、迷うようにしてからそろそろと窓をさらに引き開けた。きしり、と家鳴りがして、誰かが家の中に入り込んできた。薄目を開けてみると、藍色の窓を背に、黒い影法師が見えた。それは男のようにも思えたが、はっきりと輪郭を捕まえられたわけではない。

それはそろそろと近づいてくる。かおりは息を殺し、間合いを計った。手を伸ばせば届く、そのくらいの距離になり、相手が屈み込んでくる気配を察して飛び起きた。転がるように間合いを開けながら、懐中電灯を点ける。光が闇を薙いだ。それが一瞬、忍び込んできた誰かの顔を浮かび上がらせた。

「……お父さん」

まさか、という衝撃で光が揺れる。闇の中にいる誰かの姿を捉えられない。それは座敷の中を無目的に照らし出し、そして何度か白い顔を捉えた。

「……うそ……！」
かおりは懐中電灯を取り落とした。――では、父親だったのだ。母親の佐知子を殺した。昭もそうだろうか。父親が殺したのだろうか。かおりを一人ぼっちにしたのは、本当に父親だったのだろうか。
かおりは手の中のものを持ち替え、握り直した。
「お父さん……酷いよ」
闇の中を何かが近づいてくる。懐中電灯の明かりは、あらぬ方向を照らしていた。それでも黒々とした影が、かおりに近づいてくることは分かる。間違いなく男で白っぽいシャツを着ていた。黒っぽいズボン、その体格と足取り。何もかも恵ではあり得ない。
「お父さんだったの？　お母さんを殺したの、お父さんだったの？」
父親は何も言わなかった。ただ黙って間合いが詰められた。かおりは立ち上がり、腕を振り上げた。
「――そんなの、酷いよ！」
なんで、という叫びとともに、鈍い音がした。かおりは自分が金槌を振り上げ、振り下ろしたことをようやく理解した。黒い影がたたらを踏む。かおりはさらに金槌を振り下ろす。二撃目はかすり、三撃目は、めり込むような手応えとともに男の頭部に沈んだ。
男が倒れた。それで明かりが父親の顔を捉えた。

怒りが、かおりを支配した。かおりは夢中で右手を振り下ろし、父親を叩(たた)いた。
「酷いよ！　——お父さんが、どうしてあたしに、なんでお父さんが」
人間じゃない、と思った。文字通りの鬼だ。本当に鬼になってしまったのだ。だから母親だって殺したのだし、きっと昭も。
「あんたなんか、お父さんじゃない！」
かおりは倒れた男の胸に杭を当てた。父親じゃない、鬼だ。かおりからすべてを奪った敵だ。杭を叩いた。男が獣じみた声を上げた。人の悲鳴には聞こえなかった。途中でやめれば、こいつはきっとまた起き上がってくる。そして、かおりを襲う。危害を加えて酷いことをする。そんなことは許さない。
かおりは金槌を振り下ろしたが、狙(ねら)いが上手(うま)く定まらなかった。杭の頭を叩き損ねてかすり、杭が傾いて外れる。慌てて構え直し、また叩いたものの、わずかに先がめり込んだまま、動かなくなった。まるで岩盤の中に食い込んだようにそれ以上進まず、遮二無二金槌を振り下ろすと嫌な音を立てて杭が折れた。
男が呻(うめ)いた。——まだ死んでない。起き上がってくる。何度でも起き上がって、かおりを苦しめる。
やめてよ、と叫んだ。いい加減にして。悲鳴を上げながら金槌をところ構わず振り下ろした。こんなもの、いなくなればいい。消え失(う)せてしまえば。全部、なかったことに

なればいいのに。呪詛を込めてその鈍器を振り下ろし、どれほど経ったか、よろめいて畳を叩いた。

かおりはそれで我に返った。目の前には顔を叩きつぶされ、窪んだ肉塊に変えた男が横たわっていた。あたりには血溜まりができている。

かおりは悲鳴を上げて金槌を取り落とし、そして思わず座敷を逃げ出した。廊下の隅に逃げ込み、懐中電灯の明かりに浮かび上がった男を見る。動き出さないだろうか。かおりを襲いに来ないだろうか。

震えながら見守っていたが、男はもう微動だにしなかった。隆起しているべき場所が、完全に陥没している男の首はおぞましかった。その姿で起き上がり、動き出したらどうすればいいのだろう。――動き出さないとは限らない。目の前の身体の生死を確かめる方法がない。

実際、田中は完全に死んではいなかった。まだかろうじて残る細い意識が、恐ろしい苦痛とともに走り去っていく足音の振動を捉えていた。思考と呼べるほどの思考はもう紡がれていなかったが、ついに許されなかった自己を認識してはいた。――いや、やはりお前も許してはくれないのか、と悟った瞬間の絶望が、細く細く切れ切れに残っていた。田中の身体は駆けつけてくる振動を捉えた。それは間近に駆け寄ってきた。重い物が顔面に叩きつけられる衝撃は知覚できた。やはり、という細い諦観は、三度目に完全

に叩きつぶされた。

かおりは昭のバットを放り出した。金属製のバットは、中程から歪んで曲がっている。震える手で懐中電灯を摑み、懸命に死体の様子を照らした。長いような時間を経てようやく、それがもう動かないことを確認した。——父親は死んだのだ。今度こそ、本当に死んでしまった。

かおりはもう一度、悲鳴を上げた。悲嘆が胸からあふれて悲鳴になった。懐中電灯を取り落とし、父親の身体に取り縋った。

「……お父さん」

身体を揺らし、縋りつく。父親の心音は聞こえず、温もりも感じられなかった。父親の身体は血に濡れて、畳にもひどい血溜まりができている。

「お父さん……！」

父親に詫びたいのか、父親を責めたいのか、かおりにも分からなかった。ただ、声を上げて泣き、そして自分の側に死体が存在することに思い至った。

怖かった。そこに死体があるということ自体が、怖くてたまらなかった。かおりは泣きじゃくりながら、父親の腕を摑んで引きずった。座敷の押入の前まで引きずり、襖を開ける。下段に積み上げてあった座布団を引き出し、道具を引き出し、そこに父親を押

し込んだ。

襖を閉め、それに背を当てて振り返ると、床に転がったままの懐中電灯の明かりが、畳の上を帯状に照らしていた。そこを血の痕が横切っている。

かおりは嗚咽しながら立ち上がり、懐中電灯を拾って雑巾を取ってきた。畳の血痕を拭い始めた。

四章

I

社務所の明かりが突然、消えた。
「——何だ」
大川の声がする。すぐさま何人かが懐中電灯を点(つ)ける。光の帯が交錯した。
「停電みたいだ。村の明かりが全部消えてる」
戸口のほうから声がする。敏夫は軽く舌打ちをした。
「あちらさんも、こっちの動きに気づいたな」
「どうする、先生」
「とりあえず舞殿の篝火(かがりび)をこっちに持ってきてくれ」
社務所の座敷の縁側に沿い、篝火が設けられた。揺れる灯火は何もかもに陰影をつけ、それを踊らせてその場にいた者たちを不安なような猛(たけ)ったような奇妙な気分に落とし込んだ。
「村一帯が停電してるようだ。タイミングがタイミングだから、偶然ということは考え

られない。連中がやったんだろう。連中はそれだけ夜目が利くんだろうな」
　大川は唸る。
「それだけこっちには不利ってことか」
「だろう。電話と無線はどうだ」
　座敷の二方から、駄目だ、という声がすぐに返ってきた。
「電話のほうはウンともスンとも言わない」
「無線も駄目です。雑音がひどくて」
　敏夫は頷く。
「だろうな。連中も外部には連絡されたくないんだろう。無線が駄目だということになると、携帯電話も駄目だろう。外部に連絡できないのはたいしたことじゃないが、村の中でも連絡に困るな」
「伝令係がいるな。自転車やスクーターなんかの小廻りが利くのを使って人間が指令を運ぶしかない」
「何箇所か詰め所を設置しよう。詰め所ごとに留守居役と連絡係を置いて、何か連絡があれば、連絡係を動かして各詰め所の留守居役に伝えさせる。情報や指令は留守居役から引き出してもらう」
「司令塔を置くってわけだ。連絡係は女子供でもいいですね。婦人会のほうに話を通し

て按配してもらおう。できるだけ人手を集めて、夜の間は何人かで動いてもらうってのでどうかね」
「そうするしかないな」
「詰め所はまずここと——村道を見張るのに『ちぐさ』を使うって話はどうなった」
誰かが、使わせてもらえるそうです、と声を返す。
「じゃあ、下外場は『ちぐさ』でいいだろう。外場は公民館があるし、門前は御旅所が使えるな。上外場は」
「広沢の隆文さんが、木工所を貸してくれてます。あそこがちょうど葬儀社の斜め向かいなんで」
「じゃあ、そこだ。中外場は」
「うちを使ってください」と、結城が声を上げた。「工房はかなりの広さがあるし、兼正の坂までも、すぐですから」
「じゃあ、そうさせてもらおう。——若先生、兼正はどうします」
「坂の上と下だな。道を塞いでグループを配置する。人数は多いほどいい。おれも行こう」
「おれも行きます。ここは田茂の御隠居に頼もう」
田茂定市が頷く。

「それぞれの詰め所に誰か留守居役を置け。消防団の班長か世話役に采配してもらおう。おれは兼正に行くんで、外場は村迫の宗秀さんか宗貴くんに頼むんだな」
分かりました、と声を上げて、二人ほどが社務所を出て行く。
「――若先生、これでなんとかなりますかね」
「そう願いたいもんだな」言って敏夫は社務所の時計を見た。「三時か。まだ夜明けまで三時間程度あるな。とにかく明かりもないし、夜が明けるまでは自重することだ」
「夜が明けるまでに時間がないからね」
佳枝は集めた仲間たちにそう言う。
「とにかく、まず第一に尾崎の医者よ。人が集まっているようだから、気をつけなさい。江渕と葬儀社、駐在なんかはマークされているから、明け方に頼っては駄目。とにかくここまで戻ってくるか、そうでなければ隠れなさい、いいわね。ただし、絶対にここを知られないように。抜け道に入るときには気をつけて、人に見られないようにすること。山で仲間に会ったら、そう伝えてちょうだい」
集まった者たちは不安そうに頷く。その中に大川篤はいた。
篤を真っ先に捉えたのは、恐怖だった。悪い行ないには悪い報い――きっと何か不快で痛いことが起こるに違いない、という神託のようなものを感じた。そしてそれは速や

かに怒りに取って替わった。どこまでも追ってきて絡みつく、自分を窒息させそうな何者かに対する怒り。
篤はほんの少し前まで、千鶴の庇護を受けてよろしくやっていた。篤はこれまでの人生の中で初めて自分が報われたという感覚を得たが、これは続かなかった。あっさりと千鶴に見切られ、恩恵を取り上げられ、叱責を受けた。しばらく山入から出てはならない、と言い渡され、木偶たちに交じって死体を埋めてきた。墓穴を掘ることを強いられていたのだった。
そのさらにほんの少し前に、篤は生まれ変わった。これで貸しの多い人生とは手を切ったのだ、と思ったのだ。その少し前には、篤は死んでいた。その前にもやはり死んでいた。自分の取り分を毟り取られ、あらゆる種類の不快なことを強いられ、屍肉を野良犬に食いちぎられる死体のように略奪されていた。――そしてまた略奪が始まるのだ。
（ふざけるな）
これは不当だ。篤は自分の取り分を、まだ何ひとつ手に入れてない。千鶴はそれを小出しに舐めさせ、あっさりと取り上げた。それは束の間、篤の目の前を通り過ぎていった。そしてまた、貸しばかりが積もっていく。勝ちの目が絶対に出ない博打なんてイカサマだ。そんなルールがあるものか、と思った。篤は生まれ変わったのだから、貸しを取り立てる番になっていいはずだ。

（ルールってものが、あるだろうがよ、くそ）

ここで狩られて（また、この子ったら！）殺されるなんて、イカサマの極致だ。

（覚えてろよ）

あくまでも連中がイカサマをやると言うなら、自分がルールってものを叩き込んでやるのだ。

「どういうことだよ、これ！」

正雄は人波が崩れ始めた廊下の隅で吐き捨てた。

「冗談じゃない、なんでおれが殺されないといけないんだよ！　単に飯を食っただけだろ！」

恵は正雄のヒステリックな声に顔を顰めた。正雄の声には怒り以上に恐怖が露わで、こんな声でがなり続けられたら恵まで身が竦みそうだった。

「だいたい何なんだよ、人を犬みたいに扱っておいてさ。あいつらがふんぞりかえって好き放題にしてきたのって、こういうことが起こらないようにしてくれるためじゃなかったのかよ。どうせあの家の連中がヘマをやったに決まってるんだ。そのツケをなんだっておれが払わなきゃならないんだよ！」

「やめて」と、恵は言ったが、正雄に同意する気分がなかったわけではない。佳枝はど

ういうさつで村の連中が大挙して狩りに乗り出すことになったのか、その経過について触れていなかったが、誰のせい、と明らかにならないところに、兼正の誰かのせいではないか、という匂いを嗅ぎ取っていた。

「本当のことだろ。こういう時に、なんとかしてくれるためにあいつらがいるんだろう？ だから言うことを聞けって脅して、人を扱き使ってきたんじゃないかよ。そもそもおれをこんなにしたのは、あいつらなんだぜ。勝手に仲間に引き込んでおいて、扱き使うだけ扱き使って、尻拭いまでおれにさせるのかよ。虫のいいことばっかり言いやがって。冗談じゃねえ！」

そこ、と佳枝が厳しい声を上げ、恵らのほうを見た。恵は慌てて正雄の側を離れる。なのに正雄は同じことを繰り返しながら恵のあとをついてきた。

「嫌だ、冗談じゃねえよ！ 村に降りるなんて、絶対に御免だ。杭を持って待ち構えてるんだぜ、そんなところにどうして行かないとなんないんだよ。ふざけんじゃねえよ」

「やめてってば！」

恵は怒鳴った。正雄は怯えたように目を見開いて、それからいきなりのように顔を歪めた。

「あんたって、本当に口先だけの腑抜けね。偉そうな口を利くくせに内実は空っぽなん

だから！」
「だって……なんでだよ。嫌だよ、おれ」言って、恵の腕を引く。「なあ、逃げよう」
「馬鹿じゃないの？」恵は正雄の腕を振り解いた。「そんなことだから、あんたは駄目なの。誰かさんと自分を引き比べて僻んでなきゃならないのよ！」
「だ……誰のことだよ」
「誰のことかしらね？　本当に、あんたなんかじゃなく、彼が起き上がったんだったら良かったのに。そしたらきっと、あたしだってみんなだって助けてくれたわ。馬鹿みたいに泣き言なんか言ってないで、やるべきことをやってのけてくれたに違いないのに」
「あいつだって逃げ出すさ、あいつはそういう奴なんだからな。仲間のためになんか、動くような奴かよ」
「彼は、かおりと、かおりんちのちび助を抱えて、鬼に対抗しようとしたわ」
「でもって殺されたんだろ」
「かおりたちが荷物になったからよ。——あんたは？　あんたはなんの荷物も抱えてない。それどころか、あんたのほうが荷物になりそうね」
「なんで荷物なんだよ、お前のこと、逃がしてやろうって言ってんだろ」
ふん、と恵は鼻先で笑う。
「そうは聞こえなかったけど？　第一、あの人たちが逃がしてくれると思うの、この人

手のいるときに。ここで逃げ出したら裏切り者よ。折檻ぐらいじゃ済まないわ」
「だって」
「逃げるってどうやって逃げるのよ。あんた、車の運転でもできるわけ？　逃げてどうするのよ。今日の夜が明けて、それからどうするわけ？　寝場所はあるの？　お金は持ってるの？」
正雄は黙り込んだ。恵はそんな正雄を一瞥して背を向ける。
「どこに行くんだよ」
「決まってるでしょ。村よ」
「よせよ、危ないよ。絶対に危険だって」
正雄は前に廻り込んで止めようとする。恵はその胸を突いた。正雄が恵の心配をしているわけではないことなんか分かっている。正雄は自分だけが臆病者になりたくないのだ。
「ほっといてよ」
「だって、なあ——どこに行くんだよ」
「村だって言ってるでしょ」
「そんな、危ないだろ。危なすぎるよ」
「あんたって、本当に駄目ね。分からないの？　これが最後のチャンスなのよ。あたし

はこのまま犬みたいに山入に繋がれてるなんて御免なの」
正雄は怯んだように足を止めた。
「佳枝さんの話を聞いてなかったの？　尾崎先生をなんとかしろって言ってたでしょ」
「ここまで来て御機嫌取りかよ」
「そうよ。——本当に馬鹿じゃない。尾崎先生をなんとかしろってことは、先生をなんとかすれば褒めてくれるってことじゃない」
恵は正雄を押し除ける。
「臆病者はついてこないで。足手まといだから。危なくなったら、逃げ出すしかないのよ。その時だって兼正の奴らが優先なのよ。それまでに尾崎を殺すの。そうしたら、万一何もかも駄目になっても、一緒に連れて逃げてくれるわ。ここでちゃんと働かなかったら、あたしたちここに置き捨てられるのよ、そうに決まってるでしょ」
正雄は目を丸くし、そして慌てた声を上げた。
「おれも行くよ」
伸ばしてきた手を振り払い、恵は駆け出す。
「来ないで！　あんたなんか邪魔なの」
徹は人混みを離れながら、とうとう始まったのだ、と思った。下の家に向かいながら、

もっと早くにこうなるべきだった、と思う。屍鬼など滅びてしまえばいいのだ。

建物の中に入ると、腐臭が薄く充満している。台所から茶の間まで、犠牲者の死体が並んでいた。鍵を開けて檻に向かう。中を覗き込むと、中年の女と律子が蹲っていた。女は橋口やすよだ。わざわざ同僚を連れてきて律子と閉じ籠めたのは、辰巳一流の嫌がらせだろう。ひとつ檻の中に閉じ籠め、律子が翻意するのを待っている。律子のほうは部屋の隅に蹲って、まるで自分で自分を抱き締めるようにして丸くなっていた。

諦めたほうがいい、と思う。どうせ屍鬼たちには逆らえないのだ。だが——と、その一方で思う。村人が屍鬼を狩るために乗り出した。ひょっとしたら、じきにこの苦痛から解放されることになるのかも。

（……解放……）

それは死を意味する。犠牲者を襲う痛み、かつての隣人たちが殺戮に遭い、それをただ見ているしかない痛みは、屍鬼である限り終わらない。この痛みが終わるときは自分の呪われた生が終わるときだ。村人に狩られて、終わる——。

徹は思わず檻の格子を握った。日光の中に引きずり出されるか、そうでなければ杭を打たれるか。あるいは首を落とされるかだ。それが狩られる、ということだった。制裁のせいで林の中に放置され、炭化した仲間の屍体を埋葬したことがある。そんなふうになりたくない、と思ってしまう自分が苦しい。

だが、それは恐怖だった。他者から自分が襲われ、惨い仕打ちを受け、苦しい死を迎える。自分の存在が終わってどこにもいなくなることは想像するだけで怖い。徹はかつて一度死んだのだが、その死は緩慢に訪れた。意識は混濁し、身体は疲弊して苦痛を感じ取る能力も摩耗していた。その状態で死を迎えることと、今の自分が杭をもって追われ、それを打ち込まれることを同じことだとは思えなかった。

どうせ自分を責めるなら、憎んで殺せるほどでなくては駄目だ、と沙子は言った。本当にそうなのだと思う。徹は自分を疎み、屍鬼である自分を呪っていたが、自分に対して殺意を感じるほど憎んではいなかった。

徹は檻を掴む。しばらくそれに額を当てている。やがて顔を上げてそれを揺すった。

「起きろ」

律子は蹲ったまま動かない。

「寝たふりをしてるんじゃない！　起きてるんだろうが。そいつを襲えよ！」

俯いていた、やすよが顔を上げ、小さな悲鳴を上げて身を縮めた。

「お前が襲わないんだったら、おれが襲うからな。目の前で絞め殺してやるぞ、いいのか」

律子がようやく身動きをした。白い顔が徹を振り返る。

「襲えよ。でなきゃその女が、ひと思いに殺してくれと言うようにしてやる！」

律子は憐れむような視線を投げた。徹は自分が泣いているのを分かっていた。そうしながら罵声を浴びせかける。殺してやりたいと思うほど、自分を憎んでしまいたかった。

2

ドアの開く音がして、静信は目を覚ました。部屋には明かりがない。誰が入ってきたのか、静信では分からなかった。
「起きられますか」
そう訊いてきた声は辰巳のものだった。
「……ああ」
静信は身を起こす。目眩はしたが、起きあがれないほどではなかった。
「では、来てください」
暗闇の中から声がして、静信の腕を掴む者がある。それに促されて部屋を出、階段がある、段差があると注意されながら屋敷を下へと降りていった。建物の中は真の闇で、静信には、まったく何ひとつ見て取ることができなかった。もともと中の間取りがどうなっているかも知らず、だからその道行きの果てに、辿り着いた場所がどこなのかも分からない。ただ、屋根裏から二階、一階を経てもう一階、降りたように思った。ひょっ

としたら地下室があるのかもしれない。
「……敏夫は」
「まだ、どうにかしたという報告はありません。とにかく人が集まっていて、近づけないんですよ。……安心しましたか？」
静信は答えなかった。どう答えていいのか、自分にも分からなかった。
「二時間ほどで夜が明けます。室井さんにはここにいてもらいます」
言って、促された。そこにはやはりベッドのようなものがある。促されるまま腰を下ろした。
「屋敷の周囲を人が包囲してます。夜が明ければ中に踏み込んでくるでしょう。ここは滅多なことでは見つからないと思うけれど、あなたに声を上げたり妙な行動を取ってほしくない」
「しないと思うよ。……不安なら縛り上げて猿ぐつわを噛ませてもらって構わない」
辰巳は軽く息を吐く。まるで笑ったような調子の音色だった。
「あなたは変わった人だ」
「……だろうね」
「沙子をお願いしてもいいですか」
「ぼくに？」

「あなたに。沙子は夜が明けると身動きできないんです。去日御覧になったように、ほとんど死体と同義の存在になってしまう。ぼくは出て行かなければいけません。しなければならないことがある。正志郎もです。昼間に動ける存在は貴重です。全員、働いてもらわねばならない。他の連中は昼間には身動きができない。誰かについていてもらうとすれば、あなたしかいない」

「ぼくは……」

「村人をどうこうしろとは言いません。積極的に村の人たちに敵対してもらうことまでは求めない。ただ、沙子に不利になることはしないでもらいたい。できれば、危険から遠ざける手伝いをしてもらいたいんですよ」

「それなら、約束できると思うよ。体力的におぼつかないけれども」

「注射をして、点滴の処置をしていきます。正志郎で慣れてますから、御心配なく。それでかなり改善されるはずです」

静信は頷く。

「明かりを置いていきます。電池は棚の中です。とりあえず食糧も置いておきますから」

「……分かった」

「それと、もうひとつお願いがあるのですが」

「何だい？」
「ぼくは必ずしも人の血を必要としない。けれども、人の血のほうが効率はいいんです。ぼくはこれから、かなりの無茶をしないといけない」
意を付(はか)って、静信は頷く。
「……どうぞ」
辰巳が出てしばらくしてから、明かりを持った沙子が部屋の中に入ってきた。その明かりで、ようやく自分のいる部屋の様子が分かった。八畳ほどの大きさで、ベッドがふたつに最低限の家財が揃(そろ)っている。地下にあるのは、どうやらこの部屋だけではない様子で、壁を隔てた隣からも、微(かす)かな物音がしている。
「気分……酷(ひど)い？」
「いや。こんなものじゃないかな」
「辰巳が呆(あき)れていたわ。自分の命に無頓着な人だって」
「そうかな……」
沙子はベッドサイドに明かりを置いて、床に坐(すわ)り込んだ。静信の横たわるベッドの上に頬を載せる。
「室井さんはわたしたちの味方なの？　それとも、屍鬼も人間もどうでもいいの？」

「さあ……。どうでもいい、というのは違うだろうな。味方かと言われると、イエスと答える自信はないね。ただ――敵ではないと思う。たぶん」
「……なぜ？」
「前にも言ったろう？　ぼくは理想主義者なんだよ」
「人道主義を屍鬼のうえにも施してくれるの？」
「何かを施せるほど、ぼくは偉くないよ。……ただ、ぼくには人と屍鬼の違いが分からないんだ」
静信は息を吐く。沙子の置いたライトの明かりで、点滴のパックとチューブとが鈍く輝いて見えた。
「……同じように考えて、同じように感情があって、同じように行動する。だったら人も屍鬼も同じものじゃないのかな。屍鬼は人を狩らないと生きていけないのだけど、人だって命を狩るのだし、たしかに正志郎氏の言う通り人を狩るんだ。同じくらい残虐で同じくらい利己的な生き物なんだよ」
「そうかもね……」
「だからと言って、人は醜い、と言う気はないんだ。結局のところ、自らの生存のために命を狩るのは、生き物の宿命だと思うから。人が醜いんじゃない、人も屍鬼も同じなんだと思うんだよ。人が醜悪だと言うなら、同じくらい屍鬼も醜悪なんだろう。屍鬼が

冷酷だと言うのなら、人も同じくらい冷酷なんだと思う……」
ただ、と静信は目を閉じた。身体が重い。自分の身体が少しも自分のもののようではなかった。
「ぼくは、どちらかと言えば、屍鬼のほうにシンパシイを感じてしまう……」
「……同じものなのに？」
「うん。屍鬼も人も似たようなものなのだけど、ひとつだけ違うところがある。屍鬼は自らの残虐性に自覚的で、人は無自覚だというところだ……」
自らの罪を理解している。屍鬼はどうしても、理解せざるを得ないのだ。善ではない自分に喘ぐ。善であることを疑う余地もない自明の事柄だとして確信している人間との間の、唯一にして圧倒的な差がそこにある。
「君たちは死なないでいるために、人を狩っているだけだ。誰も望んで屍鬼になったわけじゃなく、望んで人を狩っているわけじゃない。君たちは君たちの在りように従って生きているだけなんだ。なのに君たちの存在は凶器になり、否応なく秩序を逸脱する……」
「カインみたいね。……室井さんの書く、彼」
静信は頷く。
「君の言った通り、ぼくはカインに自分を投影しているんだよ。だから、君たちのほう

に共感を抱かないでいられないんだと思う……」
「ねえ、教えてもらえるかしら。どうして彼は弟を殺したの？」
「……さあ」
「そうでなければ、質問を変えてもいいわ。どうして室井さんは、自分を殺そうと思ったの？」
　分からない、と静信は呟く。
「……本当に、ぼくには分からないんだよ。君は、どうしてだと思う？」
「あなたのほうは知らないけど、小説のほうなら答えられるわ。――彼は弟を殺さないと生きていけなかったからよ」
「君たちのように？」
「そう。……でもね、人は、相手を殺さないと自分が生きていけないから殺すのよ。他人の目から見て、本当にそうかどうかは関係ないわ。いつだって理由はそれだけなのだと思うの」
「そうかも、しれない……」
「相手が存在していると、自分の存在が成り立たないの。だから相手の存在を抹消しようとするんだわ。そうせざるを得ないの。彼に殺意がなかったなんて嘘だと思うわ。弟を殺した以上、彼には殺意があったのよ。そして、理由のない殺意なんてない」

静信は苦笑した。
「やっぱり君だったんだな……」
「やっぱり？」
「原稿に書き込みをしたろう？」
「……どうしても読みたかったの。だから襲った人にお願いして、ちょっとだけ持ち出してもらったの。──気を悪くした？」
「いや。……そうだね、あれが世に出ることはないだろうから。それまで村も、ぼくも保たない」
「……酷いことをしてるわね、わたし」
「仕方ないことだから」
「完成したところが見たいわ……」
そうだね、と静信も呟く。だが、完成はしないだろう。静信にはあれを書き上げる時間の余裕がなく、何よりも彼がなぜ弟を殺したのか、その理由を知らない。
（……いや）
静信は気怠い眠りの中に引き込まれながら思う。知らないはずはない、それは自分の中に生じた殺意の写し絵なのだから。静信はかつて、確実に自己に対する殺意を抱いた。
（そして……）

村の崩壊を是として沙子の許に来た以上、村に対してもなにがしかの殺意を抱いているのだ——おそらくは。

3

正志郎は、速見からの連絡を聞くなり、屋敷を飛び出していた。正志郎が坂を下ろうとしたときには、すでに坂の下に数人の武装した人間が集まっているのが見えた。やむを得ず山の中に入り、裏道伝いに人目を避けて神社へと近づく。なにしろ正志郎は村の中で悪目立ちする。人目を避けるしかなかったが、正志郎は屍鬼ではない。夜目が利かず、移動するのには恐ろしく時間を喰った。

村を大きく迂回している途中に、電気が落ちた。街灯も人家の窓もいっせいに明かりを失い、村は真の闇に包まれる。姿を隠してくれるのはありがたいが、周囲が見えないのは正志郎も同じだった。なんとか村道の、二之橋の袂に出た。橋を渡って水口に出る。水口からさらに山の中に入って、山から鎮守の森へと廻り込んだ。夜目の利かない自分が忌々しかったが、仲間うちで神社にここまで接近できるのは自分しかいまい。良かったのか、悪かったのか——思いながら、鎮守の森の端から境内の様子を窺った。

境内には篝火が焚かれている。社務所から舞殿のあたりにかけて人が集まっていた。

正志郎が潜んだ場所からさほど遠くない地面の上に、白い布をかけられたものがぽつんと寝かされていた。――あれが。
なんとか近寄る方法はないか。今のうちに取り返して処置をすれば、まだ甦生できるかもしれない。そう思って見守っているが、始終、誰かが近くに集まっていて、それができない。じりじりしているうちに、数人のグループがやって来た。張り番をしていた者たちに何事かを話しかけ、シーツをめくる。正志郎のいる場所からも、シーツの下にあるものの様子が見て取れた。
正志郎は呻いた。たしかに千鶴だった。見るも哀れな姿になっており、明らかに杭が急所に刺さっている。あれではもう、助ける術は存在しないだろう。
正志郎は顔を覆った。尾崎の医者は、千鶴に御し切れるような男ではなかったのだ。千鶴には単純な――子供じみた愚かさがあった。その千鶴に敏夫の籠絡は荷が勝ちすぎるのではないかという気が、正志郎にはしていた。千鶴は敏夫を支配できるつもりでいたようだし、それは正志郎に対するようにたやすいことだと思っていたふうがあったが、そもそも千鶴による支配を求めていた正志郎と、千鶴に対して敵意を持っていた敏夫では事情が異なる。もともと千鶴は誰かを支配できたことなどないのだ。誰もが千鶴に支配されてやっていたのだし、そのほとんどは千鶴の陰に沙子と辰巳の姿を見てのことにすぎない。それすらも理解できないほどの愚かさ――無邪気さが、やはり千鶴の命取り

になったのだ、と思った。
千鶴はそういう女だった。だからこそいっそう、あの姿は不憫だった。千鶴は最後に何を思ったろう。せめて死が迅速であったことを祈らずにはいられない。
なんとかせめて遺骸だけでも取り戻す方法はないか、未練がましく見つめていると、ひそかな声をかけられた。忌々しそうな顔をした辰巳が背後に潜んでいた。
「……駄目なようだな」
辰巳に言われ、正志郎は頷いた。辰巳は背後を示す。促されるまま後退し、神社の喧噪が届かないところまで山を南へと下った。
「沙子は千鶴に甘かったけど、千鶴が綻びになるんじゃないかと思ってた」
辰巳は息をついて言う。明らかに安堵した気配があるのは、神社から遠ざかったからだろう。さしもの辰巳も神域にいるのは辛いらしい。それを意外にも奇妙にも思った。
「尾崎は狡猾なんだ。……千鶴には荷が重すぎた」
「そういうことだ。だから、尾崎は脅威なんだ」
辰巳は言って、正志郎を振り返る。
「千鶴の仇を討て。あの男をなんとかして排除するんだ。あいつが神社に詰めている限り、ぼくらには手出しができない」
正志郎は辰巳を見る。

「沙子は逃げないと言う。だとしたら、力攻めにするしかない。ハンターを一人でも減らす、中心人物を排除して組織の瓦解を狙う。連中を血祭りに上げて、我々に逆らうとどうなるかを村の連中に思い知らせるしかない」
「逆効果にならないか？」
「覚悟のうえだよ。逃げないのだったら、他に手がない。たしかに今、大挙して仲間が逃げ出せば、騒ぎは外部に波及する。外の人間が我々の存在に気づくような事態だけは避けなければ」辰巳は言って、苦笑する。「もっとも沙子の本音は、未練があって諦められないということのようだけど」
「沙子らしくない……」
　正志郎は呟いた。沙子は狡猾だ。機を見るに敏で、用心深い。
「それだけ村に執着があるということだろう。そもそも、こんな夢想を実行に移すこと自体、沙子らしくなかったんだ」
　正志郎は頷く。そうなのかもしれない、と思った。それだけ沙子は帰属する社会がほしかったのだ。沙子は千鶴にだけは甘かった。――いや、正志郎にも甘いのだと思う。かりそめの父母に対する思い入れが、周到な沙子の弱点だった。たとえいっときの演技にしろ、父親がほしかったのだし、母親がほしかったのだろう。そのように、自分の帰属する社会がほしかった。自分を受け入れてくれる隣人、安心して根づくことのできる

土地、そんなものに対する頑是無いほどの執着を、正志郎も感じていた。
「正志郎、頼む」
正志郎は頷いた。

4

篤は夜道を駆けて、まっすぐに尾崎医院に向かった。佳枝は尾崎敏夫を殺せと言った。敏夫なら病院だ、と決めてかかってまっすぐに下ってきたのだった。
最初、篤は病院のほうに向かい、どの窓も閉め切られ明かりもないのを確認して舌打ちをした。——そう、こんな時間に敏夫が病院にいるはずがない。
(まったく、糞野郎が)
忌々しい気分で思ったが、そうやって侮辱したのが敏夫なのか、自分自身なのか、篤にも分からなかった。
ルールってものを教えてやる。
薄汚いイカサマで、篤にばかり貧乏籤を引かせるような、そんな真似は許さない。篤は何としても、ここらで勝ち点を上げたかった。そうして篤を見捨てた千鶴も、篤を馬鹿にした佳枝らも、みんな見返してやらなければ。

（舐めてんじゃねえぞ）

行き場のない怒りに突き動かされながら、篤は裏手に廻った。兼正のあの屋敷のように、どこか人を見下した感じのする建物がそこには寝静まっていた。篤には、この大きな家のどこに敏夫がいるのか分からなかった。

（構うもんか。どうせ医者と婆だけだ）

篤は手近の掃き出し窓に拳を叩きつける。盛大な音を立ててガラスが割れた。遠くどこからか喧噪が響いてきていたが、周囲にはなんの気配も物音もなかった。サッシを開け、中に踏み込む。中にはベッドがひとつ置いてあったが、誰の姿もなかった。

（どこだ）

篤は廊下に出る。蒼味を帯びた闇の中、長い廊下が延びている。手当たり次第に、部屋を検めた。居間らしき部屋には誰もいなかった。食堂らしき部屋にも誰もいなかった。その奥は台所で、やはり無人だ。篤はふと思いついて流しの開きを開け、そこに刺さっていた包丁を持てるだけ引っぱり出してベルトに挟んだ。柳刃のうんと尖ったのを右手に握る。――殺していい、と言われたのだ。遠慮することはない。

他にも何か、武器になるものはないか、物色しているところで物音がした。どこか家の中で襖か障子の開く音がし、台所を出た廊下の奥のほうで明かりが点いたのが見えた。ひたひたと足音が近づいてくる。篤は食器棚の陰に身を潜めた。

「――敏夫？　戻ったの？」
声とともに懐中電灯の明かりが射し込んできた。篤は食器棚の陰から踏み出した。寝間着に羽織の女は、篤を見て目を丸くした。尾崎孝江だ。篤は悲鳴を期待して笑った。にもかかわらず、孝江は険しい顔をした。
「何です、あなたは」
孝江は、その風体の良くない若者に見覚えがあった。何度も配達で来たことがある。大川酒店の長男だわ、と理解した。乱暴者で物の道理の分からないドラ息子だ。配達で何かと失態が多く、そのたびに怒鳴りつけた。孝江に叱られると恨みがましい目をして、人を脅すような顔つきをするくせに、満足に何か言い返すこともできない小心者だ。その臆病な不良息子がついに道を外れて泥棒に入ってきたのだ、と思った。
孝江は村のことに興味がなかった。だから、篤が死んだことを小耳に挟んでいながら、右から左に忘れていた。自分の値打ちを保証してくれる尾崎の威光を信じていた。だから露骨に、見下げ果てた顔をした。一喝してやれば、すごすごと引き下がるだろう。なぜなら、そうでなかったことなど、ただの一度もなかったからだ。
「何をしているんです。さっさと出て行きなさい」
孝江が言うと、篤は怯んだ。篤が怯んだのは、尾崎の威光を恐れたからでも、孝江に気圧されたからでもなかった。孝江の見下げた目が、祖母の顔に重なったからだった。

まったく、あんたはなんて子なの（**富雄！**）ろくでもないことばかり（**富雄！**）出来が悪くて頭が悪くて性根が悪くてどうしてお前みたいな（**富雄ってば！**）お父さんによぉく叱ってもらわないと一度とっくり言い聞かせて性根を入れ替えて（**何とか言ってちょうだい、この子ったら！**）

篤は吼えた。それは孝江には悲鳴の一種に聞こえた。事実そうだった。篤はこの罪に対する父親の罰を予感し、心の底から怯えていた。包丁を振り上げた。

「いい気になんなよ、糞婆ァ！」

父親が来る、篤を罰するために。拳が飛んでくるだけではない、杭を持って父親が来る。今度こそ間違いなく父親に殺される。

ヒッと孝江が声を上げた。懐中電灯が転がり落ちた。孝江は呆然としたように、切り裂かれた自分の胸許を見下ろした。寝間着の襟を押さえるように手を重ね、噴き出してきた赤いものを受け止めて、信じられないものを見るように血濡れた自分の手を見た。

「怖かねえぞ！　おれは生まれ変わったんだからな！」

篤はさらに包丁を突き出した。研ぎ澄まされた柳刃は、なんの抵抗もなく孝江の腹に根元まで刺さった。薙ぎ払うように抜くと、孝江はその場に尻餅をついた。

「やれるもんならやってみやがれ！　おれが手前をぶっ殺してやる！　人を殺したことなんかないだろうが。おれはもう何人も殺してんだからな」

「……やめて」
「手前なんかもう、問題じゃねえんだよ！」
孝江が背を向け、這うようにして廊下へと泳ぎ始めた。篤はその背に柳刃を振り下ろす。やめて、許して、助けて、と孝江が悲鳴を上げた。情けを乞う泣き言なんか聞きたくない。
「惨めな声を上げてんじゃねえ！」
突き立てた柳刃は、背筋に沿って孝江の背中を一文字に裂いた。孝江はなおも前に進もうとしていたが、血糊で滑る床の上で、ただ手足を動かしているにすぎなかった。篤はその背中に柳刃を立てる。体重を載せたその一撃で、孝江はとりあえず動かなくなった。
篤は肩で息をし（それが拭いがたい習性というものかもしれない）、孝江の身体を蹴りつけた。思う存分蹴ってから、別の包丁を握って孝江の身体を跨ぎ越した。
「藪医者！　出てこい！」
手当たり次第に斬りつけながら、部屋を検める。一階は無人なのを見て取って、二階に上がり、家具に斬りつけ、ベッドを裂いた。どこにも敏夫の姿はなかった。腹立ち紛れに箪笥から抽斗を抜いて、ぶちまけているうちに、ふっと力が抜けるようになった。くらり、と目眩がする。膝から力が抜ける。包丁を取り落とした。篤は喉の奥で悲鳴

を上げた。

（まずい……）

夜明けが来る。とっさに時計を探したが、力任せに払い落とした置き時計は、ガラスが割れ、針が飛んでいる。篤はあたりを見まわした。

隠れ家に戻らなければ。思ううちに、頭の芯が痺れるような感覚がした。大声を上げて首を振る。

――駄目だ、とても山入まで保たない。

他にどこか隠れ家はなかったか、病院の近くに仲間の潜んでいる場所は。思い出そうとするのに、記憶は次々に暗黒によって侵食されていく。たしかあそこが、と思い浮かんだ刹那、そこには黒い穴が穿たれてしまう。

（どこか明かりの入らないところ）

篤はともかくも廊下に転がり出た。砕けそうになる膝を励まし、真向かいのドアを開ける。

（誰にも見つからないような）

篤を罰するためにやって来た父親の目の届かないようなどこか。

朦朧としながら、壁に縋ってさらに隣の部屋に向かう。小部屋だった。窓があったが、雨戸が閉まっていた。部屋の一方には洋服簞笥が三竿、並んでいた。ドアを閉め、簞笥

に縋りついた。中に潜り込み、扉を閉める。ぴったりと閉まらない。閉めても閉めても、内側からでは上手くいかない。

脳裏を侵食するものに、大声を上げて抵抗しながら、必死で扉に爪をかけた。虚しく何度も閉めることを繰り返し、何度目かに、カチリと頼もしい音がした。

それが篤の限界だった。

五　章

I

十一月六日、夜明けは六時をほんのわずか、過ぎた頃だった。
敏夫らは桐敷家の前に集まり、曙光が射すのを待って中に入った。門扉をこじ開け、玄関のドアを壊して邸内に雪崩れ込む。
「手分けして探すんだ」敏夫は人々に指示をする。「ひょっとしたら、犠牲者が囚われているかもしれない。人間を見つけたら、心拍を確認しろ」
広いホールの中に敏夫の声が谺した。
「ただし、必ず複数でいろよ。一人になるな。伏兵がいるかもしれない」
了解した意を伝える声があたりに響いた。敏夫も大川とともに付近の部屋を探す。広い屋敷だったが、人数があったのですべての部屋を検めるのに、さほどの時間はかからなかった。
「誰もいない」大川が怒りに任せてそのあたりのものを叩き落とした。「ゆうべのうちに逃げ出したんだ」

敏夫は周囲を見渡す。たしかに、屋敷の中は蛻の殻だった。ガレージには車が残っていたが、どの部屋にも人影はない。

一階から三階の屋根裏部屋まで、部屋という部屋はすべて検めた。だが、人の姿もなければ死体もなかった。ただ、私物が置かれ、明らかに使用されていた形跡のある部屋が八部屋あった。そのうちの一室で、敏夫はトレイと、ほとんど手の付けられていないサンドイッチの皿を見つける。屍鬼には必要のないものだろう。屋根裏にあったその部屋は狭く、正志郎の部屋とも思えない。ひょっとしたら辰巳の部屋なのかもしれなかったが、それにしては私物がまったく存在しなかった。

(ここにいたのか……)

敏夫は幼馴染みのことを思う。おそらくそうなのだろう。部屋には外から鍵がかけられる。明らかに一度、結んだ形跡のある縄が束ねられて棚の上に載せてあった。だが、本人の姿はない。どこにも。

(連れ去られたのか……あるいはついていったのか)

ひょっとしたら、すでにもうこの世にはいないのかもしれない。本人が選んだこととは言え、それを思うと苦い気分がした。

「使っていた形跡のある部屋が八部屋ですね」

広沢が言って、敏夫は頷く。

「そのうちここは、囚人を捕らえてあった牢らしいな」

「住んでいた様子じゃありませんからね。とすると、七部屋が使われていたということですか。旦那に奥さんに娘、あとはあの若いの。他にも三人、いたということになりますね」

「だろう」

「医者と家政婦がいるという話でしたか。残る一人は誰でしょう」

「さあ。医者の江渕はここを出て江渕クリニックのほうに移ってるかもしれない。兼正の一家三人がここにいたのは確実だろうが、他の連中はどうかな」

「ああ、そうですね」

「いずれにしても、こんな程度の数じゃない。ここ以外にも隠れ家があるんだ。問題は、どこに消えたかだが」

　村の外には出ていないだろう。道路は封鎖してあるし、何より車が残っている。どこかにもっと大人数を収容できる隠れ家があるはずだ。

「問題はこっちじゃねえのかい」

　大川が棚を示した。二階の書斎らしき部屋だった。至るところに書棚が置かれていたが、その間に、細長い戸棚がある。中は空だったが、明らかに何か長いものを立てて収納してあった形跡があった。

「これは……」
「たぶん銃があったんじゃないのかい。そういう按配だぜ、これは。刻みは五挺ぶんだ。五挺あったとは限らねえが、弾がぜんぜん見当たらない。連中がずらかるときに持ち出したんだ」
敏夫は頷く。周辺の棚を探したが、やはり弾は見つからなかった。銃を持たれては厄介だ。村で猟銃を所持していたのは、すでに村にいない兼正を除けば敏夫の父親だけだったと思う。敏夫自身は、公安委員会に申し出て認可を得るのが面倒で、父親の死後、すべて処分してしまっている。
「猟銃が五挺か……」
大川が呟くのに、敏夫は言い添える。
「それに拳銃が一挺だ。駐在の佐々木がいる」
そうか、と大川は口を曲げた。
「とにかく、佐々木を見つけなきゃならん。——駐在所はどうだったって？」
「ゆうべのうちに、若い連中が踏み込んだらしいが、蛻の殻だったらしい。拳銃はどうだろう。保管庫の中まで確かめてるかな」
「確認しよう」と、敏夫は言って書斎を出る。隣の部屋から、ほら、と田代が言って手招きをした。

「どの窓も全部、二重になってる。あいつら、よほど日光が嫌なんだな」
まったくだ、と呟いて大川は窓のひとつにハンマーを叩きつける。盛大な音がして内外二重の板戸が壊れ、ガラスが砕けた。
「ちょっと、大川さん」
「こうしといたほうがいいんじゃねえか。窓を壊しておきゃあ、万が一連中がここに逃げ込もうと戻ってきても、もう使えねえだろう」
たしかに、と敏夫は頷いた。
「大将の言う通りだ。全部の窓を壊す。なにも壊さなくてもいい。要は戸が閉まらなければいいんだ。蝶番を曲げてしまえば事足りる。人の隠れられそうな戸棚も全部だ。そうすればここはもう隠れ家としては使い物にならない。敵の拠点をつぶしていくんだ」
なるほど、と清水が言って、手当たり次第に玄翁を打ち下ろし始めた。人々がそれに倣い、見るみるうちに整えられた家の中は無惨な有様になっていく。それは敏夫に、千鶴の姿を思い起こさせた。
松尾誠二らは、夜明けとともに江渕クリニックと看板の上げられた建物に押し込んだ。玄関を入ると、殺風景な待合室があり、カウンターがあった。診察室とおぼしき部屋に入って、誠二らは呆然とした。デスクがひとつ、衝立がひとつ。衝立の向こうには十

枚ほど畳が敷かれ、それですべてだった。処置台もなければ、医療器具もない。そもそもここでは、まったく診療など行なわれていなかったのだと、誠二らはこの光景から悟った。

実際のところ、「クリニック」と看板は上げられていたものの、この施設は医療施設としての認可など受けていなかった。建築業者は、医者が指導してダイエットや軽い運動をさせるだけの健康道場のようなものだ、と説明を受けていたのだった。

誠二はそういう事情を知らない。だが、部屋の隅には布団(ふとん)が積み上げられ、わずかに私物が散乱するその様子を見れば、ここが診療所ではなかったことなど一目瞭然(りょうぜん)だった。ここは屍鬼の隠れ家にすぎなかったのだ。

二階もまた同様だった。完全な無人で、江渕の私室とおぼしき部屋が一室と、一階同様の座敷があるだけだった。ここで医療行為を行なうことは、設備のうえからも不可能だった。

「でも」と、声を上げたのは大塚製材の大塚隆之(たかゆき)だった。「通ってた患者がいたんだ、たしかに」

誠二は吐き捨てる。

「そうとも。でもって、その患者はここで何をしてたんだか——江渕って奴(やつ)に何をされてたんだろうな」

村迫宗貴らは、曙光が射すと同時に、外場葬儀社の中に踏み込んだ。自宅のほうには、複数の人間が起居していた痕跡（こんせき）こそあったものの、人の姿はなく、斎場のほうにも人が潜んでいそうな様子はなかった。斎場の隅から隅までを検め、宗貴らは裏手の部屋に雪崩れ込んだ。入ったとたん、人々は鼻面（はなづら）を覆（おお）う。

倉庫のようなその部屋には死臭が漂っていた。ハンドライトで照らしてみると、ストレッチャーのような台車に載せられた棺（ひつぎ）が三つ、そこには放置されている。どれもまったく同じもので、同形の棺が倉庫の隅にも積み上げられていた。

父親の宗秀が、及び腰で棺に近づいた。蓋（ふた）を開けると、果たして中には死体が入っていた。

「……いたぞ」

父親の声に、宗貴は棺の中を覗（のぞ）き込む。中にいた顔には見覚えがあった。外場の西田老人だ。

「なんてこった……」

「ちょっと待ってください」と、声を上げたのは加藤電気店の加藤実だった。「これは、本当に屍鬼なんでしょうか」

「だって現に」

「でも」と加藤はハンドライトで死体の顔を照らす。ドライアイスらしきものが入れられ、棺の中には冷気が漂っている。そこに納まった西田の頭頂部は陥没して、血糊が瘤のように固まっていた。
「これは屍鬼に襲われた死体には見えません。事故か――そうでなければ殺された死体なのでは」
加藤が言ったところで、倉庫の隅を家探ししていた女が、地下がある、と声を上げた。行ってみると、コンクリートのスロープが地下に向かっていた。それを下りると、さらに腐臭がひどい。それもそのはず、わずか四畳半ほどの地下室には、四体の死体がコンクリートの床の上に並べられていた。上の死体は平服のままだったが、ここにある死体はどれもきちんと経帷子を着ている。
「何なんだ……これは」
宗秀は呻く。竹村源一が、こりゃァ、と声を上げた。
「ちょっと、宗秀さん」
源一は死体のひとつを照らす。
「御覧よ、こりゃァ、塚原の倅だよ」
宗貴も覗き込み、それが近所の塚原一であることを確認した。そう、塚原は死んだのだ。死んだという話を聞いた。宗貴は葬儀に行ってない。それどころか葬儀自体が行な

われたのかどうかも知らなかった。このところの村では、そういうことが珍しくなかった。

「つい一昨日、葬式だったんだよ」と源一は死体を指さして言う。「おれは親父さんと仲良かったから、葬式に行ったんだ、間違いない。ここで葬式だったんだよ。たしかに棺に入ってて、そうして山に運び上げて埋めたんだ。それがなんだって、こんなところにいるんだい」

「起き上がってきたんだ」と、誰かが声を上げた。

「違う」と、宗貴は言う。「敏夫は、起き上がるまでに四日から五日前後はかかるんじゃないかと言ってた。これはまだ起き上がってないよ」

「だったらなんで、こんなところに死体が」

それは、と言いかけ、宗貴は口を噤んだ。まさか、と思う。狼狽して顔を上げると、加藤と目が合った。加藤は宗貴の意を察したように静かに頷く。

「……上にだって死体はあった。それもきちんと棺に納まってさ」宗貴は悪心を感じる。

——なんという傍若無人な。

どういうことだい、と源一はもちろん、宗秀もぽかんとしている。

「分からないか？　棺がすり替えられているんだよ。斎場での葬式を見たことがないか？　式の最後に棺が床下に消えて、それが裏口から輿に載せられて出てくるんだ。棺

はここに入るんだよ」と、宗貴は地下室の奥にある扉を示した。おそらくはそこが斎場の真下だろう。「でもって中の死体だけが取り出されて、ここにこうして並べられる。だからこの死体は経帷子を着てるんだ。そうして、空の棺が輿に載せて運び出される。そうでなきゃ、上の棺みたいに、都合の悪い死体が入ったやつにすり替えられるんだ」

そうして、と宗貴は怒りを感じる。遺族は泣きながら、空の——あるいは赤の他人が入った棺を埋葬して別れを惜しんできたのだ。

宗秀が唸った。

「……畜生、なんて真似をしやがる」

大川長太郎は、佐藤笠太郎に先導されて水口の最も下にある荒ら家に向かった。

「ここ——ここだよ、郁美さんの家は。下外場の前田の父っつぁんが出入りしてるって噂があったんだ」

長太郎は頷き、背後の連中を促した。傾いた玄関の戸に向かって玄翁や鉄パイプが振り下ろされる。長太郎自身も、怒りに任せてそれに参加した。息子の茂が死んだ。鬼に引かれたのだ。なぜもっと早くに気づかなかった、という自身に対する怒りが、そのまま屍鬼という敵に対する怒りに転嫁されている。

その粗末なガラス戸は、意外に持ち堪えた。力任せに戸を破ってみると、それもその

はず、内側から板でしっかりと塞（ふさ）がれている。
「何かがいるのは間違いないみたいだな」
そればかりではない。中に踏み込んだ若い男が鼻を覆った。家の中には薄く腐臭が充満していた。
「まさか……死体でもあるんじゃ」
「かもしれんな」
長太郎は口を歪（ゆが）める。玄関脇（わき）の襖（ふすま）を開けると、中は手狭な四畳半、窓にはやはり内側から板が張られ、奥にはカーテンが下がっている。若い者が飛び込んで窓を破った。朝陽が中に流れ込み、それで畳の上に散らばった土塊（つちくれ）が見えた。笈太郎がカーテンを開ける。カーテンの向こうには襖があった。
「なんだって襖にカーテンなんか」
笈太郎が言いかけ、長太郎らは顔を見合わせた。そのカーテンも裏に黒い布で裏打ちされている。表地もゴム引きされているのか、妙な光沢があった。
長太郎は頷き、手にした鉄パイプの先で襖を開けた。中に横たわる人影が見え、そして異音がした。びくり、と人影が海老（えび）反った。異音は明らかに人の呻く声だった。
若い連中がカーテンを引き毟（むし）る。襖を引き倒した。押入の上段にはたしかに一人の老人がいて、それが苦悶（くもん）の声を上げ、身もがいている。

「……巌の父っつぁんだ」
長太郎も頷いた。奥歯を噛みしめる。たしかにそれは前田巌に違いなく、そして巌は吼えるように声を上げていた。その顔に、手に赤い斑が浮かび、見守るうちにも水疱を生じて弾けていく。
「こいつら、本当に」
誰かが震える声で言ったが、その先はなかった。本当にいたのだ、と言いたかったのかもしれなかったし、本当に日光に弱いのだ、と言いたかったのかもしれなかった。どうする、と別の声がした。目の前で恐ろしい声を上げ、身体をひねって苦悶しているこの老人をどうすればいいのか。身動きはしているが、ただ苦しみのあまり、身を捩っているだけのようだ。起きあがる気配はなく、長太郎らが側にいることを分かっているふうでもなかった。
長太郎は脇に手をやった。ベルトに提げた袋に杭と木槌を持っている。笈太郎がたまりかねたように悲鳴を上げて蹲り、耳を覆った。実際、その声は聞くに堪えなかった。
「こ……このままにしといたら、勝手に焼け死ぬんじゃないのかい」
そう言った誰かは、明らかに手を下すことを恐れている。長太郎は同意したかった。前田巌と付き合いがあったわけではないが、顔見知りではあったのだ。それが苦しんでいる。そこに杭を打つことは、あまりに残虐なことに思えてどうしても身体が動かない。

こいつらが息子を――茂を殺したんだぞ、と自分に言い聞かせても、やはり手は凍りついたように動かなかった。殺してやりたい、という意思はあったが、そう思うことと行為に踏み込むことの間には、恐ろしいほどの隔たりがあった。

蹲って念仏を唱えていた笈太郎が、ふいに声を上げた。

「何だい、こりゃあ」

長太郎は声を上げている巌から顔を背ける。笈太郎が示す部屋の隅へと目をやった。畳が一枚、明らかに浮いている。角が隣の畳の上に乗っていた。周囲には大量の泥が零(こぼ)れている。土の色からすると、今長太郎たちが靴の裏につけて持ち込んだものではないだろう。

長太郎は屈(かが)み込み、そして畳を持ち上げた。それを倒して放り出すと、畳の下の床板が切られている。一廻り小さな穴が開いて床下の土が見えた。それは妙に盛り上がっている。――そして腐臭が。

「こりゃあ」と、笈太郎は呻いて後退(あとずさ)る。

長太郎は中を覗き込み、パイプの先で土を掻(か)いた。白いものが土の下にあった。人がいる、この下に。

埋めてあると言うより、ほとんど薄く土をかけてあるだけのようだった。おざなりな埋葬、という気が長太郎にはした。埋葬ではない、単に隠匿(いんとく)しただけだ。おそらくは死

体の処置に困ってここに放り込んだのだろう。なんて惨(むご)いことを、と思った。せめて地中深くに埋葬してやると言うのならともかく。
これを、と誰かがちびた箒(ほうき)を差し出した。箒で土を払うと、中から死体の頭部が出てきた。腐敗し、すでに相好が変わっていたが、それがまだ少年と呼んでいい子供のものであることは分かった。
「こ……こりゃあ、田中の坊やだ」
「田中の——？」
「役場に勤めていた田中のとこの昭くんだよ。お父っつぁんが死んで、おっ母さんが倒れて——そうだ、間違いない。姉ちゃんと二人きりになったってのに」
笈太郎は喘(あえ)いで畳の縁を摑(つか)んだ。最後に会ったのはタケムラの前だ。そう言えば、あのとき自分が巌の話をしたのではなかったのだろうか。——そう、昭から巌が出入りしていたというその家はどこだ、と訊(き)かれた覚えがあった。ひょっとしたら、あの話を聞いて昭はここにやって来たのかもしれない。なぜ大人は何もしないんだ、と忿(いか)っていた子供は、大人の不甲斐(ふがい)なさに落胆して、自らここにやって来たのかも。
「そうかい、……坊やも殺されてたのかい」
笈太郎は洟(はな)をすする。畳の縁を摑んだまま、声を上げ続ける巌を振り返った。
「あんた……巌さん、この子を知ってたんじゃないのかい。同じ下外場だ、顔ぐらいは

知ってたんだろう？　まだ子供じゃないか、それをあんた、襲って殺したのかい。どうしてそんな惨いことができたんだよ」

長太郎は背後を見た。巌は口を開けたまま、その顔は焼け爛れ、弾けて、すでに炭化している。まだ身体を捩っていたが、もう悲鳴というほどの声は出ていなかった。これが息子を殺した。おそらくは、この子供も。目の前に無惨な死体がある、まだ年端もいかない少年の死体だ。埋葬されることもなく、放り込まれ土を被せられ――それが長太郎の何かを切った。

「この……化けもんが」

長太郎は足を踏み出す。周囲の二、三人がそれに従った。ひとつの死体が、越えられない一歩を越える後押しを確実にしていた。

杭を置いたのは長太郎だった。それに金槌を振り下ろしたのが誰だったのかは覚えていない。彼らは杭を打った。焼け爛れた屍体は改めて悲鳴を上げた。「助けてくれ」と聞こえたのが、いっそう彼らの怒りを煽った。一本目の杭を打っても巌の動きはやまない。身もがくように手足を振りまわしている。二本目、三本目の杭が打たれて、そして巌は動かなくなった。その焼け爛れ、ところどころが炭化した屍体を彼らは引きずり出す。路上に放り出すとき、たしかに複数の者が快哉を上げた。

「他の部屋も検めろ。誰か、ここに屍体があるって連絡してこい」長太郎は言って、笈

太郎を振り返る。「爺さん、他にどこが怪しいって？」

2

元子はのろのろと歩き、表に出た。朝陽が目を灼いた。空は嘲笑するように青く澄んで高かった。
元子は夢うつつで道を歩き、畦道を辿った。村の様子が何か変だと感じたが、どう変なのかを確認する余裕はなかった。枯れ草に覆われた畦道を歩き、国道に出る。もう国道を恐れる必要はない。なぜなら、ここを駆け抜ける車が元子から奪っていけるものなど何ひとつ残っていないからだ。
足許が定まらないまま歩く元子の脇を、トラックが一台、駆け抜けていった。素知らぬ顔で元子を追い越し、ただ通り抜けていく。
ドライブインの敷地に入ると、車が何台も停まっていた。店にも人の姿が見えたが、元子はとりあえず興味を引かれなかった。ふらふらと加奈美の家のほうに近づく。玄関に手をかけ、開かないことを悟ると、力任せに戸を叩いた。
「加奈美、……加奈美ぃ」
慌ただしい足音がして、玄関の戸が開く。加奈美が顔を出して、驚いたように目を見

開いた。
「……元子」
「加奈美、どうしよう、あたし」
元子はしゃくりあげる。加奈美は元子の腕を摑んで中へと促した。奇妙に周囲を憚るような仕草だったが、とりあえず元子はそれには気を留めなかった。
「どうしたの」と、加奈美は玄関に鍵をかけて振り返る。「その臭いは何？」
「臭い……」
「酷い臭いがしてるわ。どうしたの」
「茂樹が……」
元子は呟いて、その場に蹲った。
「加奈美、茂樹が死んじゃったよぉ」
死んでしまった。とうとう起き上がらなかった。
「待ってたのに、起き上がらなかった。とうとう起き上がらないで腐っちゃった」
加奈美が小さく悲鳴に似た声を上げた。
「待って……待ってたって、元子」
「起き上がるかと思ったんだもの。戻ってくると思ったんだもの。なのに起き上がらなかったの。あたし、ずっと茂樹を温めてて、冷えて固まらないようにして、ずっとずっ

と待って、神様にだっていっぱいお願いして」
「……元子」
「なのに、茂樹は死んじゃったの。とうとう起き上がってこなかった……！」
元子は三和土に額を擦りつけて泣いた。
「お義父さんに連れてかれちゃった。あたしから盗んでいったのよ、あの糞爺」
馬鹿、と元子は何度も金切り声を上げる。加奈美が元子の腕を摑んだ。
「とにかく上がって。人が変に思うわ」
「加奈美」
「うん。分かる。……辛かったね。とにかく上がって休んで。身体を洗ったほうがいいわ。着替えがいるね」
元子は泣きじゃくりながら、加奈美に手を引かれて上がり込んだ。居間の前まで来ると、あたりには雑巾や汚れた新聞が散乱し、汚物を擦り取った跡があった。どうしたのだろう、と思い、促されるまま洗面所のほうへ向かう。
「風呂場に行って。まだ停電してるのかしら。ひょっとしたらお湯は出ないかもしれないけど、とにかく顔を洗って身体を拭いたほうがいいわ。今、着替えを持ってくるから」
加奈美は言って、元子を促す。その加奈美の手には包帯が巻かれていた。
加奈美は寝間のほうに戻っていく。元子は勝手知った家の中を風呂場のほうに向かっ

た。途中、加奈美の母親、妙の部屋の前を通った。どういうわけか、妙の部屋の襖にはガムテープで目張りがされ、一部にはカーテンが付けられている。

（どうしたのかしら……）

元子はぼんやりと思う。そう言えば、家の中が変に暗い。どうしてこんな、何もかも閉め切っているのだろう。元子は何気なくカーテンをめくる。その下にある襖だけは目張りされずにぴったりと閉じている。

何かしら予感のようなものがあった。元子は引かれるように襖を開けた。部屋の中は暗かった。微かに、部屋の中に布団が敷かれ、そこに誰かが寝てでもいるように盛り上がっているのを見た。

（でも、この部屋は）

元子は首を傾げる。棒立ちになっていると、慌ただしい足音と悲鳴に似た声がした。

「――元子！」

加奈美は元子の腕を掴み、部屋の中から引きずり出す。襖を閉めて背中を当てた。立ち塞がるように手を広げる。

「……加奈美、今の……」

元子、と加奈美は手を伸ばした。

「お願い、何も見なかったことにして」

「だってあれ、加奈美の」
母親ではないだろうか。でも、加奈美の母親は――。
「お願いよ、元子。誰にも言わないで。起き上がってきたの。でも、何も悪いことなんかしてない。本当よ、まだ誰も襲ってないの。これからだって襲わせないわ。襲わないって約束したもの。だから、お願い」
元子は目を見開いた。足許から震えが立ち昇ってきた。そして、耐え難いほどの胸の痛み。
「お願い、元子」
加奈美は泣き崩れる。元子は機械的に頷いた。奇妙にこの場にいることが耐え難いことに思われて、元子は踵を返す。
「――元子」
加奈美は這うようにして追ってくる。
「うん……分かった。黙ってる。大丈夫よ」
加奈美は涙を零す。ありがとう、と呟いた。それに頷き、元子はふらふらと玄関に戻る。朝陽の中に出た。
空はやはり高かった。爽やかなほどの陽射しが降り注いでいる。山の緑は深く、あちこちが紅葉していた。のどかで平和な秋の景色だ。

——世界は何ひとつ変わってない。

日常は壊れていない。平和でのどかだ。なのに元子の世界は壊れてしまった。子供たちはすでにおらず、家族もいない。元子ひとりが取り残された。加奈美にだって母親が残されたというのに。

（あたしだけ……）

ふらりと元子は足を踏み出す。店の中で人が右往左往していた。一人が店から出てきて元子に目を留める。清水寛子(ひろこ)だった。

「あら——元子さん」

おはよう、と元子は頷いた。なんていう日常。

「元子さん」と、寛子は近づいてくる。そして顔を顰(しか)めた。「まあ……何の臭い？」

「……臭い？」

加奈美もそう言っていた。何がそんなに臭うのだろうか。自分で検めてみても、嫌な臭いは感じない。むしろ甘い匂(にお)いがしていた。それはミルクの匂いだ、と思った。子供に乳を含ませて、それが零れて、立ち昇っていたあの匂い。抱き上げた子供の——志保(しお)梨(り)の、茂樹の——赤ん坊の肌からは、常にこの匂いがしていた。

（……茂樹）

変色して膨らんで、融(と)けていった。

寛子は首を傾げ、そして頭を振る。
「それより、元子さん、あんた近所で変なことがなかった？」
「変な……こと」
「ええ。人がいないはずの家に人がいるとか。いるはずのない人を見たとか。分かるでしょう？　そういう変なことよ」
「いるはずのないひと……」
「あたしたち、たいへんな災難に巻き込まれているの。虫送りをするのよ。鬼を集めて村の境に追い払わないといけないわ」
元子は頷いた。
「そうね。……虫送りね。そうだわ」
「でしょう？　どこかそういう、心当たりはない？」
元子は頷いて手を挙げた。
「そこにいるわ。——加奈美の家。お母さんが戻ってきてたわ」
加奈美が元子を見送り、茶の間で頭を抱えて息をついた、それからわずかのことだった。いきなり玄関の戸が激しい勢いで打ち鳴らされた。それは戸を叩くと言うより、叩き壊そうとしているように思われた。

加奈美は慌てて立ち上がり、玄関へと駆けつける。外にはガラス戸越し、数人の男女が集まっているのが見て取れた。
「加奈美さん、開けてちょうだい！」
「何なんですか？　そんなに乱暴にしないで」
加奈美は言いながら、三和土に降りる。降りた瞬間、これは良くないことだ、と理解した。開けてはいけない。それをすると怖いことが起こる。
竦んで動けないでいると、さらに戸が勢いをつけて叩かれる。開けろ、と怒鳴る男の声が聞こえた。松尾誠二の声に聞こえた。
開けないと変に思われる、けれども開けると怖いことになる、ふたつの思いに引き裂かれて、加奈美には身動きができない。竦んでいると激しい音がして、外からガラスが打ち破られた。破片が音を立てて三和土に降る。
「――やめて！」
加奈美は叫んだが、やはりその場を動けなかった。さらにハンマーのようなものが打ち下ろされて、そして戸が内側に倒れてきた。思わず飛び退ったところに、松尾誠二らが踏み込んできた。
「な……何なの、これは」
加奈美は言って、踏み込んできた者たちの顔を見る。先頭に立ったのはハンマーを持

った松尾誠二、他にも見知った顔ばかりだった。その末尾に清水寛子がいた。そのさらに後ろには、白い顔をした元子が陽射しを受けて立っていた。

くらり、と目眩(めまい)がした。何が起こったのか分かった。加奈美はその場に坐(すわ)り込んだ。

「中を検めさせてもらうよ、加奈美さん」

誠二らは言って、返答を待たずに土足のまま家の奥へと入っていく。加奈美は放心したように坐り込んだまま、元子から目を離せずにいた。

背後では誠二らが互いに呼び交わす声がしている。すぐにそれが怒声に変わった。ガラス戸の開く音、雨戸の開く音、そして妙の悲鳴が響いた。

加奈美は腰を浮かせかけたが、腰が抜けたように立ち上がることができなかった。足の感覚がない。自分のものではないようだ。妙の声が続いている。悲鳴を上げ、叫ぶ。

加奈美は目を閉じ、耳を覆(おお)った。その指の間からねじ込まれるように、悲惨な断末魔の声がした。

「……やめて」

もう遅いということは分かっていた。それでも加奈美は叫ばずにいられなかった。

「やめて、お母さんに酷いことをしないで！　見逃してよ、――お願い！」

妙が何をしたと言うのだ。何もしてない、何ひとつ、咎(とが)められるようなことは。なのに――なのに。

加奈美は泣きながら顔を上げた。元子は朝陽の中、なんの表情もなく加奈美を見ていた。背後から足音が聞こえた。血の臭いがした。
「悪いんだけどね、加奈美さん。ちょっとあんたも調べさせてもらうよ」
誠二が言って、清水寛子が加奈美に触れた。手首を握り、首筋に触れ、脈を探しているようだったが、加奈美には抵抗する気になれず、そして白々とした顔で佇立している元子から視線を外すこともできなかった。
「大丈夫みたいね」
冷え冷えとした寛子の声を聞きながら、加奈美は目を閉じた。誠二が労るような声を出した。
「心配はいらないよ、加奈美さん。お母さんはおれたちがちゃんと葬るから」
加奈美は返答をしなかった。
(村を出よう……)
この連中が立ち去ったら、すぐに荷物をまとめて家を出よう。この村からできるだけ離れた、遠いどこかへ行くのだ。最低限の着替えと、貴重品、――そして妙の位牌を持って。
元子は泣き崩れた加奈美を無感動に見た。引きあげてくる人々を見、そして国道の橋

のほうを振り返った。
橋の向こうは水口。そして巌を見た者がいると誰かが言っていた。元子は寛子とともに店のほうへと歩く。
——巌だけは、何があっても許さない。

3

かおりはドアを叩く音で目が覚めた。
何気なく表に出ると、大人たちが集まって、何か異常なことはないか、と訊いた。
かおりは最初、自分が何を問われているのか分からなかった。
「ゆうべ……停電がありました」
「ああ、知ってる。他にはないかね。何か異常なものを見たとか、聞いたとか。噂でも何でもいいんだがね」
別に、と答えたが、かおりの脳裏には押入の中に押し込んだ父親の死体のことが閃いていた。
「本当にないかい？　よく考えてごらん」
大人たちは執拗だった。ひょっとしたら大人たちは、かおりが父親を殺したことを、

もう分かっていて、それでかおりを捕まえるために来たのかもしれない、とそんなことを思った。
「さあ……ないと思います」
言ったかおりに、女の一人が目を留めた。
「かおりちゃん、あんた、服についてるそれ、血じゃないの」
え、とかおりは服を見下ろした。見下ろすと、たしかに嫌な茶色の染みが、あちこちについている。
そうか、と思った。ゆうべは停電で明かりがなかったから、ちゃんと確認できなかったのだ。そもそも死体を隠すのが精一杯で、掃除をして、そしたらもうたまらず、雑巾を握ったまま今まで眠ってしまっていた。
かおりは大人たちを見渡す。険しい目が自分に注がれていた。刑事ドラマの犯人みたいだ、と思った。刑事はもう犯人が誰だか分かっていて、犯人を捕まえるためにやって来ていて、なのに犯人はそれを知らず、しらばっくれようとして馬脚を露す。——そのまんまだわ、と思うと、おかしかった。
「……何があったんだい」
訊かれて、かおりは踵を返した。こっちです、と大人たちを振り返る。ばれているんだから隠しても仕方がない。捕まって大変なことになるのかもしれなかったが、もうど

うでもよかった。これ以上、何かを隠したり、何かを思い煩ったり、不安になったり悲しんだりするのは面倒で嫌だった。
大人たちを先導して座敷に向かう。あんなに掃除したつもりだったのに、昼間の明かりの中で見ると、血痕が歴然としていた。こんなものなんだな、と思い、かおりは押入の襖を開ける。大人たちが低くどよめいた。これは誰だ、と声が上がった。大人たちが答えを出すのを待つのが面倒で、かおりが教えてやろうとしたとき、中の一人が狼狽したように言った。
「こりゃあ……良和さんじゃないか」
「しかし、良和さんは」
「戻ってきたんだ」と言った男は、かおりの顔を覗き込んだ。「かおりちゃんがやったのかい？　お父さんが襲いにきて？」
かおりは頷いた。まるでこの大人たちは、いろんな事情を分かっているみたいだ、と思った。
「そうか……」と言った男は、かおりに坐るよう促した。「おい、誰かこの子の面倒を見てやってくれ」
「隣の人を呼んでくるわ」と、女が言った。「たしか、大塚製材と仲が良かったはずだから」

男たちが父親の死体を引っぱり出した。
「よりによって娘を襲いに来るとはな」
「ここは奥さんも亡くなったろう。まさか奥さんも」
「なんてこった……」
運び出す大人たちが口々に言うのを、不思議な気分で聞いていた。首を傾けていると、かおりの側にいた男は、「もう心配ないから」と言う。
「……心配ない？」
男は頷いた。
「そうだ。もう大丈夫だから。――可哀想に、怖かったろうなあ。よくやっつける勇気があったね」
「やっつける」
男は運び出されていく死体のほうを見た。
「お父さんが襲ってきたんじゃ辛かったろう。酷い話だよ、まったく」
「……あたしを捕まえに来たんじゃないの？」
男は目を丸くして振り返った。
「違うさ。おれたちは、起き上がりを捕まえに来たんだよ。もう誰も、お嬢ちゃんみたいな思いをしないように、虫送りをやり直すんだ」

なんだ、と思った。では——かおりは、不思議に泣きたいような気がしてたまらなかった——やっと、大人たちも気がついたのだ。そんなことなどあり得ないと思っていた。あり得ないことが起こってくれるならもっと早くに起こってくれれば良かったのに。そう、昭が消えてしまう前に。佐知子が、父親が死ぬ前——夏野が殺されてしまう前に。

かおりの脳裏を、結城の顔が過ぎった。結城も気がついたのだろうか。あのとき、かおりや昭を追い払ったことを今頃は後悔しているだろうか。

（……後悔してたって）

同じだ。夏野はもう死んでしまったのだから。夏野が可哀想だと思った。昭も、自分も可哀想だ。

「——かおりちゃん！」

慌ただしい足音がして、大塚浩子が駆け込んできた。かおりの側に駆け寄ってきて膝をつく。

「なんて可哀想に。怖かったでしょう」

かおりは頷いた。

「もう大丈夫よ。本当になんてことでしょうね。とにかく、小母さんちに来なさい、ね？」

「本当によく頑張ったなあ」と、涙まじりの声がして、顔を上げると大塚吉五郎だった。

老人は、かおりの頭を軽く撫でる。「……可哀想にな」
うん、ともう一度、かおりは頷いた。急に涙があふれてきて止まらなくなった。浩子に抱き寄せられるまま縋りついて泣く。——本当に可哀想だ。
村を出るんだ、と思った。親戚を頼って村を出て、可哀想なのを置き去りにしてしまおう。何もかも全部、忘れるのだ。父親のことも、母親のことも。二人は病気で死んだ。弟は事故で死んだ。夏野には出会わなかった。恵なんて幼馴染みは存在しなかった。
——そういうことだ。

4

村の気配が何やら不穏だ。——光男は起きて以来、ずっとそう感じていた。美和子も克江も、村の異常な気配を感じ取っているようで、盛んに山の下のほうを気にしている。
「ちょっと様子を見てきます。どうもただごとじゃなさそうだ」
光男は言い置いて、庫裡を出た。山門を抜け、石段を降りて周囲を見渡す。周囲には何か殺伐としたものが漂っていた。一体何が起こったのだろう、とあたりを覗き込んでいて、光男は複数の人間の上げる獣じみた快哉を耳にした。
光男の家のあるほうだった。小道を覗き込むと、道の突き当たり、まさしく光男の家

のその玄関先に人が集まっているのが目に留まった。何事だろう、と足を踏み出そうとしたとき、ひとつ手前の家から人の身体のようなものが放り出されるのが目に入った。とっさに電柱に身を寄せ、身体を隠したのはどうしてなのか、光男自身にも分からない。まるで死体のような何かが手前の家からまた放り出され、そして家の中から声高に何かを話し合う人々が出てきた。彼らは——光男の家の前にたむろした人々も含め——手に手に何かしら凶器めいたものを持っていた。そう、道に放り出されたのは間違いなく死体で、人々はそれを物のように冷淡に見下ろしている。

（……隣は……でも）

いつかの夜、鶴見に会った。鶴見はあの家に出入りしていた。

人々が、死体の顔を確かめるようにそれらを転がした。光男は呻いた。中の一体は遠目にも鶴見であることが分かった。道路には血が零れている。光男は凍りついたまま、身動きすることができなかった。鶴見の身体を検めていた者はふいに何事か叫ぶと、間近に立った者から鉈を奪って振り上げた。光男は身を竦めて目を閉じる。目を開けたときには、鶴見の首はほとんど胴から切り離されていた。

（……なんてことだ……）

光男は泳ぐように参道を引き返した。鶴見だ、間違いない。鶴見は狩られたのだ。村人が鬼を狩るために集まっている。

それ自体は喜ぶべきことなのかもしれなかった。だが、光男には喜ぶことができなかった。あまりにも残虐な行為に度肝を抜かれたせいかもしれない。あるいは。
震える足を励まして石段を這うように上り、山門を入って門扉を閉じた。内側から閂をかける。
「なんてこった……」
光男は呟いた。鶴見に対する哀悼の念が、いまさらのように湧き上がってきた。鶴見は起き上がった。そしてひょっとしたら、村で死を媒介していたのかもしれない。だが、鶴見は鶴見だ。光男に、寺に行け、と忠告してくれた。鶴見の光男に対する気遣いは失われていなかった。
「なんて……惨い……」
光男はひとしきり顔を覆い、なんとか自分を立て直して庫裡に戻った。庫裡では美和子と母親の克江が、不安そうな面持ちで待っていた。
「光男さん、どうでした?」
「村で狩りが始まってます。鬼を狩ってるんです」
美和子が悲鳴を上げる。
「みんなとうとう気づいたんでしょう。これは鬼のせいなんだって」言って、光男は美和子に頷く。「ですから、若御院に何かあったんだとしても、そのうち保護してもらえ

ますよ。そう信じて待ってましょう。——いいや、表には出ないがいいです。相手は鬼とは言え、惨いことになってる。奥さんも母ちゃんも、あんなものは見ないほうがいい」

光男は言って、美和子らを促した。戸締まりをしたほうがいい。進退窮まった鬼が逃げ込んでくるかもしれないから。

言いながら、光男は怯（おび）えていた。ハンターたちは、あれが鶴見だと気づいたはずだ。鶴見が鬼になっているなら、寺の他の連中も、とそうは思われないだろうか。疫病（えきびょう）だという噂が流れた。そのとき寺は忌避された。死に汚染されたものとして。そのように、同種の思考回路が働けば、光男らも鬼だと思われ、狩られることになりはしないか。ましてや寺には信明がおらず、静信もまたいない。寺は大丈夫です、と言って信じてもらえるものだろうか。

光男は恐ろしかった。死には慣れている、死体にも。鬼を怖いとも思わなかった。光男の知る鬼は、鶴見だけだからだ。むしろ、その鶴見に白昼、あれほどの惨い真似（まね）をしてのけた、狩人のほうが恐ろしかった。

5

田代留美はガレージのシャッターを開け、買い物用の軽自動車を出した。明け方に帰ってきた夫は、軽く眠るとまた家を出て行った。留美は止めたが、夫は首を振って出かけて行った。

――鬼だと言う。

馬鹿馬鹿しくて笑いたかった。そんなことがあるはずがない。なのに夫は硬い表情をして出て行った。その前に子供たちを連れて溝辺町へ行け、と言い残していった。何もかもが済んだら連絡する、と言うが、一体何が「済む」と言うのだろう。

村の者はみんな、どうかしている、と思いながら、それでも留美は言われるまま荷物をまとめ、子供たちを車に乗せた。下外場にある家から車を出し、村道へと向かう途中で戸板に死体が載せられ、運ばれていくのを見た。――いや、正確にはシーツに覆われた身体と、そこから出た手足、戸板を伝って落ちる赤い血を見ただけだ。それでも怖気がした。村では恐ろしい――異常なことが始まっている。

震えながら村道へと右折し、川沿いの道を走るわずかの間にも、戸板に載せられた死体に出会った。子供たちが、あれはなに、と訊くのに寒気がした。こんな光景を子供たちには見せられない。一刻も早く村を出なくては。

(鬼だなんて……それを狩る、なんて)

鬼なんているはずがない。なのに戸板に死体が載せられていく。狩られた鬼の死体だ

ろうか。だが、鬼がいないものなら、あの死体は一体何だと言うのだろう？
何か恐ろしい愚行が始まっているのだ。いるはずもないものを、いると言って殺戮が行なわれている。そういうことではないのだろうか。こんなことが許されていいのか、なのに留美の夫はそれに関与しているのだ。吐き気のする思いで国道の手前まで出ると、トラックで道が塞がれていた。車を停めると、トラックの助手席から男が一人、飛び下りて駆け寄ってくる。
「あんた、誰だい」
「田代留美ですけど……田代書店の」
留美が言うと、男はトラックに駆け戻り、運転席にいた男と何事かを相談し合った。メモのようなものと留美を見比べる。また男が駆け戻ってきた。
「どこに行くんだい？」
「溝辺町……」
何だろう、これは。まるで検問のような。
「通っていいけど、村で何が起こってるか、決して外で言わないように。それをすると、えらいことになるんだ、分かるだろう？」
分からない、と思ったが、留美は頷いた。とにかくこの場を離れたかった。男は頷いて、トラックのほうへ手を振った。トラックがバックして、車一台ぶん、道を開ける。

留美は身を竦めながらそれを通過した。

（こんなこと、許されない……）

留美は国道に出ながら思った。心の病に冒された者を、狐憑きだと言って殺すようなものだ。あまりにも常軌を逸している。警察を呼ばなければ、と思う。そう、警察に行って、電話が通じないこと、停電していることを訴えて、そして村を止めてもらわなければ。そう決意しながらハンドルを握り、車を南へと向かわせる。自動車道の橋脚が見え、すぐにその下を潜って抜けた。

空はすがすがしいほどの秋晴れだった。しんしんと近づいてくる冬を漂わせて、どこか寂しげに晴れ上がっている。山は緑、そこに紅葉の赤や黄が混じる。渓流の色は深く、世界は豊穣の季節の終幕を迎えている。ガードレール、道路標識、道端の小屋、あちこちに立った広告板。電柱に架線、整えられたアスファルトの道。

橋脚を潜り抜けたとたん、別の世界に入り込んだ気がした。そこには日常があり、すべてが正常で、何ひとつ損なわれたものがなかった。急に決意が萎えた。

（警察に行く？　……何をしに？）

村で恐ろしいことが起こっている、と思ったが、その恐ろしいこととは何だろう。鬼などいるはずがないし、村の隣人たちが——ましてや夫が、鬼でない者を鬼だと言って殺すような、そんな愚行をするはずがない。戸板の死体は、ただの死体だったのだろう。

村では夏以来、死が続いた。留美の次男だって犠牲になっている。死体に遭遇することがあってもおかしくはない。いや、そもそも死体だったのかどうか分からない。急病人だったのかも。

——鬼がいると言って、村ぐるみで人を狩っています。

そんなことを言って、誰が信じてくれるだろう？　留美だって信じない。ましてや鬼がいるなんてこと、あるはずがない。死が続いたのだって偶然で、誰かに話せば、そういうこともある、と言ってくれるのに違いない。

「……そうよね」

留美はひとりごちた。夫がそんな愚行に関与するはずがなく、関与している以上は、留美が想像しているような異常なことではないのだ。だから留美は夫に言われた通り溝辺町に行って、夫に言われたホテルにチェックインして、夫からの連絡を待てばいい。そうすれば、あとで夫が何もかも納得できるように説明してくれるだろう。

村迫智寿子（ちずこ）は、荷物を提げ、娘の手を引いてガレージへと向かった。家を出て、車庫の前を通り過ぎ（そこには商売用のバンが入っている）、裏手の月極（つきぎめ）駐車場へと向かった。

昨夜遅く——ほとんど夜明けが近づいてから戻ってきた夫は、智香（ちか）を連れてしばらく

実家に帰っていろ、と言った。夫はなぜ、とは言わなかったが、神社で起こった騒動ならすでに耳にしていたし、とうとう虫送りが始まったのだということは知っていた。

――いや、やっと、と言うべきだろうか。

まさか、そんなことだったなんて。――それとも自分はこれをとっくに分かっていたのだろうか。そうなのかもしれない。隣の主婦が駆け込んできて、神社で、と言って話を聞かせてくれたとき、智寿子は何を思うより先に「やっぱり」と思った。いまさら、という思いがあった。今になってそれが分かって、それでどうなる。すでに智寿子は博巳を亡くしている。けれども同時に、これでようやく、とも思った。これで智香を失わずに済むのだ。

智寿子には自分でも、この事態を喜んでいるのか、悲しんでいるのか分からなかった。博巳のことを思うと、やるせなさが押し寄せてくるのだが、智香のことを思うと心底、良かった、と思う。同時に博巳のことを思うと村を離れたくない。虫送りに参加して、自分も鬼を狩るのだ、と思うのだが、智香のことを思うと一刻も早く村を離れなければ、という気がした。自分でもどうしたいのか分からない。けれども夫が、そうせよ、と言ったのだから。どうしても気が済まなければ、実家に智香を預けて自分だけでも戻ってくればいい。そう言い聞かせて角を曲がり、三方を建物に囲まれた小さな駐車場に出て、智寿子は眉を顰めた。

ガソリンの臭気が漂っている。駐車場に残っている車は半分以下だった。隣の住人は村を出た。少なくとも昨夜には、そう言っていた。そのようにして使われた車があり、あるいは今現在、村の内部で用を足すために使われている車もあるのだろう。いずれにしても駐車場に残っているのは三台きり、そのどれもから黒い流れが生じている。車体の下から流れ出した液体は、アスファルトを黒く濡らして揮発性の強い臭気を放っていた。

智寿子は自分の車に駆け寄った。車の脇に屈み込んで車体の下を覗き込む。どこがどうなっているのか分からない。それでもガソリンが漏れていることは分かった。そればかりでなく、タイヤまでが切り裂かれている。

「ママ、どうしたの？」

不思議そうに言う智香に曖昧に答え、智寿子は他の車にも駆け寄ってみた。他の二台も同様だった。誰がこんなことを、と思い、その犯人など分かり切っている、と思った。

「ママ、おばあちゃんのところに行かないの？」

智香に訊かれ、そうね、と答える。

「でも車が故障してるみたい。ちょっとお家に帰ろうね」

不満そうに声を上げる智香の手を引き、智寿子は家に戻る。車庫のシャッターを開けると、配達に使っているバンは異常がなかった。犯人（犯人たち）は、車庫の中に忍び

込んではこれなかったらしい。
　――どうしよう。
　これを使えば、村を出られる。智香を安全圏に連れて行ける。
（でも……博巳は？）
　博巳はもう逃げられない。義弟も死んだ。智寿子は義弟を嫌っていたが、その死を喜ぶほど冷酷ではない。死んだと思うと、むしろ不憫だった。
「くるま、故障？」
　智香が智寿子の手を引いた。智寿子は微笑む。
「うん、そうみたい。お祖母ちゃんのところ、行けなくなっちゃった」
「なぁんだ」
「智香、ママは車を修理したり、色々としなきゃならないことがあるの。お向かいの小母ちゃんのところにいてくれる？」
　智香は小さく膨れ、上目遣いに頷いた。
「必ずいてね。今日は表に遊びに出ないで。ママと約束して――いいわね？」
　速見は左右を見渡し、道具の入った鞄を提げてその車庫から滑り出た。門の脇に屋根をつけただけの車庫だった。野球帽を被り直し、足早に隣の家に向かう。隣の車庫は建

物の中に組み込まれていた。しかも住人がいるようで、二階の窓が開いている。ここは諦め、さらに次に向かう。ここは車庫すらなかった。家の前の駐車スペースに車が停めてあるだけだ。家には住人がいるようなので、やはりこれも諦める。

速見の中には焦りのようなものが生まれていた。

辰巳からは、車についてはなんの指示も受けていない。とにかく住民を襲って傀儡を作り、尾崎をはじめとするリーダー格の者たちを襲わせろ、とだけ命じられていた。そのために数人の人狼が村の内部に散っていたが、同時に彼らは村人の動向も探らねばならず、仲間の潜伏先を見張っていなければならなかった。昼間にも動ける者は、辰巳や速見を含めても六人しかいない。手に余ることは確実で、しかも辰巳や速見は村人に面が割れているために、目標に近づくこと自体が難しかった。

村では狩りが続いている。すでに戸板に載せられた仲間の屍体を遠目に見かけていた。なのに速見には、できることがない。沙子は常々、「屍鬼などいるはずがない、という常識が最大の武器だ」と言っていたが、その通りだと思う。いったん自分たちの存在が明らかになると、ただ身動きするだけでもままならない。

――もしも、と速見は思う。村人が村を出て、外部に救済を求めたら。ゆうべのうちにも、かなりの数の車が村を出ていた。今頃はもう、そのうちのどれかが救済を求めてしかるべきところに駆け込んでいるのではないかと思うと肝が冷える。

速見自身は都会で生まれて都会で育った。そこで変容し、村にやって来た。沙子に命じられて葬儀社に就職したのが半年前、ひととおり業務を覚えたところで村に呼ばれた。速見は田舎で生活したことがない。だからこの村の、ひとつの生き物のような在り方を理解して驚いた。都市では街がひとつの生物のように振る舞うことなどない。住民はたしかに都市を成り立たせる細胞ではあるのだが、総体としての統一性を欠いている。そして速見の目には、溝辺町も村と大差ないものに見える。小さな地方都市。それもまた、この村のような振る舞いをするのだとしたら。

外部に村で何が起こっているか、漏れるのはまずい。溝辺町から大挙してハンターが乗り込んできたら、速見らには退路がない。電話も無線も遮断しているものの、アクセス方法が残っているのでは、完全に遮断したことにはならないのではないか。——早朝、仲間が眠っている隠れ家のひとつを見張りながら、速見はそのことに思い至った。

村に隠れ家は多数ある。速見が身を潜め見張っていた家は、そのひとつにすぎず、そこに収容されているのも、わずかに三人のことでしかない。しかも村人は複数で行動している。たとえそこに踏み込んできても、仲間を守るために飛び出せば速見のほうが狩られる破目になりかねなかった。それよりも車をなんとかするほうが先ではないか、そう思って村を徘徊しているものの、それもまた思うに任せない。

前方から人がやって来た。速見はできるだけさりげなく顔を伏せ、近くの家を訪ねる

ふりをする。チャイムを押したふりで佇んでいると、とりあえず自分だとは気づかれなかったようだ、その三人ほどのシーツを抱えた女たちは通り過ぎていった。
速見は息を吐く。女たちが角を曲がって消え失せたのを確認し、次の家に向かう。ここは車庫が独立しており、しかもシャッターのようなものはなかった。速見は車庫の中に滑り込んだ。

辰巳は建物と建物の間の、細い隙間に身を潜めている。辰巳の顔は村人の多くに知られている。明るい昼間には、ほとんど身動きが取れなかった。だから身を潜め、ただ待っているしかない。速見も同様だろうし、正志郎も同様だろう。いったんことが露見すると、想像以上に彼らの分は悪かった。
(昼間に動けないのは致命的だ……)
改めてそれを思う。昼間でもせめて暗がりの中でなら、身動きくらいはできればいいのに。各人が自分の身を守り、隠れ家の暗闇に乗じて狩人の数を減らしてくれれば、辰巳らの分のほうが跳ね上がる。
(……彼らは弱い)
夕刻を待って形勢が逆転するのを期待するしかない。そう思いながら、建物に沿って流れる細い側溝を見つめている。側溝の中には泥が堆積し、わずかに水が流れている。

その水面には油膜が張ってガソリン臭がしていた。誰の仕業だか分からないが、村のあちこちで車のタンクに穴を開けてまわっている者がいるらしい。それが是とすべきことなのかどうか、辰巳にもよく分からなかった。

足止めにはなる、確実に。たしかに村の外部に助けを求められては目も当てられない。なんとか村を逃げ出せても、自分たちの存在がばれてしまえば、逃げ場などないのだ。――少なくとも、沙子らにはない。脈を取られれば、一発で異類の生き物だということが分かってしまう。屍鬼の身体は死の直後の状態で凍結されている。死んではいないが、生きてもいない。人と屍鬼を篩い分けることは、あまりにたやすい。

だが、本当に外部に救済を求めるだろうか。それをしない気風がこの村にはあり、そもそも外部の人間に訴えるには、事態の実相は妄想めいている。誰も信じないだろうし、それ以上に、救済を求めるほうが救済を信じられまい。虚言や妄想扱いされるのが落ち、だから誰も外部に向かって村で起こっている異常を訴えたりはできないはずだ、という予想を前提に、そもそも辰巳らは行動を起こしたのだし、それには長い経験則から来る確信があった。被害者は呆れるほど、加害者のことを訴えない。そう学んでいたし、少なくともこれまでは予想通りに進んできている。

だとすると、誰かのこの行動は、仲間からも脱出の足を奪うことになるのかもしれなかった。いよいよ逃げ出すしかないとなったときに、全員を乗せられるほどの車両を辰

巳らは持っていない。
（だが……まあ、同じか……）
どうせ逃げ出したところで、仲間のすべてを収容できるような隠れ家があるわけでもないのだ。屍鬼には絶対に遮光された空間が必要だ。村で増殖した屍鬼たちには、自分の力でそれを確保するような才覚はあるまい。
（ここであらかたが死んでくれれば、身は軽くなるな。……逃げ出すのにも話が早い）
そんなことを考えていたとき、ようやく建物から物音がした。玄関を開ける音、誰かを急かす男の声。
「急ぐんだよ。そんな大荷物をどうする気だ」
だって、と女の声がする。
「とりあえず、身の回りのものと貴重品だけでいいと言っただろう」
「そうしたのよ。本当にそれだけなの」
「それでどうして、そんなに荷物ができるんだ。そんなもの、置いてこい」
「だって」
辰巳はひそかに舌打ちをした。長い間身を潜めて待った結果がこれか。この家の夫婦は村を出ることにしたらしい。二人揃って家を出て車に乗り込む——そうすれば襲いかかる余地はどこにもない。

「ちょっと待って、あたしやっぱり」
「おい」
「もうひとつだけ。すぐよ、すぐだから」
ばたばたと家の中に駆け戻る足音がした。男が家を出てくる足音。僥倖だ、と辰巳は思った。身を潜めた隙間を滑り出る。車と塀の間に身を屈めると、男が車のほうへとやって来て声を上げた。
「何だ、この臭いは」
男が車のドアを開ける音がする。荷物を放り込み、ドアを閉める。乗り込んだ気配はない。男は不審そうに声を上げながら、ボンネットのほうに廻り込んだ。車体の下を覗き込む男の頭がちらりと見えた。
辰巳は身を起こし、車の前に飛び出す。驚いたように男が顔を上げるより、辰巳が男の首根っこを摑んで地面に叩きつけるほうが早かった。呻いた男の口を塞ぎ、車と塀の間を通って、身を潜めていた隙間へと引きずり込む。男はのけぞり、目を見開いて辰巳を見ていた。手足を振りまわすが、辰巳が襲いかかる妨げにはならなかった。男はすぐに抵抗しなくなった。膝が力を失い、羽交い締めた身体がずるりと落ちるまでにはいくらもかからない。まだ家の中では、ばたばたと駆けまわる音がしていた。
辰巳は、目を閉じて坐り込んだ男の首を摑んで揺する。松村安造だった。尾崎敏夫は

大川と行動を共にしており、松村は大川酒店の従業員だ。ごく自然に敏夫に近づくことができ、油断させることができるかもしれない。できるかどうかは分からないが、敏夫に近づけそうな人物の家を巡って、在宅しているふうなのはこの家だけだったのだから仕方がない。敏夫の母親という線も考えたが、あいにく、誰かが先に手を下していた。

辰巳は目を開けた松村の手の中に、拳銃を押し込んだ。

「尾崎を撃つんだ。気取られるな。近寄って、話しかけて、至近の距離から撃て」

松村は虚ろに辰巳と手の中のものを見比べ、そして頷いた。

6

安森厚子が数人の女たちと尾崎医院に向かったのは、ほんの流れというものだった。門前の集落を順番に巡り、不審なことがないか、訪ねてまわった。昨夜、門前の下のほうから始め、交代で休みを取りつつ、あるいは雑用に手を取られつつ、とりあえず上のほうまで辿り着いたのが、夕刻に近いこの時間だった。上のほうの集落を訪ねてまわり、寺に行くと、珍しく山門が閉じていた。私道のほうから登って光男と話をして折り返した。寺の隣は厚子の家の製材所、さらに隣は尾崎医院だ。

自宅のほうに廻って呼び鈴を押した。返答はなかった。厚子は、孝江に対して苦手意

識があったので、返答がないなら仕方ないと立ち去ろうとしたのだが、同行した女たちの中に、変だと言う者があった。こんな時間にまで寝ているはずはないし、ましてや孝江が一緒に働くために出かけるはずがない。言われてみればその通りなので、さらに呼び鈴を押し、次いでどこからか中を覗けないかと周囲を見まわした。窓のひとつが破られているのは、すぐに発見された。奥さん、と声をかけながら中に入り、手分けしてそのへんを覗いているうちに、誰かが悲鳴を上げた。駆けつけてみると、孝江が死んでいた。

「これ……」

震える女に、厚子は頷く。あたりは血の海で、俯せに倒れた孝江の背中は刺し傷だらけだった。死んでいるのではなく殺されていると言うべきだ。すぐさま厚子は家を飛び出し、急を知らせに走った。

その頃、敏夫は大川らと中外場を巡っていた。中外場だけは中心となるべき者がいない。小池老はいつの間にか消息を絶っており、こういう場合、助番となりそうな人物も、とうに死ぬか転居するかしていた。そのせいもあって、敏夫らのグループが必然的に中外場を担当するかのようになったのだった。

不審な場所のリストに目を通しながら、次に向かう場所を指示しているのは広沢だっ

た。

「次は……三安(さんやす)ですね」

ああ、と敏夫は頷く。奇妙な転居をした、中外場のはずれにある安森家。

「あそこも無人じゃないのか？」

少なくともこれまで、中外場の不審と思われる家は、無人だった。

「嫁さんが帰ってきたのを見た者がいるそうです」

へえ、と言いながら、敏夫は小道を曲がる。二軒だけ外れて安森と田茂の家が建っていた。

田茂に様子を訊(き)いてみようか、と言ったのは田代だったが、田茂の家には誰もいなかった。なのでそのまま三安に向かう。三安は固く戸締まりをされていた。

「済みません、安森さん」

大川が戸を叩く。家の中からは応答がない。仕方ない、と敏夫が言って、大川と清水が強引に戸を叩き壊す。ガラス戸には内側から板が張られていた。この家には何かある、と思わせるにはそれで充分だった。敏夫らは中に踏み込む。雨戸を閉め切り、あちこちを内側から目張りした建物の内部は暗い。結城らが窓辺に駆け寄って、何重にも下げられたカーテンを引き開け、窓を開け、雨戸を開けた。目張りされた窓を壊しながら部屋を検(あらた)める。だが、やはり家の中は無人だった。

「やっぱりいませんね」広沢が溜息をつく。
「だが、連中の隠れ家として使われていたことは間違いないようだ」
敏夫が言うと、これ、と田代が声を上げた。
一階の卓袱台の下にメモ用紙が一枚、落ちていた。それには、村の連中が気づいたから寝場所に注意するようにと、走り書きがしてあった。
「知らせが来たってわけだ……それで隠れた」
すでに屍鬼が発見され、死体となって運び出されてきているから、すべての屍鬼の許に伝令が届いたわけではないようだ。あるいは、単に他の隠れ家を思いつけなかっただけなのかもしれないが。
そう——と、敏夫は思う。右から左に安全な寝場所を確保できるはずもないのだ。恭子の例から言っても、連中はほんのわずかの日光でも我慢できないらしい。桐敷家といい、この家といい、偏執的なまでに遮光されている。これだけの造作をするのに一朝一夕で終わるはずがなく、知らせがあったからと言って右から左に寝場所を見つけられるはずもない。
「どこか、あらかじめ決めた避難場所があるんだな」
「でしょうね」と、広沢は頷いた。
それがどこか、と考え込んでいるところで、ああ、と田代が声を上げた。メモ用紙を

拾った炬燵台を脇に寄せる。
「どうしたんだ?」
「いや、一箇所、探してない場所があるな、と思って」
敏夫が首を傾げると、田代は炬燵台の下の畳を示す。半畳の畳だけが、軽く浮き上がっている。
「掘り炬燵。古い家だと、結構あるもんなんですよ」
「ははあ」
田代は笑ってその畳を引き上げた。浮いているので特に手鉤は必要なかった。持ち上げて倒し、田代は声を上げた。
「敏夫——これ」
敏夫は中を覗き込み、ぎょっとした。半畳大の穴が開いていたが、中には壁も底もなかった。床下の土が露出し、そこに棺が置かれている。
「いた……」
結城がハンドライトで中を照らす。床下の一部が、ちょうど寝棺の置けるだけ、板で区切られているようだった。なるほどな、と敏夫は呟く。
——そう、そう簡単にこれだけの造作ができるはずもないのだ。かなりの日数がかかるであろうことは想像がつくし、かと言って人目を憚る以上、連日のように通ってきて

働くというわけにはいかないだろう。安全なのは、まず建物のどこかに一晩、二晩でできるような簡便な寝場所を作ることだ。そうすればそこを寝床に家に住み着くことができ、安全に造作することができる。造作が終わったあとは緊急の避難場所として使える。目の前のこれのように。
　敏夫がそう言うと、結城は頷いた。
「上手い手だ……あらかじめ暗い場所を使うんだ」
「床下とか――天井裏？」
「あり得る」
「開けていいかね」と、大川が聞いて、敏夫は頷き、身を引く。大川は縁から身を乗り出し、棺の蓋をずらして開けた。中には若い女が横たわっていた。
「安森の……日向子さんだ」
　広沢が息を呑む。
「家出した嫁さんか」と、敏夫が言う間もなく、日向子が声を上げた。呻き声を漏らし、目を開ける。果たして敏夫らが見えているのか、絶望的な表情で周囲を見渡し、そして両手で顔を押さえた。押さえる前に、たしかにその眼球の表面が炙られたように濁るのを、敏夫は見ていた。
　田代らが、たじたじとなって退る。日向子は苦悶の声を上げ、棺の中で身を捩る。そ

の手が、顔が紅潮し、焼け爛れ始めた。
ふん、と軽く鼻を鳴らしたのは大川だった。
「結城さん、杭」
結城は肩にかけたデイパックを慌てて開く。田代が怖じけたように大川を見た。
「ど……どうするんです」
「どうするもこうするも」と、大川は目を剝く。「片付けないことには始まらんだろうが。とっととやっていかないと、日が暮れちまう」
「それは……そうですね」
「怖いんだったら、どっかそのへんを探してきたらどうかね。他にももっと隠れているかもしれない」
そうだね、と田代はあからさまに安堵した表情を浮かべ、慌てふためいたように立ち上がった。広沢がそれに続き、二、三がさらに続く。結城は杭を取り出して握っていた。
食い入るように苦悶する女を見る。そして敏夫を正面から見た。
「こいつらが……やったんですね」
「そうだ」
敏夫が頷くと、結城も頷く。嫌悪と意思が鬩ぎ合っているのがその表情から見て取れた。決意したように頷き、杭を女の胸に当てる。

「ここですか」
「もう少し」と、敏夫は手を添えて位置を決めてやる。「ここだ」
結城は穴の下に身を乗り出した不自然な姿勢のまま、杭を構えて支えた。大川が頷き、木槌を振り上げる。大川の手にかかると造作もなかった。迷いのない手つきで三度、それで杭は完全に身体を貫通する。血が棺の中にあふれ、あたりには生臭い臭気が立ち込めた。
「首はどうします」
造作もなげに大川が言って、敏夫は微かに眉を顰めた。この男は、この行為になんの気後れも疑問も感じていないのだと思った。——いや、むしろどこか嬉々とした匂いさえ感じる。「ひと思いに落としたほうが」と言った清水も同様だった。清水に嬉々とした色はないが、憑かれたような風情がある。怒りと恨み——それがこの男の回路をどこか一本、切断している。
こんなものか、と思った。おそらくは、恭子に杭を打った自分もこんなふうだったのだろう。どこか常軌を逸してしまわなければ、およそできることではない。
「首はいい。大丈夫だ。間違いなく急所に入ってる」
敏夫が言ったところで、田代が駆け戻ってきた。
「敏夫、——いる！」

田代は奥を示した。敏夫は立ち上がり、田代の示したほうに向かう。座敷にある押入の襖を広沢らが外しているところだった。押入の下からはすでに苦悶の声が漏れてきていた。中を覗き込むと、大塚製材の康幸だった。
広沢は上をも示す。上段のさらに上。
「天袋をぶち抜いて天井裏をやっぱり仕切ってます。そこに一人」
敏夫は頷く。
「他の押入も見てくれ」
大川が上段に登り、天井の板を外したところに首を突っ込んだ。清水園芸の息子だ、と抑揚のない声で言ってその身体を引きずり出した。力任せに穴から下へと引きずり落とす。畳の上に転がり落ちた少年は、悲鳴を上げてその場を転がる。座敷は明るい。薄煙を上げて少年は身もだえ、見るみるうちに皮膚の表面が焼け爛れていく。やめてくれ、と叫んでいるようだった。助けてくれ、と。そう喚きながら這って逃げようとしていたが、清水の足許に向かっている。目が見えていないのだ。
田代らが顔を背けるようにして、他の場所を探してくる、と言ってその場を去った。清水は無感動に、その少年を足蹴にした。水疱が弾け、皮膚のめくれ上がった手が清水の足を捕らえ縋りついたが、清水はそれを足で蹴って外した。大塚康幸のほうはすでに顔の表面が炭化していこうとしている。日向子、と叫んでいるようにも聞こえた。

大川と清水、結城と敏夫とで処置をしている間に、田代らが別の場所を探してもう一箇所、同じように床下と天井裏が仕切られている場所を見つけてきた。幸か不幸か、そこは無人だった。三体の屍体を運び出そうとしているところにスクーターの音が近づいてきて、安森和也が顔を出した。

「先生——若先生！」

「どうした」

「病院が、——大奥さんが」

敏夫は目を見開いた。

「母さんが？　襲われたのか？」

「分かりません。死体で——刺されて」

ここを頼む、と和也に言い置いて敏夫は駆け出した。大川らがついてきたのは、自然な流れというものなのかもしれなかった。病院に駆けつけると、母屋の玄関で安森厚子が手招いていた。泣きながら台所、と言う厚子に礼を言って、敏夫は台所に向かう。中に入るまでもなかった。母親はその廊下側の戸口で息絶えていた。

そうか、と思った。無惨だとも思うし（その死体の様子は、そういう感慨をもたらすに充分な有様だった）哀れにも思う。だが、それ以上の感情は出てこなかった。怒りはあったかもしれない。それも母親に対する怒りだ。この女は、とうとう愚かなままその

埋め合わせをすることもなく逝ってしまったのだ、となんとなく思った。それよりも強いのは脱力感だった。——これが屍鬼の報復であることは間違いない。襲わずに殺しているということは、犯人は正志郎か、と思った。

「ひでえことをしやがる」

大川が呻く。敏夫は力無く頷いた。

「……あんたらも家族には注意させたほうがいい」

大川はぱっと敏夫を見た。

「じゃあ——」

「おれに対する報復だろう。これ以上、余計なことをするな、という。……それとも警告かな」

敏夫は孝江の傍らの壁を顎で示した。血痕で汚れたそこに、掠れ掠れの血文字で「この女が生き返ることはない」と書いてあった。

「あれはどういう……」

「言葉通りさ。母は起き上がらない。襲われたのではなく、殺されたからだ」

そうか、と大川が呟くのと同時に、敏夫を取り囲んでいた人垣から不安そうな声が上がった。敏夫は自分が失言をしたことに気づいた。

「そうだわ」と、安森厚子が顔を歪めた。最悪のことを口にしようとしていた。「逆ら

ったから仕返しされたのよ、奥さんは。ただ死んじゃったんだわ。殺されたら起き上がって生き返ることもできない……」

「おい」と、大川が厚子の胸を突いた。「それはどういう意味だ。殺されるのに比べたら、起き上がって鬼になって人殺しをしたほうがましだって意味かい」

そういうわけじゃ、と厚子はよろめきながら目を伏せる。集まった人々が顔を見合わせた。彼らが急速に不安になるのがよく分かった。

敏夫は軽く舌打ちしたが、もはや取り返しはつかない。それよりも問題は、犯人はどこに行ったのか、ということだった。

「とにかく、死体を運び出してくれ。それから、誰か、この落書きを消しておいてくれ。不愉快だ」

ええ、と女たちが頷く。敏夫はその足許に目を留めた。廊下の床には、途切れ途切れに赤い汚れが続いていた。人垣を押し除けてそれを辿る。床に壁に、擦ったような汚れが続いて、それが階段に向かっていた。手摺にはべっとりと血がついている。返り血を浴びた手で握ったのだろう。

「先生、どうしました」

大川に、敏夫は上を示した。

「上にいる……」

手摺には、血の汚れが続いていた。
「まさか」
「分からない。だが、犯人がお袋を殺して、それから二階に上がったのはたしかだ」
敏夫は階段に足を載せる。やはり血の足跡らしき汚れが踏み板にも続いていた。往復したようには見えない。一人ぶんの足跡が上に登ってそれきりのように見えた。
二階の寝室は荒らされていた。至るところに血痕が残っている。それは衣装納戸(なんど)に続いていた。正確には、衣装箪笥(だんす)のひとつに辿り着いて終わっている。
「まさか……あそこに」
清水が言い、敏夫は頷いた。正志郎ではなく屍鬼なのか。二階を荒らしている最中に、夜明けが来て、慌てて隠れたということか。思いながら、敏夫は窓を開け、雨戸を開ける。薄暗かった室内に西陽が射(さ)し込んだ。
大川が箪笥に歩み寄った。勢いをつけて扉を開く。吊(つる)したコート類に埋もれた人影が見えた。大川はそれに手をかけ、引きずり出してから呻き声を上げた。
その場の全員が息を呑んだ。清水は目を白黒させて、床に転がった身体と大川を見比べる。返り血で汚れていたが、間違いなく大川篤だった。
「お……大川さん」
清水が狼狽(ろうばい)した声を上げる。結城と広沢が大川を部屋の外に連れ出そうとした。仁王

立ちになった大川は、それを振り解(ほど)く。顔を紅潮させて怒声を上げた。
「この糞(くそ)餓鬼が！」
怒鳴って結城を振り返る。
「――杭」
「大川さん」
結城は止めたが、大川は結城に手を突き出す。大川の足許で篤が苦悶の声を上げ始めた。
「同情なんかしてもらう必要はねえ。この餓鬼、大奥さんを殺しやがったんだ。ろくでもねえ餓鬼だとは思っていたが、ここまで性根が腐っているとは思わなかった」
「……でも」
「いいや。手前(てめえ)の息子がやらかしたことだ。手前で片をつけるのが親の責任ってもんだ」
大川は吐き捨て、結城の手から杭を引ったくる。田代が、そんな、と呟いて部屋の外へと逃げ出した。
結城も清水も呻いた。二人はともに子供を失っている。起き上がっている可能性がある、という武藤の言葉がいまさらのように胸に響いた。
「なんて顔をしてんだ」大川は周囲を見まわす。「こいつは大奥さん以外にも、人殺し

をしてやがったに決まってるんだ。こういうとき、親が始末してやらないで誰がするんだ、え？　子供を躾けるのは親の役目だ。悪さが過ぎたら殴ってでも止めにゃならん。他人に仕置きしてもらうのは、それこそ筋違いってもんだろうが」

「そう……そうだよ、大川さん」

清水が頷く。敏夫も頷いて、杭を受け取り、構えた。大川は木槌を握る。その時だった。

「――父ちゃん！」

焼け爛れた篤の口から悲鳴が上がった。

「勘弁してくれよ、勘弁してくれよ、勘弁――」

誰か、と大川は顔を蹙めて背後を見た。

「こいつを押さえといてくれ」

真っ青になった結城と清水がそれに従い、広沢がさらに手を貸す。篤はまだ何事かを叫んでいたが、もう言葉にはなっていなかった。大川は杭を支えた敏夫を見る。

「そこで間違いないかね。できたら、あんまり苦しめたくないんでね」

「間違いない」

大川は頷いた。木槌が振り上げられ、振り下ろされた。

7

静信は乏しい明かりの中で蹲っていた。隣のベッドでは沙子が物のように眠っている。周囲はしんと静まり返っている。ずいぶん前に頭上で人が往き来する物音がしていたが、それも絶えてかなり経つ。今頃、地上では何が起こっているのだろう。いたたまれない気分のまま、寝息すら立てない沙子と無音の中に取り残されている。

点滴が落ち切っているのが見えたので、自分で針を抜いた。かなり気分は良かった。目眩は最低限、じっと蹲っている限り動悸はしない。意識も清明だと自覚していたが、身体の奥底に拭いがたい不快感がある。こうして一進一退を繰り返しながら、抜き差しならない場所に転がり落ちていくのだ、と思った。罹患した患者に残された時間はおおむね数日以内。とりあえずこうして最低限の処置をしてもらえたとしても、襲撃が続く限り、いくらも変わらないだろう。一日、二日のことにすぎなかったとは、敏夫が言っていたことではなかっただろうか。

最大に見積もっても一週間。

(余命は一週間……)

やはり動揺はしなかった。まだ自分でも信じ切れていないのか。どこかで自分が救わ

れることを信じているのかもしれない。だが、自分で自分を振り返ってみても、自分があまりそんなことを信じているとは思えなかった。村人が蜂起した。屍鬼と人は対立している。沙子が獲物を得るのは、たやすいことではなくなるだろう。そうすれば静信こそが、もっとも安全で手軽な餌食だ。襲撃はやまないだろうし、沙子以外の者たちも養うことになるのかもしれなかった。だとしたら、明日か明後日の今頃には静信は死体になっているのかもしれない。

（半年、と言われたほうが焦るだろうな）

あるいは一年。何事かを成すには短く、ただ待つにはあまりに長い。最大でも一週間というのは、あまりにも短くて、だから焦る気にもなれないのかも。——それとも自分は、それ以前に沙子らが敗北して助け出されるだろうとでも思っているのだろうか。

静信は苦笑した。

いまさら、助けを期待する権利はないだろう。むしろ救われることなど考えたくなかった。人の顔して人に助けられるのは、自分でもおよそ納得できない。屍鬼に協力して人を殺傷する気はないが、それでも静信は間違いなく、屍鬼の側に寝返ったのだと思う。

（殺意……村に対する）

あるはずだ。静信が目を逸らしているだけで。静信が村を愛していたのはたしかだが、同時に村の崩壊を是とするほど憎んでもいたのだと思う。憎悪でなくても、殺意の理由

になるほどの何かが埋もれているのだ。
――そして自分に対する殺意が。
まだ静信は死んでいない。きっとその衝動は目的を果たすことができないまま、あの冬の日以来ずっと静信の中で眠り続けていたのに違いない。それこそが今、こうも淡々としている理由なのかもしれなかった。村が滅びることを仕方ないと思う程度に、静信は自身の存在が消え去ることも仕方ないと受け止めている。
(相手を殺さないと自分が生きていられない……)
自分を殺さないと自分が生きていられない?
(相手が存在していると、自分の存在が成り立たない)
自分が存在していると、自分の存在が成り立たない。
だから自分を抹殺しようとした。――弟を抹殺しようとした。
殺意はあったはずだ。だからこそ、彼は弟を殺した。それは必ずしも弟に対する殺意を意味しないが、彼の中には明らかに殺意に相当する高ぶりがあったのだ。おそらくそれは、彼が異端者であったことと無縁ではなく、それゆえに醸成された絶望にぴったりと貼(は)り合わされている。
「丘は」と静信は目を閉じる。「……流刑地(るけいち)だったんだ、きっと」

かつて、彼の世界は丘がすべてで、神はその世界の創造主であり、それを束ねる摂理そのものだった。

だが、その世界は広大な荒野の中に頼りないほど小さな閉ざされた空間のことでしかなかったのだった。広大な荒野に比してあまりにも小さな世界、それが神の御業の終端を示すにしろ奇蹟の限界を示すにしろ、神の栄光には限界があり、決して荒野のすべてを奇蹟で覆うほどには全能でないことを、丘の在りようが証明していた。

神は彼の信仰が分からなかった。契約を介することなしに、彼の心中を読みつくせるほど全能ではなかったのだ。だからこそ、神に対する献げ物は契約の通りであらねばならなかったし、そうでない彼の献げ物が捨て置かれたのは、あるいは当然のことなのかもしれなかった。

そもそも、と彼は思う。

神は信仰の証として供物を求めた。供物は契約によって定められており、彼はその契約に背くことで神から拒まれることになったのだが、神が真に全能の存在なら信仰の証など、どうして必要があるだろう。

神は人の内実を見通すことができないのだ。彼の信仰をついに見通すことができなかったのと同様に。だからその証をほしがる。その証には一定の形が定められていた。その形を遵守するかどうかでしか人の内実を量ることができなかった、そういうことでは

ないのだろうか。
神は人の自己に対する信仰を信じてはいないのだ。だから、信仰の証を求める。我を畏れ敬うならばその証としてこれを捧げよ、という命は、畏れ敬うことが疑わしい者たちを暗に想定しての宣旨だろう。いや、常に証を立てさせなければ、信仰を信じることができないという時点で、神は人を本質的に反逆者だと見なしていることになりはしないだろうか。
——そう、罰があるのはそこに罪が生じることを想定してのこと、秩序があるのは、必ず秩序に背く者があるのを想定してのことだ。
もとより、あの丘は流刑地だった。天上にある光輝の園、神の楽園を追われた罪人が野に下った、それがあの丘だったと言う。ならば丘の住人は罪人の末裔、丘は刑地にすぎなかったのだ。
善なるものに背き、神に背くであろうことが想定されていればこそ、丘には秩序があり、信仰には証を求められた。住人に求められていた慈善も慈愛も、すべてが罪人に対する枷、本質的に善ではない者たちを善に押し込むための規律にすぎなかった。
だが、彼は真実、善なる者で在りたかった。彼は真実、神を尊崇していた。だからこそ、彼は異端者であらねばならなかった。神は彼の信仰を理解しなかったのではない。そもそもあの流刑地に信仰が生じること自体を信じてはいなかったのだ。

神は自らへの尊崇と信仰を求めた。隣人に対しては慈善と敬愛を課した。そこで求められていたのは、堅固な信仰が存在することを証すための供物であり、たしかな敬愛が存在することを証すための調和的な態度でしかなかった。その内実は問われなかった。神への信仰と隣人への敬愛が、真実そこに存在するかどうかは問題ではなかった。丘を覆った秩序が瑕瑾なく整合しさえすれば、それで良かったのだ。

彼は丘が流刑地であることを理解していなかった。神は彼を信じていなかった。神にとって彼は本質的に犯罪者であり、反逆者だった。そこに根本的な亀裂があったにもかかわらず、彼にはそれが分からなかったのだった。だから自分がなぜ、拒まれるのかもまた分からなかった。なぜただ自己の在りように逆らわず在ることが、彼を秩序から逸脱させていくのかが理解できなかった。

彼の中には絶望が蓄積していった。彼はただ彼自身であるがゆえに許されないのだと、そう理解するしかなかった。

六章

I

西の山の稜線に向けて陽は傾こうとしていた。神社の境内には、次々に屍体が積み上げられていく。

敏夫はその数を数えて首を傾げた。屍鬼でないものも含まれているが、総計で十六。だが、こんなものではないはずだ。実際のところ、屍体の中には安森奈緒の姿も、後藤田秀司の姿もなかった。もちろん桐敷家の人々のものもない。

「こんなにいやがったのか。――先生、この屍体、どうします」

「どうするって」

「いっそ、火葬にしちまったほうが早くないですか」

敏夫は首を振った。

「ひと一人、荼毘にするのにどれだけの火力が必要だと思ってるんだ。そんなに盛大な焚き火をしたんじゃ、右から左に消防車が駆けつけてくる」

「ああ……そうか」

「この数なら、埋めるしかない。鎮守の森に埋めるのがいちばんだろう。工務店に頼むんだな」

なるほど、と呟(つぶや)いて大川は手近な者に指示する。敏夫は再び屍体の山に目を戻した。やはり、どう考えても少ない。村のあちこちに運び切れていない屍体が残っているのだろうが、それにしてもこの数は明らかに少なすぎた。

「……違う。こんなものじゃないんだ。最低でもこの数倍はいるはずだ。たかだか二十ということは、絶対にない。どこかにまだ隠れ家があるんだ、それもかなりの規模のものが」

「と言っても、怪しいところは、ほとんど探したはずなんだがなあ……」

江渕クリニック、葬儀社、駐在所。あちこちに存在する不審な家。大川は数え上げた。

「怪しいところはほぼ巡(まわ)り終えたんだがな。床下や屋根裏も検(あらた)めるのに、二周目を巡らせてるところだけどね」

「それでかなりの数がまた出てくるのかもしれないが。……だが、それにしたって数は知れてる。ほとんどの連中は隠れ家ではない場所に隠れてるんだ。どこかに見落としがある。村を出たはずはないから、今も村のどこかに潜んでいるはずだ」

「と言ってもねえ」

敏夫は首を傾げる。どこかにまだ。

「廃屋、住人のいなくなった家。他にもどこか……」
「堀江自動車なら探した」
「廃車置き場か。そう、……何かそういう」
だが、神社などの聖域はあり得ない。連中はここに立ち入れない。山の中だろうか。林の中は屍鬼の隠れ家には向かないが、あちこちに散在する小屋なら。
「山小屋はどうだろう」
「ああ、そうか。それはあるかもしれない」
大川は人を呼ぶ。それを聞きながら、敏夫は首をひねっていた。それにしても足りない。あちこちに小屋はあるが、そのどれもが、屍鬼の二人や三人が入れれば上出来という有様だろう。
「神域ではなくて、どこか暗い……完全に密閉される場所で村の内部の」
「そんな場所があるわけがねえ。墓穴の中に隠れてるんじゃないのかい。そうでなきゃ、山に穴を掘って塹壕(ざんごう)みたいなもんでも作ってるんじゃ」
「塹壕……防空壕」
だが、村には防空壕はない。残っている家もあるのかもしれないが、たいした数ではないだろう。
「……防空壕」

何か引っかかるものを感じた。地下で、暗い穴の中。たしかに屍鬼にとって、これ以上の隠れ場所はない。昨夜のうちに逃げ出して身を隠した連中がいるくらいだ、そこはもともとあったもので、しかも出入りがさほどに難しくはないはずだ。

敏夫は顔を上げた。

「……地下だ」

「はあ？」

「地下の穴蔵だよ。そうだ、地下トンネルだ」

大川は、大丈夫か、と言うように敏夫を見た。敏夫は頷く。誰か、と周囲に声をかけた。

「水利組合の者はいないか！　——田茂さん」

田茂定市が人混みの中から憔悴した顔を出した。

「何か」

「あんた、水利組合にも顔を出していたね」

「はあ」

「この時期、水口の取水口はどうなってるんだ？」

田茂は、ぽかんとした。渓流の国道の橋のほぼ真下と言える下のほうに取水口がある。農業用水のための取水口だ。外場の上水道は溝辺町から引いてきている。この揚水場は溝辺町のはずれにあって、はるばるそこから水道管を使って水は運び戻されてきている

のだった。だが、農業用水は水口で取り込まれている。これを外場首頭工という。
これは外場だけでなく、水利に見放された溝辺町西部の農地をも灌漑するための大動脈だった。そもそも村には江戸時代から、御支度金で作られた水口堰があった。それを利用して溝辺町までを灌水しようという計画は明治期から続いている。今では水口堰はコンクリートで補強され、水は口径一・五メートルの揚水機によって取り込まれる。一部はポンプで東山に汲み上げられ、高低差を利用して村に配水されているが、ほとんどは幹線水路を通って溝辺町西部に向かっていた。これはいったんバイパスのトンネルがある山へと上げられる。そこから溝辺町西部に向かって落とし込まれるのだ。山を越えたところからは三面コンクリートの用水路になっているが、山の麓までは埋設パイプラインになっている。距離にしてわずか一キロほどだが、そこにはコンクリート製の地下トンネルが存在していた。徐々に細くなってはいるものの、その直径は外場近辺では揚水機の口径に匹敵する。
「取水口は……」定市は言葉に詰まった。「閉めてます。今は農閑期なんで堰の水門も開けてるし、揚水機も停めてますんでね」
「人が出入りできるか？」
「……できます。ええ、できるはずですよ。水路には水が入ってません。取水口は閉まってるけど揚水機のあるポンプ小屋から出入りできる」

「村の支線はどうだ？」
「やっぱり水は入ってません。この時期には山から汲み下ろす地下水だけで充分なんで。ただ、こちらのほうは完全な埋設パイプラインで、口径も細い。川の底をサイフォンで通してるんで、とても人は出入りできない」
それだ、と大川が吼えた。
「連中、そこに逃げ込んでやがったんだ」
「だろう」と、敏夫は頷いた。「居住性は悪いだろうが、避難所としては充分に使える。長さがあるから、かなりの屍鬼が隠れられることは間違いない」
定市も頷く。
「あの地下トンネルには出口がないです。パイプラインに枝分かれしながら、先細りになってるだけなんで。入口を封鎖すれば、一網打尽にできるはずだ」
大川は大声を上げ、人を集め始めた。その時だった。——銃声がしたのは。
敏夫は最初、それが銃声だとは分からなかった。ただ、定市の顔半分が吹き飛んだのを見た。倒れ込んだその姿に、ようやく何が起こったのかを悟った。
周囲を窺った。間近の本殿の影から、正志郎が銃を構えているのが見えた。とっさに身体を投げ出すのと、二発目の銃声がするのとが同時だった。敏夫は近くの石灯籠の陰に転がり込む。集まった人々が逃げ出し、そして倒れるのが目に入った。

正志郎は、ようやく見つけた、と思った。全弾を打ちつくすと、装塡してある別の銃に持ち換える。

屋敷から持ち出した銃を携え、敏夫の姿を捜したが、夜が明けるまでは正志郎にも満足に身動きができなかった。ようやく夜が明けてみると、敏夫の所在が分からない。ハンターは方々に分散していて、人目を忍んで捜しまわることも困難だった。それでここに潜んでいた。いずれ敏夫がやって来るのではないかと思っていたからだ。ようやく陽が傾いた頃になって、射程内に現れた。

最初の一射で逃したのが悔しい。完全に仕留めたと思ったのに、年寄りが突然、弾道を遮った。敏夫は石灯籠の陰に身を潜め、今や正志郎の位置からは狙うことができなかった。怒りに任せて発砲したが、敏夫を殺さなければ意味がないのだと思い直した。

千鶴を殺した。このまま放置しておけば、沙子をも殺すだろう。それは自分が秩序に負けることだ。虐げられ、忍従を余儀なくされ、ここに至って、逃れようもなく組み伏せられる。それだけは我慢ができなかった。

弾を籠めた散弾銃を手に取り、正志郎はその場を駆け出す。石灯籠の背後を捉えられるほうへと廻り込んだ。銃に恐れをなしたのか、集まった村人が蜘蛛の子を散らすように逃げる。間合いは充分に開いていた。正志郎は余裕をもって駆ける。敏夫の姿が見え

た。正志郎に気づき、さらに死角に廻り込もうとする背に狙いを定めたとき、突然視野が白濁した。

「この、糞野郎が！」

大川は怒鳴って、消火器のノズルを正志郎に向ける。あたりはたちまち消火剤で濃いスモークを焚いたような有様になった。大川を真似たのか、他の者も消火器を取ってくる。幸い、神社のあちこちには、消火器がいくつも設置されている。あたりは完全に白濁した。

人間のくせに、鬼の味方なんかしやがって、と大川は呟く。こいつは敵の一味だ。人間なんかじゃない。消火器を投げ出すと、足許に置いたハンマーを握った。

風が強い。消火剤の煙はすぐに吹き散らされて薄くなったが、男は消火剤が目に入ったのか、近づく大川らの姿が見えないようだった。大川は笑う。

くたばれ、と吼えてハンマーを振り下ろした。

秋の陽が傾く。それにつれて境内のあちこちに落ちた影も長くなった。屍体の群の中に、丁寧な所作と哀悼の声をもって田茂定市をはじめとする犠牲者たちが加えられた。犠牲者は三人、二人は即死で、一人もすぐに息を引き取った。重傷者はなく、軽傷の者たちは敏夫が病院に連れ戻って処置をしている。犠牲者が並べられたあとに、投げ捨て

るようにして相好の区別がつかなくなった男の死体が放り出された。誰もその死体を振り返らなかった。

男たちの集団が武器と明かりを手に、神社を出て行く。前田元子はそれを見送り、そして並べられた屍体を山の中に運び込む作業に戻った。

一日、ここに詰めて休む間も屍体から目を離さず、巌を捜していた。自分からすべてを奪った舅を絶対に許さない。——元子は思いながら、半ば顔が炭化した屍体にシーツをかけ、数人で抱え上げて次の運び手に渡した。背恰好が巌に似ていたが、巌ではないだろう。とても舅が着そうにもないスウェットの上下を着ていた。

(絶対に、どこかにいるはず……)

見つけてみせる。まだ死んでないのなら自分が必ず殺してやる。

(あいつだけは、許さない)

2

「こんなものがあったんだ……」

村迫宗貴の声は、コンクリートの壁面に歪な音色で反響した。とても立って歩けるほどの高さはない。水の涸れたトンネルの中には腐臭が淀み、干からびた藻が剝がれ落ち

て足許で乾いた音を立てていた。
「田圃を作ってなけりゃ、関係ないから知らないだろうな」と、言ったのは定市の息子で、定文だった。「作ってても水利組合の仕事をしてなきゃ、知らない者のほうが多いからね」
水利施設は、おおむね、受益地域の住民が維持管理の費用を負担する。ただし外場に限っては、そもそもそれが御支度金による村独自の施設であったために、水利権も優先的に設定されているし、維持管理のための賦課金もない。だから知らないでいる者も決して少なくはなかった。
「そうか……」と呟き、宗貴は足を止めた。懐中電灯が薙いだ闇の中に、人の姿が見えた。
いた、というひそかな声は数人ぶん、彼らは息を潜めて人影に近寄る。床に直接身を横たえ、三人の人影が眠っている。懐中電灯で照らしても、目を開け、身動きする様子はなかった。
宗貴は試しに、棒の先でつついてみた。その中年の男が目覚めた気配はない。文字通り死んだように横たわっている。
「図書館の柚木さんだ……」
宗貴は呟く。その奥にいる二人の男には見覚えがなかった。

「誰だろう」
「いちばん奥は、後藤田の秀司くんじゃないのかい」消防団の誰かが言う。「夏の最初に死んだんだ。山入で死体が見つかったちょうどその日が通夜だったんだ」
「そんなに前から……」
宗貴は呟いた。八月の初め、本当に何もかも、そこから始まっていたのだ。
「真ん中は……」と、誰かが言いかけたとき、定文が決然とした声を出した。
「名前なんか確かめる必要はない」
でも、と宗貴が振り返るのに、定文は硬い表情を向ける。
「こいつらは鬼で、いちゃならない連中だ。おれたちの敵で、親父を虫けらのようにおれの目の前で殺した。それで充分だろう」
しんと沈黙が降り、定文の声が反響となって震えて残った。
「どこの誰だか知る必要があるのかい。かつては知り合いだったんだろうさ。だが、もう別物なんだ、こいつらは。あんたらの知ってる、あの人やこの人が人を襲って殺すのかい。そんな連中だったのか」
「それは……」
「別物になったんだ。名前なんか確認したところで、妙な情が湧くだけだ。こいつらには情なんかないのに、かかずらってどうなるって言うんだ」

宗貴は頷いた。そうなのかもしれなかった。目の前で定市が倒れ、村人が倒れた。夏以来の災厄の果てに、斃れ伏してしまった者たち。宗貴は頷いて杭を手に取ったが、それでもそれを柚木に当てることができなかった。逡巡し、背後の誰かを振り返る。

「駄目だ……。柚木さんには世話になってる。とてもできない」

言うと、定文が杭を取り上げる。宗貴はおとなしくその役目を代わってもらった。宗貴は自分の息子と弟を殺したのが、柚木であることを知らなかった。定文は少し躊躇するふうを見せてから、杭を当てる。別の者が木槌を構えた。宗貴は目を逸らし、耳を塞ぐ。——そう、名前なんか知らないほうがいい。顔なんて見ないほうが。見れば耐え難い思いがするだけだ。

そこが地下トンネルのような狭い密閉された場所だけに、木槌の音も、杭が身体にめり込む音も明瞭だった。妙にエコーがかかっていかにも忌まわしい。呻くような声が谺し、すぐに沈黙が訪れた。

宗貴は謝意を示し、次の男に向かっては自分が杭を当てた。これは敵だ、それ以上でもそれ以下でもない、と自分に言い聞かせる。別の者が金槌を振り下ろす。誰が言うともなく、彼らはそうして平等に手を汚すことを、いつの間にか暗黙の了解にしていた。宗貴には、自分たちがそうして、共犯者になることで結束を作ろうとしているように思われてならなかった。

二人目もくぐもった呻き声を上げただけで静かになった。三人目は（秀司は）、魂消(たまげ)るような叫びを上げて、その場の者を縮み上がらせた。今やトンネルの中には、血の臭(にお)いが充満していた。細い流れを作っていた。

三人の屍体を入口のほうに向かって押し出し、さらに奥へと明かりを向ける。遠目に、さらに横たわる人影が見えた。近づくと、男女合わせて五人が身体を寄せ合うようにして眠っている。宗貴はもう、それが誰なのか考えようとはしなかった。数だけを確認し、屍体に紐(ひも)をかけて、いったん入口のほうへ引き返す。なにしろ天井が低い。腰も肩もギシギシ軋(きし)んで、交代しないことにはとても留まっていられなかった。

宗貴らは屍体を引いて戻り、ポンプ小屋の中に控えていた別班に「五人」とだけ伝える。宗貴らが出るのと入れ違いに、それらの人々がパイプの中に入っていく。それを見送り、宗貴らは苦心して屍体をポンプ小屋に運び上げた。小屋の外に運び出すと、待ち構えた女衆が、軽トラックの荷台に屍体を運び上げる。荷物のように積まれた屍体、トラックの荷台からは血が滴(したた)り落ちている。吐き気を催すような光景だった。陽が翳(かげ)っているのがいっそありがたいほどだ。これで昼間のように燦々(さんさん)とした陽射(ひざ)しに照らされていたのではたまらない。

屍体を運び上げているうちに、二班が上がってきた。何も言わず、トラックの周囲にいた三班の者たちが水路の中に潜っていく。人の声と足音、そして血の臭い。すぐに小

屋で働いている宗貴たちの耳にも、呻き声や断末魔の声が届いた。宗貴は強いてそれを聞かないようにする。誰かが小声で歌を歌い出し、知らず、宗貴もそれに倣っていた。

それでもなお、凄まじい悲鳴が届いてきた。宗貴はそれを聞くまいと、無理にも声を張り上げる。周囲の者がそれに唱和し、小屋の中には曲調だけは明るい陰惨な歌声が満ちた。それを妨げるように悲鳴がする。入り乱れる足音と怒声で、それが尋常のものではないと気づくまでには少しの時間がかかった。

「おい。何か変だぞ」

定文が取水口の中を覗き込んだ。暗闇の中から、人の叫びと怒声、足音が響いてくる。呻き声と悲鳴、それが陰に籠もって反響し、地獄からの声が聞こえるとすればこれがそうか、と思わずにいられなかった。

変だ、と誰もが顔を見合わせたとき、三班の加藤が青い顔をして駆け戻ってきた。取水口の底から小屋まで伸びた鉄梯子を駆け昇り、背後を指さす。息も絶え絶えに、起きた、とだけ言った。

宗貴にはそれで充分だった。腕時計を見ると五時を過ぎている。陽が落ちて、連中の領分がやってきたのだ。

「被害は」

「分かりません。明かりが、なくて」

定文が小屋の外に声をかけに行った。
「どうする」
訊かれて、宗貴は軽く息を呑んだ。
「……ここで待つんだ。人が出てくれば引き上げる。敵なら、顔を出したところを殴って、突き落とす」
江渕は目覚めた。とりあえず命があったのだ、と真っ先にそう思った。眠っている間に見つからずに済んだのだ。ありがたい、と江渕は心の中で呟く。
沙子から連絡が来てクリニックを逃げ出した。おそらく間一髪だったと思う。江渕が夜陰に紛れて逃げようとするのと入れ違うように、車がクリニックに横着けになったから。
だが、江渕は自分の周囲に充満した血の臭いに気づいた。仲間の血の臭いだ。それがパイプの中に充満している。慌てて身を捩って腹這いになり、周囲を窺うとゆるやかにカーブしたトンネルの向こうに懐中電灯の明かりが見えた。杭を打つ、身の毛のよだつような音がしている。血の臭いが濃くなる。気づくと細く、パイプの底にも赤い流れができていた。
江渕から、その明かりまでには六人の仲間が横たわり、いましも目覚め、起きようと

身動きをしていた。江渕は跳ね起きた。わずかに六人。日没があと少し遅かったら、今頃は江渕の胸にあの凶器が突き立っていた。前後不覚に眠っているところを、杭を打たれる衝撃で目覚める。一体、どんな気分がするものだろう。おそらくはライオンのような肉食獣の牙がかかって目覚めるようなものだろう。そのときの気分を知らずに済んで、良かったと心底、思う。

——だが、本当に良かったと言えるかどうか。断末魔の声と、槌の音が絶えた。足音と悲鳴、これは人間のほうの悲鳴だ。遠目に、身を起こした仲間が、ハンターの一人を引き倒したのが見えた。その調子だ、と江渕は呟いた。

「江渕さん……」

怯えたような声が、すぐ脇からした。

「行って明かりを叩き落とすんだ。明かりがなければ、あいつらは何も見えないんだからな。そうすれば、暗闇に紛れて逃げ出せるはずだ」

男は頷いて、身を低くし、前へと駆けていく。若い女が一人、江渕の腕を摑んだ。

「こんなに血が……酷い」

ああ、と江渕は頷いた。自分の腕を摑んだ、この女を安森奈緒といったと思う。

「眠っている間に、相当、やられたようだな」

奈緒は頷く。蒼白の顔で目を見開き、零れ出る悲鳴を押さえようとするかのように拳

を口に当てていた。
「こっちに来る」
「奥は行き止まりだ。明かりが消えたら、とにかく走るんだ。ハンターを突き飛ばして走れ」
奈緒は頷く。頷いたとたんに明かりが消えた。行け、と江渕は叫んで、一目散に出口へと駆ける。途中にいたハンターは力任せに突き飛ばした。背後で悲鳴がしたのは、それが踏みしだかれたためかもしれない。そんなことに頓着している余裕など、江渕にあるはずもなかった。
とにかく走り、身を屈めたまま出口に向かう。向かいかけて足を止めた。明かりが見える。松明の明かりだ。出口にハンターが待ち構えている。――出られない。
「だ……駄目だ」
誰かが声を上げた。前に進もうとする者、奥に戻ろうとする者で、仲間が入り乱れる。それに突き倒されたのか、奈緒の悲鳴が聞こえた。
奥だ、と言う声があった。江渕が止める間もなく、奈緒を含め、三人ほどの仲間が奥に向かって駆け出す。馬鹿が、と江渕は狼狽した頭で思った。
奥は完全な行き止まりだということを江渕は知っていた。分岐するたびに先細りになり、いくらもしないあたりから這わなければ先に進めなくなる。さらに先に向かっても

その余地すらなくて身動きが取れなくなるだけだ。江渕は呻いた。
「前に行け！　とにかく、一人でもハンターの数を減らすんだ！」

3

静信は人の声を聞いたように思って目を覚ました。薄暗いライトが点され、そのせいで周囲の様子は暗いながらも見えなくはない。間近に横たわっている小さな人影があった。そして足音と人の声。ドアの外からそれは聞こえる。
静信は半身を起こす。頭の奥のほうに何か白濁したものがあった。軽く頭を振ってもひどい目眩がするだけで、芯から目が覚めてくれない。寝返りを打って起きあがろうとする、たったそれだけの動作の間に、もう息が上がっていた。
すぐ隣のベッドでは沙子が寝ている。まだ目覚めていない。ハンターが入ってきたのなら、なんとか沙子を隠し、逃がさなければならない。
ドアに鍵がかかっていることを確認し、とりあえず沙子をベッドの陰に抱え下ろす。床に下ろして毛布でくるもうとしたところで、沙子が目を開けた。
「室井さん……？」
では、もう日没なのか、と思う。腕時計に目をやると、たしかにもう五時を過ぎてい

た。侵入者はいないか、できるだけ起きていようとしたのだが、やはり途中で寝てしまったらしい。それを思うといまさらのように背筋が冷える。

物音がする、隠れていろと言う間もなく鍵を使う音がした。ドアが開いて入ってきた辰巳を見て、静信は息を吐く。同様に辰巳も息を吐いた。

「どうやら、ここは見つからずに済んだようですね」

「……村は?」

沙子が訊くと、辰巳は首を振る。

「酷いことになってる。ハンターは昼間のうちに、隠れ家を暴いていった。中で眠っていた連中を引きずり出して杭を打っていったんだ。パイプラインも見つかったようだ。おそらく、三割以上の連中がやられただろう」

「そんなに」と、沙子は息を呑んだ。

「君たちは昼間には前後不覚で、目を覚まさないから分がない」

「……正志郎は?」

死んだよ、と辰巳は低く言った。沙子は目を見開き、そして顔を覆った。

「これは駄目だ。逃げたほうがいい、と言いたいところだけど、逃げようにも退路がないんだ。あちこちの道は塞がれてる。屋敷の周辺にもハンターがたむろしている。なんとか裏手から闇に乗じて忍び込んでこれたけど、次はどうだろうな。林道の上と下に腰

を据えてる連中がいて、身動きができないんだ」
辰巳は口早に言ったが、沙子はほとんど聞いていないように見えた。
「……沙子？」
「正志郎は苦しんだかしら……」
辰巳は微かに笑う。
「正志郎にとっては千鶴が死んだことのほうが、何倍も苦しかったと思うよ」
「……そうね」
敏夫は、と静信は訊かないではいられなかった。
「お元気ですよ。腹が立つくらいいね」
言って、辰巳は沙子を揺する。
「さあ、しっかりしなさい。なんとか退路を見つけてくるから、迎えに来るまで動かないように」
「でも……」
「室井さんがいるでしょう。――ここにいるんだ、いいね？」
言って辰巳は静信に手招きをする。ついてこようとする沙子を制し、部屋を出てドアを閉めた。
「食事をさせてください」

静信は苦笑した。
「それが物陰にわざわざ呼ぶようなことなのかい？」
「呼ぶようなことなんですよ。正志郎が死にましたからね。沙子はぼくが室井さんを襲うのを、黙って見ていられないでしょう」
「……なぜ？」静信は首を傾げた。「不思議だね。沙子は千鶴さんが死んだことよりも、正志郎氏が死んだことのほうに衝撃を受けているように見える」
「なのだと思いますすよ。正志郎は沙子にとって重大だったんですから」
「父親のようなものだから？」
「屍鬼である自分を許してくれた、『人間』だからですよ」
そうか、と静信は目を伏せる。

4

奈緒は暗闇の中で泣きじゃくっていた。細いパイプの中、前にも後ろにも仲間が詰まっていて身動きができない。
パイプラインに入ってきたハンターに怯え、奥に逃げるとちょうど押入ほどの大きさの四角い小部屋があった。そこから細いパイプが何本か出ていて、人が通れそうなもの

は一本だけ、それもマンホールほどの口径しかない。これでは身動きがならない、と誰かが言い、戻ろうとしたが、出口にはハンターが待ち構えていた。煌々とヘッドライトらしき明かりが射し、強い光線とともに這い上がった仲間の身体が落ちてきた。前頭部を鉈のようなもので割られた江渕の屍体が落ちてきて、これは駄目だ、と誰かが言った。

選択肢はなかった。奥へと戻り、その細い穴の中に潜り込んだ。這わなければならなかったが、それでもまだ余裕があった。先に進むと、分岐路になっていた。腕の太さほどの細いパイプが二本、かろうじて人が入れるほどのパイプが一本。背後からハンドライトの明かりが追ってきていた。やはり奈緒たちに選択肢はなかった。そこではもう、戻るために方向を変えることもままならなかった。無我夢中で先に進み、また分岐路がひとつ。それを過ぎたところで、先頭を行く男——駐在の佐々木だ——が身動きできなくなった。完全に身体がつかえて、虚しく宙を蹴るだけ。

「先に行けよ」

奈緒の後ろにいた広沢高俊がせっつく。だが、奈緒にも進む術がなかった。

「佐々木さん、お願い、なんとかして」

「なんとかしたいさ！　でもここに、コンクリートの塊があるんだ。目詰まりしてて

——」

佐々木が言いかけたとき、背後から悲鳴が聞こえた。奈緒の後ろにはどれくらいの人数がいるのだろう。なんとか確かめようとしたが、ハンドライトの明かりが見えるだけで、数を確認することはできなかった。
佐々木が苦悶の声を上げながら、かろうじて何十センチか先に進んだ。奈緒もそれに続くが、底にコンクリートの塊がへばりついていて、そこから口径が細くなっている。前を見ると、それがかなり先まで続いているのが、わずかな隙間から見て取れた。
「畜生、前に進んでくれよ！」
高俊が奈緒の足を叩いた。頭で太股を押してくるが、奈緒の頭も佐々木の腰に押しつけられているような状態だ。佐々木が身を捩るたびに佐々木の靴が顔を蹴る。
背後からは悲鳴が聞こえている。明かりとともにそれが遠ざかる。ほんのしばらく、静かになる。そしてまた明かりが近づいてくる。悲鳴が起こる。前よりも一人ぶん近くなっている。
（お願い、やめて。……もう助けて！）
奈緒は懇願したが、誰に対する懇願なのか、自分でも分からなかった。誰が助けてくれると言うのだろう。奈緒は人を襲って殺した。家族を襲い、淳子を襲った。それ以外の者も、たくさん襲って殺した。残虐非道な殺人犯が助命を願って、それを聞いてくれる者がどこにいると言うのだろう？　奈緒でも笑う。実際、奈緒は非道な犯罪者を弁護

する者がいることを、ずっと理不尽だと思ってきた。犯罪者にも人権はあると言う。では殺された者の人権はどうなるの、と思っていた。幼い子供を殺した者、無関係の罪もない他人を次々に殺傷した者、そんな凶悪犯を擁護する人間がいるのが信じられなかった。

(そんな酷いことを考えた報いね……)

だから、奈緒だって慈悲を懇願する資格はないのだし、誰も助けてはくれないだろう。誰も奈緒を擁護してはくれない。犯罪者なら隔離できる。更生のチャンスだってある。けれども奈緒にはそれがない。獲物から切り離されて閉じ籠められるということは、飢えて死ぬということだ。その習性を改める方法など端からどこにもなかった。殺し続けると分かり切っている犯罪者に対して妥当な罰は何だろう？　奈緒には死刑だとしか思えなかった。——殺さなければ殺し続ける。

(酷いことをした罰だわ……)

夫を死なせ、子供を死なせた。大事にしてくれた義父母を殺した。死ぬと分かっていて襲ったのだから、奈緒は間違いなく殺人者だ。

(あたしが悪い人間だから)

奈緒を起き上がらせた「悪い種子」。すべてはそのせいだ。そんなものを持っていた奈緒が悪い。

ひああ、と高俊が妙な声を上げた。なんとか振り返ると、肩越しに高俊の必死の形相がちらりと見えた。

「行ってくれ！　行ってくれよ！　次はおれだ！」

奈緒は喉（のど）の奥で悲鳴を上げた。次は高俊。では、その次は奈緒自身だ。何が起こるのだろう、何をされるのだろう、それはどれだけ苦しく恐ろしいだろう。

奈緒は懸命に佐々木を押した。ずるりと佐々木の身体が進む。奈緒のほうが体格が細いだけ、いくぶん余裕があった。胸を擦られ、手足を掻（か）かれる感触がするが、決して進めないほどではない。

「行ってよ！　お願い！」

無理だ、と佐々木が喘（あえ）ぐ。せめて奈緒が先頭なら。そうすれば少しは前に進めるのに。追っ手を振り切れるかもしれない。どこか広い場所に出るかもしれない。出口があるかもしれないのに。

パイプの中に人が引きずられる音と、悲鳴が谺（こだま）していた。高俊の叫びがそれに重なる。すぐにライトが射して、高俊の身体越し、奈緒を照らした。

「来るわ！　佐々木さん、行って！」

佐々木はあがく。奈緒の顔を蹴るようにして前に進もうとする。奈緒は押す。鼻が痛んで鼻血が伝い始めた。――大丈夫、こんなものはすぐに止まる。治る。

佐々木が苦悶の声を上げながらまた前に進んだ。コンクリートの塊の表面には、血と布の断片がついていた。身を削られているのだ。佐々木は本当に、これ以上前には進めない。

高俊が悲鳴を上げた。奈緒の腰を突き上げていた高俊の頭が、ふっと離れた。前に押し出そうとしていた圧力が消え、代わりに奈緒の足を高俊が掴む。背後に向かって引きずられ、コンクリートの破片が下腹に食い込んだ。

「放して！」

「やめてくれ、おれだ、広沢高俊だ！」

高俊の手が奈緒の足に爪を立てる。奈緒は思わずそれを蹴り払った。手が離れる。高俊は奈緒を見てはいなかった。壁に爪を立てながら背後へと引きずられていく。

「おれだ、中外場の。同じ村の者だろう、なあ！」

高俊を引きずる者は無言だった。そう遠くないところにいる証拠に複数の息づかいが聞こえる。

助けてくれ、と声を上げながら、高俊は引かれていった。悲鳴がいつまでもパイプの中に谺していた。奈緒の背後には蒼いだけの闇が控えている。盾になってくれるものはもうない。

（……いや）

奈緒はたしかに殺人者だ。——でも。
「嫌よ！　お願い、そこをどいて！」
佐々木を叩く。死にたくない。苦しい思いなんかしたくない。奈緒のせいじゃない、断じて起き上がったのは奈緒の意思なんかじゃなかった。殺したくて殺してるんじゃない、奈緒だって被害者なのだ。
「どいてよ！」
佐々木を懸命に押した。高俊がいなくなって、踏ん張る場所が失せた。もう先ほどまでの勢いで、佐々木の身体を押すことはできなかった。佐々木はただ身もがいている。
革靴の底が幾度となく奈緒の顔面を蹴った。
「そこをどいてってば！」
叫んだとき、光が当たった。——来る。
奈緒は悲鳴を上げて前に進もうとした。徒らにあがき、周囲を蹴る。佐々木の身体はびくともしない。
「お願い、やめて、許して！」
あがく足を、誰かが捕らえた。その男の顔に、奈緒は見覚えがあった。
「定文さん、あたしです、奈緒です！　お願い、許して、酷いことをしないで」
定文は無言だった。奈緒は定文の視線を捕らえることができなかった。奈緒の足にロ

ープが触れた。奈緒は遮二無二足を蹴り出す。定文の手や顔に当たったが、定文はやはり顔を歪めただけで、奈緒の顔を見なかった。代わりに手に持った鉄パイプのようなもので奈緒を突く。奈緒はその痛みに悲鳴を上げた。何度目かに嫌な音がして、左の膝に激痛が走り、痺れたように膝から下が動かなくなった。その足首にロープがかけられた。足首に食い込むほど強く締められ、定文が背後に退りながら、明かりを振った。がくん、と奈緒は背後に向かって引きずられ始めた。

　コンクリートが身体を擦る。奈緒は悲鳴を撒き散らした。もう意味のある言葉など出てこなかった。周辺に爪を立て、足を突っぱろうとした。なんとか引きずられる動きに抵抗しようとするたび、後ろ向きに這っていく定文が奈緒を突いた。

　分岐路を過ぎた。少し口径が太くなって、定文が退る速度が増した。奈緒が引かれていく速度も増す。遠く、パイプを塞いだ佐々木が見えた。背後からは人の声と、胸が悪くなるほどの血の臭いがあふれてきていた。

　奈緒は救済を求めて佐々木に向かって手を伸ばした。暗い穴の中を遠ざかっていくその影は、佐々木ではなく、幹康のそれに見えた。奈緒が屠った夫。奈緒は死んでも側には行けない。夫の逝った場所には辿り着けない。夫も子供も、義父母も。起き上がることなく、こんな思いをすることもなく、奈緒の手の届かない場所にただ遠ざかっていく――。

5

篝火が揺れていた。神社の境内には、黙々と屍体が積み上げられていく。もう、いちいち顔を確かめて、これは誰だと会話する者も、泣く者もいなかった。麻痺した顔で、疲れ切った表情で、ただひたすら身体を動かしている。逃げ出した者も多かった。尾崎医院で起こったことは明らかに人々を怖じ気づかせていた。

境内の隅には、あちこちに人が蹲り、横たわっていた。疲労が極に達し、眠り込んだ者たちだった。それらを見ながら、敏夫もまた、社務所の壁に身をもたせかけて、うとうとと微睡んでいる。

屍体を抱えて戻ってきたばかりの者たちが、敏夫がもたれた濡れ縁のすぐ外、火を囲んで手を温めていた。

「呆れたぜ、あんな子供までいるんだからな。しかもそれが、何の悪いことをしたんだって言うんだ。別に悪いことなんかしてねえ、殺していいって言われたんだってさ。なのになんで罰をもらうんだって、ぎゃあぎゃあ泣き叫ぶんだぜ」

「まったく、後味が悪いったら、ありゃしねえ」

「——誰だ？」

「境松だよ。爺と親父と、孫娘が戻ってたんだ。床下に三人並んで隠れててよ」
「ふうん……」
敏夫はそれを聞くともなく聞き、目を閉じる。疲労が澱のように淀んで、身を起こしていることも辛かった。眠りそうになったとき、大川から声をかけられた。
「先生——済みません」
「……何だ？」
大川は軽く頭を下げ、脇を示す。定文らが集まっていた。
「明日は月曜なんですよ。どうしたもんでしょうね」
「ああ……そうか」
敏夫は身を起こす。幸か不幸か、外部に通勤している者も、外部から通勤してくる者もほとんどいない。だが、そう——たとえば郵便配達、宅配便、各店舗への配送など、村への出入りは皆無ではないだろう。
「……今日は配送はなかったのかい」
「村道を止めといた連中が、村は大事な神事の最中なんで、外部の人間は入れねえ、とか適当なことを言って追っ払ったようだけどね」
「それで行くしかないだろうな。百年に一度の大祭だとでも言ってやれ」
「変に思いませんかね」

「思うだろうさ。だからって、村の中でこんなことが起こってるとは想像もできんだろう」
「そりゃあ、そうだ」
「……兼正の連中は見つかったか？」
「駄目です。まだ出てきませんや。ただ、駐在の佐々木と江渕って医者は、パイプラインの中から見つかったみたいです。あと――」
大川は振り返る。安森一成が頷いた。
「葬儀屋の速見を見つけましたが取り逃がしました。工務店の車両置き場に潜り込んでいたんです。あいつだったんです、村のあちこちで車のタンクに穴を開けてまわってたのは」
「……ふうん」
「他にも二人ほど、あちこちの世話役に襲いかかってきた連中がいて、そいつらは閉じ籠めてあるんですが、それが――」
「うん？」
「脈があるんですよ。息もしてる。起き上がりじゃないんです。どう思いますか」
「さあ……」敏夫は首をひねる。傀儡か人狼か。瘤があるかどうかを確かめれば判別できるのかもしれないが、必ず首にあるとも限らない。そもそも――敏夫には人間と人狼

を見極める方法など分からなかった。
閉じ籠めておけば、傀儡なら襲撃が遠のきさえすれば正気に戻る。だが、人狼がそれを装ったら？
「……神社に引っ立ててくるんだな。怖がったり妙なそぶりをするようなら連中の仲間だ。辰巳って若いのが昼間にも出歩いていたろう。連中は人間と変わらないようだ。そういうのを人狼というらしいんだが」
「でも」と、大川は一成らを身体で遮るようにして顔を寄せてくる。「桐敷の旦那みたいな例もあるんじゃないですかい」
「協力者か？」
大川は頷く。たしかにそうだ。協力者が正志郎一人とは限らない。村の中からも協力者が出ていておかしくはないだろう。そう――少なくとも一人、寝返ったかもしれない者がいることを、敏夫は知っていた。
「……協力者だろうと、人間なら殺すわけにはいかんだろう」
「そうですかね」
「そりゃあ、殺人だ」
ふむ、と大川は頷いて顔を離したが、納得したようには見えなかった。敏夫は半ば眠気で朦朧とした頭で思う。この混乱の中、死んでしまえば屍鬼も人も違いなど分からな

い。ましてや人狼も傀儡も協力者も、区別する方法などないに等しい。不審な行動を取った者は片付けてしまったほうが話は早い。それを咎める方法もないだろう。こいつなら、やるかもしれない……。

敏夫は半ば目を閉じた。「大将」と言う声が聞こえた。

「松——お前、逃げ出したんじゃなかったのか」

敏夫は薄目を開けた。大川が振り返った先に、松村が見えた。社務所の中に入ってきて、こちらへとやって来る。

「へえ。こいつは驚いた。お前みたいな小心者が逃げも隠れもせずにやって来るとはよ」

はあ、と松村は頷く。寒いのか、懐に両手を突っ込んでいた。松村の暗い顔を見て、敏夫は脳裏の片隅で、どこかで見た顔だな、と思った。

(どこかで見たも何もない……)

大川酒店の松村だ。敏夫も顔見知りで……。

松村は近づいてくる。敏夫は跳ね起き、濡れ縁から外へと転がり落ちた。

「大川さん、気をつけろ!」

え、と大川が振り返る。松村が懐から拳銃を出した。例のやつだ、と身を伏せながら敏夫は思った。夏からこちら、嫌と言うほど見た。発症した顔だ。

軽い銃声がした。立て続けに数発。人の悲鳴と怒鳴り声、入り乱れる足音。敏夫はそろそろと身を起こす。一成が倒れ、定文は唖然と立ち竦んでいた。松村は大川に組み敷かれている。弱々しくその場を逃げ出そうとしていた。敏夫は立ち上がる。大川がじっと敏夫を見た。

「こりゃあ、一体」

駆け寄ってきた男に、大川は外に引きずり出せ、杭を持ってこい、と言う。

「しかし、大川さん」

大川は敏夫に意志を込めた視線を寄越し、そして男のほうを振り返った。

「兼正の旦那と同じだよ。協力者だ」

やはり、そういうことになったか、と敏夫は思ったが、異論は唱えなかった。黙って安森一成へと歩み寄る。下腹部に一発、そして——左目に一発。もちろん息はしていなかった。

6

「室井さん……苦しい？」

薄暗がりの中で、沙子の声がする。いや、と静信は答えたが、先ほどから身体が怠く、

辛かった。ただ怠いだけのことが、苦痛になり得るのだと、静信は初めて知った気がした。呻きが漏れそうになるのを堪えるのがやっとだった。意識は朦朧としている。
「本当は苦しいんでしょう?」
「……いや」
「ごめんなさい。……わたしが殺してしまうのね」
「自分で死にに来たんだよ」
静信は呟く。息が苦しい。胸に箍でも嵌められているようだった。呼吸は浅く、いくら息を継いでも少しも楽にならない。
辰巳に沙子を託されたけれども、どうやら静信のほうが保ちそうにない。そう淡々と思った。
「何か処置をする方法があるはずなんだけど……。辰巳がいないと分からないの」
「構わない」
苦しい息の下、沙子の泣く微かな声を聞いたように思った。

七章

I

正雄は悪心を堪えながら、山道を走っていた。自分の胃袋は用を成していないのに、吐き気がするなんて妙だ、とそんなことを頭の片隅で思っていた。

(村は駄目だ……)

恵の甘い言葉に乗って、今夜も村に下りてみたけれど、敏夫をどうにかするどころか、敏夫の所在を摑むことはもちろん、その姿を垣間見ることもできなかった。累々と道路のあちこちに積み上げられた屍体だけを見た。軽トラックがやって来て、それらの屍体は荷台に積まれ、運ばれていった。一体、あとどれくらい仲間が残っているのだろう?

(おれたちは終わりだ)

悪心は悪夢のような光景のせい、身に迫った恐怖のせいであり、自分の置かれた状況のあまりの理不尽さに対するものだった。

(なんだって、あんな酷い目に遭わなきゃならないんだよ……)

自分は何もしていない。人を襲ったのは、そうしなければ自分が飢え死にするからだ。

単に食事をしただけ、誰もが当然のことだと言う。あんな酷い目に遭うような、悪いことをしたわけじゃない。しかも自分が起き上がったのだって、そもそも柚木が自分を襲ったせいだ。自分は被害者で加害者は柚木だ。それを殺されるなんて、あまりにも理不尽だと叫びたい。

（酷いよ……おれが何をしたって言うんだよ）

叫びたい気分で山入まで駆け戻ると、本家には人が群がっていた。佳枝は硬い顔をしている。その佳枝に向かって、集まった者たちが人の名を口々に告げていた。

「境松は誰もいなかった。隠れ場所が暴かれてた」

「三安もだ。あちこちに血の痕が」

「ポンプ小屋のところに屍体が積み上げられてました。きっとパイプラインに逃げ込んだ連中だわ」

正雄は固唾を呑んだ。犠牲者の報告をしているのだと分かった。口々に挙げられる名前を聞くと、村に下りて隠れ家で生活していた連中のほとんどなのではないかと思えた。

（無理だ……駄目だ）

屍鬼は駄目だ。人間に負ける。とても勝ち目なんかない。正雄はそろそろと後退り、人の輪を離れた。正雄は死にたくなかった。まだ何もいい思いをしてない。この若さで死んで、せっかく起き上がったのに、その果てに杭を打たれて殺されるような、そんな

ことがあっていいはずがない。

（畜生、柚木の野郎）

柚木が死んだかどうか、佳枝に訊いてみれば良かった。せめてあいつが殺されていれば、溜飲なりとも下がるのに。思いながら物陰を拾い、正雄は集落を駆け下る。建物伝いに集落のいちばん下まで出て、そしてあたりを見渡した。

正雄の目の前には、ちょっとした広場があった。一方には村へ下る道があり、もう一方には林道の入口が口を開けている。この林道は貫通している。よく都会に行く連中が通っている。たしか東山の裏手をかなりの距離、迂回して、自動車道の橋脚の下手に抜けていると聞いた。走り続ければとりあえず国道までは出られるはずだ。

（でも、それから？）

夜明けまでに安全な寝場所を探せるのか。探せるようなどこかに辿り着けるのか。

（行ってみりゃあ、なんとかなる）

そう、このまま村で殺されるのを待っているなんて耐えられない。もう屋敷なんてどうでもいい。優遇されて村に下りていた連中はほとんどが殺されている。

林道には枯れ草が撒かれ、わざとらしくない程度に枝が倒し込まれて、一見するとまったく使われていないかのようだった。そもそも林道の入口さえ、それと知って見なければ見落としそうなほど、うまくカモフラージュされている。昨夜から人がこのあたり

に集まって何かしていたのはこれだったのだ、と思った。

正雄は林道に忍び込む。落ちた枝を避け、小走りに進んだ。いくらも行かないうちに、左右から人影が現れた。

正雄は足を止める。喉の奥で悲鳴を上げた。

「どこに行くの？」

訊いてきたのは恵だった。数人を従え、勝ち誇るように笑っている。

「やっぱりあんたって、その程度の奴よね」恵は言って正雄を一瞥し、隣の男を見上げた。「ね？　言った通りでしょう？　絶対に逃げ出す奴がいるって」

「まったくだ。嬢ちゃんのおかげだな」

恵はにっこりと笑み、正雄に侮蔑の眼差しを向ける。正雄は恵に向かって吐き捨てた。

「点数稼ぎ」

「臆病者。……あんたは仲間を裏切ったのよ」

その通りだ、と二人の男が正雄の腕を取った。

「ちょっと思い知る必要がありそうだな？　え？」

「お……おれ」

「今はお前を吊し上げてる余裕なんかねえ。戻れ。だが、この騒ぎが落ち着いたら、思い知らせてやるからな、それを忘れるな」

正雄は引きずられながら悲鳴を上げた。
「それが嫌なら、これからの振る舞いに気をつけるんだな。気を入れ替えて働けば、執り成してやる」
「分かった……分かったよ！」
林道の外に放り出され、正雄は背後を振り返る。遠目に恵が笑うのが見えた。
「くそ……あいつ」
いつもいつも、正雄のことを馬鹿にして。せっかく兄たちのいない場所に来たのに、恵だけは常に誰かと正雄を比べる。劣っていると決めつける。絶対に比較していることを忘れさせてくれない。
もしもここに夏野がいたら。
（絶対に殺してやるのに）
死んでまでもつきまとう。——まるで亡霊のように。これほど誰かを憎いと思ったことはなかった。

2

徹は檻の外で耳を覆っていた。檻の中から、細い呻き声がしている。律子が飢餓に喘

いでいる声だ。
「……ねえ」
ひそかな声がした。やすよの声だった。
「この声、律ちゃんじゃないの？　苦しんでるみたいだけど、大丈夫なの」
徹は口を歪めた。
「大丈夫なもんか。食ってないんだから。飢えて苦しんでるんだよ」
やすよが息を呑む気配がした。
「あんたも看護婦なんだろう。だったらその人を起こして、自分を襲って楽になれと言ってやれよ」
やすよの返答はなかった。
「患者を助けるのが仕事だろ？　だったら、苦しんでるんだ、なんとかしてやれよ！」
「それは律ちゃんが決めることだわね」
徹は檻を振り返った。
「自分の命が惜しいんだろう。たとえ知り合いでも、自分が死ぬくらいなら、飢えて死んでほしいんだよな」
さあ、とやすよは首を傾げた。
「そりゃァ、わたしは死にたくないわね。でもって、それは律ちゃんも、あんたも一緒

でしょう。……でもね、生死は患者さんが自分で選ぶもんだからね」
「……冷たいんだな」
やすよは息を吐く。
「苦しんでたら助けてやりたいわよ。人間だからね、何より患者さんが苦しんでる声を聞くのが辛(つら)いもの。けど、終末期の患者さんに対して、何もしちゃいけない、ということもあるわね。本人や家族が延命治療はしないでくれと言って、それで何もできないってことが」
「それと一緒だって？」
「一緒なんじゃないかしらね。律ちゃんは、延命のための輸血を拒否してるようなものよね。……あたしにはそういう理解のしかたしかできないんだけど」
「そいつ、食わないと死ぬぜ」
「だからって、勝手に輸血はできないのよ。あたしたちからしたら、助かる方法があるんだったらそれを受けててちょっとでも長く生きようとするのが本当だと思うのよ。でも、本人にとったらそうじゃない、ってことなんでしょ。生死を秤(はかり)にかけて、自分の生き死に以上に大事なことだから拘(こだわ)ってるんじゃないかしらね。それを馬鹿だって言うのは簡単だけど」
やすよは律子の背中を撫(な)でている。律子が声を上げた。

「やすよさん……触らないで」
「律ちゃん」
「お願いだから、できるだけ離れてて……」
やすよは痛ましいものを見るような目で律子の声がしたほうを見、そして黙って手を引いて退った。暗闇（くらやみ）の中、手探りをして、部屋の隅に身を引く。
「襲いたいんだろ？　腹が減ってるんだろ？　だったら、襲えよ！」
「いや……」
「村では狩りが始まってるんだ。村の連中はおれたちを狩ろうとしてる。あんたそうやって、我慢してても、連中がここに踏み込んできたら、あんただって殺されるんだぞ！　誰もあんたを褒めたりしないいんだ！」
「嫌なの……」
お願い、と律子は顔を上げた。
「わたしをここから出して。……わたしか、やすよさんか、どちらかを出して」
「駄目だ」
「襲いたくないの。それをしたら、わたし、自分を嫌いになる。……あなたみたいに、自分を憎んでしまわないといけなくなるの」
徹は凍りついた。

「きっとわたしも、そうなると思う。自分を許せないと思うから。でも、許すしかなくてあがくと思うの。自分に言い訳をして、仕方なかったんだって言い聞かせると思うの。でも、飢えて死ぬより、自己嫌悪から逃げるために、殺したくないって思ってる自分を抹殺するほうが、きっと何倍も苦しいと思う……」

徹は俯く。

「そんなふうに苦しいのは嫌なの。わたし、そういうエゴイストなの……。自分が苦しむのが嫌なの。なのに、このままじゃ」律子は短く呻く。「あとで何倍も苦しいのが分かってて、襲ってしまう。それだけは嫌なの。お願いだから、やすよさんをどこかにやって」

「……そういうことをすると、おれが叱られるんだよ」

「分かってるわ」

「おれの家族が襲われる。報復されるんだ」

「でしょうね」

「おれだって制裁を受ける、きっと」

「分かってるわ。だからわたし、エゴイストなの。自分が苦しむの嫌だから、あなたに苦しんでくれってお願いしてるの。お願い、やすよさんをどこかにやって」

徹は鍵を出した。震える手で格子の鍵を外し、扉を開く。

「……出ろ。あんたのほうが出るんだ」
律子は頷(うなず)き、這(は)うようにして近づいてくる。徹の足許(あしもと)に来ると、いきなり立ち上がって徹に摑みかかってきた。
「やすよさん、逃げて……！」
あんた、と徹は律子の腕を引き剝(は)がそうと摑む。
「やすよさん、ここよ！　あたしの声のするところ。ここにドアがあるわ。ここから逃げて」
徹は力任せに律子を振り解(ほど)き、律子を檻の中に突き飛ばした。檻の隅から躙(にじ)り出ようとしていた女が、竦(すく)んだように動きを止めた。
「冗談じゃない！　ここでこいつを逃がしたら、おれたちは終わりだ！　こいつが仲間を呼んで、おれたちはみんな殺されてしまう」
「知ってるわ！　でも、嫌なの。わたしはそういうエゴイストなのよ。人を襲うくらいなら死にたいの」
「あんただけが死ぬんじゃない。仲間も全部、殺されるんだ」
「そんなこと、分かってるわ！　それでも嫌なの。罪を犯すぐらいなら、罪もないのに殺されてしまう可哀想(かわいそう)な被害者になったほうがましなのよ！」
律子は泣き崩れる。

「わたし……死にたくない。あなたにも死んでほしくないわ。やすよさんにも、他の誰にも死んでほしくない。人が死ぬのは嫌なの。それを平気でいられるぐらいなら、看護婦になったりしないわ。ずっと人を助けるために働いてきたの。それがあたしの誇りだったの。でも、並び立たないのよ、分かるでしょう？　自分が生きるということは、自分以外の誰かが死ぬということなの。自分以外の人を生かすということは、自分が死ぬということなのよ」

「それは……だから」

「本当はどうしたらいいのか、自分でも分からないの。死にたくないし、殺したくない。殺すということは、わたしにとって自分が死ぬことにとても似てる。どっちにしてもわたしは死ぬの、死にたくないのに。引き裂かれて、とても痛い。もうこの痛みから逃れたいのよ。それ以外、考えられないの……！」

徹は手の中の鍵を握る。

「なんで起き上がっちゃったの？　せっかく一度死んでいたのに」

徹はうなだれて、やすよのほうに向かう。気配を察したのか、暗闇の中で、やすよが身を縮めた。徹はその腕を取る。

「……こっち」

狼狽(うろた)えたふうの、やすよを促した。

「出口はこっちだから」
「でも……」
左右を見まわす、やすよの背を押し、手の中に鍵の束を押しつける。
「これ。……頼みがあるんですけど、いいですか」
「何？」
「もしも無事、村に戻れても、親父（おやじ）におれがいたことを言わないでほしいんです。誰にも言わないでください。知られたくない……」
「分かったわ」と、やすよは頷き、そして何かを言いかける。それを徹は遮った。
「礼なら言わないでください。ここには大勢の仲間がいて、みんなそれぞれに生きてるんです。感情があって、いろんなことを考えて生きてる。人を殺すのに慣れちゃった奴もいるけど、そうでない奴もいるんです。そいつら全部を危険な目に遭わせるということだから、これはぜんぜん感謝されるようなことじゃない」
「……そう」
「それに、無事に村まで戻れるとは限らない。野犬がいるんです。あいつらはおれたちには近づいてこないけど、人間なら襲うかもしれない。途中で別の仲間に会うかもしれない。別にあんたに安全をあげたわけじゃないから……」
そうね、とやすよは言う。

「でも、やっぱりひとつだけお礼を言わせてもらうわ。律ちゃんに親切にしてくれて、ありがとうね」
「うん。……それならもらっときます」

3

夜は無情に更けていく。正雄は寝場所に戻ろうと、廃屋のひとつに入ろうとして足を止めた。村の惨状が目の前をちらちらしていた。寝場所をこじ開けられ、殺された者たち。忍び込んだ家のひとつでは、床下の寝場所にゼリーのように固まった血が溜まっていた。もしも山入にハンターが来たら。まだ村の連中は山入に気づいていない。完全に山入は外部になってしまっているのだ。だが——明日もそうだとは限らない。

いつもの寝場所に戻るのが不安だった。寝ている間に引き出され、杭を打たれるような、そんな恐ろしいことだけは避けたかった。

正雄は集落を突っ切り、抜け道に出た。西山へとまっすぐに南下する。兼正の周囲に集まっている人々を迂回して、夜の村に逃げ込んだ。人通りは多くなく、明かりの点いた家はない。まだ停電したままのようだった。

そしてずっとこのままかもしれない。送電を落としたのは仲間だ。そしてまたそれを

復帰させることのできる者はもういない。
村はまるで死に絶えたようだ。それは事実だった。夏以来、たくさんの人間が死んだ。起き上がった者も死んだ。そして、どこもかしこも屍体だらけだ。村を取り巻いている山にも無数の死体が眠っている。村は死で埋めつくされている。きっと村自体も死ぬのだろう。一刻も早く逃げ出さなければ、正雄もその死に巻き込まれる。
人目を避け、物陰を縫って、なんとか国道が見えるところまで移動した。だが、国道には昨夜と同じく、大勢の人間がいて周囲を見張っている。あれをかいくぐって逃げ出せるかどうか自信がなかった。——そもそも、村を逃げ出して、どうやって生きていけばいいのか、分からなかった。
（一人じゃ無理だ……）
では、二人なら？　正雄は一瞬、恵のことを思い出したが、恵と正雄が二人でいても、なんの意味もないことはたしかだった。必要なのは、昼間にも起きていられる誰かだ。日光を恐れない誰か。それさえいれば、正雄はとりあえず適当な狭い空間の中に入って、その人物にそれをシートや毛布で何重にも覆ってもらうことができる。それさえできれば、堅牢（けんろう）な寝場所などなくても生き延びることは不可能ではない。
誰かが必要だ。襲う必要がある。しかも、と正雄は思う。昨夜はまだ山入に羊がいた。それで飢えをしのげた。今夜は自力で獲物を捕らえなくてはならない。

（でも、そんなことができるのか？）
昨夜の食事を羊に頼らなければならなかったのは、獲物が見つからなかったからだ。人は集団で行動している。一人歩きする獲物など見つけようがなかった。しかも村の連中はみんな、夜に窓を叩くのがどういう者なのか、知ってしまっている。誰も中には入れてくれないだろう。それどころか、窓辺に近づくのは命取りだ。
（いや……待てよ）
たった一軒、入れてくれる可能性のある家がある。正雄は村の中心に目をやった。父親ならば――兄ならば。近づいても追い払わずにいてくれるだろう。まさか正雄を襲いはすまい。決して家族は襲わないと約束すれば、匿ってくれるかもしれない。
（そうだ……そうだよ）
どうして今までそれに思い至らなかったのだろう。あの兄なら、あるいは兄嫁なら。思い出すと、懐かしくて胸がいっぱいになった。そこにいる間は不満ばかり感じたが、今から思うと、良いこともなかったわけではない。仮にも家族ならば、たとえどんなに酷い仕打ちをするにしても、命まで取るとは思えなかった。
戻ろう、と思った。家に戻るのだ。結局、安心していられる場所は家族の側しかない。良いことはなくても、愉快なことはなくても、そこでは酷いことは起こらない。
正雄は夜道を駆ける。周囲に目を配りながら家の裏手に続く小道に入った。これを最

後に辿ったのは、徹の通夜の帰りだったか、葬儀の帰りだったか。家に入る前に、正雄は柚木に襲われた。今度こそ、ちゃんと家に帰るのだ、と思った。

家の裏庭は、かつて見た様子から変わっていなかった。窓に明かりはなかったが、時折、懐中電灯のものらしい明かりが、窓の奥のほうで揺れているのが見えた。家族があの窓の中にいる。正雄は窓辺に近づいた。

智寿子は箪笥の抽斗を探った。懐中電灯の明かりが頼りない。どうやら電池が切れようとしているらしい。

とりあえず着替えに戻ってきた。屍体を運び続けて、着衣はどれも血糊と腐臭で耐えられない有様になっていた。新しい衣類を引っぱり出し、寒さに震えながら、服を脱ごうとした。

その時だった。智寿子は窓が外から叩かれる音を聞いた。思わず身を硬くする。

智寿子は近くに置いていた鉄パイプを手に取った。今日一日で、屍鬼を行動不能にするのは、これで頭部を殴ることが有効なのだ、と村の者の誰もが学んでいた。まずこれで頭を狙って殴りかかる。相手がとりあえず倒れたところを、急所を狙って刃物で刺す。充分に刺してからその傷口に杭を当てれば、力のない女や老人にも、屍鬼を倒すことは不可能ではない。

智寿子はパイプを握りしめて、窓辺に寄った。窓を叩く音は続いている。
「……誰？」
おれ、と微かな声がした。
「……誰なの」
正雄、と窓の外から答えがした。智寿子は喉の奥で悲鳴を上げた。正雄が起き上がっていたのだ。脳裏にこれまでの確執が浮かんだ。特に鮮明に浮かび上がってきたのは、非常にしばしば博巳や智香が苛められていたことだった。そう、そんな少年だ——正雄は。
「……義姉さん？　義姉さんだろ？　入れてくれよ。おれ、助けてほしいんだ」
この子は平気で嘘をつく。執拗に絡み、嫌な目つきで智寿子を見る。
「助けて……おれ、殺されちゃうよ。義姉さんしか助けてくれる人、いないんだ。おれ、義姉さんを襲ったりしないよ。兄さんも親父も、——そう、智香だって襲ったりしない。絶対だ、約束するよ。だから助けてよ」
嘘つきで残酷で、他人に対する共感や想像力を持たない。信じては駄目だ。正雄は平気で他人を利用する。そういう子だと、智寿子は思っている。
智寿子はパイプを握りしめた。息を押し殺して、窓の鍵を開ける。窓とパイプを見比べ、確実な間合いを取った。智寿子はパイプを振り上げる。
「……いいわ、入ってらっしゃい」

4

やすよは建物から逃げ出して、朧気な影からそれが山入であることを悟った。幸い、やすよがいた建物は集落のいちばん下にあった。やすよは身を屈め、物陰を拾うようにして道を下り、村道のほうへと抜け出した。——なんとか抜け出ることができた。

律子たちの命運が哀れだが、自分だって死にたくはなかった。なぜ、と思う。どうして人間は、ここまで自分の生に執着するのだろう。自分だけではない、生きている者を餌食にはしたくない。夏以来、病院にやって来ては死んでいった人々、残された人々のことを思うと、それが続くことは許容できなかった。そのためには、村に戻り、山入が起き上がりの巣であることを村の者に伝えなければならない。村の者は山入に殺到するだろう。そうすれば律子も、徹も死ぬことになる。

「どっちにしろ、どっちかが死ぬんだわ……」

共存する方法があればいいのに。そう思うのは、やすよがまだ、近親者を殺されてないせいなのだろうか。職場の同僚なら、武藤を残してみんな死んだ。——死んだのだろうと思う。雪も聡子も、清美も、他の者たちもきっと鬼に殺されたのだ。中にはやすよのいたあの檻の中にいて、暗闇の中で殺されていった者もいたのかもしれない。それで

も、やすよには律子を憎むことはできなかった。徹を憎むことができない。むしろ不憫でならなかった。律子たちを人に戻してやる方法があればいいのに。
それができないのであれば、どちらかが死ぬしかないのだ。どちらか、と言われれば、律子たちのほうだ、とやすよは思わないわけにはいかなかった。しょせん、やすよはまだ死んでいないのだから。そう思う自分が辛い。引き裂かれる苦しみ——律子はこれのことを言っていたのだと思う。
律子はこの痛みから逃れるために、やすよを逃がした。ハンターを呼んで、この痛みを終わらせてくれ、と言っていたのだと思う。そしてやすよも、この痛みを終わらせたい。律子も徹もそれを望んでいるのだ、というところに縋ることで。
重い身体を励まし、夜道を駆けた。途中、前方に小さな光が見えた。きらめく反射板のような光と、低い唸り声。山入のほうには多いと聞いていた。野犬だ。
やすよは石垣を上り、山の中に逃げ込む。獣の足はやすよよりも数段、速かった。足許が見えず何度も転び、そのたびに生臭い息と、鈍い痛みを感じた。両手を振りまわし、なんとか逃れ、傷だらけになった手足を引きずって縋るように触れた木に登った。
北山は入らずの山だ。樅は切り出されるためのものでないから、ろくに枝打ちもされていない。おかげで手がかり足がかりになる枝が残っていた。やすよは懸命に上へと枝を登った。犬たちは根元に群がり、苛立ったように樹上を睨んで唸っている。

やすよは身を寄せていられる枝を探して身体を休めた。犬がどこかに行かない限り、身動きができない。とりあえず手頃な枝を揺すって折り取り、それを抱いてじっと息を潜めていた。

東のほうの空が微かに明るい。やすよはそこで、じっと救済の曙光（しょこう）が射（さ）すのを待った。

5

辰巳が戻ってきたのは、夜明け間近になってからのことだった。辰巳は部屋に入ってきて静信に処置をしながら、村にいた仲間がほぼ壊滅したことを沙子らに告げた。

「山入は？」

「まだ無事だが、昨夜あちこちに食事に行った連中が山入に帰れないまま村に残っていた。数は相当、減っているし、たぶんあそこも時間の問題だろう。そのうち誰かが山入のことを思い出す」

「そうね……」

「村中を掃除し終えて余力ができたんだろう。屋敷の周囲にびっしりと人が貼（は）りついてる。戻ってこれたのは運が良かった」

沙子は俯（うつむ）く。

「……わたしたち、おしまいなのね」
「そう悲観したものでもないよ。なんとか生き延びる手を考えよう。運が良ければどうにかなるかもしれない」
沙子は微笑(わら)おうとしたが、それができなかった。励ますように静信が腕を叩いてくれたけれども、やはり慰めにはならない。
夜明けが来る。沙子は時計を見上げた。
午前四時。夜明けまで二時間。絶望的な睡魔がやってくる。
狩人が家を包囲している。いつ踏み込んでくるか分からないのに、夜が明けてしまえば沙子は無力だ。
寒気が背筋を伝った。麻酔されたように眠る自分、それを取り巻いた狩人の群。狩人はその手にあの恐ろしい凶器を持っている。木を削って作った無骨な杭。それが掲げられても、胸に押し当てられても、沙子は身動きをしない。眠っている。目を覚ますのはきっと、そのささくれだらけの杭が胸に食い込み、肉を突き破ったときだ。
沙子は胸を押さえた。あるはずのない疼痛(とうつう)が鳩尾(みぞおち)から胸を刺した。
(ここ……)
痛みを訴えたこの場所。無骨で荒々しいあの凶器。大人の手で一握りほどもある材木が乱暴に削られ鈍い角度の切っ先を作る。それが胸に(……ここ)押し当てられ、その

頭に槌が振り下ろされ（痛い）、力任せに皮膚を裂き、肉を貫通し、胸骨を砕いて食い込んでくる。せめて銃弾なら、刃物なら。本来ならば刺さるはずもないあの鈍重な切っ先が振り下ろされる槌の打撃で（……痛い）この身を貫く。

（痛かった？　――千鶴）

刺さる痛みのほうが辛いだろうか、それとも槌の衝撃のほうが辛いだろうか。目を覚ましたときには終わりだろうか。もしも目を覚まして、槌の一振りごとに一寸、二寸と食い込んでいく杭の感触を感じていなければならないのだとしたら。

「室井さん……」

沙子は震える声で静信を呼んだ。静信は困憊した顔を上げた。

「ねえ、室井さん、杭って一撃で胸を貫くと思う？」

「沙子」

咎める調子の声には構わず、沙子は床に手をついて静信の顔を覗き込む。

「わたしの身体は子供だわ。骨だって細いし、胸だって薄い。大人が渾身の力で杭を打ち込んだら、一撃で背中まで突き抜けると思うの」

沙子は胸に当てた手で襟を握りしめた。

「突き、抜けるわよね……？」

静信は答えを知らなかったが、頷いた。沙子には彼の表情でそれが分かった。

「……わたし、怖いの」
事実、襟を握った右手を左手で押さえていなければ、布を裂いてしまいそうなほど、激しく手が震えている。
「笑う、でしょ？　たくさん人を殺してきたの。本当に、ひっきりなしに殺してきたのよ？　どんな残忍な人殺しだって、わたしほどたくさんの人を殺したりしてないと思うわ。わたしが殺されるのは、その報いなの。なのに、すごく、怖いの」
「沙子……」
振り下ろされる槌、めり込む杭。一寸ごとに杭が食い込むのを感じているなんて耐えられない。いっそひと思いに首を落としてもらいたい。自分の体格なら、大の大人が思い切り斧（おの）を振り下ろせば、一撃で首なんか切断されてしまうだろう。――それとも外に引きずり出されるのだろうか。全身が焼け爛（ただ）れていくのと、杭を打たれるのと、どちらのほうがましだろう。
「みんな、こんなふうに怖かったのよね。なのに死んだの。わたしが、殺した。そのわたしが、死ぬのが怖い、痛いのが怖いなんて、我ながら笑ってしまうわ」
静信は目を逸（そ）らした。
「怖いの。もう一時間もないの。夜が明けるのよ。外にはあれだけの狩人がいて、今にも踏み込んでくるかもしれないのに、わたし、もうじき眠ってしまう。眠ってしまった

ら逃げることも抵抗することもできないのに」
狩人たちはどんなに恐ろしいことだってできる。沙子は悲鳴を上げることも、救済を懇願することもできない。物のように横たわったまま、まさしく血祭りに上げられるのだ。
「……どうして？」
雨滴が注ぐように、冷えた涙が零れた。
「お話の中の主人公なら、きっと助けが来てくれるの。だれかが助けてくれて、庇ってくれる。奇蹟だって起こるかもしれない。最後まで希望を捨てないでいいの。でも、わたしを助けてくれる人なんていないわ。誰も助けてくれない。どんな神様もわたしのために奇蹟を施してくれたりしない」
助けを求めて呼ぶ名もない、救済を求めて縋る神もいない。
「なぜなら、わたしは人殺しだからよ」
「――沙子」
「悪者はわたしなの。無慈悲で残忍な屍鬼の首領が倒されて、それで大団円なの。残された人たちは悪鬼の犠牲になった人たちの冥福を祈って、わたしの屍体を投げ捨てる。魂があるなら未来永劫、地獄に落ちていろと罵るのよ。……でも、どうして？」
秒針は刻々と時を動かしていた。長い針が動き、短い針が目に見えない速度で時間を巻き取っていく。

「どうしてなの？　わたし、悪いことなんかしてない。食事をしただけなの。食べないと飢えて死んでしまうんだもの。そうしなかったからいけないの？　飢えて死ななかったから、わたしが悪者なの？　答えてよ、室井さん」

「……それは」

目を逸らした相手の膝に縋った。温かい身体。沙子は文字通り冷血の生き物だ。

「飢えて死にたくなかった、それが杭を打たれるほどの罪なの？　あなたたちだってものを食べて生きているんじゃない。生き物の命を奪って飢えをしのいでいるんだわ。なのにあなたたちは良くて、わたしは駄目なの？　どうして？」

静信は何かを言いかけ、そして口を噤んだ。

「人の血でなくても生きられるなら、とっくにそうしていたわ。人を狩るのは怖いことなの。とても危険なことなんだもの。でも、人でないと駄目なの。人を狩るなと言うことは、わたしに死ねと言うことよ。わたしが生きていることがいけないの？　この世に存在することが罪なの？　存在することさえ許されないほど、わたしは罪深いの？」

縋る気持ちで覗き込んだ相手は、無言のまま悼むような視線を返してくる。

「でもわたし、好きでこんな生き物になったわけじゃないわ」

「……そうだね」

「誰も訊いてくれなかった。わたしだってこんな生にしがみつくより、一度死んだあの

ときに死んだままでいたかったわ。でも、起き上がってしまったの。それはわたしの罪なの？　命があれば、それが惜しいわ。飢えて死んだりしたくない。それともそうするべきだったの？　飢えにのたうちながら死んでしまえば良かったの？　それとも自分で陽射しの中に飛び出して燃えてしまえば良かったの？　それしか許される方法はないの？」

「たしかに、それは君の責任じゃない」

「そうでしょう？　わたしだって屍鬼になんかなりたくなかったわ。人を殺さないと生きていけない、危険な狩りをしなければ飢えるだけ、夜が明ければ動けない、人は昼も夜も動くことができるのに。人から身を守る方法なんて何もないわ。人は呪術やおまじないや、いくらでも身を守ることができるのに。わたし、こんな弱い生き物は嫌だわ」

「……ああ」

「どうして、わたしたちはこんなに弱いの？　弱いくせにとても大きなリスクを背負ってる。人を襲えば人はわたしたちを憎むわ。憎悪と正義で団結した人間ほど、強い生き物はこの世にいない。なのに人に憎まれずにいる方法なんてどこにもないの。あるとすれば自分で自分を殺すことだけ」

　静信は頷く。

「……どうして、わたしたちには神様がいないの？　悪魔でも魔物でもいいわ。わたし

に奇蹟を施してくれるなら、それがわたしの神様だわ。なのにそれさえ持てないの。誰も慈しんでくれない、憐れんでくれない。掲げられる正義もないの。何ひとつわたしを保証してくれない。イデオロギーの問題でも価値観の問題でもないの。人の血がないと生きていけない。――これはそういう殺伐とした摂理の問題なんだわ」

人を襲わずに済めば、どんなにいいだろう。憎まれずにいたい、敵対せずにいたい。そうすれば眠りに就くたびに狩人の存在を思い出して怯える必要なんてない。けれど沙子自身にもどうすることもできない。敵対を恐れれば生きていられない。生きていようと思えば敵対するしかない。屍鬼は人を襲って生きる――冷酷な摂理が厳然として立ち塞がっている。

「室井さん」沙子は泣きながら静信の膝に爪を立てた。「これが神様に見放される、ということよ……」

時は無情にも過ぎていく。静信は無言で膝に突っ伏して泣く沙子の声を聞いていた。処置をしてもらったのに身体は怠かった。まるで全身を皮膚から麻酔されたようだったが、そのくせ身体の奥のほうに痛みとも疼きともつかないものが、生々しく煮立っているような気がする。身体の表面と芯のほうが、まるで二分されたように断裂していた。それは意識も同様で、表面に起伏する喜怒哀楽は鈍磨しているのに、芯のほうが醒めて

いる。思考するのには造作がなく、むしろこれまでになく清明な気さえした。
沙子の泣く声は、少しずつ虚ろな響きをするようになった。そのたびに沙子は静信の膝に爪を立てる。
「眠りたくない……」
「……大丈夫だよ。ぼくも辰巳くんもいるから」
沙子は頭を振る。
「いや……。眠りたくないの、怖い」
「大丈夫」
いや、と沙子はひたすら首を振る。
「きっと朝になったら、村の人たちが雪崩れ込んでくるわ。そしてわたしたち、おしまいなの」
「大丈夫だよ」と、辰巳が声をかける。「逃がしてあげるから、心配しないでお休み」
「いや！　……これがお別れかもしれないの」
沙子は顔を上げた。
「もうこれきり、辰巳にも室井さんにも会えないかもしれないの。わたしが死ぬのかもしれない、辰巳や室井さんのほうが死ぬのかもしれないわ。……分からない？　これっきりになるかもしれないの」

「大丈夫だよ」と、辰巳は繰り返して笑う。その笑顔を見て、辰巳は嘘をつくのが上手い、と静信は思った。
「そんなの嘘よ、信じない」
「沙子」
「……どうして？　これきりになるなら、せめてお別れの瞬間まで起きていたいわ。ちゃんと見つめて、お別れをしたいの。目が覚めたら、死んでいるなんて酷い。そんなのは嫌なの……！」
辰巳は苦笑するように息を吐き、静信に向かって首を振ってみせる。それがどういう意味なのか、静信には分からなかった。
沙子の懸念は正しいと思う。屋敷は包囲されている。いずれ地下室の存在が知れてハンターが乗り込んでくるだろう。人が雪崩れ込んでくれば、静信はおそらく沙子を庇わずにいられない。そうすればたぶん、屍鬼の仲間として殺されることになるのではないかと思う。その間に、辰巳が沙子を抱えて逃げられるだろうか。数の差を考えると、それも難しいだろうと思う。沙子がここで眠りにつくことは、たぶん別れを意味する。だが、沙子はこの眠りから逃れることができない。――せめて沙子の眠りが安らかに訪れますように、と思う。
沙子は泣きながら、睡魔に抵抗するように首を振り続けている。

「……沙子、ぼくは君のおかげで、少しだけ自分のことが分かったように思う……」
沙子は顔を上げた。
「……自分のこと？」
「うん」
「じゃあ、教えて。室井さんはなぜ、自分を殺そうとしたの？」
静信は息をつく。
「……絶望していたからだよ」
「そんなの答えにならないわ。とても月並み」
沙子は改めて静信の膝に頭を載せた。力無く膝の脇に垂らされ、床に縫い留められた手に沙子の髪がかかった。重いものを返すようにして掌を返すと、艶やかなそれを手の中に受け止めることができた。
「……うん。でも、そういうことなんだよ……」
丘はひとつの「全き秩序」だった。
そして彼は、その秩序を愛していたし、秩序の支柱たる神を尊崇していた。神の采配によって美しく整えられた楽園、緑の丘と深い森を、丘の頂上に毅然と聳えた街を、愛していた。敬虔で慈愛深く、多くを求めず、慎ましやかに生きる隣人たちを愛していた。彼らのささやかな懊悩と悲嘆、ささやかな歓喜、そのすべてを彼は無上の

ものと受け止め、それを丘に普くもたらした神の奇蹟を信じていた。
彼は心からその丘を敬愛していた。――不幸にして。
「不幸にして？」
「そう。それは悲劇に他ならなかったんだ。
なぜなら、丘が彼に求めたのは、「敬愛の演技」以外の何物でもなかったからだ。
丘はそもそも流刑地だった。彼はそもそも罪人として生まれた。神も秩序も、彼の中に信仰と敬愛が宿ることなど、端から信じてはいなかったのだ。
彼は真実、丘を敬愛していたが、丘は彼に「敬愛の演技」を求めた。彼は丘を否定する権利を持たなかったし、もちろん、否定する気も毛頭なかったのだが、丘は彼に丘を肯定する権利もまた与えなかったのだった。
丘は彼の内実に頓着しない。真実、丘に敬愛を捧げる彼に、形だけの敬愛の演技を求めることで、完膚無きまでに彼を拒絶したのだった。
彼は決して秩序に愛されることがなかった。そこに真実の敬愛があるゆえに、彼は神に供物を捧げるのにも、彼なりに考え得る限り最上のものを捧げようとしたが、そうやって捧げられた供物は、信仰の証として取り決められていたものを得てして逸脱した。彼の供物は無視され、投げ捨てられた。神は弟の捧げた供物をのみ喜んだ。彼はそのたびに悲嘆にくれ、次こそは神に喜ばれるものをと腐心して、いっそう取り決めを逸脱し

ていくのだった。

彼は自己の中の真実を訴えることによって、秩序の寵愛(ちょうあい)を願ったが、決してそれが受け入れられることはなかった。秩序が彼に求めていたのは、秩序が彼に課したもの、それだけで、それ以上ではならなかったし、それ以下でもならなかったのだ。

彼の中には失望と悲嘆が蓄積し、やがて絶望に育っていった。彼の中には自分の敬愛が決して入れられないことに対する絶望が、種子のように凝(こご)っていた。

その一方で、彼は弟が秩序を憎んでいたことを知っていた。憎悪を押し隠して秩序に媚(こ)びる弟、造反も逸脱もできない己を疎(うと)み続けていた弟を了解していたのだった。そうして、そんな弟こそが、秩序により神により隣人により肯定される、その事実にさらに深く悲嘆せざるを得なかった。弟を羨(うらや)み妬(ねた)み憎むより先に、それほどまでに内実を振り返ろうとしない秩序が、彼の真情を汲(く)んで彼を受容することなどあり得ないことを、痛いほどに理解せざるを得なかったのだった。

彼は、自分が決して秩序に愛されることなどあり得ないことを悟ったんだ……」

そもそも神が、流刑地に住まう罪人の末裔(まつえい)たちを愛することなどあり得なかった。

「彼の信仰には意味がなかった。弟は秩序からの寵愛を得ていたけれども、それは単に模範囚に対する温情でしかなかった。彼の中には失望が蓄積し、……やがて絶望に育っていったんだと思う……」

彼は絶望によって弟を殺した。
弟を殺したからと言って、彼が秩序に受け入れられるわけでは決してない。彼はそれすらも理解していた。懇願によっても脅迫によっても、秩序の寵愛を勝ち取ることはできないと彼は知っていた。——知らざるを得なかった。
どれほど願っても、何をしても決して得られない、そう悟ることを絶望とは言わないか。彼は絶望によって寵愛深い弟を殺した。彼は絶望のあまり、何かをせずにおれなかった。なぜ我をさほど憎み給う(たま)か、と振り上げた拳(こぶし)は、どこかに振り下ろされなくてはならなかったのだ。
弟は彼と世界との接点だった。そして、それと同時に彼の絶望の接点だった。彼はそれを打ち壊すことで、彼を嘖む(さいな)絶望から永遠に逃れようとしたのだった。
「……だから」と、静信は呟く(つぶや)。「本当に憎しみでも恨みでもなかったんだ……」
「……ふうん……」
呟いた沙子の声は、睡魔の誘惑に搦め(から)取られ、どこか穏やかで甘い。
憎しみでも恨みでもなかった。妬みでもなかった、と彼は呟いた。
それは嘘だ、と彼を取り巻く悪霊(あくりょう)は揶揄(やゆ)した。
汝(なんじ)は弟の、その本性において造反者たらんとした資質を看破し、その在り方を憎み、にもかかわらず秩序に肯定される弟を妬んだ。

それは違う、と彼は訴えた。彼は弟の内実を了解していた。それでもなお、弟を愛していたのだし、ゆえに弟のそういう在りようを不憫にも哀れにも思っていた。ただ彼は、真実、絶望していたのだ。

お前が憎かったわけではない、と彼は空洞の目をした屍鬼に言った。

知っている、と弟は答えた。その屍鬼は、初めて口を開いた。

貴方は私を憎まなかった。そもそも貴方は他者を憎むことができない。たとえ憎悪が芽生えても、憎む己を許さないだろう。他者に対する憎悪は生じた瞬間に自己に対する嫌悪に形を変え、自律すべき責務として昇華される。私は貴方のそういう在りようを、理解している。

ならばなぜ自分を追ってくるのか、と彼は問おうとし、そして突然、彼は荒野に弟と佇んでいる自分に気づいた。悪霊が呪詛を撒く夜、荒れ果てた大地の上、彼らはふたつの寄り添った影だった。

振り返れば、弟は彼を責めたことが一度たりともなかった。どんな恨みも言わず、黄昏から夜明けまでを黙って彼に付き従い、ただひたすら放浪する彼の道連れであり続けたのだった。

彼はようやく弟の心情を理解した。それは慈愛であって呪いではなかった。畏れを捨て、迷いを脱してみると、黙って彼に付き従う弟との旅路だけが残った。すでに彼を拒

んだ秩序は遠く、弟は傍らにある。秩序は彼らを選別できない。彼は弟と自分を比して己に絶望する必要がなく、弟もまた彼と自分を比して己を疎む必要がなかった。もはや選別という無慈悲が彼と弟の間に亀裂を入れることはない。ようやく彼は、自己と弟をふたつながら手にしていた。

彼は満たされ、喜びを感じた。彼は弟と寄り添い、鬼火を灯火に荒野を歩いた。心を苛むものも、苦しめるものもなかった。丘の上で彼には手に入れることを許されなかったものが、荒野にはあった。

「そして彼は、弟が他ならぬ、そのために彼を追ってきたことを悟る」

「兄を救うために？　……天使のようね」

沙子は半ば眠ったような声で不満気に言ったが、静信はゆるく首を振った。

「彼に対する慈悲でもなく、憐れみでもないんだ。弟は彼とともにあるため、ただそれだけのために荒野に兄を追ってきたんだ」

彼らは永く秩序によって分かたれていた。その二者は、凶器が一閃する瞬間に、真の意味で交わったのだ。殺戮の一瞬は、丘にあっては永遠に交わるはずのない、ふたつの相反する魂が、ようやく見出した、ただひとつの結論だった。

そう悟って、彼は傍らの弟を見つめた。弟もまた彼を見つめ、そして消えていった。

夜はまだ始まったばかり、夜明けの光は遠く、世界は暗黒によって幾重にも閉ざされ

ていた。まだ屍鬼が墓に戻る刻限ではない。にもかかわらず、彼の弟は彼を見放して消えてしまった。彼は弟を呼んだ。初めて声に出して、吹き渡る風に向かって呼ばわった。呼んだ声が風に巻かれて彼の耳に戻る。

それは、彼を呼んでいた。

荒れ果て凍りついた起伏。大地に突き当たり、虚空に跳ね返った声はまぎれもなく彼の声で彼自身を呼んでいた。

そして彼は、思い出した。

この名は自分の名、彼には弟がなかった。

彼は孤独に生まれ、同胞を持たなかった。彼が楽園を放逐されたのは弟を殺した罪によってではなく、自らを殺傷した罪によってだったのだ。

殺したのは彼、殺されたのもまた彼自身だった。弟は彼の絶望の中から生まれた。そして彼はその絶望によって、弟と自己とを殺傷したのだった。

彼は荒野を見渡し、いっかな遠くならない丘を振り返った。頂上の光輝は冷ややかに彼を照らして、彼の足許に罪の色の濃い影を落とし、それを踏みしめる彼の足は半ば以上透けていた。彼は試しに片手を挙げた。丘に向かって掌を翳すと、掌越しに緑の丘と冴え冴えとした光輝が見えた。光は彼の掌を貫き、彼の目を貫き、脳裏を刳って彼の背後にある大地を刺した。彼はようやく理解した。

彼はとうに、荒野に住まう悪霊のひとつに成り果てていたのだ。
彼は手を降ろした。喜びをもってそれを受け容れた。
すでに光輝は、彼を分かつことができない。
「……それが、答え?」
どこか寝言めいて、沙子は呟く。静信は手の中の髪を指の先で撫でる。
「……たぶん」

6

律子は檻の中で膝を抱えていた。徹もその向かいで膝を抱えた。徐々に睡魔がやってくるのが分かった。夜明けが来る。やすよは今、どこにいるだろうか。
無事に逃げてほしい、けれどもここに狩人が押しかけてくるのは怖い。いまさらのように、やすよが急を知らせれば、明日には大挙して村人がやって来るであろうことを自覚した。
ひょっとしたら、明日にはまた死ぬんだ、と思った。律子が律子でいられるのは——知覚し、思考し、自分を自分として認識していられるのは——、今から眠りにつくまでのごく短い時間でしかないのだと、そう思った。たぶん三十分もないだろう。二十分、

あるいは十五分。律子の乏しい経験から言っても、そのくらいで抗い難い睡魔がやってきて自分を捕らえてしまうことが予想できた。
（あとそれくらいの命なんだ……）
眠ってしまえば前後不覚で、殺される瞬間まで目は覚めない。もしも明日、死ぬのだとしたら、律子の「いのち」は、本当にそれくらいしか残されていないことになる。
律子は膝を抱いた。自分が招いたことなのに、膝も腕も、音を立てるほど震えていた。否応なく眠る。眠ったらもう目覚めない。
「……ねえ？」
律子は声を上げた。膝を抱いて顔を伏せていた徹が、顔を上げた。
「側に行っちゃ、駄目……？」
徹は律子を見る。そうして頷いた。律子は、ありがとう、と言って場所を移動した。徹の隣に腰を下ろし、ぴったりと身体を寄せる。徹も震えているように感じた。それともこれは律子の震えが伝わっているのだろうか。しっかり身体を寄せ合い、徹の手を探って握ったのに、ほんの少しの温もりも得られなかった。……悲しい生き物だと思う。
「……怖いの」
「うん」とだけ徹は答えた。代わりに痛いほど、律子の手が握りしめられた。
律子はそれに縋り、目を閉じた。

八章

I

夜明けだ、と誰かの安堵するような声が社務所の外でした。敏夫もまた息をつく。なんとかこれで、一晩を持ち堪えたわけだ。

境内には屍体が積み上げられている。夜を徹して埋葬していたが、一向に減った気がしなかった。境内には蠅が集まり、死臭が充満している。

「埒が明かないな……なんとかならないか」

「と言われてても」と、田茂定文が渋面を作る。「なにしろブルドーザーが入りませんからね。あんな小さいショベルカーが一台きりじゃ、大車輪で働かせても、たかが知れてます」

「そうだな……」

考え込んだ敏夫の脇で、そう言えば、と結城が声を上げた。うたた寝をしていたふうの広沢を見やり、声をかけかねたように敏夫を振り返った。

「前に広沢さんに、穴のことを聞いたんですが」

「穴？」
「ええ、どこかこのへんに、穴があると。祠があって入口が塞がれてて……地獄穴と言っていたんじゃなかったかな」
「そうか」と、定文が声を上げた。「そう、あります。地獄穴が。——先生、あそこに埋めるというのはどうですかね。穴の中に安置して、入口を一気に埋めてしまえば」
「その手があるか。祠の中から入れるんだったかな」
「入れます。親父の鍵があるんで見てきましょう。ひょっとしたら落盤で塞がっているかもしれませんが」
言って、定文は立ち上がる。敏夫と結城もそれに続いた。それは本殿の奥にある。本殿の裏手に苔むした崖があって、そこに寄せて小さな祠——と言うよりも御堂という体裁の建物が建っていた。
定文が古い錠前に鍵を差した。滑りが悪いのか、苦心惨憺して廻し、諦めたように金槌を取り出して錠前を叩く。金具ごと抜け落ちて、それで祠の戸が開いた。
中には小さな祭壇があり、その奥には格子戸が閉まっている。格子を透かして、横穴が口を開けているのが見えた。入口の部分では、ゆうに人が立って歩けるほどの高さがある。
定文は格子戸を押し開ける。冷えて淀んだ空気が吹き上がってきた。ハンドライトの

明かりを向ける。かなりの幅と高さのある横穴が、光の届かない奥のほうまで続いていた。
「入口のあたりは大丈夫なようですね。これだけの広さがあれば、かなりの屍体を安置できるでしょう」
「ああ」と、敏夫は頷く。「全部ここに納めて、最後に入口を工務店に塞いでもらおう。たしかにそうすると格段に楽になる」
ええ、と定文が頷いたところに、人のざわめく声がした。田代が祠の入口に駆けつけてきた。
「敏夫、やすよさんが」
敏夫は振り返る。祠から飛び出すと、傷だらけになった橋口やすよが左右から支えられてやって来るところだった。
「やすよさん……その怪我は」
「野犬ですよ。あとは勝手に転んだんです」
やすよは力無く笑った。
「運のつきかと何度も思いましたけど、意外に貯め込んでたみたいですね」
敏夫は失笑した。
「まあ、無事で何よりだ。しかしなんだって」

「山入にいたんです」と、やすよは目を伏せた。「山入に連れてかれて、逃げてきたんです」

「――山入」

「……あそこは、起き上がりの巣です」

「何だって」

やすよは顔を上げた。今にも泣きそうな表情に見えた。

「道が塞いであって、出入りできないようになってるんです。山入の建物全部に手が入ってて、死んだはずの人がうろうろしてます。たくさんいて起き上がりの村みたいなんです」

敏夫は口を開けた。

「……そういうことだったのか」

2

人を満載した車が、山入に向かった。切り通しで進路を阻まれ、手に手にシャベルを持って駆け下りると、土砂を掻き分け始める。工務店のトラックが機材を下ろしにかかった。何人かがそれを踏み越えてさらに先へと向かう。

敏夫は徒歩で先を急ぐ。かなりの勾配(こうばい)の坂を登ってようやく山入の集落が見えるあたりまで来たとき、悪路に強い車が追いついた。それに同乗するまでもなく、カーブを曲がったそこが山入だった。山に囲まれた窪地(くぼち)のような集落、だらだらと続く坂と、その左右に建つ古い建物。

敏夫はそれらを見渡して、息をひとつ吸った。十数軒ほどの建物には、どれも手が加えられていた。雨戸は外から打ちつけられ、倒れかけていた廃屋にも補強がなされている。住居だけでなく、それに付属する納屋(なや)や小屋までを含めると、建物はかなりの数に上る。しかもその合間、棚田のあちこちに、コンクリート・ブロックを積み上げた小屋ともトーチカともつかないものができていた。

「……なるほど、村だ」

「どうします？」

「もちろん、開けていくんだ。全部の建物を」

板を打ちつけられた雨戸が引き剝(は)がされた。雨戸の内側には漆喰が塗ってある。それが剝がれ砕けて白い煙を上げた。雨戸を剝ぎ、壁を壊す。すぐに方々の建物から、すでに聞き慣れた苦悶(くもん)の声が聞こえ始めた。殺伐とした槌の音と、血の臭(にお)い。屍体が運び出され、トラックの荷台に積み込まれていく。誰にとっても、長い長い苦行になった。

大川は廃屋の汚い一郭で、横たわる室井信明を見つけた。老人は陽射しに苦悶の声を上げたが、四肢が自由にならないらしく、身もだえはできなかった。ただ両手をしっかりと合わせて合掌していた。まるで感謝しているようにも見えた。

松尾誠二が、村迫宗貴が、——あるいは他の多くの者たちが、かつての知人、隣人を見つけた。彼らは機械的に杭を打ち、白々とした表情で屍体を運び出した。結城はそうして積み上げられた屍体をトラックへと積み込みながら、すぐ下の建物から二体の屍体が運び出されてくるのを見た。一方はまだ経帷子を着ていた。運ばれてきたそれを見て、結城は呻いた。広沢も顔を背け、敏夫ですらが苦いものを飲み下すようにして視線を逸らす。国広律子と武藤徹だった。

「武藤さんに……何て言おう」

広沢が顔を覆うようにして俯いた。結城は首を振った。

「何も言う必要はないでしょう。知らないほうがいいこともある……」

そうですね、と広沢が零した。結城は微かに汗ばんだ手を握った。どうか——この屍体の群の中から息子を発見することがありませんように。田代は蹲り、二人に向かって手を合わせていたが、耐えかねたように立ち上がって、近くの草叢に吐瀉した。

「大丈夫ですか」

結城が声をかけると、田代は蹲ったまま首を振る。

「おれは……駄目だ。もう我慢できない」
「田代さん」
「これ以上は、とても」
そう呻いて啜り泣く。泣きたい気持ちは結城にもよく分かった。もうたくさんだ、と思った。屍鬼の集団はこれで瓦解しただろう。これだけ数が減り、村人がはっきりと敵対してしまった以上、村に留まってはいられまい。もう放っておけばいいじゃないか、という気がする。そうすれば勝手に逃げ出していく。
そして、と結城の中の自分が囁く。惨禍は村の外に広がるわけだ、と。それでもいいじゃないか、と思う自分がある。もうこれ以上、殺戮に手を貸したくない。そう思う一方で、それを留める自分がいる。この狩りが苦痛であればあるだけ、結城はそこから逃れられない。みすみす息子を死なせたという思いが、苦痛から身を引くことを自分に許さなかった。
「けれども、せめて桐敷家の人々だけは」
広沢が沈痛な口調で言う。桐敷沙子と、辰巳。あの二人だけがまだ見つかっていない。あの二人だけは何としても仕留める必要があった。それをしないと、誰の中でも終わりにならない。
「ここにいるんだろ」と田代は泣く。「ここのどっかにいるよ。あとはもう、やりたい

奴に任せるよ」
　広沢が首を傾げた。
「……いますかね」
「もう逃げた可能性も高いでしょうね」と、結城は言う。「首領なんだから、真っ先に逃げ出したでしょう。村を封鎖される前に」
「そんな暇があったでしょうかね」
「屋敷を逃げ出す暇がなかったなら、山入にやって来る暇もなかったんじゃないですか。だったらここにもいないということですよ。そもそも道だって塞がっていたわけだし」
　広沢の声に、田代が顔を上げた。
「西山に山入に抜ける道がなかったかな」
「ありましたね、そう言えば。昔山入に入る連中が使っていた……」
「そこを使って抜け出してきたんだよ。きっとどっか、そのへんにいるよ」
だからもう、こんなことはやめよう、と田代は訴える。
「でも、肝心の屋敷を抜け出すのが……」
　広沢は俯いた。千鶴のあの悲劇がどの時点で屋敷に届いただろう。あれは神社の境内の中だ。屍鬼は境内には踏み込めない。知らせが走ったにしても、それとほぼ時を同じくして村人も桐敷家の周辺に駆けつけているのだ。屋敷から逃げる暇はなかったのでは

ないか。
「屋敷から抜け出す通路でもあるんだろ」
田代が泣いて、広沢はふと顔を上げた。
「そうか……」呟いて、敏夫を捜す。トラックの側でメモを取っていた敏夫に駆け寄った。
「先生。屋敷です。まだいる可能性があります」
敏夫は首を傾げた。
「あの屋敷は――」
「地下室があるんです」
敏夫は眉を顰めた。
「わたしは工事を見てました。珍しい工事だったんで。基礎工事のとき、すごい量の土砂を上げてました。まるでビルでも建てるような基礎工事をしてたんです。地下室があるんだな、と思いました。思ったのを覚えてます。けれども、そんなものはなかった。隠されていたんじゃないですか」
「……たしかか？」
「絶対にたしかです。完全に包囲してあったのなら、抜け出せなくてまだ残っていても不思議じゃない。ひょっとしたら身を潜めて、包囲が緩むのを待っているのかもしれな

い」

敏夫は頷いた。大川を呼ぶ。その背に、広沢はさらに声をかけた。

「先生、済みませんが、田代さんの具合が悪いらしい。連れて帰ってもいいですかね」

「マサさんが？」

「もう参っているんでしょう。……実を言うと、わたしもそうです」

敏夫は顔を強張(こわば)らせた。

「ただ、わたしは遺体をなんとかするのにはお付き合いします。とても放っておけませんから。けれども、もう」

分かった、と敏夫は低く呟いた。広沢は頭を下げる。踵(きびす)を返して田代の許(もと)に取って返した。

「田代さん、戻りましょう」

「でも……」

「わたしももう、限界です。殺しの現場は見たくない。神社に行って埋葬を手伝いますよ」言って、広沢は結城を見た。「結城さんはどうします」

結城は切実に頷きたかった。だが、無意識のうちに首が横に振られる。

「……わたしには脱落できません」

そうですか、と広沢は目を逸らした。

3

ふいに戸外が騒がしくなったのが、地下にいる静信たちにも分かった。駆けつける車の音、人が大声で呼び交わすような声。

辰巳は静信にここを頼みます、と言い置いて地下室を出てみた。物陰から外の様子を覗き見る。陽光の中、車と人が門の前に殺到し、まるで踏み込む手はずを整えるかのような動きを見せていた。

(……ばれたか)

おそらくは地下室があることに気がついたのだろう。駆けつけてきた者から踏み込んできてくれるようなら、まだ付け入る隙もあるが、態勢を整えているだけの冷静さがあるようなら、ほとんど辰巳らには望みがない。沙子は泣きながら眠りについた。たしかに、あれが最後の眠りになるのかもしれなかった。最後の最後で静信が、沙子の目を恐怖から逸らしてくれたことだけが救いだ。思いながら地下に戻った。ベッドの上に坐り込み、沙子を見ていた静信が顔を上げた。

「室井さん。どうやらここも駄目なようです。最後の最後までお願いして悪いんですが、沙子を頼みます」

静信は辰巳を見返してくる。その顔色は悪い。見事に土色に変わっていた。そもそも、もはや身を起こしているのが精一杯なのに違いない。手当てはしているとは言え、もはや身を起こしているのので精一杯なのに違いない。だが、他に頼れる者はいない。何よりも昼間に動ける者でなければ託す意味がなかった。

「態勢が整うと同時に、連中は行動を起こすつもりでしょう。たぶんいっせいに敷地内に入ってきて、屋敷を包囲し、一階を根こそぎ検めてここへの入口を捜す。屋敷の中に踏み込まれてハンターがひしめくようになると身動きが取れません。ただ、それまでに車に辿り着けていれば、連中が家に踏み込んだのと同時に外に飛び出せるかもしれない。なんとか悪あがきして一騒動起こしてみますから、その隙に沙子を逃がしてくれませんか」

「君は……？」

「さあ。運が良ければ逃げ出せるでしょう。……無理かな、この数じゃあ」

言いながら、辰巳は大型のトランクを部屋の物入れから引っぱり出す。眠った沙子を抱え上げて、その中に納めた。なんとか沙子が丸くなっていられる程度の大きさがあった。

「道路は封鎖されているんだろう？」

「されてます。けれども、山入の林道なら使えるかもしれません。山越えで別の林道に

貫通させてあるんです。あれが知られていなければまだ使える。唯一(ゆいいつ)の生命線です」
「けれども、山入には」
「村道は使えませんが、抜け道があります。——いや、村道ももう通行不可能ではないかもしれないな。山入のことがバレていたら、切り開かれているかもしれませんけど。どうせその場合も人で封鎖されているでしょうが、抜け道ならまだ大丈夫でしょう。かろうじて車一台なら通り抜けられる」
静信は頷いた。辰巳はトランクを閉め、固くベルトを締める。
「遮光は万全とは言えません。空気穴がありますから。もしも車から降ろすなら、できるだけ暗いところに」
静信は頷く。辰巳が引き起こしたそれを二人で抱えて部屋を出た。短い廊下の突き当たりに階段がある。辰巳はそれを上り、外の様子を見て頷く。
「今のうちです」
苦労して階段を昇った。上がったそこは洗面所だった。まるで配管を覗き込むための落とし蓋(ぶた)のような顔をして、洗面台の前にかろうじてトランクが通る程度の穴が開いている。
建物のその一郭は風呂(ふろ)場などの小部屋が多く、壁が多かった。窓はすべてガラスが割られ、板戸も取り払われていたが、とりあえず外から姿が見えるようなことはなさそう

だった。その一郭からガレージに向かう通路はすぐだった。
トランクを抱え上げ、四輪駆動車の後部シートに積み込んでゴム引きの布でくるむ。音がしないよう、できるだけそっとドアを閉めてから、辰巳がキーを寄越した。
「……お願いします」
周辺は騒がしいが、まだ邸内に人が踏み込んでくる様子はない。静信が聞き耳を立てていると、辰巳も屋敷のほうを見て頷いた。
「まだのようですね。尾崎の先生は慎重だ。まったく、食えない」
静信はガレージの床に坐り、辰巳を見上げた。
「今のうちに聞いてもいいだろうか」
「何です?」
「ぼくは沙子を見ていると、屍鬼がとても哀れな生き物に見えるんだ。実際のところ、ぼくはなぜ君が沙子の支配下にあるのか分からない。君には本当に沙子が必要なんだろうか?」
「要不要は、恣意(しい)的に決めるものですよ」
「じゃあ、言葉を変えよう。君たちを見ていると、屍鬼と人狼(じんろう)は共生関係にあるように見えるんだ。人狼は屍鬼によって生まれる。その因果関係からすると、人狼が屍鬼に支配され、屍鬼に奉仕することは当然のことのように思えるんだ。

だが、実際のところ、人狼との共生関係がなければ成り立たないのは屍鬼のほうなんじゃないだろうか。彼らは太陽が出ている間、休眠する。眠ると言うより、活動を休止すると言ったほうがいいんだと思う。その間、屍鬼はまったく無防備になる。昼間にも起きていて活動できて、自分たちを庇護してくれる存在が屍鬼には必要だ。しかしながら、人狼は屍鬼の庇護を必要としない。

君たちのほうが優れた生き物に見えるんだよ。種としては優良種に見える。生存に適しているという意味においてね。むしろ屍鬼は人狼を生むために汚染を広げているのじゃないかと思うくらいに」

「屍鬼は不完全な人狼だと？」

「違うのだろうか」

「千鶴が生きていたら、さぞかし怒っただろうな」辰巳は声を上げて笑い、「けれどもぼくも、実を言うとそう思ってますよ」

やはり、と静信は頷く。

「どちらのほうが生存に対して有利かを考えると、それは明らかでしょう。屍鬼というのは人狼のなりそこないです。ぼくたちを生み出した何かは、人狼を作ろうとしている。屍鬼はそれに失敗した結果として生まれる副産物ですよ、たぶんね」

「だが、君は沙子に仕える。なぜだ？」

「個人的な感情の問題ですよ、単に」
静信は辰巳をじっと見つめる。辰巳は軽く苦笑した。
「沙子は、愚かだから」
「――愚か？」
辰巳は頷く。
「屍鬼とは何なんでしょうね。沙子も千鶴も、そして正志郎も、色々と理屈をつけるけれども、ぼくには単なる化け物に見える。人でも獣でもない、まあ、存在する言葉に当てはめると、化け物というのが順当なところでしょう。屍鬼は死から甦ったもの、人を狩るもの、人の形をしながら、人の範疇にはいないもののことです。人を襲い、殺して飢えをしのぐ。
それは屍鬼の属性なんです。罪でもなければ、殺戮の権利でもない。それは屍鬼という化け物の性質のひとつにすぎないんです。屍鬼が生きるためには吸血の行為が不可欠だけど、それを行なえば人は死ぬ。それは結果にすぎないでしょう。人を殺さずに済ませようと思えば、人は狩人の存在に気づき、反撃に転じる。だから結果を頓着しても始まらないんです。それは一種の摂理であって、誰の罪でも悲劇でもないんだから」
「しかし、沙子は」
「苦しんでいるのは、たしかです。だから愚かだと言う。あなたも言っていたでしょう。

身体は変容しているのに意識が変容してない、それが悲劇だって。そう思うんですよ、ぼくもね。

沙子が苦しいのは、人でないもののくせに、人の正義に拘るからです。正志郎が苦しかったのは、人でしかないくせに人の正義を拒んでいたからです。人には人の摂理があり、屍鬼には屍鬼の摂理がある。人と屍鬼は異類の生き物なんですよ。同じ価値観を共有できず、同じ秩序を共有はできない。それほど隔たった存在なんです」

「散文的だね」

「世界というのは散文的なものだと思いますがね。——屍鬼は屍鬼でしかないんです。腹が空いたら人を狩るんだ。生かしておいては危険だから、襲った以上は殺したほうがいい。人は人です。屍鬼を罵ればいいんだし、怯えればいい。苦しむのは屍鬼という天敵をいただいた人の定めってもんでしょう。

屍鬼でありながら、人であろうとして苦しむ沙子を、ぼくは愚かだと思う。同様に、人でありながら人であることを拒んで苦しむ正志郎を、ぼくは憐れんできたんです。そんなことには頓着しない千鶴は健全なんですよね。——けれども沙子以上に愚かだ」

静信は黙って頷いた。

「人はどこから来てどこへ行くんでしょうね。問われつくしたことだけれども」

「さあ……」

「ぼくには明らかだという気がするんですよ。そんなものは決まってる。胎から来たんです。そして土に還る。無に還るんです。真に不思議なのは人という命の由来ではないんです。人という器の中に宿った人格の由来なんですよ。それは、いつから芽生え、いつ終わるんでしょうね。
それは虚空に出現するんです。そして、長い落下を開始する。ただひたすら終焉に向かって落ちていくだけ、けれども落下していく一刹那が、彼にとってはすべてなんだ。より良く生きると言う、心地良く生きると言う。けれどもそんなものが何になるんです？　ただひたすら落ちていくだけなのに。ビルから落下するときに、落ち方を競って何になるんです。花の色を競うようなもんです。枯れるだけのことなのに」
「良い色の花は、自分のコピーを後世に残すことができる、——普通はそう答えるのだろうね。だから種は繁殖するんだ、と。そういうことじゃないのかい？」
くすり、と辰巳は笑う。
「自我がなければね。自分の子供は自分じゃないです。遺伝子を継承してくれても、自我までは継承してくれないんですよ。人が自我を残そうと思えば、自分自身が永遠に生きながらえるしかないんです。そしてその自我こそが、人の人たる所以でしょう。にもかかわらず自我だけは残すことができないんだ。それは虚空に出現し、落下して消える。ただそれだけのものなんです」

「虚無的だね」
「ぼくは虚無主義者なんです。自我こそが自分を自分として成り立たせているのに、これは落下するだけのもの、滅び去るだけの運命のものです。虚しいからこそ、人はその自我の存続期間に意味を付与しないではいられないんじゃないかな。そうすることで落下の虚しさに耐えようとする。
　ぼくはそれを否定するわけじゃないです。それこそが自我を持つ生命の定めだと思うんですよ。だから、そこに囚われて虚無感に喘ぐ沙子や正志郎を、ぼくは肯定する。否定するのは、落下を落下だと認識してない愚かな連中なんです。どうせ散華するだけの命、咲き方に悩み、散り方に迷うのは悪いことじゃないでしょう。それこそが生きる意味を探すということなのじゃないかな」
「そうかもしれない」
「沙子の執着、正志郎の憎悪、人として意味のある生に囚われた彼ら――それは愚かな営みだけど、不快だとは思わない。だからぼくは彼らの生き様を肯定する。だから手を貸すんですよ。実を言えば、ぼくは屍鬼じゃない。屍鬼とも人とも違う種類の生き物なのだけれども」
「君は善人だね」
「皮肉ですか？　だったら、もう少し臓腑を剔るような言葉を考えてもらいたいな」辰

巳は笑う。「ぼくは虚無主義者なんですよ。それでも昔は、ぼくだって生きることにそれなりの意味を探してた。自分がただ落ちていくだけの存在だと理解してたから。けれどもぼくは死なない。少なくとも自分の意思で、生存期間を引き延ばす余地が残されているんです。そうするとね、生きる意味なんてのは必要ないんですよ。意味を付与する必要なんてない。生きるってことは、時間が過ぎるってことと完全に同義です。それでぼくは徹底した虚無主義者になったんだな。

ぼくにとって沙子はね、滅びの象徴なんです。すべてのものは滅びる。意味なんてものは飛散して消失する。けれども沙子がそれに抵抗してあがくさまは見応えがある。落下していく様子そのものが、見ていて飽きないんです――綺麗だと思う」

言って辰巳は微笑む。

「実を言うと、それだけのことなんです。滝みたいなものかな。水が落ちていくだけのことだけど、あれは見応えがある。水が涸れれば惜しいと思う。末永く残ればいいのにと思う。――そういう感じ」

「驚いたな……それだけ？」

「それだけなんです。でもってぼくには、それだけで充分なんです。と言うより、それ以上のことはどうでもいい。自分の人生に意義を求める気なんてないですから。

沙子はここに屍鬼の社会を作ろうとした。屍鬼の連中は、ここに屍鬼の王道楽土が築

かれるのだと思っていたようだし、沙子にもそういう気があったんでしょう。けれども、ぼくはそもそも、そんなものを信じてない。無理ですよ、あり得ない。生態系のバランスってものがあるでしょう。獲物の数に対して適正な屍鬼の数ってものがあるんです。そしてそれは、どんな肉食動物より少ない。屍鬼の社会なんて築けるはずがない。こんな狭い地域に社会を築けるほどの屍鬼が集まったら、崩壊することなんて目に見えてる。

けれども、そういうことを考えるから沙子は愉しい。それもね、沙子は別に屍鬼の救済のために立ち上がったわけですらないんですよ。単に沙子が寂しいんです。あまりに若くて、世の中に見切りをつけられないうちに、親も家庭も社会ももぎ取られてしまった。それでそういうものが恋しくて忘れられないんです。千鶴を仲間に入れて、正志郎を迎えて、まるで家族みたいな顔をして。ここに社会を作ろうとしたのだって、そういうことなんですよ。帰属する社会がほしかった。人間の続きをやりたかったんでしょう。失ったものを取り戻そうとしたんです。

可愛いじゃないですか。とてもいじらしいと思うな。沙子は純なんですよ、そういうところがね。だから、屍鬼のくせして人を殺す自分に悩む。化け物になって、人を殺さないと生きてられないくせに、人が恋しくてたまらないんですよ。そういう自分を嗤ってしまえないんです。恋しい自分に忠実で、状況に流され、自分を歪めることがない。

人殺しだってね、慣れてしまえばいいんです。あるいは、あくまでも屍鬼になること

を拒めばいい。みんなそうしてる。なのに沙子だけはそうなれないんだ。なぜ自分は人を殺さなければならないのか、それは是か非か、そこを問い続けないではいられないんでしょう。目を瞑って、そんなものだと言ってしまえない。沙子の生き方――落ち方は、純粋で歪みがない。同じようにあがいても醜いところがない。だから見応えがするんでしょう」

「だが、ここで死ねば、君はそれを見ていられない」

「そうですね。――そうです。けれども、沙子が失われるよりいいな。そういう気分ですね」

「たいした熱愛ぶりだね」

「それじゃあ、嫉妬に聞こえますよ、室井さん」辰巳は笑う。「ぼくはね、かつて、世界を憎んでいた。絶望していたんです。世界を滅ぼしてみたかった。沙子に会ったとき、沙子が救世主に見えたんです。沙子は人の秩序に反する。沙子は腐り切った世界を打ち壊す者です。そして反社会的な新秩序を作る者だと思っていた。それでぼくは沙子を歓迎したんです。

けれども、ぼくは屍鬼にはならなかった。そして沙子を見ていると、新秩序なんてものも存在し得ないと分かった。沙子が求めているのは屍鬼にとって都合の良い秩序です。それは反秩序なんかじゃない。秩序を自分の居場所に引き寄せようという行為なんです。

けれども、これは成功しないことが目に見えてた。沙子の望みを突き詰めると、マジョリティになることなんです。人と屍鬼の力関係が逆転して、屍鬼のほうがマジョリティになり、屍鬼の都合が正義になって世界がそれで整合する。――そうでなければ、沙子が真に望んでいるような世界は来ないんです。

けれども、そんな世界はあり得ない。屍鬼のほうがマジョリティになったら、滅びていくだけですよ。それも餌食を失って飢えて死ぬという極めてお粗末な結果になるだけ。屍鬼というのは圧倒的なマイノリティであることを運命づけられているんです。そうでなければ存続できない」

「そうだね……」

「ぼくは世界が滅びるところを見たかった。秩序に悖る沙子が反秩序の世界を築くのだと思ったけれども、これはあり得ないと分かった。沙子が秩序になれば、人は滅びるし、人が滅びれば屍鬼も滅ぶ。あとには何も残らない。世界の滅亡と言えば、これ以上の滅亡はないです。だったらそれでいいか、という気がするんですよ。

実を言うと、ぼくは世界で最後から二番目に死ぬ人間になりたい。本当は最後に残る人間になりたいんですけどね。世界が滅んで完膚無きまでに消滅するところを見届けて死にたい。けれども、沙子はぼくをとても楽しませてくれたから、最後は譲ってやってもいいです。ぼくさえいなくなってしまえば、沙子も死ぬしかないのだけど、そんなこ

とは知ったことじゃない。最後を譲ってやる程度にはぼくは沙子を大事だと思っているけれども、世界の存続と引き替えにするほど大事なわけじゃないんだ」
「逆じゃないのかい？」
「逆？」
「君は沙子にただ惹かれているように見えるよ。そして、沙子の望みが畢竟、世界の滅びでしかないから、それを肯定しているように見える」
「ああ……」辰巳は瞬いた。「そうかな。そうかもしれない。沙子の望みを叶えてやりたいけれども、沙子の死は見たくない。そういうことなのかな。……自分でもよく分からないですね」
「そう……」
「それはこれから分かるんじゃないかな」辰巳は言って、窓のほうを見た。「まだ世界は滅びてない。ぼくと沙子以外の連中があんなに残っている。ぼくが死んだあとも、連中は正義や秩序を信奉して、世界を整え続けていくんでしょう。沙子がそれを破壊する日はまだ来ない。その状況下で沙子のために死ぬことを、ぼくはどう思うのかな。今際のきわに、やはり悔しいと思うか、それともこれも善しと思うか」
　辰巳は言って笑った。
「それで決着がつくんでしょう。たぶん」

4

辰巳が白いセダンのドアを開ける。門の前に人が集まり、今にも入ってきそうな喚声が上がっていた。

「ぼくが正志郎の車で、正面に出ます。とりあえず坂の下に向かって村道を目指す。注意を引きつけてる間に林道を登ってください。分かれ道を下ってすぐのところに小屋があります。小屋の中は車で通り抜けられます。単なる空洞の門なんです。その裏側が抜け道に続いていますから」

静信は頷(うなず)く。辰巳は笑う。

「お元気で……と言うのは、無理があるかな。運が良ければ、いずれどこかで」

言って、辰巳は車に乗り込む。静信もそれに倣(なら)い、運転席で身を縮めた。それでもまだ少しの時間がかかった。人の喧噪(けんそう)と喚声が、すぐ間近に雪崩(なだ)れ込んできて、屋敷のほうに流れていくのが聞こえるまでに、五分以上の時間がかかった。同時にシャッターの開き始める音がし、エンジンがかかる音がした。辰巳が盛大にエンジンを噴かすのに紛れ、静信もエンジンをかける。

人の声がした。ガレージの中に明かりが流れ込んできて、シャッターが開き切らぬ間

にタイヤを軋ませて辰巳の車が出る。シャッターを引っ掻き、裂くような音がした。そして人の怒声と、衝撃音と悲鳴が。静信は目を閉じ、駆けつけた人垣を薙ぎ倒して走り去っていく白い車を思い浮かべる。またタイヤの軋む音がした。車は坂の下に向かい、人の声もそれにつれて下のほうへと流れていく。

静信は身を起こした。とりあえず前方には人の姿は見えなかった。クラッチを繋ぎ、車を出す。門扉のない門へと突進して、坂の上のほうへと曲がった。曲がった目の前に人がいるのが分かった。かろうじてハンドルを切ったが、接触は避けられなかった。衝撃があったが、それが人なのか、彼らの手にしていた武器なのか、そこまでは分からなかった。唖然としたように振り返る人の中に、敏夫を見たようにも思ったが、これは気のせいかもしれない。自分でも分からない。車を走らせることが無茶だと思えるほどの目眩がしていた。

ミラーで後方を確認する余裕もなかった。視線を動かすと視野が揺れる。とにかく前を睨んでハンドルに縋りついているしかない。前方から車が現れたが、接触することを覚悟でそのまま突っ切る。相手のほうが、急ハンドルを切って林の中に突っ込んでいった。

分岐路まではすぐだった。辰巳に言われた通りに曲がると、すぐ下に小屋が現れたが、同時に登ってくる車も姿を現した。登ってきた車は、進路を阻もうとするように蛇行す

る。それをかろうじて右にハンドルを切って避けたが、それで小屋を通り過ぎてしまった。リアが接触する音がした。盛大にリアタイヤが流れる。なんとか体勢を立て直そうとして、立木にフロントをぶつけた。ハンドルで胸を打った。その痛みよりも衝撃で揺さぶられる目眩のほうがひどい。構わず車を走らせたものの、ほとんど視野が定まらず、何も見えてないも同然だった。

抜け道に入れなかった。なんとかミラーを覗き込むと、接触した弾みだろう、登ってきた車が鼻先を立木にめり込ませて道を塞いでいた。足止めにはなるだろうが、しかしこの道には先がない――いや、と静信は思う。この車なら田圃に乗り入れられるだろう。田圃を突っ切って丸安の材木置き場に入ることができるはず。そうすれば門前の道に出られる。

思ったところで道が切れた。勢いに任せて田圃に乗り入れる。悪路に揺さぶられ、目眩で視野は定まらない。丸安の材木置き場に乗り入れたものの、当然の帰結のように、何度もあちこちにフェンダーをぶつけ、ついに目が霞み、満足に見えなくなった。

これ以上、車は使えない。村道には人も多いだろう。土手から転落するのが落ちだ。とにかくこの目眩が治まるまでの時間が静信には必要だった。沙子をどこかに隠し、夜を待つ。沙子が歩いてくれれば、その手を引いて、自分なら山を越えられるだろう。

ほとんど勘で、材木置き場を抜け、すぐ脇の坂道に車を乗り入れた。寺に向かう私道

だ。沙子に寺は辛いだろうが、眠っているのだから嫌がりようもあるまい。私道を登り、鐘楼脇から墓地のほうに乗り入れて停めた。車からトランクを引き出す。人の騒ぐ声は聞こえたけれども、近づいてくる声も車の音も聞こえなかった。
引きずるようにしてトランクを抱え、ふらつきながら本堂に向かう。火事場の何とやらとしか思えない勢いで階段を上り、本堂に入った。ここだけは盲点になるはずだ。戒壇の裏側に廻り込んだ。背後の扉を開け、戒壇の下に潜り込む。古い位牌を納めておくための棚の間にトランクを隠し、その上に覆い被さるようにして倒れ込んだ。手を伸ばして手探りし、扉を閉めた。
閉めたそこで、意識が途絶えた。

5

「くそ！」
大川は坂の上下を見比べて吼える。敏夫はどこか呆然とした顔で坂の上を見ていた。路面には数人が倒れて呻いている。その側に駆け寄る者があり、付近に停めた車に乗り込む者がいる。次々にエンジンのかかる音が響いた。
「先生、怪我人を」

「あ……」敏夫は瞬く。「ああ、分かった」
「車の連中は坂の下に行け！　絶対に村から出すな！」
「車、見ましたか」
清水が肩で息をしながら駆けつけてきた。
「坂の上に向かった車。運転席に」
「清水さん」敏夫は声をかけたが、間に合わなかった。
「若御院が乗ってた」
大川は、ぽかんと口を開けた。
「そうだ――そもそも、これだけの騒ぎの間、若御院はもちろん寺の連中はどこにいたんだ？」
周囲の人間が呆気（あっけ）にとられたように口を開けた。敏夫は思わず顔を背けた。
「きっと、先に出た車は囮（おとり）だよ。娘は若御院の車に乗ってたに違いない」
清水は力説する。
「しかし、坂の上は――」
大川が周囲を見渡すと、何人かが頷いた。
「行き止まりだ、林道だから」
「病院の裏手に出られるだろう」

「出られるが、出た先は畦道だ。車ではそれ以上、先に進めない」
「あの車なら田圃に乗り入れられるだろう」
そうか、と数人の声がした。大川は敏夫を見る。
「ここをお願いしてもいいですかね。おれたちは若御院の車を捜します」
「ああ……」
敏夫は頷いた。——頷く以外に何ができると言うのだろう。静信は村を裏切ったのだ。そして屍鬼の側に寝返った。そんなことならとうに分かっていた。いまさら衝撃を受けるようなことではない。
馬鹿だと思う。だが、同時に静信らしい、とも思った。
（結局、あいつは頑固者で……）
いつだって自分に忠実なのだ、静信なりに。

6

美和子は玄関のほうから、大勢の人間が呼ぶ声を聞いた。光男と克江と顔を見合わせ、おずおずと玄関に向かう。そっと戸を開けてみると、大川を先頭に十数人の人間が立っていた。

「奥さん、若御院はどちらかね」
大川に居丈高に訊かれて、美和子は首を振った。
「分かりません。戻ってこないんです」
「そりゃァ、通らない。若御院は戻ってきたはずだ。それともあんたたち、隠し立てをするのかい」
美和子は光男を振り返った。
「いえ……でも、本当に」
「本当なんですよ、大川さん」光男が土間に降りてきた。「若御院は金曜から行方が知れないんです。どこかに出かけたか——連れて行かれたまま戻ってこないんです。実を言うと、わたしらも心配していたようなわけで」
大川は背後の仲間たちを振り返った。清水は大川の視線を受け、きっぱりと首を横に振る。車が鐘楼の脇に乗り捨ててある。静信は必ず戻ってきたはずだ。
大川は美和子と光男に——その背後に立ち竦んでいる克江に視線を戻した。心なしか狼狽しているように見えるのは、気のせいだろうか。
「捜させてもらっていいかね」
光男は目を剝いた。
「大川さん、そりゃや、どういうことです」

「どうもこうもない。――それとも、あんたたちが匿っているのかい」

「匿うって」

「大川さん、用心しなさいよ」清水が口を挟んだ。「桐敷の亭主だって、昼間にうろうろしてたんだ。真昼に出てきたからって、信用も何もできたもんじゃない」

「なるほどな」

大川に見下ろされて、美和子は背筋が冷えるのを感じた。敵視されているのはたしかだ。大川たちが静信を捜しているのも、決して静信にとっては喜ばしい理由によるものではあるまい。

「一体、何があったんです？」

前に出たのは、清水だった。

「何があった？　奥さんは、あれだけの大騒ぎを知らないんですか？　あの間、どこにいたんです？　そう言えばお見かけしてないような気がするが、知らないなんてことがあるもんなんですかね」

「村で何かあったようなのは知っていましたけれど」美和子は後退った。「けれどもわたしは、息子を待っていて」

「なるほど、高見の見物を決め込んでいたわけですか。寺は村とは別物らしい。下界の騒ぎなど知ったこっちゃない、ということですか」

「そんな……わたしは」
「それとも、何が起こっているか分かっているから出てこなかったんですか。ここに隠れて、成り行きを窺（うかが）っていたんですかね」
「あんたね」光男は清水の前に割って入った。「どういうつもりだか知らないが、突然、押しかけてきて何の言いがかりだね。若御院はいない。わたしらだって捜しているんだ。あんたらも若御院を捜してると言うなら、さっさと行って、見つかったらわたしらが心配していると伝えてくれんかね」
清水は目を細めた。光男は明らかに美和子を庇（かば）っている。そして美和子は怯（おび）えていた。しかしながら、なぜ美和子が檀家（だんか）の者に怯える必要があるのだろう。後ろ暗いところがなければ、怯える必要などないはずだ。そうでなければ光男が自分たちに敵対する理由がない。
「やっぱり戻ってきてるんだな。あんたら、それを匿っているんだろう」
「何のことです」
「若御院を出してくれ」
「ですから――」
言いさした光男を、清水は突き飛ばした。
「あんたじゃ埒（らち）が明かん。奥さん、若御院を出してください」

「清水さん、わたしたちは本当に……」
「出せって言ってるんだ！」
「ちょっと」
割り込んだ光男が、清水の肩を突いて、それが清水を激昂させた。清水を支えた大川が、ずいと前に出る。
「どうやら、この連中も仲間のようだな」
清水は頷いたが、美和子にも光男にも、そしてもちろん克江にも何のことだか分からなかった。分かったのは、そこにいる十数の人々が自分たちを敵視しているということだけだった。
「いつの間にか、寺は乗っ取られていたらしい」
「そりゃあ、そうだ」と、大川の真後ろにいた男が怒鳴った。「よく考えりゃ、寺には墓がある。起き上がった連中は、真っ先に寺を襲ったはずだ」
「なるほどな」
大川が前に出て、美和子はさらに退った。委細は分からずとも、大川の破壊的な雰囲気がただ恐ろしかった。克江の腕を取り、固く手を握り合う。光男はそれを見て取り、再び間に割って入る。大川の動きを遮り、美和子らを振り返った。
「奥さん、逃げなさい。母ちゃんもだ」

だが、光男のそういう言動は、大川たちに確信を抱かせた。やはりそうだ。寺はいつの間にか連中の配下にあり、美和子らは連中の仲間になっていたのだ。静信は沙子を抱えてここに逃げ込み、目の前の二人はそれを隠そうとしている。こうして光男が邪魔をしている隙に、美和子と克江が静信を促して逃がすつもりだ、と大川は即断した。

「どけ！」

有無を言わせず、大川は光男を蹴り倒す。美和子らを捕らえようと駆け出すと、二人は悲鳴を上げて庫裡の奥へと逃げ込もうとした。大川の背後にいた連中が、どっと崩れ、庫裡の中に駆け込んだ。行く手を塞がれ、逃げ惑ううちに、美和子と克江の手が離れ、別方向へと遠ざかっていく。あとに続こうとした大川の足を掴んだのは光男だった。もんどり打って転びそうになり、大川は、光男が襲ってきたのだと思った。斟酌なく光男の腕を蹴る。嫌な音がして、光男の肘があり得ない方向に曲がった。

美和子は克江を見失い、背中で光男の悲鳴を聞いた。振り返ったが、玄関はすでに廊下を曲がった向こう、そこで何が起こったのか分からなかった。けれどもあれは尋常の叫びではない。きっと酷いことが起こったに違いないと思うと、すぐ背後まで迫っている足音が怖い。とにかく闇雲にその場を逃げ出した。どこかに隠れ——あるいは、どこからか逃げ出さなくては。

（静信は……）

けれども、息子はどこに行ってしまったのだろう。一体、何が起こったのか。良い息子、良い跡取りだった。村はつい先頃まで、なんの問題もなく平和に、人の和によってまとまっていた。人々の慈愛と敬愛によって寺は支えられ、世界には寸分の隙間もなかったのに、いつの間に何が忍び込んで、何もかもをこんな悪夢に変えてしまったのだろう。

背後から腕を摑まれ、悲鳴を上げてそれを振り解いた。泥濘を踏むような気持ちで足を縺れさせながら走り、そして背中に鈍い衝撃を感じた。突き倒されるようにして転がり、美和子は背中に疼痛を感じる。

（何が）何が起こり、そして何が（……一体、何が）美和子の世界を侵食してしまったのだろう。

這って逃げようとした足に背中に、再度、衝撃が襲ってきた。悲鳴を上げたが、美和子を助け起こしてくれる手はなかった。ひたすらに、前へと這い進もうとした膝が滑った。まるで床の上に水か油でも零れているようだ。こんなに滑るなんて。

目眩を堪えた美和子の首を衝撃が襲った。世界はその瞬間に砕け、崩壊していった。

静信はうとうとと半ば眠り、騒がしい物音を聞いた。唐突に目覚め、そして庫裡のほうから入り乱れる足音と、細い女の悲鳴が響くのを聞いた。

（何……）

驚いて身を起こし、とっさに間近のトランクを庇う。音の所在を庫裡だと見切って、慌てて戒壇を抜け出し、本堂の戸を開けて周囲を窺った。

庫裡のほうで怒声が響いている。大勢の足音、何かを指示し合う声。それは本堂のほうに近づいたかと思うと、静信が板戸の陰で息を殺しているうちに庫裡のさらに奥のほうへと移動していった。

静信は本堂を出た。家の中の気配に耳を澄ませながら、庫裡へと渡る。渡ったすぐそこに倒れた美和子を見つけた。

静信は呆然と立ち竦んだ。我に返って美和子の側に駆け寄り、抱き起こしたが、そもそも後頭部が陥没していた。それで息があるはずもなく、実際、助け起こしてみても驚いたように目を瞠ったまま光を失った母親の目を覗き込んだだけだった。美和子を襲った迅速で残酷な死。——屍鬼ではない。明らかに人の襲った痕だ。

「……なぜ」

なぜ、美和子が襲われねばならないのか、静信には理解できなかった。理由があるとすれば、静信が沙子を庇った、そのことに対する報復だとしか考えられない。

自分のせいなのか、と愕然とし、同時に心底、絶望した。これが、美和子が信じ、頼りにしてきた世界の正体だ。秩序と、それを信奉する人々が、それらを自明として調和

していた世界。この世界は秩序に悖る者の存在を認めず、受容する許容力がない。牙を剝き、排除し、そうすることでかろうじて形を保っている——その程度の脆い世界。

「……お母さん」

済みません、と詫びたかったのか、それとも憐れみたかったのか、静信は自分でも分からなかった。美和子を廊下の片側に横たわらせ、そして庫裡の奥を窺う。盛んに戸を開け閉てする音、何かが叩き落とされ破壊される音が響いていた。家捜しする音だ。捜しているのはトランクだろう。トランクの中に隠された、秩序の敵。

退路を確認しようと、輿寄せから外を窺い、境内には誰もいないことを確認する。なんとか沙子を、もっと安全な場所に移動させねば。死角になっている玄関先の様子を見ようと玄関に向かい、そこで静信は光男を見つけた。光男の遺体というより、残骸だった。駆け寄るまでもなく、息絶えていると分かる。分からざるを得ない。かろうじて皮一枚で首が繋がっているような状態では。

その有様を見れば、単に報復と言うよりも、光男と美和子が屍鬼に変じたのだと思われたことは確実だった。克江はどこに行ったのだろう。姿は見えないが、訪れたものに変わりはあるまい。少し落ち着いて確認すれば分かることを、その手間を惜しんだとしか思えない。もはや狩人ではない、単なる暴徒だ。

光男に軽く手を合わせ、静信は本堂へと足音を忍ばせて駆け戻る。戒壇の下に飛び込

み、トランクを引き出した。重みは感じなかった。とにかくこれをどこか安全なところへ。切羽詰まって無理な姿勢で担ぎ上げ、本堂から表へと忍び出た。

小さく声が聞こえたのは、本堂の階段を下りたときだった。ガレージの側に一人の男が屈み込み、静信のほうを見ている。男は声を上げ、駆け寄ってきた。静信はトランクを手放し、同様に駆け寄る。仲間を呼ばせてはならない。絶対に。

男は山刀を持っていた。山で下生えを切り払うためのものだ。振りかぶられたそれが唸りを上げて振り下ろされ、とっさにそれを避ける。それが血濡れているのが目に留まった。美和子のものか光男のものか。血はまだ新しい。ぎらりとするような光沢を放っている。

どうして、と叫びたかった。美和子たちは無関係なのに。自分のせいだという負い目と、仲間を呼び寄せてしまうかもしれないという恐れがなかったら、静信は口を極めて男を弾劾したに違いなかった。

男は獣じみた唸り声を上げ、静信に斬りかかってくる。仲間を呼び集めることよりも、静信を何がなんでも打ち倒す、そのことのほうに気が向いているようだった。山刀を奪おうとする静信と揉み合いになった。幾許かの理性を残している静信のほうに分がなかった。

腕をかすられ、膝上をしたたかに叩かれた。山刀をもぎ取ろうとして失敗し、間合い

からなかった。
狙い澄ましたように首筋に向かってきた凶器を、どうして避けられたのか、静信にも分
を開けようと飛び退った足が縺れた。三撃目は腹を刳った。思わず静信は膝をついた。
目標物を失った山刀は本堂の階段を噛んだ。抜くのに手間取っている男を突き倒し、
胸ぐらを摑んで石畳に叩きつける。男は呻いて動かなくなった。
死なせたわけではなさそうだった。男は目を閉じて微かに喉の奥で呻いている。静信
は男が腰に下げた手拭いに目を留め、ともかくもそれを口の中に押し込んだ。それ以上
のことをしている余裕はなかった。
山刀を抜き、トランクへと駆け寄る。腹部から温かいものがあふれて腰を伝い、足の
ほうにまで流れてくるのが分かった。それでもなおトランクを抱えることができたのは、
我ながら驚嘆に値した。境内の端を拾うようにして墓地へと駆け込み、荒れた墓地の中
を下る。村にはとても下りることができない。このまま山の中に入るしかなかった。幸
い、寺の周囲は入らずの山だ。静信は山を朧気にとは言え把握しているが、追っ手はそ
うではあるまい。問題は、静信自身がどこまで保つか、ということだった。
庫裡を家捜しし、清水はそこに誰もいないことを確認せざるを得なかった。
「いたか？」

仲間の声には、いない、と吐き捨てるように答えた。仲間が浮き足立つのが分かった。
本当に静信がいなければ、彼らの行為には正義はなく、単なる蛮行になってしまう。
「本堂は——本堂はどうだ」
さっき見た、と言う者には、たしかに隅まで捜したのか、と訊いた。相手が自信なさそうなのを見て取り、本堂へと向かう。
途中、絶命した美和子の死体の側を通った。何がなんでも静信には寺にいてもらわねばならない。——いや、車があったのだから、たしかに寺に逃げ込んだはずだ。いないぞ、と同様に動揺した声が飛び交った。誰もが静信らの姿がないことに狼狽していた。
「清水さん、いたか」
大川に訊かれ、清水は首を振る。
「そんな馬鹿な」と、大川は怒ったように大股に庫裡へ戻っていく。そのあとを追い、そして清水はそれに気づいた。
「大川さん」
美和子の遺体だ。廊下の端に、まるで安置するように寄せられている。清水はそれを示した。
「大川さん、あれ。誰かが奥さんを動かしてる」

廊下には美和子を動かした血の痕までが残っていた。大川は本堂からやって来る連中を呼び集める。誰か美和子を移動させたか、と訊いた。答える者はいなかった。
「……やっぱりいたんだ」
「誰が」
「若御院だよ。他に誰がこんなことをするんだ。わたしらが庫裡の奥を捜してる間に、どこかから出てきたに違いない」
半ば、安堵する心地で、清水は玄関に駆け出し、境内を見渡した。すぐにそれを発見した。本堂の階段の下に、仲間が一人倒れている。駆け寄ると意識がない。単に気を失っているようだが、手拭いで猿ぐつわされているところからしても、誰かに襲われたことは確実だった。静信は寺に戻っていたのだ。そして、どこかに消えた。
(寺の下か……いや、それはない)
とても村には下りられなかっただろう。だとしたら、山しかない。しかしながら、一口に山を捜すと言っても、と独白し、清水は足許に点々と血痕が続いているのを見つけた。
「大川さん、墓地だ。墓地のほうに逃げ込んだんだ」
清水が血痕を示すと、行こう、と大川が仲間を促した。

静信は懸命に山道を進んでいたが、いかにも足場が悪く、しかもトランクを抱えての行程はあまりにも難事だった。腹から伝ったものは足を濡らし、今や片方の靴の中で足が滑るのを感じた。泥濘を踏むような音がしている。何度も木立の合間から空を見上げ、そこに夕暮れの気配を探したが、強い風に吹きちぎられたのか、雲ひとつない空は残酷なほど明るかった。

兼正の教会跡に出ることができれば、と静信は足を励ます。教会のどこかに隠れて夕暮れを待つことができるかもしれない。そうでなくても、あそこまで出れば、山入に抜ける小道へと出られる。少なくとも静信は、そのルートを知っていた。山入に出れば、屍鬼たちが使っていた車があるはずだ。山入の林道は村の外に貫通している、辰巳がそう言っていた。

何度もトランクを下ろし、引きずり、抱え上げを繰り返して、やがて静信は背後に人の声を聞いた。とっさに背後を振り返る。まだ遠い。ほとんど谺のようにしか聞こえない。けれども追ってきていることは確実だった。振り返った目に、点々と残る血痕が見えた。連中はこれを辿ってきている。

冷や汗が浮かんだ。このまま聖堂までは、とても辿り着けない。走ってくる追っ手のほうがはるかに速い。

静信は意を決して、トランクを抱えて林の中に踏み込んだ。少なくともそれで、下生

えが血痕を隠してくれるはずだ。見通しは利かず、日が暮れるのも早い。もはやそれに縋るしかなかった。
　斜面をひとつ、必死の覚悟でトランクを抱え、駆け登った。それで奇蹟はつきた。とてもこれを抱えて走ることはできなかった。少なくともこれで、道を行く連中の目からは隠れおおせたはずだ。軽くトランクにもたれて息をつき、さらにトランクを引きずるようにして斜面を登る。——なんとか、山入へ。
　絶え絶えになる呼気を堪えて、斜面を登った。追っ手の声は聞こえなくなった。どうやら静信を見失ったらしい。それを確認して、膝から力が抜けた。なおも自分を励まして斜面を登っていると、林の中がたそがれてくるのが分かった。次第に周囲が暗くなる。夕闇が忍び寄ってこようとしている。
　上出来だ、と笑い、静信は何気なく腕時計に目をやった。それは単なる習慣のような動作だったが、静信は針を読みとることができなかった。トランクを下ろし、改めて時計を凝視する。午後三時十二分。——まだ陽が落ちるような時間ではない。
　そうか、と静信はトランクを抱えた。沙子が眠るそれを抱え上げる。陽が落ちているのではない、これは夕闇ではない。この薄暮は静信の視野に落ちているのだ。静信に沙子を託し、出て行った辰巳の顔、眠りたくないと怯えた沙子の顔を思い出して、自分を鼓舞しようとしたが、すぐにそれも限界が来た。

トランクが隠れるほどの茂みを見つけ、そこにトランクを押し込むので精一杯だった。ベルトを解き、ロックを外して沙子が出られるようにし、そこから重荷を捨て、斜面に縋って茂みを離れる。少しでも距離を作らなければ。追っ手が自分を発見し、そのすぐ側にトランクが残されているような事態だけは避けたい。

闇雲に足を進めたが、外界より早く静信の上に落日は訪れた。視野は薄暮に覆われて霞み、やがて明かりを失っていった。

7

陽が落ちようとしている。大きく傾いた陽射しに、狩人の誰もが焦り始めた。元子もまた例外ではない。

山入。方々の家から屍体が次々に運び出され、小型トラックの上に乗せられていく。そのどこにも巌の姿はなかった。いないはずはない。必ず山入にいるはず。なのに巌は周到に元子から身を隠している。

夜が来る、と思うと元子は歯ぎしりしたい気分がした。巌はまんまと逃げおおせたことに北叟笑み、自分を取り逃がした元子を嘲笑うだろう。そうして夫を、娘を、そして息子を元子の手の届かないところに連れて行くのだ。

すでに元子には、自分がこうして山入に留まっている間に、村で巌が見つかっている可能性、——あるいは、とっくに巌が埋葬されている可能性を念頭に思い浮かべることができなかった。山入にいるに違いないと、頑に思い込んでいる。夫や志保梨が甦生したことを頭から信じて疑わず、いつの間にかそこには茂樹までもが含まれていた。もとより、元子は茂樹が甦生しなかったこと、自分があれほど抱き締めていたにもかかわらず、腐敗していったことを覚えている。茂樹は甦らなかった、元子の側では。——それはきっと、茂樹が山入で甦生したからに違いない、と元子はすでにそう信じていた。

夫と子供たちが巌と一緒に山入にいる。それは元子にとって疑う必要のない確信だった。そうでありながら、元子はこうして山入が暴かれている間に、夫や子供もまた杭を打たれ、屍体に変じているかもしれないという可能性は念頭に浮かびもしないのだった。巌が隠している。そしてこのまま見つけられなければ、巌が連れて行ってしまう。元子には手の届かないところで、元子抜きで、元子の失った子供たちのいる家庭を維持していくのだ。

(許さないわ。……絶対にそんなことさせない)

トラックに屍体を積み込みながら、元子は声を上げた。元子の中で、巌はこの中にいない、という確信が育っていた。積み込まれる屍体を検めても無駄だ。この中に巌はいない。巌はまだ生きている。

元子はトラックの側を離れた。狩人が押し込んだ家のひとつに飛び込む。一緒になってあたりのものを動かし、打ち払い、潜んでいる屍鬼を探した。
駄目だ、と元子の間近で声がした。
「外に出よう」
元子はその男に喰ってかかった。
「まだ全部の敵を捕まえてないわ！」
「分かってるさ」と、男は渋面を作った。「だが、もう陽が落ちるんだ」

九章

I

風が強くなった。空は見事な血色に染まり、村はその瘴気に触れて錆びついている。忌まわしい呪いのように、あらゆるものには陰影がまとわりつき、世界は前途のない予兆に翳っている。

沙子が目覚めたとき、世界はそのように崩壊の寸前にあった。トランクの中から這い出し、影色の梢の間から仰ぎ見た空の色に沙子は一瞬、呆けた。

——とりあえず、目覚めた。危険な半日が過ぎ去ったのだ。沙子は再び自分を手にした。意思と感情と感覚と、そして意のままになる五体を。

沙子はそれが自分にとって、喜ぶべきことなのか、それとも嘆くべきことなのか分からなかった。とりあえず意識を喪失している間の半日をやり過ごすことはできたけれども、これからの半日で、目覚めなければ良かったと思うことになるのかもしれない。

沙子は茂みを這い出した。付近には誰の姿もない。静信はどこへ行ったのだろう。なぜ自分はこんな山の中にいるのだろう。

「室井さん……？」
沙子の声は風に攫われた。そうやって呼び、姿を捜している自分を、沙子は浅ましいと思う。沙子は静信を襲った。ひょっとしたら、すでに静信は死んでいるのかもしれなかった。だとしたら殺したのは沙子だ。そもそも頼ることのできる義理でもない。にもかかわらず静信の姿のないことが、沙子には寂しく心細くてならなかった。
「室井さん……」
沙子は再度、呼び、周囲を捜した。斜面の上のほうから血の匂いが漂ってきていた。それに引かれて、沙子は斜面を登る。それでもずいぶんと捜しまわって、下草の間に倒れた姿をようやく見つけた。
「室井さん！」
沙子は駆け寄る。俯せた肩を揺すったが、静信は動かなかった。斜面の起伏を利用してかろうじて仰向かせると、腹部が血みどろになっているのが見えた。草も土も血を吸って黒々とした艶を帯びている。
沙子は息を呑み、傷に触れた。衣服は血を吸ってずっしりと重く、触れれば指圧で粘度を伴った液体が指を伝った。
「室井さん……ねえ」
沙子は静信の身体を揺する。まだ温かい。とても温かい。微かに息をしているように

見える。いや、たしかに息をしている。触れれば脈も感じる。まだ死んでいない。

「良かった……」

沙子は誰かに感謝したが、だが、いくら揺すっても、静信の返答はなかった。目を開けることも、声を上げることもない。昏倒している。そしてこの傷からして、たぶん静信は助からない。すぐさま病院に運べばともかく、この状況で沙子にそれができるはずもなかった。

「駄目……駄目よ、室井さん」

沙子は傷口を探り、両手で押さえた。もしもこの傷のせいで静信が死ねば、静信は甦らない。完全に死んでしまう。

「お願い、死なないで」

わたしを残して逝かないで、と沙子は自分の声を聞く。どこまでも沙子は欲深い。静信を喪失することはもちろん、何よりも自分が一人残されることが恐ろしかった。

「室井さん、お願い！」

起きて。目を開けて。――必死で傷を探る沙子の耳に、微かな怒鳴り声が聞こえた。風に乗って、それは斜面の上から吹き下ろしてくる。ごく間近にいるのかと思われるほど、明瞭だった。

声がしたぞ。

声。
女の子の声だ。
奴だ。近くにいる。
沙子は身を竦めた。とっさに周囲を見たが、身を守る武器になりそうなものはない。どっちだ、と沙子を捜している声がする。山の下のほうだ、とそれは確実に沙子の所在を捕らえていた。
沙子は斜面と静信を見比べ、腰を浮かせた。静信を傷つけたのはあの連中だろうか。だとしたら、静信を病院に運び込むなんてことを連中はしないだろう。
(誰か……運んでくれそうな人)
この場を逃げ出し、誰かを呼び、そして急を伝えなければ、と沙子は思い、そんな自分を嗤った。できるはずがない。電話を切ったのは沙子自身だ。外部とは繋がらない。山を抱え下ろし、車に乗せ、近隣の町まで。それだけの時間、静信が持ち堪えられるとは思えなかった。
一人になってしまった。罪を背負ったまま。狩人が沙子を裁くためにやって来る。
斜面の上に、狩人の姿が見えた。沙子には見えたが、人間には沙子の姿は見えないだろう。沙子は逡巡し、そして結局、その場を立って幹伝いに斜面を下り始めた。斜面を下りてくる連中は、手に杭を持っている。あの恐ろしい凶器。何よりも、その凶器から

逃げないでいられなかった。
まだ命が惜しいのか、と沙子の内側で声がする。死にかけている恩人を見捨ててまで逃げるのか。なぜそこまで惜しむ必要がある。——けれども、死にたくない、自分を喪失したくないという衝動に逆らうことはできなかった。傷つけられたくない、壊されたくない。どんな形であれ、「生」あるものの、それは根源的な本能だ。
沙子は斜面を下る。草叢（くさむら）を掻（か）き分ける音は、風の音が消してくれるだろうと祈るしかなかった。

2

山入は夜の中に沈んでいた。ハンドライトの光がその闇（やみ）を切り取っていたが、それは広大な闇に対して、あまりにも心許（こころもと）なかった。人々は集落の最も下にある建物と、最も抜け道に近い建物に立て籠（こ）もっていた。建物の周囲に篝火（かがりび）を焚（た）き、できるだけ密集して四方を見渡せる場所に集まっている。
そこから十人ばかりが、ぴったりと肩と肩を寄せて出て行く。この異常な状態をいつまでも引っぱれない。早晩、外部の人間が村の異常に気づくだろう。これだけの屍体があれば、外部の人間を恐れなければならないのは、むしろ人間のほうだった。大量の屍

体がある。それも惨殺された態だ。何としても屍鬼の首領を挙げ、せめても大多数を駆除したことを確認して、一刻も早く村を常態に戻さねばならなかった。それを思うと、陽が落ちたからと言って、続きは翌日に、と先送りにするわけにはいかなかった。そもそも村人の疲労と緊張も極に達している。誰もがもう、この悪夢のような惨殺戦を終わりにしたかった。

かと言って駆除しつくしてもいないのに、終わりにはできない。一匹でも屍鬼が残れば、それを起点としてまた汚染が始まる。嘘でもいい、狩りつくしたという確証が彼らには必要だったし、そのためには少なくとも、首領である少女だけは何としても狩り出さねばならなかった。

闇に怯えながら、十人を越える者たちがぴったりと肩を寄せ合いながら安全地帯を出て行く。そして一時間かそこらして戻ってくる。屍体を一体、下げてくることもあったが、手ぶらのことのほうが圧倒的に多かった。

「こんなに暗くちゃあ」困憊したふうの男が、がっくりと土間に腰を下ろした。「探すどころか、足許も満足に見えやしねえ。ところが連中は夜目が利くときてる。おれたちが連中を探して右往左往している脇をついてきてたって分かりゃしねえ」

「だが、本当にいねえ。ひょっとしたら、もう山入にはいないってことなんじゃないのかい。御覧の通り、建物は全部潜みようもないようにしている。たとえ山の中に隠れて

いても、陽が上れば勝手に死ぬんじゃないのか」

同意する声が多いのは、疲労で気力も体力も限界に来ている証拠だった。全員が無言で、誰かがもう終わりにしようと言い出すのを待っている。

元子にはそんな、その場の空気を肌で感じ取ることができた。早晩、捜索は打ち切りになる。まだ巌が見つかっていないのに。

山入にいるはずだ、と元子は山に囲まれた窪地のような集落を見た。風が強く、篝火が小さい。これ以上、大きな火を焚くことができないのだ。

すべての建物を完全に捜索したとは言えない。床下、天井裏、あらゆるところが遮光されて区切られている。中には一見して戸口の見当たらない空間もあり、てっきり遮光のためだけに塞いであるのかと思えば、意外なところに出入り口があって屍鬼が潜んでいたりする。収容し切れないほど増えた屍鬼が、なんとかして安全なねぐらを確保しようとした結果だ。

こうして人が見張っている。屍鬼は山入を出られていない。建物を出て山に逃げ込んだ可能性もあるが、たとえ山に逃げ込んでも、朝には建物の中に戻らねばなるまい。

――絶対にどこかにいるはずだ。息を潜め、狩人が諦めるのを待っている。

人々の間には倦怠感が漂っていた。口数も少なく、だんだんグループを作って人が出て行く頻度も間遠になる。元子はそっと、その人の輪を離れた。

自分一人で建物の中に入っていき、巌を捜せるものではない。もしもそんなことをすれば、巌は嬉々として元子を襲うだろう。襲って殺す。嗤いながら子供たちを連れて逃げる。

「そんなことは、させないわ……」

巌だけは逃がさない。元子は夜空を仰いだ。風の通り抜ける音が谺している。その気流が見えないのが不思議なほどだった。

この風、そして空気も山も何もかもが乾き切っている。ここで山入に火が点けば、建物とともに巌も燃えつきてしまうのに違いない。山に火が入る、と村人は言うが、山が燃えたからそれがどうだと言うのだ。どうせもう、林業で食っている者など知れている。山に火が入って逃げ込んだ敵が焼き殺されれば、山を灰にする値打ちはあろうというものだ。

元子にもう、巌が果たして建物の中にいるのか、山の中にいるのか分からなかった。どこか、村にいるのだ。子供たちがどこにいるのかも分からなかった。分かっているのは、ここで敵を滅ぼさなければ、子供たちは永遠に連れ去られ、それは巌のせいであり、巌は元子を嘲笑い、勝ち誇るだろうということだった。

元子は風向きを見て、懐から拾った小瓶とライターを出した。小瓶には松明を作るのに使ったガソリンをくすねたものが入っており、ライターもまた誰かが目を離した隙に

失敬してきたものだった。元子はそれを昼間のうちにポケットに忍ばせていた。すると、もうその時点から無意識のうちに、山入に火を放つことを考えていたのかもしれない。元子にはもう、どうでもいいことだった。単に必要なものを自分が持っていることを知っているというそれだけのことだ。

元子は最も風上の建物に向かった。身を低くし、物陰を伝い、そして建物の吹きさらしの縁側に枯れ草と木っ端（こっぱ）を積み上げた。カーディガンを脱いでガソリンを吸わせ、木っ端の間に埋め、残りを間近の襖（ふすま）にかけた。そしてそこに火を点けた。

一瞬のうちに炎は襖を駆け上がり、元子の作った焚き火を燃え上がらせた。古い建物は乾き切って、あっさりと炎の蹂躙（じゅうりん）を受け入れた。

——これでもう、巌は好き勝手にできない。

元子は微笑（ほほえ）む。

元子の勝ちだ。巌は傲慢（ごうまん）の罪によって滅び、二度と元子を虐（しいた）げることができない。

元子は「巌」と呼んでいるそれが、いつの間にか運命とも神とも呼び慣わされるものにすり替わっていることに気づいていなかった。——そしてそのまま、永遠に気づくことはなかった。

すでに火は、廃屋の廊下を火床に変えていた。その明かりを受け、元子の背後に忍び寄ってくる人影が揺れた。

村迫宗貴らは、突然、集落の一郭で点った明かりを見て腰を浮かした。
街灯のない夜は暗く、ゆえにいっそう、その明かりは強かった。最も風上にある家の一郭。
「何だ……？」
口々に言う男たちを促して、宗貴は行ってみよう、と足を踏み出した。
「まさか……火事じゃないだろうな」
「まさか」
宗貴は言ったが、自然、足は速くなった。小道をひとつ登ったところで、それが本当に炎の明かりであることを知ってぞっと総毛立つのを感じた。
そんな、と宗貴は夜空を見上げる。紺青の闇を背に、山は黒い。その稜線は蠢いている。強い風に吹き煽られて山を覆った樅の梢が揺れているのだ。この乾燥、この風で火災になったら、おおごとになる。
背後に向かって声をかけた。
「おい、できるだけ来てくれ！」
大声を上げながら、周囲の数人とともに走る。駆けつけた家の裏手では火の手が上がっていた。炎は縁側を火の海に変え、襖や障子を駆け上がって、軒下を舐めるように屋

根に向かって噴き上げている。その明かりを背景に、ふたつの黒い影があった。

「誰だ！」

一方が振り返った。その腕から、ずるりと女の身体が滑って落ちた。振り向いた顔を赤々と炎が照らす。速見だ、と即座に分かった。速見は鉈のような刃物を持っており、それが炎に照らされ、滑ったように煌めいた。女はその場に手足を投げ出し、こそとも動かない。

「……まさか、手前が火を」

誰かの罵声に、速見は首を振った。怯えたように火と宗貴らを見比べた。と、唐突に駆け出す。逃がすな、と宗貴は叫んで走り出した。追いついたのは丸安製材の安森和也だった。和也は速見に飛びかかり、引き倒す。そこに追いついた人々が殺到した。誰ともなく凶器を振り上げた。なんてことをしやがる、と罵声があふれた。それを掻き消すような悲鳴が、長く尾を引いて上がった。

宗貴はそれを見て取って、女に駆け寄る。首の付け根から胸許にかけて、深い傷が見えた。虚ろに開いた目で、すでに絶息しているのが分かる。可哀想に、と思い、なぜこんなところに一人で、と思った。思った瞬間、女の身体からガソリンの匂いを嗅いだようにも思ったが、これはたしかとは言えなかった。

そうしている間にも、炎は廃屋を舐め、錆びたトタン板で覆われた藁葺きの屋根を駆

け昇り始めていた。
「おい——人を集めるんだ！　えらいことになるぞ」
宗貴の声に、男たちが声を張り上げる。駆けつけた者たちが近くの水道に取りつき、水を得ようとしたが肝心の水が出なかった。
「断水か？」
宗貴は声を上げた。
「駄目だ——山入には上水道がない」
そう、ないのだ。山入の住人はわずかに三人、老人たちの住んでいた二軒の家は、井戸水に頼っていた。地下水を汲み上げているのは電動ポンプだ。停電したままでは水を汲み上げることができない。
「どっかに」と宗貴は叫ぶ。「釣瓶の残ってる井戸はないか！　誰か、手動のポンプが残ってる家をどこかで見なかったか」
声を張り上げてみたが、誰もが顔を見合わせた。とにかく谷川から水を汲んでくる、ポンプか釣瓶を探してみる、と声だけを残し、方々に村の者が散っていったが、そうしている間にも火は屋根を覆って火柱を夜空に上げ始めた。強い風に煽られ、火の粉が舞う。藁葺きの屋根は燃える端から崩れて火種を撒き散らし始めた。
「消防車」と、金切り声を上げ、女が一人、間近に飛んできた火の粉を踏み消す。その

側にまた火の点いた藁しべが降る。
電話は繋がらない。無線も繋がらない。電気は来てない。こうなるともう、手も足も出ない。消防団の車庫にはポンプ車が一台眠っているが、肝心の道は土砂で塞がったまま、土砂の山にせよ抜け道にせよ、ポンプ車が越えてこれるものかどうか心許なく、何よりも急を知らせることすらできないようでは、とうてい間に合うまい。
見ている間に、すぐ風下の家の屋根に火が点いた。ここも昔ながらの藁葺き屋根だった。庭木にかかった火の粉が枝に留まり、枯れた葉を焦がし始める。
「駄目だ……」と、宗貴は呟いた。「おい！　水はいい。それより残った屍体を家の中に放り込もう」
でも、と声を上げた者に、宗貴は怒鳴る。
「急げ！　運び下ろしてる間も、穴を掘って埋めてる間もないんだ」
宗貴は炎上する建物を見上げた。
「こうなったらもう、この火がなんとかしてくれることを祈るしかないよ」

3

恵は物陰から物陰へと身を潜め、大塚製材の材木置き場まで辿り着いていた。

恵が目を覚ますと、山入は無惨な有様になっていた。かろうじて逃げ出したが、逃げ出せた恵は運が良かった。眠っている間に寝場所を暴かれていたら——。

なんとか山を抜け、村を縦断してここまで来たものの、村道は塞がれ、農道も塞がれている。けれども村には道なんていくらでもあるのだ。下外場の畦道を辿れば、国道に出ることができる。

そう——国道に出るのだ。

村を出るのだ。もう恵を村に縛りつけるものはない。佳枝もいない、おそらくは桐敷の者たちも。飼い主はいないのだ。自由になっていいはず。

あの国道を南に下り、人の多い町に逃げ込む。そしてどうにかして、もっと人の多い不夜城のような都市に向かうのだ。雑踏は恵を隠してくれる。夜のない町では居場所にも獲物にも困るまい。

(どうやって……?)

実際にどうやって生き延びるのか、恵には具体的なイメージは何ひとつなかった。これまでだって家を出ようと思うことがあった。けれどもこのイメージのなさが、恵を村に縛りつけてきたのだ。具体的なイメージがない。だから怖くて実行に移せなかった。今も寄る辺を失うことを思うと、怖くて不安でたまらなかったが、村に残っていても殺されるだけだ。

（……死にたくない）

なんの楽しみもないまま。村に閉じ籠められたままで終わりたくない。この世のどこかに――それはたぶん都会のどこかだ――人生を謳歌している同じ年頃の少女がいる。あらゆる楽しみを享受し、華やかに暮らしている者たちが。こんな惨めな暮らししかしないまま、何ひとつ華やかなことも楽しいこともないままで終わってしまいたくなかった。やりたいことがある、望みがある。恵にはまだ可能性があるはずだ。それを全部、あんな恐ろしい凶器で断ち切られてしまうなんて我慢できない。

村を出るのだ。もっと早くにそうすれば良かった。後先を考えない無謀な少女たちが都会に吸い寄せられ転落していくのを、恵は軽蔑をもって眺めていた。その踏ん切りが妬ましく、同時にあまりにも分かり切った凋落を蔑んでいた。だが、そのほうがどんなにましだっただろう。もっと早く、夏が来る前に逃げ出してしまえば良かった。こんな後悔は一度で充分だから、今度こそ恵は村を出て行くのだ。

周囲の様子を窺った。畦道には誰の姿もない。国道には畦道を見張るように何人かの人影が立っていたけれども、数は決して多くない。視野を掠め、国道を渡り、畦道に下りることができれば、夜陰に紛れて南へと下っていける。

恵は身を低くして、そろそろと国道のほうへ近づいた。なんとか国道を渡るのだ。向こう側の暗がりに飛び込んでしまえば、あとは歩くだけ。高架を越えるほど離れれば国

道沿いに歩いていけるし、そうすれば運が良ければヒッチハイクもできるだろう。車の中に乗り込んでしまえば、どうにでもなる。上手く襲ってしまえば、都会に連れて行ってもらうことができる。しばらくはそいつで食い繋げるのだし、そいつの懐にあるもので当面をしのぐこともできるはずだ。

見逃して、と恵は祈る。沙子のように大それたことなんてしようとは思わない。ひっそりと都会の夜に紛れ、食うために最低限の命を狩るだけだ。屍鬼が一人、都会に紛れ込んだからと言って、何だと言うのだろう？　事故で、暴力沙汰で、命なんて簡単に欠けていくのだ。自分一人の取り分ぐらい、見逃されてもいいはずだ。

（だから……お願い）

恵は左右を見渡し、思い切って畦道を飛び出した。前に進むことだけを考えて、ひといきに国道を駆け抜ける。田圃の中に飛び下りたとき、「誰かいたぞ」と言う声が聞こえた。もう遅い。恵は夜の中に飛び込むことができた。夜目の利かない人間なんか怖くない。

思った瞬間、眩しい明かりが射した。恵の前に黒々と長い影ができた。振り返るとヘッドライトが、正確に恵を狙っている。

「あそこだ！」

恵は悲鳴を上げた。田圃の中を遮二無二駆ける。車では追ってこれないはずだ、そう

思う恵をエンジン音が追ってくる。たまらず振り返ると、オフロードのバイクが一台、田圃に下りてきたところだった。

恵は絶望的な悲鳴を上げた。どこか——身を隠せるところ。安全な場所。

走りながら周囲を見渡しても、そんな場所はどこにもない。収穫の終わった田が、あるいは放置されたまま稲の倒れた田が広がっている。

足が縺れた。エンジン音が迫ってきて、追い越しざま髪を掴まれた。恵は宙に放り投げられるようにして、畦道に叩きつけられ、排水路の中に転がり落ちた。

慌てて身を起こそうとしたが、狭い排水路の中、身動きもままならない。かろうじて身体をひねり、身を起こそうとした胸許に切っ先が突きつけられた。恵はその感触で身体が凍りついた気がした。

(これ……)

懐中電灯の明かりが恵の顔を照らす。

——恵ちゃんじゃないか。

無事だったのかい、と言ったのは田中だっただろうか。そう言ってくれればいいのに。

「……見たことがあるぞ」

——この子は知り合いだ、大丈夫だ。

そうしてこの胸を突いた切っ先がどけられる。助け起こされ、大丈夫か、と労られる。

「まだ娘じゃないのか」
「敵か？　味方か？　どっちだ」
（敵じゃない……）
「逃げたんだから、化け物の仲間だろう」
違う、と恵は叫びたかった。なのに声が出なかった。歯の根が合わないほど震えている。この切っ先をどけてほしい。――こんなものを刺すなんて、そんな酷いことをしないで。
「即断するんじゃない」
その声に、恵は救われた気がした。男が排水路に屈み込んできた。松尾誠二だった。誠二は大きな手を差し伸べる。恵はそれに摑まろうとしたが、誠二はその手を避けるようにして恵の首を摑んだ。そして懐中電灯で恵の顔を改めて照らす。
「……清水の恵ちゃんだね」
恵は泣きながら頷いた。――そうです、恵です。小さい頃からよく知っているでしょ。お宅の小母さんも、子供もよく知ってる。あの恵です、だから酷いことはしないで。
誠二は首を振った。
「屍鬼だ」
違う、と恵は叫んだ。酷いわ、なんでそんな嘘を言うの。あたしが何をしたの、どう

して、こんな。叫んだのか、それとも叫んだつもりになっただけなのかは、恵にも分からない。
ぐっと鈍い痛みを伴い、杭の先が押し当てられた。あまりの痛みに恵は咳き込みそうになる。ヒッと風鳴りのような音を立てて吸い込まれた息はしかし、咳き込むまでもなく杭にハンマーが打ち下ろされる衝撃で押し出された。骨を軋ませる衝撃、胸骨が砕けた痛み、何かが、恵の身体を裂いてめり込んでくる。
(……うそ)
恵は口を開けた。悲鳴よりも先に、大量の血が逆流してきてあふれた。痛い、と思ったのが意味のある思考の最後だった。恵の意識は弾け飛んだ。ただ杭のめり込む衝撃だけが知覚されていた。ハンマーが打ち下ろされるごとに杭は揺れて軋み、恵の骨を砕いて肉を裂いた。血があふれて排水路に流れ込んだ。恵の身体が完全に停止し、意識が完全に絶えるまでには、十分よりも長い時間がかかった。

誠二は排水路の中で死んだ身体を見下ろした。
「大丈夫だったのかね。本人は違うと言ってたが」
誰かの声に、誠二は首を振った。
「違うもなにも。こりゃあ清水の娘だよ。おれが葬式の采配をしたんだ」

そうか、と複雑そうな声がする。
「脈もなかった。間違えようなんかないさ」
だが、後味は悪い。知り合いで、しかもまだこんなに若い。屍体が無惨なだけに虚無感と倦怠感を誘った。こんなことがいつまで続くのだろう。ここまでして守らなければならないものがあるのだろうか。
「おい……」
誠二は側にいた誰かに肘の先で小突かれた。振り返ると、矍鑠とした老人が一人、北の山を見上げている。
「どうした?」
「なんか、北山のほうが明るくねえか?」

4

沙子は斜面を上り下りして、完全に自分が山の中のどこにいるのか見失ってしまっていた。
――たかだかこれだけの山なのに。
常に北山を見ていれば大丈夫だろうと思った。それが甘かったことを、沙子は痛感し

ないわけにはいかなかった。斜面を上へ上へと登れば少なくとも山の稜線に出るはずだと思ったが、それですらおぼつかなかった。
それでもとにかく小走りに山を抜け、狩人を引き離したはずだった。なのに沙子は前方に狩人の姿を見つけて立ち竦む。狩人は斜面の上を振り仰ぎ、そして確実に沙子の姿を捉えた。
「――いたぞ」
清水といったと思う。恵の父親だ。肉親を奪われた憎悪は深いだろう。沙子に怯えるとは思えなかった。
「いたぞ、こっちだ！」
清水は叫んだ。その瞬間、怒りで清水の顔が膨れあがったように見えた。沙子は怒気から逃れるように進路を変える。夜目が利くことがせめてもの救いだ。下草を強引に掻き分け、幹から幹へと縋りながら、ひたすらに斜面を駆ける。息が荒い。呼吸する必要などないのに、喉許に喘ぎがわだかまるのを、沙子は本当に不思議だと思う。これは身体が覚えている反射の名残なのだろうか。それとも、それなりの理由があってのことだろうか。
背後から、そして下から呼び交わす狩人の声が聞こえていた。彼らは沙子の所在を掴んでいる。明らかに追ってきている。距離は近づいていないが、行方をくらましてしま

えるほど離れてもいない。
沙子は声から逃れてまた斜面を登った。疲れない足、ある程度以上に弾むことはない呼気。狩人の疲労を誘い、追跡のスピードが緩むのを待つしかない。静信を――最後の庇護者を置き去りにして、沙子は斜面を駆け登る。本当に――なんて、浅ましい。
声が離れた。代わりに増えたように感じる。狩人が集まっている。包囲網を狭めて追ってきている。
ここはどこだろう。具体的な位置は分からないが、頂上まで出れば、その向こうは山入のはずだ。山入に行けばまだ仲間が残っているかもしれない。抜け道もあるし、少なくとも村から遠ざかることができるはず。
ひたすらに斜面を登って、稜線に出た。傾斜は下りに傾き、梢の間から窺い見える視野は広くなった。それに励まされながら斜面を下り、そして沙子は異臭を嗅いだ。
前方が微かに明るい。梢の間から見える山入は霧のようなものの中に沈んでいた。狭い谷間の底はガスに――いや、煙に満たされている。
まさか、と沙子は思わず足を止めた。吹き上げてくる風には焦臭いにおいが混じり、潮騒のような風音に混じって、別種の異音が響いていた。煙に満たされた谷間には、赤い明かりが滲んでいる。それが揺らぎ、時折強くなり、煙に霞んでまた暗くなる。
「……火……」

馬鹿(ばか)な、と思う。この風、この乾燥の中で火を使った者がいるのだ。狩人だろうか。それが山入に火を放ったのだろうか。そんなことをしたら。
呆然(ぼうぜん)とした沙子の背後で、男の怒声が響いた。
「いたぞ！　すぐ下だ！」
沙子は背後を振り返る。斜面の上に狩人の姿が見えた。なんとか迂回(うかい)路を探さなくては。沙子は身を屈め、煙の中に下りていった。

5

明かりが、と敏夫に言ったのは結城だった。
「なんだか北のほうが明るくありませんか」
言われて見上げる。たしかに北山の向こうが禍々(まがまが)しいほど明るかった。
「何だ……あれは」
敏夫は境内を出る。一之橋の袂(たもと)まで辿(たど)り着いたとき、盛大なエンジン音をさせて、山入のほうから車の群が戻ってきた。
敏夫、と村迫宗貴が車を降りる。
「タカさん、あれは」

「山入だ」

「――消火を」

言いかけた敏夫を宗貴が止めた。

「消火できないんだ。水がない。第一、もう間に合わない。山入は諦めるしかない。すごい勢いで火の粉が飛んで、建物の半数以上が燃え始めてる。北山の斜面にも火が入った」

敏夫は呻いた。

「消防車が来るぞ」

「山入の屍体は火の中に投げ込んできた。すでに車に積んであったぶんだけは運んできたけど」

「とにかくそれだけでも境内に」

宗貴は頷いて、後ろの小型トラックに合図し、敏夫を振り返った。

「あの娘は？」

「まだだ。屋敷に隠れていたが逃した」

敏夫はそれだけを言った。逃した二台の車のうちの一台に、幼馴染みの姿を見たことは口にしなかった。

「娘のほうは大川さんたちが捜してる」

「使用人は」

「分からない。車で飛び出してきて、村中を逃げまわったあげく、三之橋から川に落ちた。車は中洲の岩に当たって大破した。そのまま水の中だ。引き上げて運転手の姿を確認している余力がない」

「そう……」

とにかく、と敏夫は顔を上げた。

「外部の連中がやって来る。何としても、それまでにこの屍体の山をなんとかしなきゃならん」

「住民の避難は」

「そんなことを言ってる場合か。とにかく屍体の処理が最優先だ。貴重品を運び出すのは構わないが、車で避難しようとする連中を村から出すな。道を塞ぐんだ。――松尾さんはいるかい」

「そんな。おい、敏夫」

責めるように宗貴が敏夫の腕を摑んだ。敏夫はそれを振り解く。

「タカさんの言いそうなことぐらいは分かる。女子供だけでも先に村を出せと言うんだろう。山に火が入ったのなら、下手をすると村にも飛び火する。避難させたいだろうが、そういうわけにはいかないんだ」

「どうして」

「車が足りないんだ！」
宗貴ははっと息を詰めた。
「連中が、かなりの数の車に穴を開けた。一軒に一台の車が行き渡るかどうか分からないんだ。しかも屍体を運んで始末するのにも車はいる。人手だっているんだ。屍体を始末して、火が北山を越えてくるのをなんとか止めなければ、これほどの犠牲を払って守ったことの意味がない。——違うか」
「あ……ああ」
「人手は残しておいてもらいたい。女手だろうと今は必要なんだ。しかも女子供を避難させるのに、使える車を持っていかれてしまうと、屍体の処理をする車両にも困る。あげくに、村に火が及んだとき、踏み留まった者が逃げ出す手段がなくなってしまう」
宗貴は黙り込んだ。
「外の連中にあの屍体の山を見られたら、おれたちは終わりなんだ。とにかく、あれを始末することが最優先だ。怪我人と子供たちに貴重品だけ入れた荷物を持たせて、国道の周辺に待機させろ。世話をする者を残して、残りは全部、境内に集めてくれ」
その境内のほうから、松尾誠二が駆けつけてきた。誠二は北山を見上げ、顔色を失くす。敏夫は同じ指示を繰り返した。誠二は頷く。
「ドライブインに集めます。年寄りを世話係に残しましょう。手前だけ逃げ出そうとす

る奴がいたら、車から引きずり出してキーを取り上げます」
「それがいい。本格的に避難するとなったら、分乗しなけりゃならんから」
「ええ。——とにかく、村を駆けまわって、路上に屍体が残っていないか確かめないと」
「路上の血痕もなんとかしなきゃならん」
誠二は頷く。
「あと、押し込んだ跡もです。消防車が入ってきたとき人目につきそうな場所の家が、あまり極端に破損しているようなら、怪しまれない程度にしておかないと」
「どのくらい猶予があると思う」
「分かりません。でも、今は夜だから煙は見えない可能性が高いです。北山の陰になって、あの明かりもまだはっきりとは見えないかも。——ただ、北山のこちら側が燃え始めたら隠しようがないです」
「時間がない」
「急ぎますよ」
宗貴は物言いたげに敏夫を見る。
「……他に方法があるか?」
「いや……たしかに、ない……」
でも、と間近の男が声を上げた。

「あの娘はどうするんです。あいつが元凶なんですよ」
敏夫は渋面を作った。
「大川さんらに期待するしかない。今からわざわざ人手は割けない」

6

煙に咳き込みながら、沙子はなんとか斜面を下ろうとしたが無理だった。いぶされて喉が痛む。耐えかねて斜面に沿い、迂回路を探した。
そこだ、と声がしたのは、その最中だった。見上げると、薄煙の向こうに厳つい男の姿が見えた。息も絶え絶えに、待ってくれ、どこだ、と呼び交わす声がする。沙子はほとんど追っ手から逃げられていない。
「逃げ場はねえぞ」
男は恫喝した。沙子は身を翻し、斜面を下る。すぐに煙が押し寄せ、さすがの沙子も視界が定かでなくなった。喉が詰まる。この感触は久しぶりだ。
慌てて斜面を横這いに走る。沙子にももう、自分がどこに向かっているのか分からなかった。ただひたすら、男から——男が手にしているであろう凶器から逃げる。逃げないではいられない自分を、醜いと思う。

これは報いだ。殺戮に対する罰。なのに必死で枯れた草叢を掻き分け、斜面を這い上り、転がり下り、なんとか活路を探そうとしている。こんな生など投げ捨ててしまえばいい。そうすれば自分にも、自分以外の者たちにも平穏が訪れるというものだ。

（そして世界は調和する……）

汚らわしい殺戮者が取り除かれて、全き神の世界が修復されるのだ。

（なぜ？）

沙子は斜面を滑り落ちながら自問した。草叢に転がり込み、枯れた枝葉に掻き切られながら、さらに樅の中を遮二無二走る。蒼い闇は見通しが利いたが、一条の光も見えないことに変わりはなかった。山入からは遠ざかっているのだろう、煙の臭いは薄れたが、背後から風に乗って届く追っ手の声は、近づきもしない代わりに遠ざかりもしなかった。やっと振り切ったと思っても、別の方角から違う声が聞こえる。追っ手は信じられないほど執拗だった。――当然のように、とも言える。そう、罪は必ず罰と貼り合わされているものだから。

（なぜなの？）

茂みを掻き分けると、開けた場所に出た。沙子はやっと自分が今どこにいるのかを理解した。目の前には、異形の怪物の屍のように黒い建物が残骸をさらしていた。

――なぜ。

沙子はその建物に駆け込む。蒼い闇、堆積(たいせき)した沈黙と絶望、高窓には信仰と決意が掲げられながら、それが見下ろす空間のどこにも信徒はおらず、空洞の祭壇は祈るべき対象を欠いたまま朽ちていこうとしている。

沙子はその祭壇に駆け寄った。

「なぜそんなに、わたしを疎(うと)むの！」

救済を求めて縋るべき神がいない。なぜなら沙子こそが神に敵対する者だからだ。

「でも……望んで敵になったわけじゃないわ」

死に瀕(ひん)する自分を救ってもくれなかった。起き上がることを止めてもくれなかった。沙子を罪から遠ざけることはしなかったくせに、許しを施してくれることもしないのだ。

なぜ、さほどに我を憎み給(たま)うか。

「どうしてなの！」

がたり、と背後で音がした。沙子は祭壇に縋って振り返った。蒼い闇をハンドライトの光が切り裂く。戸口には厳つい男の影が立ち塞がっていた。

「どこに逃げようってんだ、え？　逃げ場はねえって言ってるだろうが」

大川は、怯(おび)えたように振り返る少女を見据えた。息が荒い。脇腹(わきばら)が痛むが、今は獲物を捕捉(ほそく)した、という高揚感の前にさほどの苦痛を感じなかった。少女は身を翻し、小動物のように声を上げて廃屋の片隅に逃げ込もうとする。いたいけに見えるのが、おかし

かった。さんざん村の者を殺したくせに。——だが、いかにも怯えたふうがいい。溜飲が下がるというものだ。
大川は足を踏み出す。恐怖を露わに、逃げ場を探すのが楽しい。今にも倒壊しそうな荒ら家で、天井の一郭も落ちてはいるが、四方の壁は無事なようだった。袋の鼠だ。何がなんでも捕まえてみせる。悲鳴も上がらないほど残虐に殺してやる。想像すると愉しくて、哄笑が喉をついた。それに怯えたように少女が足を止め、一瞬、身を竦めてまた物陰を探して走り始めるのが、さらに笑いを誘った。
少女が転ぶ。あがいて立ち上がり、逃げる。焦っているのか、少女の足が縺れだした。大川は少女と戸口の間に立ち塞がりながら、着実に距離を詰めていった。仲間の声が耳に届かなくなったが、あんな子供一人、仲間の手などなくても大川だけで事足りる。さらに距離が詰まった。傾いたベンチを挟んで向き合い、大川は床を蹴った。ベンチを踏み台に、少女の身体を薙ぎ倒すようにして飛びかかり、床を転がってついに敵を捕らえた。
「捕まえたぞ、餓鬼！」
羽交い締めた腕の中で少女が悲鳴を上げて、大川は爆笑した。これで終わりだ。ついに敵は大川の支配下に堕ちたのだ。
少女の胴は、片腕で抱えられるほどしかなかった。身もがく身体を締め上げる。とっ

さにだろう、少女が大川の首に抱きつこうとしたのを見て取って、空いた片手で顔を突いた。そのまま手近の壁に後頭部を叩きつける。

「とうとう観念するしかなくなったようだな、え？」

荒い呼気の合間を突いて笑いが漏れる。哄笑は止まらなかった。首の付け根、顎を摑んで締め上げ、壁に押しつけて宙吊りにする。少女は細い手足を振りまわしたが、大川はその衝撃を毛ほどにも感じなかった。

じたばたするな、と命じながら、大川は獲物が抵抗することを楽しんでいた。傷つけられまい、逃げようとして虚しい努力をしているのを踏みにじるのが愉しい。これがこの人殺しの末路だと思うと笑いが止まらなかった。かろうじて束縛を逃れた少女の腕を摑んで振りまわす。床に叩きつけ、馬乗りになり、そして腰に帯びた杭を摑んだ。杭を構えた瞬間、少女が悲鳴を上げて海老反った。

「怖いか？　これが怖いか」

嗤わせてくれる。なんて愉快な小娘だ。

大川は爆笑し、ふと思いついて杭を置いた。代わりにナイフを取り出して手近のベンチの端に突き刺し、細く木片を裂き取る。

「怖がらせちゃあ、可哀想だ。これならどうだ？　これっぽっちなら怖かねえだろう」

大川が示した木片は十五センチほど、身を捩る少女の腕を捕まえて引き起こし、手近

の壁に張りつける。

「やめて、お願い！」

「そりゃあないだろう、嬢ちゃん。あんたみたいな人殺しがそれを言うのは、お門違いってもんだ。そうだろう、え？」

「杭はいや！　お願いよ！」

　大川は笑った。笑って少女の腹を膝で突き上げて支え、木片を白い掌に突き立てた。体重をかけて薄い身体を壁に押しつけ、金槌を摑む。少女は目を見開き、悲鳴を上げた。木片は一撃で薄い掌を貫き、壁に縫い留めた。大川はまた爆笑した。

「お楽しみはこれからだ」大川は痙攣する身体を見下ろす。「あんたの餌食になった遺族を全員、呼んでくるってのはどうだ。全員にこういう小っこい杭を持たせて打たせてやるんだ。それでこそみんなも溜飲が下がるってもんだろう」

　少女は喘ぐ。呻きながら嗚咽を漏らした。

「人殺しの化け物が。今まで一体、何人の人間を殺したんだ、え？　一度でも仏心を起こしてやったことがあるのか。家族のことを考えてやったことがあるか？」

　少女の返答はない。苦痛のあまり答えられない、というように見えた。大川の声さえ耳に入っていないのかもしれない。

「お前はまだ死んでない。だが、みんな死んだんだ。お前が殺した。こんなもんで済む

と思うなよ」

大川はさらにベンチから木片を削ぎ取った。先を尖らせるために少女の腹に当てた膝を緩めると、縫い留められた掌を支点に少女の身体が沈む。それを笑いながら先端を削り、再度、釘のような杭を作っていると、少女の掌のほうが裂けて身体が落ちた。

裂けた手を胸に抱き込み、悲鳴を上げて蹲る少女を大川は笑いながら見下ろす。少女の腰を踏んで、せっかく捕らえた獲物を逃がすような愚は犯さなかった。

惨いとは思わなかった。憐れみは必要ではない。これは正義だ。ここにいるのは残虐な化け物であって、慈悲の必要な子供などではない。誰も大川を責めはしないだろう。

木片から杭を削り出した。手許と少女を見比べるのに忙しく、大川は背後に近づいた人影に気づかなかった。廃屋の外で吹きすさぶ風の音が、背後の気配を完全に隠していた。

それに気づかなかったのは、沙子も同様だった。腰を踏み据えられた大川の足が緩んで、やっと頭上を仰ぎ見る余裕ができた。大川は前のめりにたたらを踏み、片手で頭を抱えて驚いたように背後を振り返った。温かな血が、沙子の顔に降りかかってきた。

痛みのせいで目が霞み、大川の背後にいる人物の顔はしかとは見届けられなかった。ただ、重い刃物が鈍く光って大川の側頭部に落ちた。大川は呻いて前のめりに泳ぎ、かろうじて近くのベンチに手をついて身体を支えたが、その後頭部に向かってまた刃物が

振り下ろされた。

耐えかねたように、大川の身体が落ちた。軽く地響きがし、舞い上がった埃が渦を巻く。

沙子はいつの間にか、起こしていた上体を縮めた。救済などあるはずがない。沙子に奇蹟を施してくれる神はいない。なのに、誰かがたしかに沙子を救ってくれたのだ。

沙子は呆然と人影を見上げた。

「……室井さん」

7

静信は沙子を見下ろした。沙子の驚愕に見開かれた目が、ふいに悲嘆を浮かべるのを、たしかに見たように思った。

静信はそれから目を逸らし、右手に握ったままの山刀を手放した。それは落下し、倒れた男の無惨な傷痕の近くの床板に突き立ってから倒れた。男の後頭部は藻が付着した岩礁のように見えた。滑らかな丸みが失われ、そこに付着して海草のように絡み合った髪は濡れている。おそらく生きてはいないだろう。その体格から、大川富雄だろう、と静信は目算をつけた。

風が樅の枝を揺すって潮騒のような音を立てていた。風には焦臭いにおいが混じっている。光源になるものもないのに視野は明るい。まるでフィルターをかけたようにすべてが蒼褪め色彩を失っていたが、暗くはなかった。大川の傷の細部が見て取れる。それは限りなくおぞましい眺めのはずだったし、事実、静信はその凄惨な傷痕から目を逸らさずにはいられなかったが、同時にその傷痕は別の情動をも惹起した。それを明確に意識に乗せ、自覚することは無意識が拒んだ。

静信は床に蹲った沙子に視線を戻した。奇妙に明るい視野の中、自分のほうを見上げる沙子の複雑な表情も絵に描けるほど明瞭だった。枯れ草にまみれ乱れた髪と、泥や煤をなすりつけたような白い顔。見つめるうちに沙子は顔を歪め、俯いた。

「室井さん、……わたし」

屋外の風音に掻き消されても良さそうな微かな嗚咽もまた、明瞭だった。脇腹の焼けつくような痛みは鈍痛を残して引いていた。手を当ててみると血糊を吸った服から粘ついた液体が浸み出してきたが、手で堰き止めてもあふれてくる、という感触はもうなかった。きっと止まっているのだろう。

信明は甦生した。美和子が死んだのは屍鬼に襲われたせいではなかったが、もしもそうなら、やはり甦生したのかもしれない。おそらくは、そういうことなのだろう。

変容に対して衝撃は受けなかった。少なくとも現在は、それを淡々と受け止めている

自分を、静信は自覚していた。ひょっとしたら、静信はこれを予感していたのかもしれない。振り返ってみれば静信はこのところ、自分の身体に違和感を飼っていた。

「沙子」呼びかけた声もやはり淡々としていた。「怪我は」

沙子は俯き、顔を覆ったまま頭を振る。片手に酷い傷が見えたが、とりあえず、沙子は庇っている様子ではなかった。あるいはすでに塞がり始めているのかもしれなかった。

「では、立つんだ。急いで逃げないと火に追いつかれる」

沙子は再度、頭を振った。静信は膝をつき、沙子の髪から枯葉を払い落とす。乱れたそれを軽く撫でつけた。沙子は顔を上げた。

「逃げない。……室井さんも、ここにいて」

「沙子」

「そのほうがいいの。このままここにいて、全部を終わりにするの。ここがわたしたちの墓所になるのよ」沙子は静信の袖を掴む。「——それともわたしと一緒に死ぬのはいや？」

「立つんだ」

静信は沙子の腕を掴む。引き上げようとした沙子の身体は、思ったよりも数段、軽く、勢い余って腕を掴んで抱き上げる恰好になった。

「逃げても意味がないのよ、室井さん」

沙子は身を捩って静信から逃げ出す。内陣の奥へと走り込んだ。
「分からないの？　あなた——血の匂いが変わってる」
静信はこれに返答をしなかった。そう、沙子にも分かって当然だろう。静信自身も、分かっていたのだから。黙ったまま沙子を促そうとすると、沙子は怖いものから身を引くようにして飛び退いた。
「逃げても自分からは逃げられないの。それから目を逸らさないで！」沙子は言って、ベンチの間に倒れ込んだ大川の死体に指を突きつけた。「あなたの犯した罪はあなたを追ってくるのよ。絶対に逃げられない。罪深いだけの命なの。あなたが生き延びようとする限り同じ罪が無限に作り出されて、永遠にあなたを追ってくるのよ」
静信は頷いた。「……だろうね」
「逃げられないの、絶対に。あなたは今、この場を乗り越えることしか考えられないかもしれない。実際に人と火が追ってくるんだものね。それからは逃げることができるかもしれない。けれども追っ手や火から逃げても、あなたは何者からも逃れたことにならないのよ。きっと後悔する。あのとき逃げなければ良かった、って。今なら間に合う。あなた、まだ悔いるほど生きてない。傷ついて倒れたときのことを思い出しなさい。あのまま眠ってしまったと思えばいいのよ。そうすれば」
「来るんだ」

静信は沙子の腕を摑んで戸口へと引いた。戸口から覗いた空が赤い。風に乗って火事場の臭いが吹き込んできている。狩人は山入の火災に気づいたろう。たとえまだ気づいてないにしても、じきに気づく。このまま北山を横切って上外場の集落に出ることができれば、火事場の混乱に乗じて車の一台ぐらいは手に入れることができるに違いない。

「わたしは、いや！」沙子が身を捩った。「お願い、ここにいて。わたし、ここから動きたくない！」

静信は黙って沙子を引きずった。沙子の足許で歪んだ床板が軋んだ。

「わたしはもう終わりにしたいの。でも、あなたが残ったら、わたしの罪は終わりにならない。何もかも清算してしまいたいの。やっとその踏ん切りがついたの。お願いだから、そうさせて」

「君は自棄を起こしているだけだ」

「そうよ。自暴自棄になってるの。それでいいの。わたし、やっと自分を投げ捨てる気になれたの。気の迷いでも何でもいい、今はその決心がついてる。このままここにいれば、気が変わったときには手遅れになってるわ。それを望んでるの——お願い」

静信は沙子を振り返る。沙子は断固としてその場を動くまいと、傾いた祭壇に縋った。

「沙子、ぼくはたしかに君の犯した罪の具現だ。ぼくがこの世に生き延びている限り、君が死んでも君の罪は終わりにならない。ぼくを起点とする汚染が、君の罪を血脈のよ

うに伝えていくんだ」
「室井さん、だから」
静信はその場に膝をつく。
「ぼくは君が、なぜ十字架を畏(おそ)れ、招待なしに人家に入り込むことができないのか知っていると思う」
沙子は祭壇に縋ったまま目を見開いた。
「本当に？」
静信は頷く。
「たぶんね。実際の摂理は分からないが、その意味は分かったと思う」
「なぜ……？　どうして？」
「世界は調和しているからだ」静信が言うと、沙子は身を引いた。「君たち抜きで、世界は閉じているから」
「……分からないわ」
「世界は君たち抜きで完璧(かんぺき)に整合している。君たちはそこに二度と入ることができない。君は十字架を突きつけられたとき、何を思うだろう？」
「何を……」
「――自分が、圧倒的な少数であり、例外であり、秩序の外に、つまりは世界の外にあ

ることを思い知るんだ」
静信は空洞の祭壇を見上げ、二人を無言で見下ろしている殉教者たちを見上げた。
信仰は人々を束ねる。同門の隣人は血の繋がりはなくとも信仰という縁によってまとめられた同朋だ。信仰は慈愛を説き、博愛を説く。同種の生き物に対する団結の要請。この団結は、小さくは傾いたバラックの家庭から、血縁集団へ、地縁集団へと繋がり、圧倒的多数の無意識という神性によって束ねられ縒り合わされ、太くモラルと法と常識という強固な絆を作って、人々を調和の中に編み上げている。
「その中に、君たちは決して入れない。君は十字架が怖いんじゃない。その背後に、寸分の間隙なく束ねられた人類を見るんだ。そうしてそこから、永劫閉め出された自分の孤立を悟る」
「わたしたちは……」
「聞きなさい。――孤立は恐怖だ。君を守ってくれる法はなく、秩序も常識もモラルもなく、縋りつくべき神もいない。憐れんでくれる隣人もない、君のために義憤を感じてくれる同志もいない。君は世界に、ただ一人、守るものも保障を与えるものもなく、本当にまったく一人で立ち向かわねばならない」
「ええ、そうよ。でも」
沙子の縋る祭壇に神はいない。掲げられる何物も存在しない。

「屍鬼になるということは、孤絶を意味する。屍鬼は繁殖できない。血統は途絶し、家は崩壊する。遺伝は途絶える。血の絆も断たれる。捕食者と餌食には絆のありようがない」
「いいえ、でも」
「屍鬼になるということは、そういうことなんだ。血縁に象徴されるあらゆる縁からの隔絶。ばらばらになり、君はいかなる集団にももはや縁（ゆかり）を持てない。君はここで、屍鬼だけの社会を、集団を作ろうとした。そんなことができるはずがないんだ。君たちは流浪（るろう）の民だ。いかなる縁の中にも戻ることができない。屍鬼は徒党を組めない。なぜなら、獲物に対して捕食者の数があまりに増えれば、均衡が破壊されるからだ。同じテリトリーの中にあまりに多くの狩人がいれば、獲物は狩人の存在に気づく」
　沙子は怯（おび）えたように静信を見上げる。
「わたしが悪かったと言うの？　法外な望みを抱いたからいけないって？」
「そうじゃない。——君たちは異端者だ。君は徹底した異端であり、首筋にはスティグマが捺（お）された。二度と剝（は）がすことのできないそのスティグマは、君たちを暗黒の論理で聖別する。君たちは秩序を追われた者だ。神の論理で調和した世界に君たちは二度と立ち寄ることが許されない」
「酷いことを……言うのね」

「沙子」静信は泣くに泣けず乾いた少女の瞳を見る。「ぼくは君たちを哀れだと思う。君たちの存在は悲劇だ。それよりもっと本当に悲劇的なのは、君たちがすでに神の範疇を零れ落ちたにもかかわらず、信仰と思慕を捨てられないことなんだよ」

「……信仰……」

「君は、神様に見捨てられたという感じが分かる、と言った。そうとも、君たちは、死者が甦るはずもないという摂理を裏切った瞬間に、神に見放されたんだ。君は狩人になった。人を狩らねば生きていけない。人を狩るということは、人を殺すということで、それは絶対的な悪だ。——そう定めたのは誰だ？」

沙子は目を見開いた。

「それは君を見捨てた神の論理だ。本当は屍鬼でなくとも、あらゆる生命は命を狩るんだ。人が、生物が生きるためには、必ず何かを犠牲にする。何かの犠牲なしに生きることのできる者など、どこにもいない。有害であるものは有害であることによって、無害であるものは有益でないことによって、やはり何かを犠牲にしていく。人が世界の中で生きるということは、世界から自分の取り分を搾取して、自分以外のあらゆる他者を、自分のために折り曲げるということなんだ。そうとも——この地上はそもそも罪人の住まう流刑地なんだよ」

静信は沙子の手を取って、そっとその祭壇から引き剥がした。

「にもかかわらず、君は神の論理に徹底的に縛られる。すでに神の範疇を脱落した者は、神の調和で裁くことができず、神の摂理で言う罪が適用できるはずもない。なのに、君は依然、神を信仰していて、神の秩序の中に戻ることを切望していて、そのために君は神の秩序に悖る自分の行為を、どうあっても自主的に圧倒的な罪だとして受け止めなければならないんだ」

「……わたし」

「君たちは秩序を逸脱した自分を憎み、秩序を慕い、そこに戻ることを切望したあげく、自分たちを受け入れてくれる秩序を作ろうとした。しかしながら神の秩序を真似る限り、それはもう君たちを守るものとしては機能しないんだ。君たちは神の秩序を自分たちの手で再現しようと思った時点で、自らを罪人として排除し罰するシステムを作り出そうとしたことになるんだ」

沙子は顔を覆う。

「殺人は神の範疇の罪だ。君は甦ったときに神の掌から零れ落ちた。罪と咎められ、弾劾される資格さえ失ってしまったんだ。——それが異端になるということなんだよ」

「それって、もっと酷いわ……室井さん」

うん、と静信は頷いた。

「君が甦ったこと自体が、とても酷いことなんだよ」

顔を覆った沙子の背を静信は抱く。
「君は——」
　言いさして、静信はすでに血糊の乾いた自分の腹を探った。
「——ぼくたちは、生きていかなくてはいけない」
「わたし、こんな命は嫌だわ」
「それでも、ぼくたちは死なないでいるなら、生きていくしかないんだ。もちろん、死なないでいることと、生きることは同義じゃない。死にたくないという望みと、生きたいという望みもまた同義じゃない」
「ええ、そう。そしてわたしは、生きたいとは思えない。ただ、死にたくないの。それってとても虚しいことだわ。そんな生にしがみついていなくてはいけないの？」
「けれども、生きるということは結局のところ、存続のための存続に奉仕するということなんだよ。ただ存続のためにだけ存在する、その虚しさを抱えて、それでも諦めずにいるということなんだ」
「あがく、ということ……」
　静信は頷く。
「そう、ぼくは思う」

8

山入の火災が北山の稜線(りょうせん)を越えた。

敏夫はそれを絶望的な気分で見た。風は真っ向から吹き下ろしてくる。火の粉が舞って、すでに村に降り注いでいた。文字通り――早すぎる雪のように。

「これは駄目だ……」

敏夫は呟(つぶや)いた。部外者の介入は避けられない。北山の稜線を越えた以上、この明かりは溝辺町からも見えているに違いない。じきに消防車が駆けつけてくるだろう。

「尾崎さん……」

結城に問われ、敏夫は頷く。境内には、まだ屍体が残っており、しかもまだ村の各所にも残されたままだった。とても全部は集めきれない。

「こうなったらもう、火勢に任せるしかない。すべてを火の中に投げ込んで、口を噤(つぐ)むんだ」

炎の蹂躙(じゅうりん)に任せ、すべてを業火(ごうか)の中に葬(ほうむ)る。村人は離散し、外場は消滅する。あとには屍体が残されるが、誰も何も言わなければ、何が起こったのか、外部の人間が推測することはできないだろう。

敏夫は脱力してその場に腰を下ろした。自分のしたことは何だったのだろうか、と虚脱した頭の隅で思った。村を救いたかったはずだ。だが、その村は完全に崩壊して消え去るのだ。

「……負けなのかな、やはり」

敏夫が呟くと、結城が怪訝そうな表情で傍らから見下ろしてきた。

「勝ち負け……なんですか？　誰に対する？」

「さあ。誰だろう。おれは村を救いたくて、なのに失敗したわけで……」

「村を救うというのは、村の崩壊を食い止めるという意味ですか。それとも村を正常な状態に戻すという？」

敏夫は結城を見上げ、瞬いた。自分でも驚いたことに、敏夫自身、どちらなのか分からなかった。

「侵略を食い止める、なのかな。そういう意味では、まあ、なんとかやるだけのことはやれたんだろう。屍鬼のほとんどは狩ったと思うから。だが……」

村の存続を守る、という意味なら完全に敏夫は敗北したのだ。村はもう存続できない。それどころか、敏夫の行為は消滅を促したとさえ言える。そして、炎の中に消え失せていく村が常態を取り戻すことなどあり得ない。敏夫が守ろうとしたものは完全に失われてしまった。

だが、と敏夫は思う。村を常態に引き戻すことなど、果たして可能だったのだろうか？

　敏夫は疲弊していたし、なのに問題は山積していた。村の誰もがこの狩りをどれだけ続ければいいのか、と思っていただろうし、敏夫もやはりそう思っていた。どれだけの屍鬼を狩り出せば、すべてを倒したと安堵できるのだろう。まだ残っているかもしれない、と疑心暗鬼に囚われながら、警戒を続けるのか、狩りを続けるのか。事態を揉み消すために、これからどれだけの労力が必要になっただろう。役場の人間は全員がいないも同然だ。それをどう報告し、言いくるめるのか。孝江の死だってある。それを外部にどう伝えるのか。

　そうか、と思った。敏夫は村を救おうとしたが、どこかの時点で、村を救う術など失われていたのだ。敏夫がやったのは悪あがきに等しい。ただこのまま諾々と滅んでいきはしないと、最後に矜持をかけて一矢報いた、それだけのことなのかもしれなかった。

「……これで良かったのかもしれないな」

　そうですね、と側に立っていた結城が呟いた。

「今から思うと、いっそのこと住民を避難させて一気に村を焼き払ってしまっても、同じことだったのかもしれないです」

「ああ……そうかな」

「よく考えたら、我々が村を侵略以前の状態に戻すことなんてできるはずもなかったんです。あれだけの人間が失われて、その欠落を埋める方法なんかなかったんですから。最後に敵に襲いかかってみせたのは、文字通りの抵抗にすぎなかったという気がします。それとも報復だったのかな。殴られたから殴り返してやるんだという」
「そうかもしれん」
「こうして冷静になってみると、屍鬼を狩って、それで何を取り戻せるつもりでいたんだろう、という気がしませんか。屍体を抱えて記憶を抱えて、このまま村に踏み留まれる者がどれだけいたんでしょうね。しかも周りは共犯者だらけなんですよ」
「……ああ」
「ここにいる限り、絶対に忘れられない。けれども村が残れば、意外に人は踏み留まろうとしたんじゃないかという気がします。地縁というのは強いものですね。わたしも息子がここにいる限り、離れられなかったと思う」
「そうかもしれない。そうして残っても、誰もがみんな悪夢の中に半分、足を突っ込んだままだ。死ぬまで覚めることはないんだろうし、それを思えば村が残っても常態が戻ってくることなんかあり得なかったんだろうな。村は変わる……かつてからは想像もつかないような、途方もなく歪な姿に」
「それこそ起き上がりですね」

「そうだな……」
だったら荼毘にしてしまったほうがいいのだろう。畢竟、そのほうが村のためだ。だが、そこにしか辿り着けなかった自分が悔しい。そう——、たしかに村を常態に引き戻す術など失われていたのだ、とうの昔に。事態はどこかの時点から修正不可能なところに踏み込んでいたのだし、もちろん敏夫にだってそれは分かっていた。それでも何かをしなければならないと——。
「そうか……」と、敏夫は呟いた。結城が問いかけるような声を上げたが、これには答えなかった。
自分は何かをしたかったのだ、この村で。村に唯一の病院、村人の生命を預かっていると言いながら、実はそれはすでに敏夫の手の中にはなかった。病院としての意義を失った病院、医師としての意義を失った医師、尾崎としての意義を失った尾崎。
「参ったな……あいつの言った通りか」
そう、幼馴染みの言ったように、自分はこの状況を支配したかったのだ。倦怠があった、辟易していた。何よりもただ虚しかった。だからこそ疫病を、あるいは敵を組み伏せることで自分の存在意義を摑み取りたかった。自分の振る舞いが世界を改変し得ることを、確認してみたかったのだ。世界にとって無価値な泡沫のひとつにすぎないわけではないことを、自分にも他者にも証明したかった。

それには成功したのだろうか？　そうなのかもしれないし、そうでないのかもしれない。どちらにしても、これで終わりではあるまい。自分はおそらく、生のある限り、そうやって泡沫にすぎない自己に抵抗し続けるのだ。そんなものなのかもしれんな、と敏夫は北の山を見上げた。そして敏夫と同じく、虚脱したように山を見上げている人々に声をかける。

「全員を『ちぐさ』に集めよう。分乗する車の割り振りを決めないと」

「でも——先生」

「せめて着替えるぐらいは、着替えておいたほうがいいだろうな。みんな血だらけだ。車を出して、家に荷物を取りに行く者がいるようなら送ってやれ。とりあえず、その間に怪我人と子供を分乗させて、一足先に村から出す算段をしよう」

はい、と周囲の者が頷いた。敏夫はもう一度、北山を見上げる。火勢はもう山寺に迫ろうとしている。——すべてを呑み込んでいく。

終章

「なんとかですね、室井さんにインタビューをさせていただきたいんですよ」
　男は言って、喫茶店の狭いテーブルの上に本を置いた。カバーを外されたその本は、つい先だって津原自身が手掛けたものだった。それを指の先で軽く叩き、男は煙草に火を点ける。フィルターを啣えた口許は笑っていたが、津原は男が、実は苛立っていることを了解していた。
「連絡先を教えていただけませんかね。電話でも繰り返したように、室井さんに執筆をしてもらおうとか、そういうことじゃないんですよ。わたしは別に出版社の人間じゃない、単なるライターですからね」
「それは再三、聞きましたから了解しています。そうではなく——」
　津原が言いかけると、男は手を挙げて言葉を遮る。ちょうどそこにウエイトレスがコーヒーを運んできて、津原も言葉を続けるタイミングを失してしまった。
「室井さんに話を聞きたいだけなんです。別に何か書いてもらおうなどとは思ってない。

もちろん、暴露記事を書きたいわけでもないです。差し障りがあると言うなら、室井さんのお名前は伏せてもいい。わたしは単に外場に興味があるだけなんです」

男はいかにも年期の入ったふうな鞄の中から、フォルダを取り出した。台紙にきちんと貼り込んだ新聞の切り抜きをざっと示す。見るまでもなく、それが昨年に起こった例の事件のものだということは分かっていた。

「外場村に住んでいたんでしょう、室井さんは。少なくとも例の事件の直前まで外場に住んでいたことは間違いがないはずです」

「たしかに、そうです」津原は答えながら、何度、同じやりとりをすればいいのだろう、という気がしていた。「しかし、電話でも申し上げたように、ぼくは――」

男は再度、手を挙げた。うんざりしたように煙を吐く。

「どうして所在を隠すのかな。……あちこちに訊いてまわったんですけどね、どこも教えてくれないんだ。知らない、の一点張りで。みんなあの事件のあとに連絡を取ってない、と言うんです。しかし、そういうことがあり得るんですか？　普通、付き合いのある作家の住んでいる町が焼けたと聞いたら、見舞いの電話ぐらいするもんなんじゃないですか」

もっとも、と男は口許を歪める。

「火災のせいで電話は不通だったし、あのあと、村は存在しなくなったと言っていい。

なにしろ、四百戸からあった家屋がほぼ全焼して住人も離散したまま、四か月近く経ったと言うのに、戻ってきた者はいない。事実上の廃村ですよ。住人のほとんどは転出してますけど、室井さんは転出届を出してない。外場に住民票を置いたままです。だから、室井さん本人から新住所を知らされない限り、連絡先の知りようがない、と言う他社の言い分は分かる。――しかし、おたくさんの場合それは通らない。つい先日、室井さんの新刊が出ているじゃないですか」
　男は笑って、テーブルの上の本を示した。
「しかも、聞くところによると、津原さんは室井さんの先輩だそうで。同じ大学の卒業生で、同じ寮に入っていた。室井さんがデビューしたのだって、おたくさんの雑誌からだ。いろんな意味で旧知の間柄でしょう。しかも新刊だって出てる。相応のやりとりがあったはずですよ。原稿を受け取って、ゲラ刷りを出して著者校正を受け取って――違いますか？」
「それは、そうですが」
「そちらさんがね、神経質になるのも分からないわけじゃないです。なにしろ、とんでもない事件だったから。――実際、妙な事件だ」
　男はフォルダから新聞の切り抜きを引き出す。ざっと広げてみせた。
「最初は単なる山林火災に見えたんです。続報が入ってみると、すでに村がひとつ火災

に呑(の)まれたらしい、と言う。折からの異常な乾燥と強風に煽(あお)られて、火は麓(ふもと)の市街地に迫っていた。最終的に少なくとも市街地への延焼は食い止めたわけですが、それまでに一千ヘクタールの山林と村がひとつ焼失している。しかしながら、市街地が大丈夫だと分かった段階で、我々としちゃ火事は終わった気分です。正直言って、どこか田舎の山が焼けているからって、我々には関係がない。村がひとつ焼けたようだけれども、住人はなんとか避難したって話だし、現場には報道陣はもちろん、消防車さえ満足に近づくことができなかった。遠目にヘリからの映像が入ったくらいで、そんなんじゃ、村が焼失したと言われたってピンと来ない」

男は切り抜きを繰りながら、自嘲(じちょう)めいて笑う。

「マスコミが取り上げない事件は事件じゃない。特にテレビですよ。実際にカメラが現場に入って、村が炎上しているところを映してなきゃ、集落がひとつ消えたって、その重大性がよく分からない。いつの間にか我々にとってのリアリティってのは、リアルな映像ってもんを抜きには成立しなくなっているんだな。『生々しい現実』ってやつは『臨場感あふれる映像』と同義なんです、お笑いなことに」

はあ、と津原は、とりあえずこれには頷(うなず)いた。

「現場にカメラが入ることはできなかった。付近一帯に近づくことができなかったんですから。世間にとって、火災はリアルじゃなかったんです。市街地は無事だと聞いた時

点で世間の興味は失せてしまった。実際に鎮火して、外場に報道陣が入れるようになるまでに一週間近くがかかったわけですが、その時にはすでに報道する値打ちがなかった。——そのあとに」

男は皮肉な笑みを浮かべて新聞記事の切り抜きを指の先で弾いた。

「報道する値打ちが生じたときには、何が起こったのか分からない状態になってしまっていた、というわけです」

「あの、ですから」

言いかけた津原を、男は何度目か、遮った。

「おたくさんがね、神経質になるのは分かりますとも。なにしろ妙な事件でしたからね。近辺の住人の証言を信じる限り、外場では昨年の夏以降、信じられない数の人間が死んでいたはずなんです。ところが戸籍を調べてみると、死人なんか出ちゃいない。そういうね、怪談話のような事実が、鎮火して住民が離散したあとになってゴロゴロ出てきた。焼け跡から出てきた、あの死体みたいにね」

男は口許を歪める。

「外場で何かが起こっていたんです。そのあげくに住人の誰かが放火して村は焼失し、あの惨状だけが残された。何が起こったのかは分からない。死人の数から考えても、外場村の住人の多く——ひょっとしたらほとんどが関係していたはずなんだ。ところが、

あの大火のせいで外場って村は、もはや存在しないも同然だし、肝心の住人だって離散しちゃってる。なんとか行方を探し出しても、何も知らないか、さもなければ頑強に口を閉ざす。完全に行方をくらました奴もいる、それどころかあのあと、首を括ったり病院に入った者も少なくない」
「……ええ」
「室井さんはその渦中にいたんですよ。しかも室井さんの家は、外場では威光のある寺だったって言うじゃないですか。寺の坊主が読経しなくて、誰が死者を葬るんです。室井さんは絶対に詳しいことを知ってるはずだ。ぼくはそれをですね、ぜひとも聞かせてもらいたいわけですよ」
言って男は津原の顔を覗き込む。
「ひょっとして、室井さん、そちらで書いてるんですか」
「何をです」
「ですから、例の事件を、ですよ」
いや、と津原は首を振った。
「じゃあ、こうしませんか。ぼくに室井さんのインタビューをさせてくれる。それをまとめて、そちらさんから本にする」
津原は少し、空になったカップの中を見つめた。

「……それはできないんです」
なんで、と相手は不満そうな声を上げた。
「どうしてそこまで頑強に隠すのかな。ひょっとして、室井さんを庇ってるんですか」
「そういうことじゃないです。室井は消息が分からないんです」
あのね、と苛立ちを露わにした相手を、今度は津原が遮った。
「本当に分からないんです。匿っているわけでもないです」
「でも」
「あの事件が新聞に出る前にですね、その本――『屍鬼』の原稿が送られてきました。住所は伊豆の旅館になってました。しばらくそこにいるということなので、そこで校正までやってもらいましたが、室井は校了と同時にそこを引き払いました」
「今、どこに」
「分かりません。それきり、音沙汰がありませんから。事件については何も聞いてません。今は訊かないでくれ、と言うので無理には訊かなかったんです」
「そりゃあ、通らない。校了で接触が終わるわけじゃないでしょう」
「終わりだったんです。見本を送ろうにも送り先が分からなくて、念のためにあちこちに発送してみましたが全部が転送されて戻ってきました。いつもの口座に印税を振り込もうとしたら、口座も解約されていました」

津原は呆気にとられたような男を見つめる。

「最近になって葉書が来ましたが、住所はありません。印税は適当に寄付してほしいと」言って、津原は自分の手を見下ろす。「――あれが室井という作家の絶筆です」

津原は困惑したままの男を残して喫茶店を出た。暦のうえでは春になったが、陽の落ちた街を渡る風は冷たかった。肩をすぼめて足早に社に戻り、連絡板の書き込みを消す。自分の席に戻ると、机の上に津原宛の郵便物が積まれていた。ざっと差出人を検め、窓際にある棚の上に放り出していく。このところ、郵便物を検めるたびに必ず感じる落胆を今日も感じながら席に戻った。椅子に坐って息をつく。津原は机の抽斗を開けた。上司の手から返ってきた葉書は、今もそこにある。

津原　様

書店で拙作を見ました。立派な本にしていただき、ありがとうございました。

連絡を絶って申し訳ありません。お手数ですが、印税等につきましては、寄付するなり何なりと、宜しいようになさってください。

津原さんにはお別れを申し上げます。これまでお世話になりました。

これ以後、室井は死んだものとお考えください。

これまでの御厚情に、心から感謝いたします。

室井　拝

　津原はしばらくその文面を眺め、それを再び抽斗の中にしまった。机の上に広げたものを適当に掻き集め、抱えて棚の上に置く。代わりに郵便物を抱え上げた。

　窓の外を見たのは偶然だった。

　ネオンが瞬く街路を見下ろし、細い小道を挟んだ向かい側に何気なく目をやる。三階下の喫茶店の前に、上を見上げている人影があった。視線が交わったように思ったが、確証はない。津原のほうを見上げた少女は、ふいに視線を路上に戻して、夜の道を大通りのほうへと歩いていった。

　少女は白いコートのポケットに両手を入れて、雑踏を縫って歩いた。

　大通りに出ると、停車灯を点けて歩道脇に停まった車に歩み寄る。少女が助手席のドアを開け車に乗り込むと、運転席で俯いた男が少女に何事かを話しかけた。少女は二言、三言、言葉を返す。男は頷いて、車を出した。

　車両は都会の通りを流れるテールランプの一滴になり、そのままそこに埋没して消え去った。

解説

宮部みゆき

本書の文庫版の解説を書くという大役をいただいたときから、さて書き起こしをどうしたものか、ずっと頭を悩ませていました。というのは、わたしが真っ先に主張したいことを正直に書くと、新潮文庫編集部にとっては営業妨害になりかねないから。

でも、まあいいでしょう、ニンゲンは正直がいちばんだ。

今、書店の店頭などでこの文庫版を手に取り、大部の作品を読み進む前に解説をちらっとのぞいていています——という読者の皆さん。

迷わず、ハードカバー版（上・下）をお買いなさい。

いや、ちょっと待った！ これじゃホントに業務妨害だから、言い換えましょう。本書を手にとっておられる貴方(あなた)、さあレジに行きましょうね。その前に、ちゃんと五冊を揃(そろ)えて持っているかどうか確認してね。とりあえず一巻だけ買おう、なんてことをやると、夜中の三時過ぎに続きを求めて町をさまよう羽目になります。風邪をひいてしまう。

さあ、そして貴方は『屍鬼』を読む。夢中になって読む。子供がおやつをねだっても、

旦那さんが風呂がぬるいと怒っても、上司が残業しろと命じても、宿題がまだでも、ご飯を食べてなくても、すべてを振り切り、耳をふさいでただひたすらに、ずんずんと読んでしまう。
そして読了したら、あらためて書店に行き、ハードカバー版を買いましょう。買うことになります。絶対に欲しくなる。
この気持ち、すでにハードカバー版の『屍鬼』を持っていて、読んでいるんだけど、文庫が出たら当然のように買う——という読者の皆さんなら、説明なんかしなくても判っていただけるはず。ベクトルは逆でも、想いは同じだからです。
世の中にはたくさんの小説がすでに存在していますし、わたしがこの文章を書いている今この瞬間にも、新たな作品が世に出ていることでしょう。そのなかには傑作も秀作もある。でも、ただ凄いとか面白いとか素晴らしいとかの賛辞だけでは足らず、読むものに一種の畏怖心さえも抱かせるような、他の小説と同じ言葉で賞したくないと感じさせるような小説は、やっぱりごくごく少ないものです。
『屍鬼』は、そうした希少な小説のうちのひとつです。そしてそういう小説の持つ、まるでブラックホールみたいに読み手の魂を吸い込んでしまう求心力、曰く言い難い密度みたいなものを「書籍」の形で実体化させるためには、やっぱりハードカバーの方がいい。文庫版だと、書籍の体裁が小説の放つエネルギーを支えきれないのです。書籍の形

が内容である小説に押し負けてしまって、その小説が作品内に創り出している異世界を、現世に表出しきれないのです。

ピンときませんか？　では、こんな解説なんかすっ飛ばしてよろしい。本書を読んでもらえば（読んでいる途中であっても）、わたしがここでくどくど説明しようとしていることが、言葉なんかなしに「！」と伝わることでしょうから。そして貴方は、ハードカバー版も欲しくなって書店に走る。その光景が目に見えるようであります。

ただ、なにしろ大部の作品でありますから、持ち歩いて読み続けるには文庫サイズの方が便利ではありますよね。だから「文庫も」買ってそばに置きたいという読者の皆さんのお気持ちも、とてもとてもよくわかります。わたし自身がその一人なんだもの。そうするとやっぱり、文庫版が出るのは嬉しいことだ！

著者の小野不由美さんが、アメリカのホラー小説王スティーヴン・キングのファンであり、本書『屍鬼』は、キング初期の代表作である『呪われた町』（邦訳は集英社文庫）へのオマージュとして創られた作品であるということは、すでに有名な話です。翻訳ものには馴染みがないという読者の方のために申し添えますと、中扉のタイトルの脇に添えられた短い献辞に出てくる「セイラムズ・ロット」とは、『呪われた町』の舞台となる場所で、本書でいうところの「外場」にあたる町のことです。ですから小野さんご自身が、開巻早々のこの部分で、『呪われた町』への想いをうち明けておられるとい

うことになりますね。
わたしもキングの初期の作品の大ファンでありまして、特に『呪われた町』はオールタイム・ベスト5に数えるほど好きな小説です。そこで今回、少々あらたまった気持ちで、『呪われた町』と『屍鬼』を、一作続けて読み通してみました。
普通なら、これは「読み比べて読み解く」作業になるのでしょう。でも、そうはなりませんでした。わたしの目には、この二作は、まったく違う小説に映りました。
『呪われた町』は、確かに怖い小説です。ありふれた平和な町、マクドナルドやドーナツ・ショップ、ガソリンスタンドに美容院。そこを徘徊する吸血鬼。当たり前の日常が、徐々に変質してゆく恐怖。それはもう大変なもので、わたしは初読のとき（もう二十年以上も前の話ですが）、できるだけ賑やかで明るい場所で読み進めました。まわりが静かだと、あまりの怖さにかえって気が散ってしまったからです。
でも、『屍鬼』は違いました。むしろ一人きりで、誰にも見られずに――『屍鬼』を読んでいるわたしの顔を、不用意に誰かに見られなくて済む安全な場所で――読むことが快感でした。また、そう読まなくてはならない小説だというふうにも感じました。
それでいて、どちらも傑作だ。
わたしも『呪われた町』のハードカバー版を持ちながら文庫版も買ったクチです。手軽に文庫版を読み直しています。でも、最初に文庫版を読んだとき、真っ先にこう感じ

ました。

――なんかちょっと、ライトになってる。

これこそ、本の形が内容に押し負けて、小説が持っているエネルギーを伝えきれない、ということではないですか。けっして、再読ですでにストーリーを知っているから怖さが減ったということではない！　『呪われた町』は、そんなヤワな小説じゃない。これはやっぱり、本の「器」の問題なのです。

『屍鬼』の文庫化の話を聞いたとき、おお嬉しい、装丁も楽しみだ！　と思いつつ、

――『屍鬼』という凄い小説を、文庫という本の形では御し切れまい。

わたしがそう思ったことと、このことは、ピタリと嚙み合ってきます。冒頭、文庫の解説にしてはいささか不謹慎な文章を書き並べたのも、実はそう、これを言いたかったからなのでした。だから編集部の皆さんも怒らないでね、ね？

ハンディな形の本では制御しきれないほどのエネルギーを持つ小説であるということ。

ぶっちゃけた話、読者が、

「ああ、やっぱりハードカバーで読まなくっちゃ！」

と、雄叫びをあげてしまう小説であること。これこそ傑作の条件、しかももっともクリアの難しい条件なのに、『屍鬼』と『呪われた町』は、オマージュとして書かれた作品とオマージュを捧げられた作品という関係でありつつ、揃ってそこへ達している。希

有(う)なことです。

念のために申しますが、物語を伝えるというだけならば、つまりストーリーを堪能(たんのう)するだけならば、本の形なんて何でもいいんですよ。何でもいいと思わせるのがまた傑作の条件のひとつでもあるのです。で、『呪われた町』も『屍鬼』も、この条件は最初から満たしているのですよ。こちらだって、満たすのが、おそろしく難しい条件なんですけれどね。軽々とクリアしてしまっている。

その上に、それでは伝わりきらないものも内包している。そこが凄いというのです。そんな小説、物書きならば誰だって、ひとつは書いてみたいと思うものです。だけど、誰でも書けるものではありません。とうとう書けずに終わってしまうことの方が、圧倒的に多いのです。

ところで、先ほどからわたしは、『呪われた町』に関しては、しきりと「怖い、怖い」と言い、『屍鬼』については、「怖い」という言葉を使っていません。これは、『屍鬼』が『呪われた町』のように怖くはないという意味ではないんですよ。もちろん怖い。怖いのだけれど、怖い怖い、もっと怖がらせてというだけで読み進むことのできない要素が、『屍鬼』にはあるのです。

『呪われた町』は、セイラムズ・ロットの住人たちが、一人、また一人と吸血鬼と化してゆき、やがて町全体が崩壊してゆく、その過程がすさまじく怖い。でも、崩壊が行き

着いたところで主要な登場人物たちが反撃に移るとき、正邪の区別に迷いはありません。善と悪、明と暗、光と闇はきっちりと境界線を隔てて対立しており、だから、反撃の過程もまた恐ろしくサスペンスに満ちてはいますが、光の側に生き残って闘う主人公たちの心がぐらつくことはありません。例外的に、神父さまが一人、根こそぎぐらつかされてしまって自滅しますが、これは彼の国ですっかり揺らいでしまっているキリスト教という絶対神宗教へのちょっとした皮肉ぐらいに考えておけば済んでしまう程度のものです。なんだかんだ言いながらも、闇の盟主である吸血鬼と闘う主人公たちの心のどこかに、〝光としての神〟の力への信頼があることは、作品のそこここで感じられます。問題の神父さまが、

「教会は軍隊なのです。そして軍隊は軽々しく動かすべきものではありません」

という台詞を吐くシーン、またラスト近くで、主人公が思わず懇願するように、

「神よ、どうぞこれで彼を終わりにしてください」

と叫ぶシーンなど、その好例でしょう。

ところが『屍鬼』のなかには、この〝光としての神〟に相当する存在がありません。重々しく動かされるべき軍隊もいません。死者が甦る「起き上がり」という異常な現象と戦い、それによって崩壊してゆく外場を救うために、残された人たちが頼りにできるものは、ただひとつ。人の「良心」というべきもののみ。

そして注目するべきは、ここで良心を問われるのが、「起き上がり」に怯える生者たちばかりではなく、すでに「起き上がり」になってしまった人びとでもあることです。というより、むしろ主体はそちら側にこそある。人は、何らかの事象によって「人でなし」に変えられてしまったとき、それでもなお「人としての良心」に従うことができるのか。

たとえば、誰を主人公と特定することの難しい多彩な登場人物たちのなかでも、たぶん読者の圧倒的な支持を集めるであろう結城夏野。彼は「起き上がり」という異変に、悩み苦しみながらもきっぱりと「否」の意思表示をします。夏野のなかには、「死よりも悪いものがある」という物差しがありました。それは彼を悲劇的な結末へと導きますが、それでも、その姿に読者は心を打たれてしまう。また、最期に手を握りあって寄り添う徹と律子。彼らは「起き上がり」になることによって初めて人としての良心を問われ、一度は良心を裏切ったり、自己嫌悪に苛まれたりしながら、ついには良心に従うことを決めた人びとです。反対に、夏野を目の仇にする正雄や、彼にストーカー的な執着をする清水恵は、「人でなし」と化したことを自由と感じ、人としての良心を捨て去れることを手放しで喜ぶ人たちでした。

貴方はどちらを選ぶか。『屍鬼』という小説は、エンターテイメントとしての優れた物語性と比類ないサスペンスで読者を引っ張りながら、常にこの問いを投げかけてくる

のです。せっぱ詰まった状況下、アメリカの田舎町の神父さまが駄目なのとはまた違った、とことん現代日本的な理由で「宗教」も「神」も頼りにはならない。その象徴が、若御院であることは言うまでもありません。規範を見失い、信じて従うよりも先に考えすぎてしまう日本の（まっとうな）宗教人、知識人と呼ばれる人びとは、現実の異変に「抵抗」する上ではまったく無力なのだから。

そこで貴方は夏野になるか。恵になるか。そして、その選択の理由は何なのか。

この一点、まさにこの部分で、『屍鬼』は、「外敵である吸血鬼と、たとえ勝ち目は乏しくとも雄々しく闘う」という突き詰めてアメリカ的な展開を見せる『呪われた町』とは別の小説となり、『呪われた町』が目をやっていなかった、新しい山の高みに到達していると、わたしは思います。それは、スティーヴン・キングという作家を生み育てたアメリカの文化と、小野不由美という作家を育む現代日本の差です。

もちろん、どちらがいいと、軽々に決めつけることはできません。でも、九月十一日の同時多発テロ発生以来、世界中の敵と雄々しく闘うことばかりに邁進しているアメリカを横目に、わたしは、『屍鬼』が書かれ得た日本という国の現状と文化は——その軟弱さも含めて——ひょっとしたら貴重なものなのかもしれないと思って、ちょっぴり胸を張ってみたりしているのです。

（平成十三年十一月、作家）

屍鬼（五）

新潮文庫　お－37－7

平成十四年三月一日発行

著者　小野不由美

発行者　佐藤隆信

発行所　株式会社新潮社

郵便番号　一六二―八七一一
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部(〇三)三二六六―五四四〇
　　　読者係(〇三)三二六六―五一一一

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社　製本・憲専堂製本株式会社

ISBN4-10-124027-2 C0193